

# ソードアート・オンライン～黒の剣士と絶剣～ リメイク版

舞翼

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

世界初のVRMMORPG《ソードアート・オンライン》。茅場晶彦の宣言によってデスクゲーム豹変し、一万人のプレイヤーが幽閉された――。百層をクリアするまで脱出不可能、ゲームオーバーは、現実世界の《死》を意味する。

——そんな中で三人の幼馴染は、どのような物語を紡ぐのか――。  
※これは、『ソードアート・オンライン』黒の剣士と絶剣』のリメイク版作品になります。

設定などを少し変更しています。

アドバイスなどがあればよろしくお願いします!!

優しくお願いします。メンタルが豆腐以下なので……。

誤字脱字が非常に多いかも……。ご容赦を……。

注意：紺野姉妹の年齢を改変しています!!

# 目次

## SAO編

第1話《劍の世界へ》	1
第2話《再会とレクチャー》	4
第3話《全ての始まりと終わり》	14
第4話《細剣使いとの出会い》	25
第5話《第一層ボス攻略会議》	36
第6話《第一層ボス攻略戦》	47
第7話《ビーター誕生》	58
第8話《月夜の黒猫団》	71
第9話《《二刀流》と《黒燐剣》》	80
第10話《クリスマスイベント》	87
第11話《運命の出会い》	94
第12話《竜使いの少女との出会い》	100
第13話《《黒の剣士》と《絶剣》》	112
第14話《圈内事件》	124
第15話《調査開始》	131
第16話《黄金林檎》	139
第17話《ヒースクリフとの会合》	148
第18話《第二の圈内事件》	155
第19話《事の真実》	164
第20話《笑う棺桶》	171
第21話《二人の想いと事件解決》	180
第22話《リズベット武具店》	190
第23話《ドラゴンの巣とクリスタル》	197

第24話《笑う棺桶、討伐作戦》	204
第25話《皆の笑顔》	212
第26話《S級食材の晩餐》	220
第27話《第74層迷宮区攻略》	230
第28話《青眼の悪魔、輝く目》	240
第29話《紅の聖騎士・ヒースクリフ》	247
第30話《二刀流vs神聖剣》	254
第31話《新居とヌシ釣り》	261
第32話《眠れる森の少女》	274
第33話《軍の徴税部隊》	287
第34話《アインクラッド解放軍》	300
第35話《ユイの涙》	308
第36話《ユイの心》	318
第37話《骸骨の狩り手》	325
第38話《世界の終焉》	336
if √	
第39話《彼女たちの元へ》	352
第40話《再会と笑顔》	358
第41話《初めてのデート》	366
if √ 後日談	
第42話《君と送る年、迎える年》	376

## SAO編

### 第1話《剣の世界へ》

桐ヶ谷和人は、睡眠が全く取れていなかった。

何故かというのと、今日の——二〇二二年十一月六日曜日、午後一時に、《ソードアート・オンライン》の正式サービスが開始されるからだ。

《ソードアート・オンライン》が各メディアに大々的に発表された時、世界のゲーマーを震撼させたのだ。

《ナーヴギア》。このマシンは、VRMMORPG——ソードアート・オンラインを動かすゲームハードだ。

しかしその構造は、全時代の据え置きマシンとは根本的に異なり、モニター装置と手で握るコントローラという二つのマシン・インターフェイスを必要とした旧ハードに対して、ナーヴギアのインターフェイスは一つだけなのだ。

頭から顔まですっぽりと覆う流線型のヘッドギア、それだけだ。

その内側には、無数の信号素子が埋め込まれ、それらが発生させる多重電子よって脳そのものに直接接続し、脳の視覚野や聴覚野にダイレクトに与えられる情報を見て開き、触感や味覚、嗅覚を加えた、五感全てにナーヴギアはアクセスが可能なのだ。

ナーヴギアを装着し、顎下を固定アームでロックし、開始コマンドである《リンク・スタート》を唱えた瞬間、あらゆるノイズは遠ざかり、視界は暗闇に包まれ、その中央から広がる虹色のリングを潜れば、其処はもう全てがデジタルデータで構築された完全なる別世界だ。

半年前、二〇二二年五月に発売されたこのマシンは、遂に完全なるバーチャル・リアリティ《仮想現実》を実現したというわけだ。

開発した大手電子機器メーカーは、ナーヴギアによる仮想空間への接続を次のように表現したのだ。

——《完全フルダイブ》、と。

完全ダイブはその名に相応しい、現実世界との完璧な隔離だったの

だ。

だが、完全ダイブという新世代ゲームを実現したナーヴギアだが、その斬新さゆえに、肝心のソフトリリースはぱっとしない物が続いた。

パズルや知育、環境系のタイトルばかりで、俺を含む、ゲーム中毒者アデイクトは大いに不満を募らせたものだ。

——ナーヴギアは真の仮想世界を創る。

なのに、その世界が百メートル歩いたら壁に突き当たるような狭苦しいものでは、本末転倒ではないか。

ハードの発売当初こそ、自分がゲームの中に入る、という体験に夢中になった俺や他のコアゲーマーたちが、すぐにあるジャンルタイトルを待ち望むようになったのも当然の流れだ。

即ち、ネットワーク対応ゲーム——それも、広大な異世界に数千、数万のプレイヤーが同時に接続し、己の分身を育て、戦い、生きる。MORPGを。

期待と渴望が限界まで高まった頃、満を持して発表させたのが、VRMMOという世界初のゲームジャンルを冠した《ソードアート・オンライン》だったというわけだ。

ゲームの舞台は、百層にも及ぶ階層を持つ巨大な浮遊城。

プレイヤーが武器一本を頼りに駆け抜け、上層を目指し攻略していくのだ。

この世界には魔法は存在せず、代わりに剣ソードスキル技が実装されている。その理由は、己の体、己の剣を実際に動かして戦うという、フルダイブ環境を最大限に体感させるためだ。

スキルは戦闘以外にも、鍛冶屋や裁縫、釣りや料理、音楽などフィールドを冒険するだけでなく、生活する事も出来るのだ。

そして、僅か千人に限定して募集されたベータテストプレイヤー。つまり、正式サービス開始前の稼働試験参加者の枠には、十万人の応募が殺到したのだ。

俺がその狭き門をかいくぐって当選したのは、まさしく幸運だった。

オマケにベータテスターには、その後の正式パッケージの優先購入権がプレゼントさせたのだ。

まあそんなわけで、俺は三日前から店頭前に並んで購入を待つ、ということとはしていないのだ。

店頭に並んで購入した皆さま、お疲れさまですツ!!

壁に掛かっている時計の時刻を確認すると、午後一時までは残り一分。

俺は、ナーヴギアの有線がコンセントに刺さっているか、ソフトが入っているかを確認すると、ベットの土上へ横になり、枕の横に置いてあるナーヴギアを被り電源を起動させる。

信号が点滅し、それが強くなってくる。

残り五秒……四秒……三秒……二秒……一秒、そして俺は、仮想世界に飛び込む言葉を発した。

「リンク・スタート」

しかし、この時俺はまだ知らなかった。

——この言葉が、俺を含めた一人を《ソードアート・オンライン》へ幽閉する言葉だったとは——

## 第2話《再会とレクチャー》

SAOにログインし、始まりの街の石畳を踏んだ俺は、周りを見渡してから、感動が入り混じった声を発した。

「帰って来たんだ……この世界に」

俺のキャラクター名は《kiritō》、性別は《男》だ。

容姿は、少しだけイケメンに近くしている。

何故こうしたかというと、幼馴染の双子姉妹に、『和人って女顔で可愛いよね』って言われた事があるからだ。

まあ、俺の両親が他界し親戚の家へ引き取られたので、小学校低学年時に、その地元から引っ越してしまっただが。

「……取り敢えず、武器を買いに行くか……。βテスト時と同じく、片手用直剣でいいか……」

武器屋に向かう為にダッシュをしていたら、一人の男性プレイヤーに声を掛けられた。

俺の迷いの無い走りを見て、ベータ経験者だと見当をつけ、声を掛けたんだろう。

俺はその場で停止し、男の元へ歩を進めた。

「に、兄ちゃん、αβテスターだろ?」

俺は口籠りながら答えた。

「ま、まあ、そうだけど」

「やっぱりそうか。ちょいとレクチャーしてくれよ。恥ずかしなから、オレは仮想世界が初めてだよ」

と、頼み込んできたのだ。

てか、凄いコミュ力だな。俺には一生真似出来ん。

自分で言うのも何だが、今現在の俺は、ボツチのエキスパートだ。

——その時だった、俺の隣から声を掛けられたのは。

「あのく、すみません。私たち姉妹もお願いできますか……?」

「ボクからもお願い出来るかな?」

姉妹ってリアル情報だよね……。

大丈夫なのかな?





「ぶぎーっ！」と怒りの叫び声を上げ、イノシシがこちらに身体を向けた。

ユウキは斜め斬りモーションを取り、剣に水色のライトエフェクトを纏わせ、突進してきたイノシシとすれ違いざまに、片手剣単発ソードスキル《スラント》の斜め斬りを放ち、イノシシは「ぶぎー」と断末魔を響かせ、ポリゴン片へ砕け散った。

「やったね♪」

「おう、お疲れ。——次は、ランの番な」

「ええ、わかりました」

俺は再び足元の草むらから小石を拾い上げると、投剣スキル《シングルシユート》を発動させ、近場に居たイノシシの視線をこちらに向けさせた。

ランは剣を中段に構えて右脚で地面を蹴り、剣に赤いライトエフェクトを纏わせ、片手剣基本突進技《レイジスパイク》を放ち、イノシシのポリゴン体が破碎した。

ランは剣の構えを解いてから、俺の元へ歩いて来た。

「やりましたよ」

「おう、お疲れ」

これを見ていたクラインは呆然としていた。

まあ、こうなるのも仕方ない。

開始してから数十分で、ソードスキルを放つコツを掴んでいたのだから。

ユウキとランは感覚派だな。

「……今どうやってソードスキルを発動させたんだ……」

「えっとね。ボクは、ズパーン！ってやったよ」

「私は、構えを取ってから、少し溜めて放つ感じですね」

いや、多分それじゃ伝わらんとぞ。

まあ、俺も感覚派だから、二人が言っている事は大体解るが。

「ズパーン！ってよ……」 後、溜めて放つ感じかあ……」

「クラインが知っている必殺技を意識して放ってみればいいんじゃないかないか？」

「必殺技か……。 よし！ やってやらあ！」

俺の前にPOPしたイノシシが、クラインに視線を向ける。

クラインは曲刀を中段に構え、すう、ふう、と深呼吸してから腰を落とし、右肩に担ぐように曲刀を持ち上げる。

すると、ゆるく弧を描く刃が、オレンジ色へ輝く。

「りゃあ！」

太い掛け声と同時に、これまでとは打って変わった滑らかな動きで左足が地面を蹴り、心地よい効果音を響かせて、片手用曲刀基本技《リーバー》が、突進に入りかけていた青イノシシの首に見事命中し、イノシシのHPを吹き飛ばし、ポリゴン片となり砕け散った。

「うおっしやあああ！」

派手にガッツポーズを決めたクラインが、満面の笑みで振り向き、左手を高く掲げた。

「初勝利おめでとう」

「でもあのイノシシって、某ゲームのスライムと同じらしいよ」

「弱かったですからね」

「えっ、マジかよ！ おりやてつきり中ボスかなんかだと」

「「ないない」」

お、はもったぞ。

俺たちって気が合うのかな……。いや、有り得んな。 うん、有り得ない。

まあ、クラインの喜びと感動はよく解る。

自分の剣でモンスターを倒すという、爽快感を味わう事が出来たのだから。

おさらいのつもりか、同じソードスキルを何度も繰り返しては、楽しいかな奇声を発していた。

そんなクラインは放っておいて、俺は周囲をぐるりと見渡した。

四方に広がる草原は、ほのかな赤みを帯び始めた陽光の下で美しく輝いている。

遙かな北には森のシルエット、南には湖面の煌き、東には街の城壁を薄く望むことが出来る。そして西には、無限に続く空と金色に染ま

る雲の群れ。

浮遊城アインクラッド第一層の南端に存在するスタート地点、始まりの街の西側に広がるフィールドに、俺たちは立っている。

「綺麗ですね」

「綺麗だね」

「ああ、そうだな」

俺はランとユウキの言葉に頷いた。

ユウキがとランが、昔を思い出すようにしながら口を開いた。

「昔、三人で綺麗な景色を見たんだよね」

「ええ、そうね。あの時は楽しかったね。今でも鮮明に覚えているわ」

俺にもそれに似た記憶はあった。

その記憶とは、二人の女の子と公園でかくれんぼをしてから、ブランコへ座り、夕焼けの空を見入っていたのだ。

その時俺は、小学校低学年だったはずだ。

「……………いや、まさかな。二人が俺の幼馴染の姉妹だなんて都合が良すぎる。——でも」

俺がやろうとしている事は、ネットゲーム内でリアル情報を聞くと、いうマナー違反行為だ。

——だが、俺は意を決して女の子二人に聞いた。

「なあ、その時のもう一人は、男の子じゃなかったか。……………女顔の」

自分で「女顔」と言うのは少し抵抗があったが、確認するには効果大な言葉だ。

俺がそう確認すると、二人の女性プレイヤーは眼を見開いた。

「え、そうだけど。なんで知っているの……………」

「も、もしかして、……………和人さんですか」

「……………まあ、うん、和人だ。——桐ヶ谷和人だ」

俺のリアルネームを知っているという事は、この姉妹は俺の幼馴染で間違いない。

姉の名前は紺野藍子。

妹の名前は紺野木綿季だ。

「久しぶりだね、いきなり引越しちやったから、ビックリしたんだよ」

そう言うてから、ユウキは俺に抱き付いてきた。

これは、小さい時に俺にしていた癖だ。

てか、剣を仕舞って！俺、斬られちゃうから！

「ほら、ユウキ。か？……じゃなくて、キリトさんが困っているでしょ。それと剣を仕舞いなさい」

「ぶーぶー、姉ちゃんのいじわる」

ユウキは渋りながらも俺から離れ、剣を腰に装備している鞆に納めた。

それに倣って、ランも剣を鞆に納めた。

てか、長年ボツチだった俺には刺激が強すぎる。

……その……柔らかい物がね……。何とは言わんが……。

満足したクラインが、曲刀を腰に装備している鞆に戻しながら近づいてきて、ぐるっと視線を巡らせてから、再び視線を戻した。

「なんだ、おめえら知り合いだったのか」

「まあ、そうだな」

「うん、ボクたち三人は、幼馴染だよ」

「ええ、小さい時は、いつも一緒でしたね」

「かあく、羨ましいね。感動の再開かよ。——しっかしよ……こうして見回すと信じられねえな。ここがゲームの中だなんてよ。

<sup>S.A.O</sup>これを創った茅場晶彦は天才だぜ。すげえよな、……マジ、この時代に生きててよかったぜ!!」

「大げさな奴だなあ」

笑いながらも、内心では全くの同感だった。

「キリトも、クラインさんと同じことを思っていたんでしょ?」

……何でばれたんだ。ユウキはエスパーなのか。

何か、ランにもばれてそうだな。二人は双子だし。いや、関係ないか、多分。

「いや、まあ、そうだけどさ……。じゃあ、クラインはナーヴギア用のゲーム自体も、このS.A.Oが初めてなのか?」

「おう！ つーか、むしろSAOが買えたから、慌ててハードも揃えたって感じだな。 なんとって、初回ロットが一万本だからな。 我ながらラッキーだったよなあ。 ……まあ、それを言ったら、SAOベータテストに当選した、おめえのほう十倍ラッキーだけだよ。 あれは限定千人ぼっちだからな！」

「ま、まあ、そうなるかな」

じとつと睨まれ、思わず頬を掻く。

俺は、ふと思ったことがあったので聞いてみた。

「ランとユウキは、どうやって手に入れたんだ？」

「えつとね。 お父さんとお母さんが、三日間の有給休暇を使って買ってきてくれたんだ」

「お父さんとお母さんの、二人分ですね」

……うん、ユウキたちの両親は、完全に二人を溺愛しているな。

有給休暇を取って店頭前に並んだとか……すげえの一言だな……。

「さてと……どうする？ 勘が掴めるまで、もう少し続けるか？」

「オレは一度落ちて、メシを喰わねえとなんだよな。 アツアツのピザを、五時に予約してからな！」

俺は視界端に表示されている時刻を確認した。

視界端に書かれている時刻は、午後五時に回ろうとしていた。

「準備万端だなあ。 ——ユウキとランはどうするんだ？」

「えつと、ボクはキリトと話がしたいな」

「そうですね。 積もる話がありますから」

まあ確かに。 俺も話したいことが山ほどあるしな。

「かく、もう一回言うけどよお、おめえ羨ましすぎるな。 両手に花じゃねえか。 オレも彼女が欲しい……」

「いや、彼女じゃないぞ。 幼馴染だ」

「同じもんだ」、とクラインが呟いたが、俺はスルーする事にした。

この話題は、長引かせると危険だと思ったからだ。

「あ、んで、オレそのあと、他のゲームで知り合った奴らと《はじまりの街》で落ち合う約束してるんだよな。 どうだ、紹介すつから、あいつらともフレンド登録しねえか？ いつでもメッセージ飛ばせて

便利だしよ」

「え……うーん」

クラインとは自然に付き合えているが、元ボツチの俺が上手く付き合える気がしない。

そんな時、ユウキとランが助け船を出した。

「キリトは人見知りだから、もうちよつと時間が経ってからの方がいいかも」

「そうですね。 集団行動は慣れていませんから」

「なるほどなあ……。 ま、そのうち紹介する機会があるだろ」

「わ、悪いな」

謝ると、クラインはぶんぶんとかぶりを振った。

「おいおい、礼を言うのはこっちのほうだぜ！ おめえのおかげで、すげえ助かったよ、このお礼はその内ちゃんとするつから、精神的に。――

―オレとフレンド登録はできねえか？ そっちの御嬢さんも」

「まあ、それくらいなら」

「いいよ」

「いいですよ」

俺たち四人はフレンド登録をした。

クラインは時計を確認し、言葉を発した。

「……ほんじゃ、おりやここで一度落ちるわ。 マジ、サンキューな。

これからも宜しく頼むぜ！ ま、御嬢さんたちとは、上手くやれよ」  
何を上手くやるのか、よく解らん。

俺の頭の中は、疑問符だらけだ。

クラインが一步下がって、右手の人差し指を振り《メインメニュー・ウインドウ》を呼び出すと、右手人差し指を動かし、ログアウトボタンに――

「あれ、ログアウトボタンがねえぞ」

「は？ ログアウトボタンが無いって……そんなわけないだろ、よく見てみる」

横長の長方形をしたウインドウには、初期状態では左側に幾つものメニュータブが並び、そのメニューの一番下に《Log Out》の

ボタンが存在するはずだ。

「やっぱりどこにもねえよ。おめえらも見てみろって」

俺たち三人は、メニュー・ウインドウを開いた。

——無かった。今日午後一時にログインした時、一番下に表示されていたログアウトボタンが綺麗に消滅していたのだ。

「……ねえだろ」

「うん、ない」

「ボクもない」

「私もです」

ノンビリした口調で言うクラインに、俺は突込みを入れた。

「さつきさ、五時にピザの予約してる、とか言ってたなかつたか？」

「うおっ！ そうだった！」

眼を丸くし叫んだその姿に、つい口元を緩めてしまう。

ランとユウキも、くすくすと笑っていた。

「お……、オレ様のアンチョビピццаとジンジャエールがあー!!」

「とりあえず、GMコールしてみろよ。システム側で落としてくれるかもよ」

「試したけど、反応がねえんだよ。ああ……、もう五時二十五分じゃん！ 他にログアウトする方法ってなかつたっけ？」

情けない顔で両の手を広げるクラインの言葉に、俺は不安を覚えた。

——途轍もなく、嫌な予感がするのだ。

この仮想世界から離脱する手段は、メインメニュー・ウインドウを開き、ログアウトボタンに触れ、右側に浮かぶ確認タグの Yes ボタンを押すだけでいい。

それと同時に、——この仮想世界から離脱する手段はこれだけしかないのだ。

茅場晶彦の特集で組み込まれていた言葉が蘇ってきた。

——これはゲームであっても、遊びではない——

——直後。

四人の身体が、青いライトエフェクトに包まれ、強制転移させられ



た。

### 第3話《全ての始まりと終わり》

強制転移された直後、——突然、リンゴーン、リンゴーンという、鐘の音のような——あるいは警報音のような大ボリュームのサウンドが鳴り響き、四人は飛び上がった。

「んな……ッ」

「な、何だ……」

「きや……なに」

「な……なに」

鐘が鳴り終わった後、俺は周りを確認した。

俺は広大な石畳の上に脚をつけており、周囲を囲む街路樹と、瀟洒しょうしゃな中世風の街並み、そして正面遠くに、黒光りする巨大な宮殿。

此処は間違いなく、ゲームのスタート地点である《はじまりの街》の中央広場だ。

色とりどりの装備、髪色、眉目秀麗びもくしゅうれいな男女の群れ、間違いなく、四人と同じくSAOプレイヤーだ。

一万人のSAOプレイヤー全員がこの広場に強制転移されたのだ。やがて、ざわざわという声が発生し、徐々にボリュームを上げていく。

「どうなっているの?」「これでログアウト出来るのか?」「早く出してくれよ」などの声が切れ切れに耳に届く。

次第に苛立ちの色合いが増し、「ふぎけんな!」「GM出て来い!」等の喚き声が聞こえ始めてきた。

——その時、誰かが叫んだ。

「お、おい……上を見ろ!!」

四人は、反射的に上空に眼を向けた。

其処には、異様な物が出現していたのだ。

上空が真紅の市松模様いちまつもように染め上げられ、二つの英文が表示されていたのだ。

真っ赤な英文で綴られていた英文は、【Warning】、【System Announcement】と。

空を埋め尽くす真紅の中央部分が、まるで巨大な血液の雫のように、どろりとゆっくり滴つていくが、落下する事は無く、赤い一滴は突如中央で形を変えた。

出現したのは、身の丈が二十メートルあるかという、真紅のフード付きのローブを身に纏った人型だ。

だが、深く引き下げられたフードの中には、——顔が無かつたのだ。そして、中身のない巨大なローブから、声が降ってきた。

『プレイヤーの諸君、私の世界へようこそ』

俺は、奴の言葉の意味が全く掴めなかつた。

奴は言葉を続けた。

『私の名前は茅場晶彦。今やこの世界をコントロールできる唯一の人間だ』

——茅場晶彦。

若き天才ゲームデザイナーにして量子物理学者だ。

茅場は、このSAOの開発ディレクターであり、ナーヴギアの基礎設計者でもある。

『プレイヤーの諸君は、すでにメインメニューからログアウトボタンが消滅している事に気付いていると思う。しかし、それは不具合ではない。繰り返す。これは不具合ではなく、『ソードアート・オンライン』の本来の仕様である』

「し……仕様、だと」

クラインが割れた声で呟いた。

その語尾に重なるように、滑らかな低音のアナウンスが続いた。『諸君は今後、この城の頂きを極めるまで、ゲームから自発的にログアウトする事はできない』

俺はすぐに理解した。

この城の頂きとは、第百層だということに。

『……また、外部の人間による、ナーヴギアの停止、あるいは解除もありえない。もしそれを試みた場合——』

僅かな間を置いて、奴からは、驚愕の真実が伝えられた。

それは、信じたくない言葉だった。

『——ナーヴギアの信号素子が発する高出力マイクロウェーブが、諸君らの脳を破壊し、生命維持を停止させる』

脳を破壊する。

つまり、茅場の言っている事は、殺す、ということだ。

ナーヴギアの電源を切ったり、ロックを解除し頭から外そうとしたら、装着している者を殺す、そう宣言したのだ。

ざわざわと、集団のあちこちがざわめくが、声を上げたり暴れたりする者は居なかった。

いや、出来なかったのかもしれない。

クラインから、乾いた笑いの混じる声が漏れた。

「はは……何言ってだアイツ。 おかしいじゃねえか。 んなことできるわけねえ、ナーヴギアは……ただのゲーム機じゃねえか。 脳を破壊するなんて……んな真似ができるわけねえだろ」

後半は掠れた叫びだった。

ナーヴギアは、ヘルメット内部に埋め込まれた無数の信号素子から、微弱な電磁波を発生させ、脳細胞そのものに擬似的感覚信号を与える。

まさに最先端のウルトラテクノロジーと言えるが、原理的には、それと全く同じ家電製品が日本で使用されている。

それは、——電子レンジだ。

十分な出力さえあれば、ナーヴギアは、脳細胞中の水分を高速振動させ、摩擦熱によって蒸し焼きにする事は可能だ。 だが——

「……………原理的には、有り得なくもないけど……………でも、ハツタリに決まってる。 だって、いきなりナーヴギアの電源コードを引っっこ抜けば、そんな高出力の電磁波を発生させられないはずだ。 大容量のバッテリーでも内臓させてない……………限り……………」

平静を取り戻しつつあるランから、言葉が発せられた。

「……………いえ、出来ますよ。 ナーヴギアの三割はバッテリーセルです……………もし、脳に高出力の電磁波として送られたら……………私たちの脳は……………、——破壊されます」

後半の言葉は、三人にしか聞こえないように、静かに呟いた。

上空から、茅場のアナウンスが再開された。

『より具体的には、十分間の外部電源切断、二時間のネットワーク回線切断、ナーヴギア本体のロック解除、分解、破壊を試み——以上のいずれかの条件によって、脳破壊シークエンスが実行される。この条件は、すでに外部世界では、当局およびマスコミを通して告知されている。ちなみに現時点で、プレイヤーの家族友人等が警告を無視して、ナーヴギアの強制除装を試みた例が少なからずあり、その結果——残念ながら、すでに二百十三名のプレイヤーが、アインクラッド及び、現実世界からも永久退場している』

今、茅場が発した言葉が事実なら——二百人以上も死んだということになる。

その中には、俺と同じベータテスターや、知っていた奴がいたのかもしれない。

そいつらが——ナーヴギアに脳を焼かれて死んだと、そう茅場が言ったのだ。

「信じねえ……信じねえぞオレは」

石畳に座り込んだクラインが、掠れた声で呟いた。

茅場は、冷たい声でアナウンスを再開させた。

『諸君が、向こう側へ置いてきた肉体を心配する必要はない。現在、あらゆるテレビ、ラジオ、ネットメディアは、多数の死者が出ている事を含め、繰り返し報道している』

茅場は、多数の巨大ウィンドウを展開させ、今騒がれているニュースなどを表示させ、言葉を続ける。

『諸君のナーヴギアが強引に除装される危険は低くなっていると言つてよかろう。今後、諸君の現実の体は、ナーヴギアを装着したまま二時間の回線切断猶予時間のうち、病院、その他の施設へ搬送され、厳重な看護態勢のもとに置かれるはずだ。諸君には、安心して……ゲーム攻略に励んでほしい』

こんな状況で、安心してゲームを楽しむなんて不可能だ……。

こんなの、馬鹿げてる……。

『しかし、十分に留意してもらいたい。諸君にとって、《ソードア

ト・オンライン》は、すでにゲームではない。もう一つの現実と言  
うべき存在だ。……今後、ゲームにおいて、あらゆる蘇生手段は機能  
しない。ヒットポイントがゼロになった瞬間、諸君のアバターは永  
久に消滅し、同時に、——諸君らの脳は、ナーヴギアによって破壊さ  
れる』

瞬間、俺は恐怖に押し潰されそうになるが、必死にそれを抑えた。  
俺の視界左上には、細い横線が青く輝いていて、その上に343/  
343という数字が表示されている。

これは、俺の命の残量。

これがゼロになった瞬間、俺の脳はナーヴギアのマイクロウェーブ  
に焼かれ——死ぬ。

確かにこれはゲームであるが、——この瞬間に、デスゲームに豹変  
したのだ。

『諸君がこのゲームから解放させる条件は、たった一つ、先に述べたと  
おり、アインクラッド最上部、第百層まで辿り着き、そこに待つボス  
を倒してゲームをクリアすればよい。その瞬間、生き残ったプレイ  
ヤー全員を、安全にログアウトすることを保証しよう』

「クリア……第百層だとお!?」

突然クラインが喚き、がばつと立ち上がり、右手を空へ向かって振  
り上げた。

「で、できるわきやねえだろうが!! ベータじゃ、ろくに上がれなかつ  
たらしいじゃねえか!!」

クラインが言った事は真実だ。

二ヶ月のβテスト期間中にクリアされた層は、九層までだ。

今の正式サービスには一万人のプレイヤーが居るが、この人数で攻  
略しても、第百層をクリアするのに、何ヶ月……いや、何年掛かるも  
解らない。

攻略にも、己の命を賭けるのだ。

五、六時間前、母親の作った飯を食い、妹と短い会話を交わし、自  
宅の階段を上った。

あの場所にはもう戻れない? これは、本当に現実なのか?

『それでは、最後に、諸君にとってこの世界が現実であるという証明を見せよう。諸君のアイテムストレージへ、私からのプレゼントが用意してある。確認してくれ給え』

それを聞くと、プレイヤー全員が、メインメニューからアイテム欄のタブを叩くと、一番上にそれはあった。

アイテム名——《手鏡》。

俺はその名前をタップし、実体化をさせた。——その時、はじまりの街全体が白い光に包まれた。

だが、何の変化も無かった。

俺は再び手鏡を覗き込んだ。

そこには、黒髪に黒曜石のような瞳、中性的な顔立ちがあった。

「……これって現実世界の俺の顔だよな」

隣に立っていたクラインを見たが、無精髭ぶしようひげを浮かせた野武士、——いや、山賊が立っていたのだ。

俺は呆然と呟いた。

「お前……誰……？」

「いや、おめえこそ誰だよ……」

暫し間を置いてから、

「お前がクラインか!?!」「おめえがキリトか!?!」

双方の手から鏡が零れ落ち、地面に落ちて、甲高い破碎音と共に砕け散った。

すると、クラインがきよろきよろしながら、

「ユウキちゃんとランさんは?」

「私は、ここですよ」

「ボクは姉ちゃんの隣にいるよ」

俺とクラインが振り向くと、其処には、美少女双子姉妹が立っていた。

「ユウキちゃんとランさんは、何も変わってねえじゃんか。てか、メチャクチャ美少女だな……」

「ま、まあ、ユウキとランは、元のアバターがデフォだったからな。

変わらなくて当然だ。ちよつとは変わっているが。てか、昔より

可愛くなっているな。　つか、この状況で平静を取り戻したとか、凄えな……」

「ありがとうございます」

「ありがとうね♪二人共」

「でも、どうやって再現したんだ。　まるでスキャンを掛けたみたい……スキャン。――そうか、ナーヴギアは高密度の信号素子で頭から顔全体をすっぽりと覆っている。　つまり、脳だけじゃなくて、顔も<sup>せいさい</sup>精細に把握できるんだ……」

「で、でもよ、身長とか……体格はどうなんだよ」

クラインの言う通り、多数のプレイヤーの身長や体格が《変化》しているのだ。

「いや、待てよ。　初回に装着した時のセットアップステージで……なんだっけ……きや、キャリアレーション?とかで、自分の体のあちこちを触ったじゃねえか、……もしかして、アレか……?」

「ああ、なるほど……そういうことか……」

キャリアレーションとは、装着者の体表面感覚を再現する為、《手をどれだけ動かしたら自身の身体に触れられるか》の基準を測る作業の事だ。

つまり、リアルの体格をナーヴギア内にデータ化することに等しいのだ。

そのデータを使用し、現実の姿を詳細に再現し、ポリゴン体に置き換えたのだ。

「……現実」

俺がポツリと呟いた。

「あいつはさつきそう言った。　これは現実だと。　そしてそれを認識させる為に、全プレイヤーの顔や体などを再現させたんだ……」

「で、でもよ……なんでそんなことを……!!?」

「それなら、すぐに答えてくれますよ」

「そうだね。　なんでこの世界を創った、とかもね」

「だな、もう少し待とう」

既に三人は、平静を取り戻していた。



数秒後、血に染まった空から、茅場の声が降り注いだ。

『諸君は今、なぜ、と思っっているだろう。なぜ私は——S A O及びナーヴギア開発者の茅場晶彦はこんなことをしたのか？と。私の目的は、そのどちらでもない。それどころか、今の私は、すでに一切の目的も、理由も持たない。鑑賞するためののみ、私はナーヴギアを、S A Oを造った。そして今、全ては達成せしめられた』

短い間を置いてから、茅場は言葉を続けた。

『……以上で《ソードアート・オンライン》正式サービスチュートリアルを終了する。プレイヤー諸君の——健闘を祈る』

最後の一言が、僅かな残響を引き、消えた。

真紅のローブ姿が音も無く上昇し、フードの先端から空を埋めるシステムメッセージにとけ込むように同化していき、肩が、胸が、そして両手両足が血色の海へ沈み、最後に一つだけ波紋が残った。

直後、天空一面に並んでいたシステムメッセージもまた、現れたと同じように唐突に消滅した。

そして、ゲーム本来の姿を取り戻していた。

——この時、ようやくプレイヤー集団は然るべき反応を見せた。

「嘘だろ……なんだよこれ、嘘だろ！」

「ふざけるな！ 出せ！ ここから出せよ！」

「こんなの困る！ このあと約束があるのよ！」

「嫌ああ！ 帰して！ 帰してよおお！」

悲鳴、怒号、絶叫、罵声、懇願、咆哮が、はじまりの街に響き渡り、広大な広場をぴりぴり振動させた。

——これは現実だ。

茅場晶彦の宣言は、全て真実だ。

俺は当分の間——数ヶ月。あるいはそれ以上、現実世界に戻る事は出来ない。

母親や妹の顔を見る事も、会話を交わす事も、ひよっとしたら、その時は永遠に来ないかもしれない。

——この世界で死んでしまったら。

ゆっくり息を吸ってから吐き、俺は口を開いた。

「三人共、ちよつと来い」

「お、おう」

「ええ、わかりました」

「うん、わかった」

四人は人の輪を抜け、広場から放射状に広がる幾つもの街路の一本へ入った。

「いいか。良く聞け。この世界で生き残っていく為には、ひたすら自分を強化しなきゃならない。MMORPGってのは、プレイヤー間のリソースの奪い合いなんだ。システムが供給する限られた金とアイテムと経験値を、より多く獲得した奴だけが強くなれる……」

この《はじまりの街》周囲のフィールドは、同じことを考える連中に狩り尽くされて、すぐに枯渇するだろう。モンスターリポップの再湧出をひたすら探し回るはめになる。今のうちに次の村を拠点にしたほうがいい。俺は、道も危険なポイントも全部知っているから、今のレベルでも安全に辿り着ける。俺はすぐに次の街に行く、お前らも一緒に来い」

クラインは顔を歪めながら、口を開いた。

「でも……でもよ。前に言っただろ。おりゃ、他のゲームでダチだった奴らと、徹夜で並んでソフトを買ったんだ。そいつらもログインして、さっきの広場にいるはずだ。置いて……いけねえ」

この男は——陽気で人懐っこく、面倒見もいいんだろう。

クラインは、その友達全員と一緒に連れて行くことを望んでいる。

だが、俺はどうしても領くことが出来なかった。

ユウキやランは問題ないが、それは戦闘に関してだ。

道や危険なポイントの事は知らない。なので、クラインともう一人増えたら危うい。

もし、道中で死者が出て、その結果、茅場の宣言通りそのプレイヤーが脳を焼かれ現実でも死んだ時。

その責任は当然、安全な《はじまりの街》の脱出を提案し、しかも仲間を守れなかった俺が取る事になる。——そんな途轍もない重みを背負うことなど、出来ない。出来るはずがないのだ。

クラインは俺の逡巡を読み取り、ニツと笑みを浮かべ、ゆつくりと首を左右に振った。

「いや……、おめえにこれ以上世話んなるわけにやいかねえよな。オレだって、前のゲームじゃギルドのアタマ張ってたんだしよ。大丈夫、今まで教わったテクで何とかしてみせらあ。それに……これが全部悪趣味なイベントの演出で、すぐにログアウトできるつつう可能性だってまだあるしな。だから、おめえは気にしねえで、次の村に行ってくれ。——オレが言うのは変だが、ユウキちゃんとランさんは、キリトを見てくれねえか。こいつ、危なっかしい気がするからなあ」

「ええ、任せてください」

「うん、ボクと姉ちゃんに任せてよ」

俺は一步下がった。

「ここで別れようか……。何かあったらメッセージを飛ばしてくれ。……また、どこかで」

「また会えるよ」

「そうですよ」

「ユウキちゃんとランさんの言う通りだぜえ。次会うときは、おめえに強くなった姿を見せてやらあ」

「そうか……」

「おう、楽しみしてろよ」

三人は身体を次の拠点となるべき村の方角へ向け、数メートル走った時、クラインが短く叫んだ。

「おめえら三人とも、可愛い顔してやがんな！ 結構好みだぜ！」

三人は振り向き、叫んだ。

「お前も、その野武士ツラのほうが十倍似合ってるよ！」

「クラインさんは、そっちの方がカッコイイよ！」

「ええ、またどこかで！」

「おう、おめえらも気づけてな」

——三人は再び前を向き、駆け出した。

はじまりの街の北西ゲート、広大な草原と深い森、それらを越えた

先にある小村——そしてその先に何処までも続く、果てなきサバイバルへ向かって。

## 第4話《細剣使いとの出会い》

俺は、《ルインコボルト・トルーパー》が振り下ろす無骨な手斧を右にスツテプして躲し、深く息を吸い吐いてから片手剣単発ソードスキル《スラント》を発動すれば、コボルトはHPを全損させ発動させ、ポリゴン体は砕け散った。

武器を構えながら周りを見渡すと、ユウキとランが対峙していたコボルトも、無数のポリゴン片となって散っていた。

俺は構えを解き、左右に剣を数回振り払ってから、背に装備している鞘へ剣を納めた。

「ふう、終わったな」

「私も終わりました」

「ボクも終わったよ」

姉妹は、剣の刀身を腰に装備している鞘へ戻しながら、此方にやって来た。

——《ソードアート・オンライン》の正式サービスが開始してから、一ヶ月が経過した。

この一ヶ月で二千人が死んだ。

その中には、自ら命を絶った者も居たらしい。

「街へ戻るか。今日の午後四時頃に、第一層ボス攻略会議があるらしいからな」

「ええ、わかりました」

「ん、了解」

踵を返そうとしたその時、迷宮区奥の暗闇で、一瞬の閃光が瞬いた。

「誰か居るな……」

「ええ」

「いってみようよ」

三人は顔を見合わせ頷いてから、右手で剣の柄を握り抜剣させてから、走り出した。



細剣使いは、コボルトが振り下ろす斧をぎりぎりの間合いで躲し、回避に成功するとコボルトが大きく体勢を崩すので、その隙を逃さず、全力でソードスキルを叩き込む。

技は、細剣カテゴリーで最初に習得出来る単発突き攻撃《リニア》だ。

剣を体の中央へ構え、そこから捻りを入れつつ、真っ直ぐ突くだけのシンプルな基本技だが、スピードが凄まじい。

止めの一撃を喰らい、コボルトが仰け反りポリゴン片を散らすと、細剣使いは壁に背をぶつけ、そのままズルズルと座り込み荒い呼吸を繰り返した。

暗赤色のレザー・チュニツクの上に軽量のブレストプレート、下半身はレザーパンツに、膝までのブーツ。

頭から腰近くまで覆うフード付きケープを羽織っている為、顔は見えない。

近づく足音に気付き、細剣使いはピクリと肩を震わせたが、それ以上動こうとはしなかった。

三人は約一メートル距離を取り、足を止め、俺が口を開いた。

「……さっきのは、オーバーキルすぎるよ」

細剣使いは肩をぴくりと震わせ、フードがほんの数センチ程持ち上げられ、暗がりの奥から二つのライトブラウンの瞳が鋭く俺を射た。

「オーバーキルっていうのは……モンスターの残りHP量に対して、与えるダメージが過剰だって意味だ。さっきのコボルトは瀕死状態だった。HPゲージはあと二、三ドットだったよ。止めは軽い

通常攻撃で充分だったはずだ」

数秒後、小さな声が零れた。

「………過剰で、何か問題あるの？」

「………オーバーキルしても、システム的なデメリットやペナルティはないけど……効率が悪いよ。ソードスキルは集中力を要求

されるから、連発しすぎると精神的な消耗が早くなる。帰り道だつてあるんだし、なるべく疲れない戦い方をしたほうがいい」

「………帰り道？」

細剣使いからは、疑問を含んだ答えが返ってきた。

てか、ユウキとラン以外に、こんな喋ったのは久しぶりだ。

「ああ、このあたりのダンジョンを出るだけでも一時間近くかかるし、そこから最寄りの町まで急いでも三十分だろ？ 疲れ切っているミスも増える。見たところ君はソロみたいだし、一人だと小さなミスでも命取りになりかねない」

「……それなら、問題ないわ。わたし、帰らないから」

「「は？」」

三人は同時に声を上げた。

すると、俺の右隣りに立っていたユウキが言葉を発した。

「え……帰らないって……、町にだよね？……ポーションの補給とか、どうするの？」

細剣使いは、小さく肩を上下させた。

「ダメージを受けなければ薬はいらないし、剣は同じのを五本買ってきた。……休憩は、近くの安全地帯で取ってるから」

「ちよつと待ってください。……じゃ、じゃあ、ダンジョンに潜りつばなしなんですか？」

「……そうよ。もう、三日……か。 四日。……もういい？ そろそろこの辺の怪物が復活してるから、わたし、行くわ」

壁を支えにして立ち上がった細剣使いの小さな背中へ向かって、俺は言葉を投げかけた。

「……そんな戦い方してたら、死ぬぞ」

細剣使いは足を止め、右の壁に肩を掛け、ゆっくり振り向いた。

「……どうせ、みんな死ぬのよ。 たった一カ月で、二千人が死んだわ。 でもまだ、最初のフロアすら突破されてない。 このゲームはクリア不可能なのよ。 どこでどんなふうにも死のうと、早い……遅いかだけの、違い……」

そこまで言った所で細剣使いの体が揺らぎ、緩やかに地面へと崩れ落ちた。

「ちよ」

「やっぱり限界だったんだよ」

「私たちが、助けましょう」

「……了解。——俺が道を開くから、二人はその人を運んでくれ。

二人でなら、運べるはずだ」

ユウキとランは剣を鞘に戻してから、細剣使いを起こし、腕を己の肩へ回し歩き出した。

俺は右手に剣を携え、周りを警戒しながら歩き出した。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

気付いた時には、ダンジョンの中には居なかった。

アスナが眼をぱちつと開け、上体を起こし周りを見渡すと、そこは、金色の苔を纏う古木と小さな花をつけた茨の茂みに囲まれた、森の中の空き地だった。

だが——どうして？ 迷宮で倒れたはずの自分が、遙か離れたフィールドへ移動しているのか？

その答えは、アスナの顔を正面から見ていた少女二人と、数メートル離れた所で、片手剣三本を抱え、その鞘に頭を預けるように俯いてる少年だ。

少年少女は、アスナがダンジョンで話し掛けられたプレイヤーで間違いない。

この三人が何らかの手段を用いて、この森まで移動させたんだろうが、どのようなにして運ばれたかは謎だ。

アスナ——結城明日奈は、掠れた声を押し出した。

「余計な……ことを。 何で……助けたの」

「ボクは助けたかったから、助けたんだよ」

「ええ、私も助けたかったからですよ」

これに気付いた少年が一本の剣を背中に装備すると立ち上がり、二本の剣を両の手に持ち、此方に歩み寄って来た。

「別に、あんたを助けたわけじゃない。 助けたかったのは、あんたが持っているマップデータさ。 最前線近くに四日もこもってたなら、未踏破エリアをかなりマップピングしたはずだ。 あんたと一緒に消



えるのがちよつともつたいなくてね」

アスナはメニュー・ウインドウを開きタブを切り替え、マップデータにアクセスすると羊皮紙アイテムにデータをコピーしてから、オブジェクト化して手に取り、少年の足許へ放り投げる。

「……………なら、持っていけば。これで、あなたたちの目的は達成したでしょ。じゃあ、私は行くわ」

「ちよつと待ちなよ。もう少し休んだ方が」

「ええ、疲れがかなり溜まっていると思います」

二人の少女がそう言ってきたが、どうせ皆死ぬんだから、疲れていようがいまいが、関係ない。

そう思いながら、アスナは下草に手をつき、立ち上がった。

黒々と伸びる迷宮区へ戻る為、一步踏み出した所で――。

少年の声が飛んできた。

「待てよ、フエンサーさん」

アスナは無視して数歩進んだが、続きの言葉が気になり足を止めた。

「あんたも、基本的にはゲームをクリアするために頑張っているんだろ？ 迷宮で死ぬためじゃなく。なら、《会議》に顔を出してもいいんじゃないか？」

「……………会議」

「ああ、今日の夕方、迷宮区最寄りの《ツールバーナ》の町で、第一層のフロアボス攻略会議が開かれるらしい」

「……………わかった」

「んじや、確かに伝えたぞ。ユウキ、ラン。行こうぜ」

二人の少女は立ち上がると、少年は両の手に持っていた剣を二人に渡す。

「ほい。 剣だ」

「ありがと」

「ありがとうございます」

少年は歩きだし、少女たちは片手剣を腰に装備してから、少年の背中を追うように歩き出した。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

俺たち三人は謎の細剣使いと連れ立って——までとは言えない距離を保ったまま、森を抜け、トールバーナの北門を潜った。

視界に「INNER AREA」という紫色の文字が浮かび、安全な街区圏内に入った事を教える。

俺は後ろを振り向き、言葉を投げかけた。

「会議は町の中央広場で、午後四時からだそうだ」

「……………」

当然の如く、細剣使いからの返答は返ってこない。

代わりに、フードに隠れた顔が上下した。

「俺は鼠と会って来るから、後、お願い出来るか？」

「OK♪」

「わかりました」

「ユウキは、コミュカを發揮しすぎるなよ。フエンサーさんは疲れ

てるみたいだし」

「そうならないように、私が見ときますよ」

ランがそう言ったので、大丈夫だろう。

俺は歩きながら掲げた右手を振り、メッセージに書かれた場所へと

向かった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「何処かに隠れてるだろ。出て来いよ」

「妙な女だよナ」

と、不意に背後から声を掛けられ、俺は振り向いた。

其処に居たのは、βテスト時から付き合いのある、鼠のアルゴだっ

た。

「……すぐに死にそうなのに、死なナイ。どう見ても素人なのに、技

は恐ろしく切れル。何者なのかね」

「さあ、俺は興味ないしな」

「そうだったナ。キー坊は何時も一緒に居る女性プレイヤーしか興

味ないんだったナ」

「ちよ、妙な言い方はやめてくれ。ただの幼馴染だ」

「幼馴染なのカ。良い情報が手に入ったナ」

……上手く情報を引き出させたな。

まあ、何時かばれることだし、いいか。

「あのフェンサーの事は聞かないのか？ 安くしとくヨ。五百コ  
ル」

「いや、いいよ。この事がばれたら、殺されそうだし……」

「にしし、キー坊は、頭が上がらないのか」

「いや、そんな事は……、まあ、俺の事は置いといて。で？ 今

日もまた、本業の取引じゃなくて、何時もの代理交渉か？」

するとアルゴは渋面になり、通りの左右を見回すと、俺の背中を指  
先で押して近くの路地へと移動させた。

細い路地の奥で立ち止まったアルゴは、背中を民家の壁に預け、頷  
いた。

「まあナ。二万九千八百まで引き上げるソーダ」

「ニーキュッパときたか」

俺は苦笑し肩を竦めた。

「……悪いけど、何コル積まれても答えは同じだ。売る気はないよ」

「オレっちも、依頼人にはそう言ったんだけどナ」

アルゴの本業は情報屋だが、副業でメッセンジャーの仕事も請け  
負っているのだ。

ここ一週間ほど彼女経由で、俺に接触してきている何者かは、少々  
複雑……というか面倒な依頼人らしい。

そしてその依頼人は、俺の持つ《アニールブレード+6》を買い取  
りたらしい。

「……………つたく、情報売るだけじゃなく、売らないほうでも商  
売したんだからなあ……見上げた商売魂だよ、ほんとに……………」

「にやははは、それがこの商売の醍醐味だナ！ 誰かに情報を売ると、  
その瞬間に《誰それが何々の情報買った》っていうネタが生まれるわ  
けだからナ！」

「……………どっかの女性プレイヤーが、俺のパーソナル情報をお求めになった時は知らせてくれ、相手の情報買うから……………。これなら、ぼれても大丈夫だと思うしな…………」

「にやははは、将来のキー坊は、奥さんに頭が上がらないナ。——んじや、依頼人には今度も断られたって伝えとくサ。この交渉は無理筋だ、ともナ。ほんじゃナ、キー坊。——ユーちゃんとラーちゃんにも、よろしく言っといてくれナ」

アルゴは身を翻すと、《鼠》の渾名に相応しい敏捷さで表通りを去った。

「……………てか、何で二人の名前知っているんだ」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

俺が三人の居る場所へ戻ると、ユウキとランは細剣使いと話をしていた。

——— すごいな。

「……………あの人とは幼馴染なの?」

「ええ、そんなんですよ。 さっきのアスナさんに言った言葉も、本心からじゃないですよ」

「そうそう。 『無理するなよ』 って言えばいいのにね」

俺はそつと近づいて、言葉を発した。

「……………あのく、戻りましたけど」

「あ、キリトお帰り」

「お帰りなさい、キリトさん」

「……………えっと、おか……………やつぱり無理」

「……………ま、まあ、行こうぜ。——残りは二時間くらいあるし、メシでも食うか」

そう言ってから、俺たち四人は歩き出した。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

アスナが三日、或いは四日ぶりの食事に選んだのは、NPCベーカリーの売り場で最も安い黒パン一つと、町のあちこちにある泉で好き

なだけ汲める水ひと瓶だった。

現実世界でも食事を楽しいと感じた事は数える位しかないが、この世界での飲食の空しいものだった。

トールバーナの町の中央部、噴水広場中央に置かれた木製のベンチに座ったアスナは、フードを眼深に下ろしたまま、口を動かし続けた。何時もはひっそりと、誰にも見つからない場所で摂っていたが、今日は違った。

アスナの左側に座る、ユウキから声が掛けられた。

「ねえねえ、アスナは何でフードを羽織っているの?」

アスナはパンを千切ろうとしていた手を止め、口を開いた。

「……顔を見られたくないからよ」

「そっか。——そうだ、キリト。クリーム持ってたよね」

「ああ、あるぞ」

少年はポケットに手を入れ二つの小瓶を取り出し、一つはユウキに渡し、もう一つは己とランの間のベンチの上へコトンと置いた。

「これをパンに使ってみなよ」

パンに使う、パンの上に塗ると理解したアスナは、おそるおそる右手を伸ばし、指先でツボの蓋をタップし、浮き上がったホップアップ・メニューから《使用》を選ぶと、指先が仄かな紫色に光る、《対象指定モード》と呼ばれる状態で、左手に持った食べかけのパンを触れる。すると、微かな効果音と共に、パンの片側が白く染まった。

これは、どう見ても——

「……これは、クリーム? こんなもの、どこで?」

「えっと、どこで取ったんだっけ? 姉ちゃん」

ランは手を止め、言葉を発した。

「ひとつ前の町で受けられる、《逆襲の雌牛》ってクエストよ」

ランがそう言うと、三人はパンにクリームを塗る。

少年は大口を開けてかぶりつき、ユウキとランはパクリとパンを食べ始めた。

アスナは左手に持ったパンを、おそるおそる齧った。

「ツ!?!」

いつもぼそぼそと粗いだけのパンが、質感のある田舎風ケーキのように変わってしまったかのような味が口中に広がった。クリームは滑らかで、しかもヨーグルトに似た爽やかな酸味がある。

アスナは、二口、三口と夢中でパンを頬張った。

気付けば、皆より早く完食していた。

羞恥が強烈に立ち上がりこの場から逃げ出したくなるが、ここまでして貰っただけで逃げ出すのは礼儀知らずな行為だ。

「……………ぐ、ぐ 馳走様」

「は、早いね」

「お腹減ってたんですね」

「腹一杯になって何よりだ」

少年と少女にこのように言われ、羞恥が先程より増してしまった。

フードの中に隠れている顔は、真っ赤になっているだろう。

少年が両の手をパンパンと払い、言葉を発した。

「さつき言っただけの牛のクエスト、やるならコツを教えるよ」

アスナは頭を振った。

「……………いい、わたしは、美味しいものを食べるために、この町まで来たんじゃないもの」

「じゃあ、何のためだ？」

「わたしが……………わたしでいるため、最初の街の宿屋に閉じこもって、ゆっくり腐っていくなら、最後の瞬間まで自分のままでいたい。たとえ怪物に負けて死んでも、このゲーム……………この世界には負けたくない。

い。 どうしても」

「あく、今の言葉を訂正する事になっちゃうけど。 フェンサーさんは死なないと思うぞ。 ユウキとランが、全力で君のことを守ると思うからな。 ——でも、この状況を生み出したのは……………言い換えれば、君をそこまで追い込んだのは、ある意味俺の……………」

アスナには言葉の続きが聞こえなかったが、ユウキとランには聴こえていたようだ。

二人は真剣な顔となり、

「キリトさん。 そんなこと言ったらダメですよ」

「キリトは頑張ってるよ。 みんなの為に情報を集めて、流したりしているでしょ」

「……ああ、ありがとう二人とも」

思ったより重い空気になってしまったので、アスナは立ち上がった。

「……行きましょう。 あなたたちが誘った会議なんだから。 そう

いえば、君には私の名前を覚えていなかったわね」

「ああ、そうだな」

「わたしの名前はアスナよ。 覚えといて」

「……キリトだ。 よろしく、アスナ」

アスナは、会議が開かれる広場へ歩き出した。

キリト、ユウキ、ランも立ち上がり、アスナの後を追うように歩き出した。

——これから、第一層ボス攻略会議が始まる。

## 第5話《第一層ボス攻略会議》

四十六人。

それが、ツールバーナの噴水広場に集った者の総数だった。

「すごい……こんなにたくさん……」

後方で歩く、フードを羽織ったアスナが、そう呟いた。

俺は歩きながら振り向き、言葉を返した。

「たくさん……この人数が」

このSAOでは、一パーティーが最大八人までであり、計四十八の連結<sup>レイド</sup>パーティーを作ることが出来る。

——俺が予想した人数より、少ない。

「アスナが言ったことは、死ぬ可能性があるのに、こんなに集まったのは凄いつて意味だよ」

俺の右隣で歩くユウキが、こう答えた。

確かに、攻略に己の命を懸かっているにしては集まった方なのかもしれない。

「……なるほど。——いや、でもどうかな」

「ええ、そうですね。《攻略に遅れるのが不安》、で来ている人がいると言うことですね」

俺はランの返答に頷いた。

「ああ、ランの言う通り、全滅するのは怖いけど、自分の知らない所でボスが倒されるのもやっぱり怖いんだ。俺も含めてだけどき。——

ゲーマーの性<sup>さが</sup>なのかもな」

「……それって、学年十位から落ちたくないとか、偏差値七十キープしたいとか、そういうのと同じモチベーション？」

俺は絶句したが、暫し考え、頷いた。

「うん……まあ、そうなのかも……——アスナって、エリートお嬢様だった？」

「キリト……」

「キリトさん……」

俺はユウキとランの指摘を受けて、『しまった』と思った。



現実世界のことを聞くのは、重大なマナー違反だ。

「……………ええ、そうかもね。私のことは、今は関係ないでしょ」

驚いたことに、アスナはこう答えたのだ。

俺はわざと咳払いをしてから、言葉を発した。

「そ、それじゃあ、行こうぜ」

三人は空いている隅っこの席へ座り、会議が開かれるのを待った。

——第一層ボス攻略会議が開催される。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「はいー！ それじゃ、五分遅れたけどそろそろ始めさせてもらいます！ みんな、もうちよつと前に……………そこ、あと三步こつち来ようか！」

この声の主は、長い鮮やかな青髪を流しているイケメンだった。

イケメンは笑みを浮かべると、言った。

「今日はオレの呼びかけに応じてくれてありがとう！ 知っている人もいると思うけど、改めて自己紹介しとくな！ オレの名前は『ディアベル』、職業は気持ち的に『ナイト』やっています！」

すると、会場がどつと沸き、口笛や拍手に混じって「ほんとは勇者って言っていてーんだろー！」などという野次が飛んだ。

恐らく、ディアベルのパーティーメンバーだろう。

ディアベルは右手を掲げ場を制してから、話し始めた。

「さて、こうして最前戦で活動している、言わばトッププレイヤーのみんなに集まってもらった理由は、もう言なくてもわかると思うけど……………」

その一言に全員が頷いた。

ディアベルは、街並みの彼方に聳える巨塔、第一層迷宮区を指し示しながら続けた。

「……………今日オレたちのパーティーが、第一層のボス部屋を発見した！ そしてこのボスを倒し、みんなに伝えなきゃいけない。それが今ここに居る、トッププレイヤーの義務だ！ そうだろ、みんな！」

「そうだ、やってやろうぜ！」

「オレたちならやれるぞ！」

この演説で盛り上がり上がっている場に、水を差した人物が居た。

「ちよつと待ってんか、ナイトはん」

前方の人垣が半分に割れ、ずかずかと前に出て来たのは、小柄ながらがっちりとした体格の男だった。

特徴的なのは、サボテンのように尖った髪だ。

ディアベルの横に立ったサボテン頭は一步踏み出した。

「そん前に、こいつだけは言わせてもらわんと、仲間ごつごはできへんな」

ディアベルは笑みを浮かべながら、サボテン頭に聞いた。

「こいつってというのは何かな？　でも、発言するなら名乗ってもらいたいな」

サボテン頭は、広場をぐるっと見渡した。

「わいは《キバオウ》ってもんや。　こん中に、五人か十人、ワビい入れなあかん奴がおるはずや」

「詫び？　誰にだい。　もしかして、——元βテスターのことかな？」

キバオウは吐き捨てた。

「はっ、決まっとするやろ。　β上がりどもは、このクソゲームが始まったその日に、はじまりの街から消えよった。　右も左も分からん九千人のニュービーを見捨てよった。　奴らはウマイ狩り場やらボロいクエストを独り占めして、ジブンらだけぼんぼん強うなって、その後もずーつと知らんぷりや。　……こん中にもちよつとはおるはずやで、β上がりつちゆうことを隠しておる奴が。　そいつらに土下座さして、貯め込んだ金やアイテムをこのボス戦のために吐き出してもらわな、パーティーメンバーとして命は預けられんし、預かれんと、わいはそう言うとするんや！」

声を上げようとする者は居なかった。

元βテスターである俺もまた、奥歯を噛み締め、息を殺し、沈黙を保ち続けた。

その時だった。

ユウキが立ち上がった、発言をしたのだ。

「ちよつといいかな……」

「えつと、君は誰かな？」

ディアベルが笑みを崩さないで聞いた。

「ボクの名前はユウキ、ニュービーだよ。キバオウさん、あなたが言いたいことは、元βテスターが指導をしなかったからたくさんの人が亡くなった、そうだよね」

「そ、そうや。元βテスターのグズどもが指導しておれば、二千人も死ななかつたんや」

「それって、自分勝手すぎないかな」

ユウキの声には怒りが含まれていた。

「私も発言いいですか？」

ランも挙手をして立ち上がった。

キバオウは怒りを含んだ言葉で促した。

「つ、次は誰や！ さつさと名のらんかい！」

「ええ、わかりました。私の名前はランです。ニュービーです。——キバオウさん、あなたは元βテスター千人は九千人の命を守る為に、命を張れと。悪い言い方をすれば、守る壁になれってことですよね」

ランの言葉は、冷え切っていた。

すると、周りがざわざわし始めた。

そこを追撃するように、スキンヘッドで、肌がチョコレート色の男性プレイヤーが立ち上がった。

「オレも発言するぞ。オレの名前はエギルだ。キバオウさん、金はともかく、情報ならあったんだぞ」

エギルはレザーアーマーの腰につけた大型ポーチから、簡易な本を取り出す。

表面には、丸い耳と左右三本ずつのヒゲを凶案化した《鼠マーク》。

「このガイドブック、あんただって貰っただろう。ホルンカやメダ

イの道具屋で無料配布してるんだからな」

「貰たで。……それが何や」

そう言うキバオウの声は、徐々に弱々しくなっていた。

「こいつに載っているモンスターやマップデータを情報屋に提供したのは、元βテスターたちってことだ」

キバオウはこれを聞き、押し黙ってしまった。

そこに、ディアベルが纏めるように言葉を発した。

「キバオウさん、君の言うことは理解できるよ。オレだって右も左も解らないフィールドで、何度も死にそうになりながらここまで辿り着いたわけだからさ。でも、今は前を見るべき時だろ？ 元βテスターだって……いや、元βテスターだからこそ、ボス攻略のために必要な人なんだ。彼らを排除して、結果攻略が失敗したら、何の意味もないじゃないか」

「………ええわ、ここは引いたって。でもな、ボス戦が終わったら、キツチリ白黒つけさしてもらおうで」

振り向き、スケイルメールをじやらじやら鳴らしながら、元居た場所まで戻っていった。

それを確認してから、ユウキ、ラン、エギルは着席した。

「やっぱり、慣れないことは疲れますね」

「うん、ボクも疲れたよ」

そう言うってから、ユウキとランは大きく息を吐いた。

「あ、あなたの幼馴染って凄いわね……」

「……俺には出来ない行動だった。ありがとう、二人とも。少し

だけ気が楽になったよ」

「いえ、当然のことでしたまでですよ」

「そうだよ。姉ちゃんとかボクは、キリトに命を救われてるんだから」

俺は、アスナを申し訳なさそうに見た。

すると、アスナはフードの中で頭を振った。

「……私は、君たちに命を救われた。私は君を責めないわ」

「……ありがとう」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「それじゃ、攻略会議を再開したいと思う！ みんな、まずは仲間や近

くにいる人と、パーティーを組んでみてくれ！」

「……………なん、だと。」

でもまあ、信頼、信用できるメンバーと組むのが一番良い。

まあ、アブレ組になってしまおうと思うが。

「アスナさん、私たちと組みましようか？　知らない人と組むのは嫌でしょ？」

俺とユウキとランは、はじまりの街を出てからパーティーを組みっぱなしなのだ。

「……………そうね」

「決まりだね。　じゃあ、キリトがアスナに申請してね」

「了解した」

俺は頷き、視界にウィンドウを表示すると、アスナにパーティー参加申請を出す。

アスナがOKボタンにタッチすると、視界左側に四つ目のHPゲージが出現した。

それから、パーティーの役割編成が完了した。

俺たちのパーティーは、取り巻きコボルトを排除するE隊のサポート役に組み込まれた。

言い換えると、ボス戦の邪魔にならないように後方で大人しくしていて、ということだと思う。　予想通り、アブレ組になってしまった。

まあ、アスナは不満を漏らしていたが。

「……………私たち、ボスに一回も攻撃できないまま、終わっちゃうじゃない」  
「い」

「しよがないですよ。　四人しかいませんし、次がありますよ」  
と、ランがアスナを慰めていたが。

俺は気になることがあったので、アスナに聞いた。

「なあ、アスナって、スイッチやPOTって知ってるか？」

「……………スイッチ……………POT……………？」

「……………あ、俺、腹減ってきたな。　メシでも食ってくるわ」

俺はそう言って歩き出したが、ユウキとランにコートの首根っこを同時に掴まれ、情けない声を漏らした。

「キリトさん。今、逃げようと思いましたね」

「キリト、面倒くさがらしいの」

「な、何のことかな。……す、すいません」

「はあく」

ちよ、同時に溜息を吐かないで。

俺、泣いちやうよ。

「ふふ、あなた達は、とても仲がいいのね。　少しだけ羨ましいわ。――

―それで、どこで説明してくれるの」

アスナはフードの中で微笑んだ。

「アスナ、棘が取れてきたね」

「そうね。　こつちの方が話やすいですね」

「えーと、やっぱり二人に任せるのは無し?」

「無し(です)」

「あい……。――じゃあ、其処ら辺にある酒場にしようか?」

「それは、私が無しね」

ユウキ、ラン、アスナに否定されてしまった。

こうなると、男はとことん弱い。

「あなた達が泊まっている宿屋でいいじゃない。――それに、顔を見られたくない」

「そうですね。　私たちの宿には、お風呂がありますから」

「お、お風呂ッ。　お風呂があるの!?!」

アスナはフードの中で眼を輝かせ、笑みを浮かべていた。

恐らく、この世界に来て一番の笑みだっただろう。

「ええ、ありますよ」

「女の子は、やっぱりお風呂だよね♪」

このようにして、女性陣で話が進んでいった。

俺の意見は通らないのね……。

うん、もう諦めたよ。

「じゃあ、宿屋へレッツゴー♪」

ユウキの掛け声と共に、俺たち四人は歩き出した。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

トールバーナの町の東に広がる小さな牧草地沿いに、三人が泊まっているという宿屋は存在した。

敷地の脇を綺麗な小川が流れ、設置された小さな水車が音を立てている。

二階建ての宿の一階には、NPCの農夫一家が暮らしている。俺が先頭に立ちドアノブを捻ると、自動で解錠音が流れ、扉が開いた。

「ま、まあ、どうぞ」

「……ありがとう」

アスナはそう言ってから、扉を潜って中へ入っていった。

緊張する俺を見ていた双子姉妹が、呆れたように言葉を発した。

「キリトさん、緊張してるんですか？ 女の子を入れたことあるじゃないですか？」

「ボクと姉ちゃんの際は、緊張しないくせに」

「いや、お前らは幼馴染だろ。だから……えーと、その」

「まあいいですよ。それより中へ入りましょうか」

「だね」

三人は扉を潜り、部屋の中へ入った。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「案内して来たよ」

そう言って、ユウキが俺の隣へ座った。

アスナを風呂場まで案内して来たのだ。

俺は、鼠が作った攻略本に視線を落としていたんだが、如何せん、落ち着かないのだ。

まあ、ユウキとランが入っている時も落ち着かないんだが。

その時、コンコンとドアがノックされた。

ランが立ち上がり、扉の前まで移動し、ゆっくりと扉を開けた。

入って来たのは、鼠のアルゴだった。

「フェンサーはどうしたんだ。会議には一緒にいたんだろ？」

そのまま、俺の向かいにあるソファアームまで移動してから、どすんと腰を下ろした。

「ああ、あいつは今外してるぞ。——で、今日はどうしたんだ？」

まあ、この宿屋の風呂場にいるんだが。

これがばれたら、色々ヤバイ？」

「クライアントが、どうしても今日中に返事を聞いてこいっていうもんだからサ」

「なるほどな、本題に入ってくれ」

「ユーちゃんとラーちゃんもいるけど、いいの力？」

「別に構わないぞ」

「にしし、ユーちゃんとラーちゃんを信用しているんだナ」

「信頼もしてるぞ」

「にしし、キー坊は、将来決断を迫られるナ」

俺とアルゴの会話を聞いていた双子姉妹の頬が朱色に染まっていた。

え、何で？

「それじゃあ、本題に入るナ。クライアントがキー坊の剣を買い取るのに、三万九千八百コル出すそーダ」

「……………あんたを侮辱するつもりはないけど……………それ、何かの詐欺じゃないか？ どう考えても、四万コルは割に合わないよ。だって、素材の《アニールブレード》の相場が、一万五千くらいだろ。」

それに二万足せば、ほぼ安全に＋6まで強化できるだけの素材アイテムも買えるはずだ。時間はかかるかもしれないけど、三万五千コルで俺と同じ剣が作れる計算だぞ」

「オレっちも、依頼人に三回そう言ったんだけどナ！」

「……………アルゴ、あんたのクライアントの名前に千五百コル出す。それ以上上積み返すか、先方に確認してくれ」

「……………わかつタ」

アルゴは頷きウィンドウを開くと、高速タイピングで依頼人にメッセージを飛ばした。

それから一分後、メッセージが返ってきた。



「教えても構わないソーダ。——クライアントの名前は、キバオウだ」  
「……何でそこまで俺の剣に拘るんだ?」

暫しの沈黙が流れる。

この沈黙を破ったのは、ランだった。

「キリトさんの剣には、キバオウさんがどうしても欲しい理由があるんですよ」

ランに続いて、ユウキが言葉を続けた。

「そうだね。例えば、キバオウさんがキリトの剣を使うとか。もう一つは、キリトの戦力を落とすことによって、お得な何かを得られる、とか」

「なるほどナ。そういう解釈もできるナ。ユーちゃんとラーちゃんは、頭が回るナ。オレッち感心したヨ。で、キー坊はどうするんだ?」

「……この剣は、売る気はないよ」

「……今回も、剣の取引は不成立ってことでいいんだナ?」

「……ああ、そうだ」

アルゴは立ち上がった。

「そんじゃ、オレっちはこれで失礼するヨ。その攻略本、役立ててくれよナ」

「……ああ」

「つと、帰る前に、悪いけど隣の部屋借りるヨ、夜装備に着替えたいからナ」

「……ああ」

いや、ちよと待て!?! アルゴ奴、今何て言った?

呆然と見守る俺の視線の先で、アルゴの小柄な姿が風呂場に消えたが、それと同時に、俺の眼が誰かの手によって眼隠しされた。

——三秒後。

「わああ!?!」

という驚声と、

「……………ぎゃああああああ!?!」

と言う凄まじい悲鳴が、屋敷全体を震動させた。

直後、誰かが風呂場から飛び出す音が聞こえてくる、この声の主は、アルゴ以外のプレイヤー。と言うことはアスナしかいない。

この眼隠しを取ったら、俺、死んじゃうかも……。

「キリトさんは、見たらダメですよ」

声の主は、ランだった。

「ランさん。この眼隠しは、事態が収拾するまでお願いしてもいいですか？」

「ええ、任せてください」

その後は、ユウキの手伝いもあり、早くにことを収めることが出来た。

マジで助かりました、ランさん。

——俺は、朝日を拝む事が出来たのだ。

## 第6話《第一層ボス攻略戦》

そして翌日。

トールバーナの噴水広場には、総勢四十六人が集っていた。噴水広場の中央で、周りを見渡したディアベルが美声を張り上げた。

「みんな、いきなりだけど——ありがとう！ たった今、全パーティー四十六人が、一人も欠けずに集まった!! これから迷宮区へ移動しようと思う！ みんな、ついて来てくれ！」

四十六人はディアベル先頭の下、迷宮区タワーを指し歩き始めた。

まあ、アブレ四人は距離を取り歩いているが。

◆◆◆◆◆

此処は《圏外》なので、時折左右の森からモンスターが現れ襲い掛ってくるのだが、それは、前方を歩いている腕自慢プレイヤーが瞬殺している。

道中の大人数による行程は、アスナの記憶の一部をちくりと刺激した。

アスナは思い出した。

今年の一月に行った修学旅行だ。

その時の状況と、樹下の道を行く雰囲気は、あの時と酷似していた。絶えないお喋り、爆発する笑い声、この騒ぎようが、その同級生たちを想起させたのだ。

「……ねえ、キリト君は、ここに来る前も他の……MMOゲーム？ つていうの、やってたんでしょう？」

「ん……ああ、まあね」

「他のゲームも、移動の時ってこんな感じなの？　なんて言うか……遠足みたいな……」

アスナの言葉に答えたのは、後方を歩いていたランだった。

「ふふ、遠足ですか。　残念ながら、他のタイトルではこうはいかな

かったと思いますし、フルダイブ型ではないゲームは、キーボードやマウス、コントローラを操作しなくちゃいけませんからね。チャットなどで話せる時間はなかったと思いますよ」

「へえ、そうなんですか。ランさんは詳しいんですね」

「ええ、誰かさんに触発されて詳しくなっただんですよ」

ん、もしかしてランの言う誰かって、俺のことか？

小さい時に、ゲームの話をした記憶はあるが。

「そっだよ。キリトのことだよ」

「そ、そうか」

ユウキに心を読まれた……。前にも、こんな事があったような。

てか、俺は双子姉妹に隠し事は不可能なのかもしれない。

何それ怖い。

「……私も、あなた達のような友達が欲しかった」

「え、ボクとアスナは友達じゃないの？」

「私達とは友達ですよ」

じゃあ、俺の扱いはどうなるんだろうか？

メツチャ気になるんですが。

「そ、そう。それなら、キリト君とも友達になってあげるわ」

「そ、そうっすか。あ、ありがとうございます」

アスナがポツリと呟いた。

「もし、こういうファンタジー世界がほんとにあったとして……そこを冒険する剣士とか魔法使いとかの団が、恐ろしい怪物を倒しにくとして、道中の彼らは、どんな話をするのかしらね。……それとも押し黙って歩くのか……」

アスナの問いに、俺が答えた。

「死か栄光への道行き、か。それを日常として生きている人たちなら……たぶん、晩飯を食べにレストランに行く時と、一緒なんじゃないかな。喋りたいことがあれば喋るし、なければ黙る。このボス攻略レイドも、いずれはそんなふうになると思うよ。ボスへの挑戦を、日常にできればね」

アスナは小さく笑った。

「……ふふ、キリト君は面白いことを言うのね。　この世界は究極の非日常なのに、その中が日常になるなんて」

「確かにそうだ」

すると、前方を歩いていたキバオウが此方にやって来た。

「ええか、今日はずっと後ろに引っ込んでおれよ。　ジブンは、わいのパーティーのサブ役なんやからな。　大人しく、わいらが狩り漏らしたコボルトの相手だけしとれや」

「はいはい、わかりました。　なら、あなた達パーティーが残さず狩ってくださいね。　私たちはお邪魔虫でしょうから。　……それとも、出来ませんか」

ら、ランさん。　メチャクチャ怖いですけど……。

それに、声のトーンが徐々に落ちてるし。

「チツ」

キバオウは舌打ちをして元の場所へと戻って行った。

「キバオウさん、好きになれないんですよ」

「……そ、そうなのか。　てか、ランさん。　メッチャ怖かったです」

「ふふ、そうですか。　あれ、演技なんですよ。　これくらいなら、ユ

ウキもできますよ」

「ユウキとランは、女優職業に向いてるんじゃないか？」

「そうですね。　考えときます」

「うん、ボクも考えとくよ」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

四人の眼前には、灰色の怪物のレリーフの二枚扉が鎮座していた。

俺は最終確認の為、三人の近くに寄った。

「最終確認だ。　今日の戦闘で俺たちが相手をする《ルインコボルト・

センチネル》は、ボスの取り巻きの雑魚扱いだけど充分に強敵だ。

昨日もぎつと説明したけど、頭と胴体の大部分が金属鎧でがっちり守

られているから、まずは、俺たち三人の誰かが、奴の長柄斧をソード

ポールアックス

スキルで撥ね上げさせるから、スイッチして、アスナと残りの二人で

畳み掛けてくれ。　絶対に集中力を切らすなよ。　ボス戦では致命的

になるからな」

「了解」

ディアベルがレリーフの前へ立ち、美声を響かせた。

「ここまで死者を出すことなく辿り着くことが出来た！ ボス戦も死者を出さず攻略しよう！ そして、最後にオレから言えることは一つだけだ。勝とうぜ！」

ディアベルは片手剣を高々と掲げると、大きく一つ頷いた。残りの全員も、剣を抜剣して頷き返した。

「行くぞー！」

まず最前列で突進したのは、ヒーターシールドを掲げる戦槌ハンマー使いと、彼らに率いられるA隊。その斜め後方を、斧戦士エギルが率いるB隊が追う。右には、ディアベルと彼の仲間五人によるC隊と、両手剣使いがリーダーのD隊。その後ろを、キバオウ率いる追撃E隊と、長柄武器ポールアーム装備のF隊、G隊が並走する。

そしてその後ろに、オマケ四人だ。

A隊リーダーと玉座の距離が二十メートル切ったその瞬間、上空から巨大なモンスターが着地した。

狼を思わせる顎あごをいっばいに開き、吼える。

「グルルラアアアッ!!」

ボスの名は《インフィング・ザ・コボルトロード》。

奴の外見は、青灰色の毛皮を纏った、二メートルを超える逞しい体軀。

血に飢えた赤金色に爛々と輝くせきがん隻眼。

右手に骨を削って作った斧を携え、左手には革を貼り合わせたバツクラを構え、腰の後ろには一メートル半ほどの長物を差している。

「よし！ ボスは武装は情報通りだ！ これならいけるぞー！」

ディアベルの指揮により、各隊が突進していく。

ボスが右手の骨斧を高々と振りかざすと、A隊に力任せに叩き付けるが、分厚いヒータシールドがそれを受け止め、眩いライトエフェクトと強烈な衝撃音が広間を震わせた。

その音が合図だったように、左右から重武装の取り巻きが飛び降り

てくる。

こいつは、《ルインコボルト・センチネル》だ。

キバオウ率いるE隊と、それを支援するG隊が三体へ飛び掛かり、タゲを取る。

だが、その内の一体がその場から抜け、此方に突進して来た。

「誰が行く？」

「じゃあ、ボクがいくよ」

ユウキ剣を中段に構え地を蹴り、剣に赤いライトエフェクトを纏わせる。

片手剣基本突進技《レイジスパイク》を放ち、センチネルの斧に衝突させ撥ね上げさせてから、体勢を崩させた。

「スイッチー！」

ユウキが叫び、俺たち三人はユウキと入れ替わる。

アスナは、仰け反りながら空きになったセンチネルの喉元に、渾身の《リニア》を撃ち込む。

これにより、センチネルのHPが約六割減少した。

センチネルは体勢を立て直そうとするが、俺が剣に薄水色のライトエフェクトを纏わせ、片手剣単発ソードスキル《ホリゾント》を発動させると鎧上から水平に斬りつけ、再び体勢を崩させる。

鎧上からの攻撃なのでHPが二割程度しか減少しないが、その上を畳み掛けるように、ランが剣に水色のライトエフェクトを纏わせ、片手剣単発ソードスキル《スラント》の斜め斬りを喉元へ向けて放った。

この攻撃が喉元入ってセンチネルはHPの全損し、ポリゴン体は散っていった。

「やったね」

「ですね」

「うむ。初めてにしては、良い連携だった」

「そうね」

「んじや、行きますか」

「了解！」

四人は、狩り漏れたセンチネルを排除する為走り出した。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

コボルト王との戦闘は順調に進んでいた。

ディアベル率いるC隊が一本目のHPゲージを、D隊が二本目のHPゲージを削り、現在はF、G隊がメイン火力になって三本目のHPゲージを半減させている。

ここまで、壁役のA、B隊メンバーが何度かHPを黄色にした程度で、赤の危険域に落ちた者は居なかった。

取り巻きのセンチネルはオマケ四人で処理出来ているので、途中からE隊がG隊のメイン戦場の支援に回った。

「はッ」

「ギャアアアア！」

俺の攻撃によってセンチネルが断末魔を上げ、ポリゴン体を散らしていった。

背後で、キバオウの声がひそつと響いた。

てか、G隊と合流したんじゃないのかよ。

「アテが外れたやろ。 ええ気味や」

「……………は？」

意味が解らず、振り向きざまにその声を上げた。

残り一体のセンチネルも倒されていたので、再度POPするまで、会話をする隙がありそうだ。

「……………で、何が言いたいんだ？」

「へタな芝居すなや。 こっちはもう知つとるんや、ジブンがこのボス攻略部隊に潜り込んだ動機つちゆうやつをな」

「動機……………だと？ ボスを倒す以外に、何があるって言うんだ？」

「何や、開き直りかい。 まさにそれを狙うとったんやろうが！ わいは知つとんのや。 ちゃーんと聞かされとんのかやで……………あんたが昔、汚い立ち回りでボスのLAを取りまくつとったことをな！」

ラストアタック

——LA

俺は数多のボス戦で、敵のHPゲージ残量を測りつつ最大威力のソードスキルを叩き込み、LAボーナスを取得することを得意として



いた。

だが、それはβテスト期間に於いてだ。

キバオウは、俺が元βテストスターだったことはおろか、当時のプレイスタイルまで知悉ちしつしている。

この男は『聞いた』と言った。

それはつまり、伝聞情報だということだ。でも、いったい誰から？

キバオウはこの一週間、情報屋鼠のアルゴを通じて、俺の《アニールブレード+6》を買い取ろうとした。

昨日は提示額を市価を上回る四万コルにまで吊り上げたが、しかし俺が最終的な拒絶を伝えても、その金を他に遣おうとしなかった。

いや、遣えなかつたのだ。彼の金ではなかつたから。

アルゴだけではなく、キバオウ自身もまた代理人なので、買い取りを断られた翌日も平然と話し掛けられた。なの

真の依頼人は他にいる。四万コルの出所はそいつだ。アルゴとの間にもう一人置けば、俺が幾ら情報量を積んでも、本当の出資人の名前は買えない。

その黒幕は、キバオウにβ時代の情報を与え、元βテストスターへの敵意を煽って操った。

だとすれば、そいつの狙いは《アニールブレード+6》を得て自身の攻撃力を増やすことではなく、——俺の攻撃力を削ぎ、弱体化させ、嘗て得意技だったL Aボーナス獲得を妨げること。

「……………キバオウ。あんたにその話をした奴は、どうやってβテスト時代の情報入手したんだ」

「決まっとるやろ。えろう大金積んで、鼠からβ時代のネタを買ったっちゅうとつたわ」

これは嘘だ。

アルゴは、自分のスターテスは売っても、βテスト関連の情報は絶対に売らない。

俺が考えていたら、前線の方で、

「おおっしやー！」

と言う歓声が弾けた。

ボスの四段HPゲージが、遂に最後の一本に突入したのだ。三本目のゲージを削ったF、G隊が後退し、代わりに全回復を終えたC隊がボスに向かって突進していく所だった。

——ディアベルは此方に振り向き、不敵な笑みを浮かべ走り出した。

「ウグルウオオオオオオ——!!」

コボルト王が一際猛々しい雄叫びを放つと同時に、壁の穴からセンチネルが飛び出してくる。

「……雑魚コボ、くれたるわ。 あんじょうLA取りや」

そう言うと、キバオウはE隊の元へ走っていった。

キバオウとすれ違うように、アスナたちは俺と合流した。

「……なに話してたの？」

「うん、結構長話だった気がするけど」

「大丈夫ですか？」

アスナたちがそう聞いてきたが、俺は首を横に振った。

「大丈夫だ。——まずは、敵を倒そう」

「了解」

短いやり取りの後、此方に突進してくる二体のセンチネルに剣を向ける。

不意に何かを感じた俺は、ボスに視線を向けた。

コボルトが右手に携えていた骨斧、左手で構えていた革盾を投げ捨てた場面だ。

コボルトは右手を後ろに回し、ぼろ布が巻かれた柄を握り、タルワール湾刀を引き抜く。

ここからは、死ぬまで曲刀カテゴリのソードスキルだけを使う。

使う技は縦斬り系ばかりなので、技発動時の軌道を把握すれば、ボスに貼り付いたままでも回避が可能だ。

ディアベルの指示でC隊が、ボスの周囲をぐるりと取り巻いた。

あとは、湾刀の振り下ろし攻撃を避けつつ、トドメまで……………。

——いや、待て。 キバオウに大金を託し、俺の剣を買い取らせよ

うとしたプレイヤーの目的は、俺のL Aを妨害すること。

剣は奪えなかったものの、その人物の目的はほぼ達成されている。俺はレイドのオマケ部隊として、センチネルの相手だけをせねばならず、ボスに近寄れないのだから。

だとすれば。黒幕の正体は、今この瞬間、ボスのL Aを取ろうとしているプレイヤーということになる。

四万もの金を出して、俺の妨害しかできないのではあまり割に合わない。

自分がL Aを取れてこそ、その出費に見合う報酬が期待できる。

つまり……キバオウを操ったプレイヤー、俺のβテスト時を知る人物、そいつは先程笑みを浮かべた――

「来ます！」

ランの鋭い美声によって前を振り向くと、一体はユウキとアスナの元へ、もう一体は俺とランの元へコボルトが突進して来ていた。

センチネルが振り下ろしかけた斧を、単発斜め斬りソードスキル《スラント》で思い切り弾き返す。

「スイッチー！」

俺がそう叫ぶと、代わりにランが前に出てソードスキルを叩き込む。

俺は再度コボルト王を一瞥した。

ボスの無敵モーションが終了し、戦闘が再開される所だった。

最初にタゲを取ったディアベルが、落ち着いた動作でボスの初撃を捌こうとしている。

その背中に向けて、俺は内心で囁き掛けた。

「――ディアベル、あんたが、……何もかも仕組んだのか……？」  
違和感。 何かが違う。

あのボスモンスターは、俺が知るコボルト王と少しだけ違う。

それは、右手に携えている武器だ。

俺の位置では武器のシルエットしか見えないが……あの剣は、湾刀にしては細すぎる。幅と、それに武器の輝きが違う。

俺はあの武器を見たことがある。それは、浮遊城の上階に生息す

るモンスターが持つ武器。　モンスター専用のカテゴリの——野太刀。

「だ……だめだ。　下がれ!!　全力で後ろに跳べ——ツ!!」

コボルト王の巨体が床を揺るがし、垂直に跳んだ。

空中で巨体を捻り、武器に威力を溜め、落下すると同時に蓄積した力が竜巻の如く解き放たれた。

刀専用ソードスキル、重範囲攻撃《旋車》。

この攻撃によって、C隊のHPのゲージが一気に黄色に染まり、回転する光が取り巻いてる。

これは、——行動不能状態だ。

ディアベルが打ち倒されてしまったので、全隊の動きを縛ってしまったのだ。

俺は我に返り、走りながら叫んだ。

「追撃がくるぞ。　壁役隊、C隊の援護に行くんだ!!」

前方から、エギルの野太い声が返ってきた。

「お、オウ。　だが、前方にはセンチネルが……」

「俺たちに任せろ!——三人とも、行くぞ!」

「了解!!」

四人は前方に陣取るセンチネルを葬り、道を開く。

壁役隊は開かれた道を掛けて行く。

——だが、間に合わなかった。

スキル後の硬直から解除されたコボルト王が吼え、両手で握った野太刀を床すれすれの軌道から高く斬り上げ、ソードスキル《浮舟》を放ったのだ。

狙われたのは、正面に倒れるディアベルだった。

薄赤い光の円弧に引っかけられたように、ディアベルの体が高く宙に浮く。

コボルト王が携える野太刀が、再度赤いライトエフェクトを包み、スキルコンボを開始した。

ディアベルは空中で剣を振りかぶり、反撃のソードスキルを放とうとするが、動作が不安定になってしまい、ソードスキルが発動されな

かった。

上、下の連撃。そこから溜めの突き。三連撃技《緋扇》がディアベルを正面から襲った。

この攻撃を受けたディアベルは吹き飛ばされ、俺の近くに突き刺さるように落下した。

HPゲージは、急速に減少を始めていた。

俺は声を絞り出した。

「……………おい、しつかりしろ」

「……………すまなかった、キリトさん。後は頼む。ボスを、倒」

最後まで言い終えることなく——騎士ディアベルは、その体をポリゴンへ変え、アインクラッドから姿を消した。

## 第7話《ビーター誕生》

「うわあああ!!」

「し、死んだ!!」

「も、もうダメだ!!」

このような叫び声——あるいは悲鳴がボス部屋に響いた。

レイドメンバーほぼ全員が、武器を握り締め、両眼を見開いている。

——リーダーディアベルの死。

いや、死ぬという状況が想定外で、どうすべきなのか判断出来ないのだ。

俺のすぐ近くにいたキバオウが膝をつき、眩いた。

「……………何で……………何でや…………。ディアベルはん、リーダーのあんたが、何で最初に…………」

俺は項垂れるキバオウの左肩を掴み、無理矢理引っ張り上げた。

「へたつてる場合か!」

「……………な……………なんやと?」

「E隊リーダーのあんたが腑抜けていたら、仲間が死ぬぞ! いいか、センチネルは追加で湧く…………。——そいつらの処理はあんたがするんだ!」

「……………なら、ジブンはどうすんねん。一人とつと逃げようちゆうんか?」

「そんな訳あるか。 決まっているだろ…………。ボスのLA取りに行

くんだよ」

ディアベルは皆を逃がせではなく、ボスを——倒せ。と言おうとしていたのだ。

なら俺は、——ディアベルの意志に従うのみだ。

だが、これから行われるのは血戦だ。

俺は走り出す寸前、後方に居る彼女たちへ振り向き、「後方に留まり、前線が決壊したら即座に離脱しろ」と言おうとしたが、俺の口が開くより先に、彼女たちに宣言されてしまった。

「キリトは一人で行かせないよ。ボクも一緒に行くよ」

「ええ、私も行きます」

「私もよ。パーティーメンバーだから」

「……………ああ、解った。頼む」

短いやり取りした後、コボルト王の元へ走り出した。

行く手では、

「ひ、た、助けて…………」

「や、やめてくれ…………」

「ど、どうすればいいんだよ…………」

と、怒号と絶叫が弾けていた。

ディアベルに続く死者は出ていないが、前衛部隊のHPは黄色まで減少していた。

C隊に至っては、危険域だ。

恐怖で逃げ回るプレイヤーもおり、このままでは数十秒で隊列が崩壊する。

まずは、このパニックを鎮めねばならないが、俺にはパニックを鎮める言葉が見当たらない。

その時。隣を走っていたアスナが、はためくフードケープを邪魔そうに掴み、一気に体から引き剥がした。

栗色の長髪を靡かせ疾駆するアスナは、突如現れた一筋の流星だった。

俺たち三人を除くプレイヤーは、その美しさに眼を奪われ、沈黙した。

この生まれた静寂を逃さず、俺は叫んだ。

「全員、出口方向に十歩下がれ！ボスを囲まなければ、範囲攻撃は来ない！」

俺の声の残響が消えると同時に、最前線のプレイヤーたちが一斉に後方へと動く。

コボルト王は、横一列で走る四人と正対する。

「これでよかった？」

「ああ、助かったよ。アスナ」

「ボスの手順は、どうすればいいんですか？」

「センチネルと同じ?」

ランとユウキがそう俺に問いかけてきた。

俺は、それに答えるよう指示を出す。

「ああ、手順はセンチネルと同じだ。……行くぞー!」

「了解!」

前方では、コボルト王が両手で握っていた野太刀から左手を離し、左腰溜めに構えようとしている。

俺はソードスキルを発動させ、体を転倒寸前まで傾ける。

地を這うような低さから地を全力で蹴ると、刀身が薄青い光に包まれ、瞬時に駆け抜けた。

片手剣基本突進技、《レイジスパイク》。

同時に、ボスが構えていた野太刀が緑色に輝き、視認不可能な速度で斬り払われた。

刀直線遠距離技、《辻風》。

「う……おおッ!!」

突き上げた剣の軌道と、コボルト王が振るった野太刀の軌道が交錯した。

甲高い金属音と共に火花が弾け、俺とコボルト王は互いの剣技を相殺させ、二メートル以上もノックバックした。

生まれた隙を、凄まじい速度で迫ってきた三人が捉えた。

「せあッ!!」

アスナが放った《リニア》は、コボルト王の右腹を深々と打ち抜き、ユウキとランが放った《スラント》が左腹に深く斬りつけた。

この攻撃により、コボルト王のHPが僅かに減少するが、コボルト王のHPゲージは、センチネルの倍以上ある。

そして、援護は望めない状況だ。

——俺たちでやれるところまでやるしかない。

「……次、来るぞー!」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

後方で回復していたレイドメンバーは、コボルト王を引き付けてい



る四人を見て、呆然と呟いていた。

「お、おい、あのチビすげえぞ。ボスの攻撃を全てキャンセルしてやる」

「あ、あいつら、攻略部隊にいたのか？」

「も、もしかして、このまま……」

連携を取り戻しつつあるレイドメンバーは、見事な連携を見せられ、希望が見えてきたようだった。

——だが、現実には甘くなかったのだ。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

この綱渡りを失敗したら、システムアシストを阻害し、最悪の場合ソードスキルが途中で止まる。

そしてそれは、十六回目に訪れてしまった。

「しまっ……!!」

俺は発動しかけた垂直斬り、《バーチカル》をキャンセルしようとした。

上段と読んだ刃が、半円を描いて動き、真下に回ったのだ。

同じモーシヨンから上下ランダムに発動する技、《幻月》。

右手で握っている剣を引き戻したが、一瞬の隙が出来てしまい、不快なショックが全身を襲い、動きが止まる。

真下から撥ね上がってきた野太刀が、俺の体を正面から捉えた。

HPを三割以上減少させてから大きく吹き飛ばされ、俺の代わりに、ユウキがコボルト王に突っ込んだ。

《幻月》は技後硬直が短い。高く斬り上げられたままの刃が血の色に光った。

まずい——これはディアベルを殺した三連撃技、《緋扇》。

——その時。

「ぬ……おおおッ!!」

と、太い雄叫びが轟いたのだ。

ユウキの頭上を掠めるように、巨大な武器が緑色の光芒を引きながら撃ち込まれる。

両手斧系ソードスキル、《ワールド・ウインド》。

野太刀の衝撃と、旋風のように回転する両手斧が激突し、コボルト王を後方へノックアウトさせた。

攻撃を相殺させた人物は、エギルだった。

「あんたらがPOT飲み終えるまで、俺たちが支える。ダメージディーラーにいつまでも壁役やられちゃ、立場ないからな」

気付けば、前進して来たのはエギルだけではなかった。

彼の仲間のB隊をメインに数名。

傷が浅かった者が回復を終えて前線へ復帰したのだ。

後方に吹き飛ばされた俺は、床に片膝をつきながら、短く答えた。

「……………すまん、頼む」

「おうよ、任せなー」

そう言ってからエギルは、仲間の元へ走り出した。

短いやり取りの後、彼女たちが此方に走って来た。

「あ、あぶなかつたよ。あとで、エギルさんにお礼を言わないと。

キリトは大丈夫？」

「ああ、平気だ。お前らは大丈夫か？」

「「ええ（うん）」」

「そうか」

俺は立ち上がり、叫んだ。

「ボスを後ろまで囲むと全方位攻撃がくるぞ!! 技の軌道は俺が言う

から、正面の奴が受けてくれ!! 無理にソードスキルで相殺しなくて

も、盾や武器できっちり守ればダメージは喰らわない！」

「「「おう!!」」」

野太く、男たちの声が重なった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

前衛でエギルらが、俺の指示通りに盾や大型武器で守りに徹した。

時折硬直ディレイが発生すると、その隙に彼女たちがソードスキルを叩き込

む。

それを繰り返しているとボスの憎悪値ヘイトが上がってしまうが、壁役の

六人が《威嚇》などのヘイトスキルを使用し、タゲを取り続ける。コボルト王のHPが残り三割を切り、最後のゲージが赤く染まった。

その瞬間、気が緩んだのか、壁役の一人が脚をもつれさせた。よろめき、立ち上がったのは、コボルト王の真後ろだった。

「……早く動け！」

俺は反射的に叫んだが、コンマ一秒間に合わなかった。

ボスが《取り囲まれ状態》を感知し、ひとときわん猛に吼えた。

巨体が沈み、全身のバネを使つて高く垂直に跳び、その軌道上で、野太刀と己の体をぎりぎり絞つていく。

全方位攻撃、《旋車》。

「う……おおあッ!!」

俺は剣を右肩に担ぐように構え、左足で思い切り地を蹴り、俺の体は斜め上空へ弾丸のように飛び出す。

片手剣突進技、《ソニックリープ》。

剣が鮮やかな黄緑色の光に包まれ、コボルト王へ一直線に進む。

「届……けエ——ッ!!」

剣先が空中に長いアーチを描きながら走り、《旋車》発動寸前のコボルト王の左腰を捉えた。

次の瞬間、コボルト王の巨体は空中で傾き、床に叩き付けられた。

「ぐるっっー」

起き上がろうと手足をばたつかせる。

これは、——転倒状態。

着地した俺はコボルト王へ向き直り、叫んだ。

「全員——全力攻撃!! 囲んでもいい!!」

「「「お……オオオオオオ!!」」」

エギルらが、これまで守りに専念していた鬱憤を爆発させるかのようにならうに叫んだ。

倒れたコボルト王を取り囲み、ソードスキルを発動させ、色とりどりの光に包まれた斧、メイス、ハンマーが、巨体に降り注ぐ。

爆発めいた光と音が炸裂し、コボルト王のHPがゲージ削られる。

これは賭けだ。

コボルト王が起き上がるまでにHPを削り切れれば俺たちの勝利。その前に《転倒》から脱すれば、再び《旋車》が炸裂し、全員を斬り倒す。

技後硬直から回復したエギルたちが、次のスキルの予備動作に入つた。

同時にコボルト王はもがくのをやめ、起き上がるべく上体を起こした。

「……………間に合わないか!! だが——」

四人は剣を構えた。

「行くぞ!!」

「了解!!」

同時に走り出し、ソードスキルを発動させる。

コボルト王のHPゲージは、約十パーセント。

アスナは、渾身の《リニア》をボスの左腹に撃ち込み、ユウキは思い切り地を蹴り、推進力に乗って、片手剣基本突進技《レイジスパイク》をボスの右腹に放ち、ランは、ボスの正面腹に片手剣単発ソードスキル《スラント》の斜め斬りを放ち、俺は地を蹴り剣を撥ね上げ、V字の軌道を描き、片手剣二連続技《バーチカル・アーク》を放った。コボルト王の巨躯が力を失い、後方へよろめき、体にヒビが入り、直後、コボルト王の巨躯がポリゴン片を破碎させた。

同時に、俺の視界に「You got the Last Attack!!」という紫色のシステムメッセージが瞬いた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

ボス部屋を静寂が包み、それを破ろうとする者は居なかった。

全隊が、コボルト王が存在した空間を呆然と見詰めていた。

俺の視線の先に「Congratulations!」の文字が浮かび上がった。

それを見たレイドメンバーから、歓声が沸き上がった。

「しゃあああああー!」

「やった、勝った、勝ったぞ！」

「第一層攻略だ！」

両手を突き上げて叫ぶ者。仲間と抱き合う者。無茶苦茶な踊りを披露する者。嵐のような騒ぎの中、ゆつくりと近づくと近づく大きな人影があった。

「……見事な指揮だったぞ。そしてそれ以上に見事な剣技だった。

コングラチュレーション、この勝利はあなたのものだ」

「いや、これは俺だけの力じゃ成し遂げられなかった、彼女たちのおかげだ」

「エギルさん、さっきは助かりました。ありがとうございます」

ユウキはエギルの方向に体を向けてから、ぺこりとお辞儀をした。

「おう、良いってことよ！」

「私からもお礼をさせていただきます。妹を助けてくださり、ありがとうございます  
うございます」

「私からもするわ。大事な友達を助けてくれて、ありがとう」

ランとアスナにお辞儀をされ、エギルは頭をぽりぽり搔いた。

「当然のことをしただけだ。気にしなくていいぞ」

ユウキが俺に近づき、右手を差し伸べて来た。

「立てる？」

「ああ」

右手をゆつくり引つ張り上げられ、立ち上がった。

——その時だった。

「——なんでやツ!!」

突如、そんな叫び声が上がった。

半ば裏返った、泣き叫んでいるかのような響きに、広間が一瞬で静寂に包まれた。

「——なんで、ディアベルはんを見殺しにしたんや!!」

この声の主は、キバオウだった。

俺はキバオウの言葉の意味が解らなかった。

「見殺し……?」

「そうや!! ジブンは、ボスの使う技を知ってたやんけ!! ジブンが

最初からあの情報をディアベルはんに伝えておれば、ディアベルはんは死なずにすんだんや!!」

これを聞き、残りのレイドメンバーたちがざわめいていく。

「そういえばそうだよな……」

「なんでこいつはボスの攻撃がわかったんだ……」

「……攻略本には書いてなかったしな」

「鼠が間違った情報を載せたのか……?」

などの声が、徐々に広がっていく。

その時、キバオウが率いるE隊の一人が走り出し、俺の近くまでやってくる、右手人差し指を突きつけ叫んだ。

「オレ……オレ知ってる!! こいつは、元βテスターだ!! だから、ボスの攻撃パターンとか、旨いクエストとか狩場とか、全部知ってるんだ!! 知ってて隠してたんだ!!」

これを聞いたユウキたちは、黙っていなかった。

「攻略知識なら、ボクたちは持っていたはずだよ!」

「そうです! あなたたちが窮地に陥った時助けてくれたのは、その攻略本じゃありませんか!」

「あなたたちが言っている事は、勝手な憶測だわ!」

「お、お前らは、コイツの肩を持つのか!? も、もしかしてお前らも、元βテスターなんだろう!!」

まずい。この流れはまずい。

俺の脳裏に一つのアイデアが浮かんだ。

これを実行したら、俺は今後どんな目に遭うかわからない。

——俺は意を決して一步踏み出し、ふてぶてしい表情を作り、重い口を開いた。

「あははははは!! 冗談きついで!! そいつらは初心者だよ!!」

「だ、だけど。会議の時、お前をかばってたじゃないか!」

「そ、そうだ。あと、もう一人いたはずだ!」

「お前らはわかってないな。……俺が指示を出したからに決まってるだろ。ボス戦も、こいつらを利用しただけだ」

俺の豹変ぶりに、アスナ、ユウキ、ラン、エギルは眼を見開いた。

周りのプレイヤーも、啞然としていた。

「それに、俺を素人連中と一緒にしないでもらいたいな」

「な……なんだと……?」

「いいか。よく思い出せよ。 S A O の C B T は クローズドベータテスト ほとんどもない

倍率の抽選だったんだぜ。受かった千人のうち、本物の M M O ゲー

マーが何人いたと思う。ほとんどはレベリングのやりかたも知ら

ない初心者だったよ。今のアンタらのほうがまだマシさ。——俺

はあんな奴らとは違う。俺はβテスト中に、他の誰も到達できな

かった層まで登った。ボスの刀スキルを知ってたのは、上層で刀を

使う M o b と 散々戦ったからだ。他にも色々知ってるぜ、アルゴな

んか問題にならないくらいな」

「……………なんだよ、それ……。そんなのβテストどころじゃ

ねえじゃんか……もうチートだろ、チーターだろそんなの!」

周囲から、そうだ、チーターだ、ベーターのチーターだ。と言う声

が幾つも上がり、それはやがて混じり合い、《ベーター》と言う響きの

単語が生まれる。

「……………《ベーター》、いい呼び方だなそれ」

俺は周りを見渡し、告げた。

「そうだ。俺は《ベーター》だ。これからは、元テスト如きと一

緒にしないでくれ」

——これでいい。

これで元βテストは、二つのカテゴリに分けられた。

《素人上りの単なるテスト》と《情報を独占する汚いベーター》に。

今後、新規プレイヤーの敵意は、全てベーターに向けられるはずだ。

仮に元βテストだと露見しても、すぐに目の敵にされることはな

いだろう。

俺はE隊の男から視線を外しメインメニューを開くと、アイテム欄

からドロップした《コート・オブ・ミッドナイト》を装備した。

丈も伸び、裾は膝元まで達している。

ロングコートを翻し、ボス部屋の奥にある扉へ向かった。

「お、おい。どこ行くつもりだ!」

「決まってるじゃないか。二層を有効化アクティベートしに行くんだよ。主街区まで少しフィールドを歩くから、ついてくるなら、初見のMobに殺される覚悟しとけよ」

俺は振り向き、此方を見ていたアスナ、ユウキ、ラン、エギルに、胸中で「すまない」と呟き、二層に繋がる扉を押し開けた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆  
「……………姉ちゃん」

「ええ、あれが演技だっつてわかってますよ」

「この先キリト君は、茨の道を進む気なの…………？」

「あんたらは、わかってたんだな。あれが演技だっつて」

四人は、キリトが演技をして、元βテスターへの恨み妬みを引き受けようとしている事に気付いていた。

ユウキは考え込み、一つの答えを出した。

「ボクは、キリトの後を追うよ。いいかな？」

「わかったわ。それに、キリトさんを一人にしてしまったら、何時か壊れてしまいます」

「…………でも」

そう言っつて、ユウキは言い淀んだ。

「私のことは心配しないでいいわよ。私は、アスナさんたちと行動を共にするわ」

「こっちは任せて」

「オレたちに任せろ」

「じゃあ、またね」

ユウキは振り向き、人垣を抜けるようにして第二層へ続く扉へ向かって行ったが、その途中野次が飛んだ。

「ど、どこいくんや!？」

「あいつを追う気か？」

「卑怯なビーターなんか放っておけ！」

ユウキは振り向き、叫んだ。

「君たちは一体何を見ていたの!？ 彼が居なかったら、もつと最悪な



事態になってたかもしれないだよ!!」

振り向き駆け出したユウキは、扉を潜って二層へ続く螺旋階段を上った。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

俺はフィールドを数歩歩き、岩肌から伸びるテラスの端に腰を下ろした。

やがて、背後の螺旋階段を上ってくる小さな音が聞こえてきた。

俺が振り向かずにいると、足音を立てたプレイヤーが数歩寄つてきて、俺の隣に腰を下ろした。

「……………来るな、って言ったのに」

俺がそう呟くと、ユウキはこう答えた。

「言つてないよ。死ぬ覚悟があるなら来い、っていったんだよ。」

—これからボクは、キリトと行動を共にするからね」

俺は眼を丸くした。

「……………は？ 何言つてんだ。俺と一緒にくるってことは、ギルドやパーティーに入れなくなるんだぞ……………。それに、お前に迷惑を掛ける事にもなる。お前にはデメリットしかない……………。だから、今すぐ戻れ」「いやだ」……………

俺が告げる筈だった『戻れ』の言葉は、ユウキに遮られてしまった。

ユウキは言葉を続けた。

「みんなには言つてあるから大丈夫だよ。姉ちゃんのごことは心配しなくても大丈夫。アスナたちと一緒に行動するからね」

「……………いや、やっぱりダメだ。すぐ戻るんだ。今ならまだ間に合う」

「いやだ。ボクも一緒に行く」

「ダメだ」

「行く」

「……………ダメだ」

「行くつたら、行く!」

「……………ダメだ」

「行くもん!!」

俺は思い出した。

ユウキは、一度決めたことは曲げないということ。

「……わかったよ。 どうなっても知らないからな」

「うんうん、じゃあ、行こうか。 ——これからよろしくね、キリト」

「……ああ、よろしく頼む」

俺とユウキは立ち上がり、歩き出した。

——こうして、第一層ボス攻略戦に終止符が打たれた。

## 第8話《月夜の黒猫団》

最前線を第三十層へ置き、デスゲームが開始されてから五ヶ月が経過した。

俺は第一層ボス戦後にビーターと名乗り、己に敵意を向けさせ、元βテスターへの恨み妬みを緩和させる事に成功した。

そして今、俺たちは第十一層迷宮区へ訪れている。

此処の層は、主にゴブリン達が根城にしている迷宮区だ。

こここのモンスターは、俺たちの全力のソードスキルで一掃できるし、ダメージを喰らっても戦闘時回復スキルバトルヒーリングによる自動回復で長時間は潜って居られる場所だ。

なぜ、俺たちが下層へ降り立ったかということ、必要な素材集めの為だ。

俺はだらだらと歩きながら、言葉を発した。

「もう帰ろうぜ。俺、腹減った」

「そうだね。必要な素材は集まったし、帰ろうか」

俺の言葉に応じたのは、第一層からコンビを組んでいるユウキだ。出口を目指して歩いていたら、集団ゴブリンに追い掛けられているパーティーを発見した。

HPバーを確認した所、出口まで逃げ切る余裕はありそうだが、途中で他のModと遭遇してしまったら、その限りではない。

「……俺、ちよつと行ってくるわ」

「じゃあ、ボクも行くよ」

俺たちは放剣してから駆け出し、そのパーティーの援護へ向かった。

パーティーの横まで移動した俺が、問いかけた。

「ちよつと、前支えましようか?」

棍使いは眼を見開いて俺を見ると、一瞬迷ったようだったが、頷いた。

「すみません、お願いします。やばそうだったらすぐ逃げていいですから」

「ユウキ。行くぞ」

「OK」

俺とユウキは同時に突っ込み、片手剣単発ソードスキル《スラント》を放つ。ゴブリン四体を一撃で葬ると、剣を左右に数回振って鞘に納めた。

ユウキはパーティーメンバーに振り向き、いたわ「労りの言葉を掛けた。

「大丈夫ですか?」

これを聞いたパーティーメンバーは、頷いた。

俺はこれを見て、ほっと息を吐き、言葉を発した。

「そうか。すぐに此処から出て、街へ戻った方がいい」

「……ああ」

棍使いは呆然と眩き、残りのメンバーも頷いた。

俺とユウキの先頭の下、出口へ向けて歩き出した。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

黒猫団リーダー、ケイタが音頭を取った。

「我ら月夜の黒猫団に、そして、命の恩人のキリトさんとユウキさんに、乾杯!!」

「「乾杯!!」」

「「か、乾杯……」」

俺とユウキは、第十一層の街タフトのNPCレストランに訪れていた。

理由は、助けてくれたお礼がしたいから、だそうだ。

まあ、ほぼ強制的に連れて来られたんだが。

「ありがとう……ほんとうに、ありがとう。 凄い、怖かったから

……」

「……あ、ああ」

サチと名乗る女性プレイヤーにそう言われ、俺は言い淀んでしまうが、ユウキが代わりに答えてくれた。

「どういたしまして」

談笑するユウキの姿を見て、俺は表情を柔らかくする。

数分後、ケイタがおずおずと聞いた。

「あ、あのく、失礼を承知でお聞きしますが、お二人のレベルは、どれ程ですか……?」

俺とユウキは顔を見合わせ、口を開いた。

「……お、俺は四十五だ」

「……ぼ、ボクは四十三かな」

これを聞いたケイタが、眼を輝かせ喰い付いてきた。

「や、やっぱり攻略組の方だったんだ。さっきの強さを見て、攻略組の人かなって思ったんです!」

「ケイタ、敬語はやめにしよう」

「呼び方も『さん』付けじゃなくていいよ」

「そ、そうか。じゃあさ……キリト、ユウキ。うちのギルドに入ってくれないか?」

「え?」

俺とユウキは同時に声を上げた。

ケイタは言い募った。

「僕ら、レベル的には、さっきのダンジョンくらいなら充分狩れるはずなんだよ。ただ、スキル構成がさ……君たちも分かっていると思うけど、前衛できるのがテツオだけでさ。どうしても回復がおいつかなくて、戦ってるうちにじり貧になっちゃうんだよね。キリトとユウキが入ってくればずいぶん楽になるし、それに……サチ、ちよつと来てよ」

此方にやってきたサチは、俺とユウキを見て会釈をした。

「こいつ、見てのとおりメインスキルは両手用長槍なんだけど、もう一人の槍使いに比べてスキル値が低いから、今のうちに盾持ちの片手剣士に転向させようと思ってるんだ。でも、なかなか修業の時間も取れないし、片手剣の勝手がよく分からないみたいでさ。二人とも片手剣士だろ。片手剣のことは良く熟知してるはずだし、よかったら、コーチをしてくれないかなあ」

「何よ、人をみそつかすみたいに」

彼らのやり取りは微笑ましく、そして眩しく映った。

「うちのギルド、現実では、みんな同じ高校のパソコン研究会のメンバーなんだよね。あ、みんないい奴だから、二人もすぐ仲良くなれるよ」

「……すまない、ギルドに入ることはできない」

「……コーチならしてあげてもいいけど」

団長ヒースクリフが率いる血盟騎士団からも勧誘があつたが、俺たちはそれを断つた。

因みに、副団長にはアスナが、副団長補佐にはランが就いている。

「……そっか。じゃあ、コーチを頼もうかな」

ケイタは渋々頷いてくれた。

そしてコーチは、一週間という期限を付けた。

「あのさ、攻略組の話を聞きたいんだけどさ……。いいかな？」

この問いには、俺が答えた。

「まあ、構わないけど。というより、黒猫団は、攻略組入りをしようとしていいるのか？」

だが、今のレベルとスキル構成では、攻略組入りは危険すぎる。

前線へ出ても、命を捨てに行くだけだ。

「え？ でも、今の君たちは……」

「二人の言いたい事は分かってるよ。そりゃ、仲間の安全が第一だけだし。将来的には攻略組入りして、ゲームクリアの為に戦いたいと思ってるだ。——攻略組の君たちと、僕らは何が違うのかな？」

「……そうだな。情報力の差かな。俺たちは、何処の狩場が効率良くレベリングができるとか熟知してるしな。でも、最前線でレベルが低かったら話にならないし、自分達の危険度が上がる。低いレベルでボス戦をしても、命を捨てに行くだけだ」

だが、俺の答えは不満だったようだ。

「確かに、そうならない為にも情報力は必要だと思うよ。でも僕は、それに加えて意志力が重要だと思ってるんだ。仲間を守り、そして全プレイヤーを守ろうっていう意志の力っていうのかな。そういう力があるからこそ、攻略組は危険なボス戦に勝ち続けられると、僕は思っているかな」

「そうか……そうだよな」

ケイタはこのように熱く語っているが、攻略組のモチベーションはただ一つ。

数千人のプレイヤーの頂点に立つ最強剣士であり続けたいという執着心だけだ。

プレイヤーの解放を願って戦っている者は、極少数だけだろう。

「今日は、ここでお開きにしないか？」

一番の理由は、下層に長く留まりたくないからだ。

ユウキが俺を一瞥してから、言葉を発した。

「そうだね。話したい事があつたら、明日聞くよ」

黒猫団のギルドメンバーが、「また明日」と言ってから、俺とユウキは立ち上がり、最前線である第三十層へ戻った。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

そして翌日。

第二十層ひだまりの森で、黒猫団はレベリングを行っていた。

「やっぱ、厳しいよな……」

「だね……」

モンスターと戦うサチは、上手く戦うことが出来ていなかった。

至近距離でモンスターと剣を交える為には、スターテス以外に胆力が必要となる。

サチの大人しく、怖がりな性格では、前衛に向いているとは思えない。

最後のモンスターが散つたのを確認してから、俺とユウキが口を開いた。

「じゃあ、この辺で終わりにしよう。明日もあるんだし」

「みんな、帰ろうか」

黒猫団のギルドメンバーは歩き出し、第十一層へ帰るべく足を進めた。

街に戻り、黒猫団のメンバーを見送ってから、第三十層へ戻った。





か？

すると、クラインが手を打った。

「どうだ、キリの字とユウキちゃん。オレのギルドに入いらねえか？」

「却下。俺は、何処のギルドにも入る気はない」

「ごめん、クラインさん。ボクも同じだから」

俺とユウキは即答した。

「二人とも即答かよ……。ま、気が変わったら何時でも言ってくれや。そんな時や、歓迎するぜ」

「ああ、その時はよろしく頼む。んじや、そろそろ俺たちは行くわ」

「じゃあ、またね」

「おう、またな」

俺とユウキは、第三十層の宿を目指して歩き出した。

その時だった、俺にメッセージが飛んで来たのは。

メッセージの差出人はケイタだ。

『宿屋からサチが居なくなった。探すのを協力してくれ』、という内容だった。

「ユウキ。すぐに向かうぞ」

「わかった」

二人は転移結晶を取り出し、第十一層向かう言葉を発した。

「転移、タフト！」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

第十一層に転移した俺は、追跡スキルを発動させ、視界に表示された薄緑色の足跡を追った。

ユウキも、俺の後ろを追うようにして続く。

俺は主街区外れにある水路の片隅で、マントを羽織ってうずくまっているサチの姿を見つけた。

ユウキは、近づき声を掛けた。

「どうしたの？ サチさん」

俺はこうなる事を予想していた。

厳しい前衛を強いられていたので、サチへのプレッシャーが強くなってしまうからだ。

「キリト……、ユウキさん」

サチは静かに話し出した。

「……私、死ぬのが怖い。私、本当はフィールドに出たくなかったんだ。安全な街の中にずっと居たかった。でも、みんなに嫌われたくないし、迷惑はかけられない。——何でこんなことになっちゃったのかな？　なんでゲームなのに死ななきゃならないの？　茅場って人は何がしたいの？」

俺が呟いた。

「……サチは、これからどうしたいんだ？」

「逃げたいよ……。黒猫団のみんなから。モンスターから。……」

SAOから。死んじやった方がいいのかな」

暫し沈黙してから、ユウキが口を開いた。

「サチさん。死ぬなんて言ったらダメだよ」

「……ごめん、嘘だよ。死ぬ勇気があったら、こんな街の圏内に隠れてないよね……。ねえ、君たちは何でそんなに強いのか？　私に、その強さを教えて」

俺が強いか……。——俺は弱い人間だ。

大多数のニュービーを見捨てた卑怯者だ。

「俺は強くないよ。強くあろうと頑張ってるだけさ」

「ボクもかな」

「それって、お互いを想って？」

サチの質問に、俺は暫し思案してしまう。

「それは、解らん。こいつを守るように、って頑張ってるけど」

「ボクも同じだね」

「そっか。二人とも、まだ気付いてないんだね」

何に気付いてないんだろうか？

俺とユウキは、首を傾げるだけだ。

「君たちを見ていたら、私も頑張ってみようって思えてきたよ。私、みんなの所へ戻るよ」

「ああ、それがいい」

「そうだね。みんな心配してると思うしね」

「うん、ありがとう」

サチは立ち上がり、みんなが寝泊まりしている宿屋へ戻った。

俺は念の為、ケイタに『サチは、宿屋に戻った』とメッセージを飛ばした。

## 第9話《二刀流》と《黒燐剣》

俺とユウキは、第11層のタフトのNPCレストランに訪れていた。また、今日で一週間になるので、今日のレクチャーが終わったら、俺たちは最前線に戻るのだ。

この日ケイタは、目標額に達した資金を持って、ギルドハウス向けの小さな一軒家を売りに出している不動産仲人プレイヤーの元へ出かけていた。

帰りを待っていたテツオが椅子から立ち上がった。

「ケイタが帰ってくるまでに迷宮区で金を稼いで、新しい家具を全部揃えちまおうよ」

俺は何処の迷宮区で金を稼ぐか気になったので、テツオに聞いてみた。

「で、何処の迷宮区で金を稼ぐんだ？」

「えっと、第二七層の迷宮区にしようと思ってるんだ」

この迷宮区は、金を稼ぐには打って付けの場所だが、トラップ多発地帯でもあるのだ。

そして、攻略組のメンバーがマッピング中に罠に掛かってしまい、死亡した例もあるのだ。

俺は言葉を濁した。

「いや、でも、やめた方がいいと思うぞ……」

「うん、キリトの言う通り、やめた方がいいかも……」

「この一週間でレベルもかなり上がったし、大丈夫だよ」

ユウキも俺と同じ事を思ったので、否定の言葉を発したが、テツオはそれを軽く流してしまった。

「そうと決まれば、迷宮区へ行こうぜ」

そう言うのと黒猫団のメンバーは立ち上がり、NPCレストランの出口に歩を向けた。

俺とユウキも立ち上がり、黒猫団メンバーの後を追った。

◆◆◆◆◆  
第二十七層迷宮区。

迷宮区では、ある程度のレベルが有ったので順調に狩りが出来ていた。

「大丈夫だよね」

「ああ、大丈夫なはずだ。もしもの時の転移結晶もあるしな」

「まあ、そうだけど」

二時間程度で、目標金額が溜まったので帰ろうとしたのだが、テツオが隠し扉を発見したのだ。

「お、隠し扉だぜ！」

「お、ホントだぜ！」

「お宝があるかもな！」

ダツカー、ササマルもこれを見てはしゃいでいた。

まあ、サチは俺たちの後ろに隠れているが。

「なあ、ユウキ。こんな所に隠し扉なんてあったか？俺たちがマッピングした時は、無かった気がするんだが……」

「……うん、無かったかも」

だが、俺とユウキの心配を余所に、サチを除く黒猫団のメンバーは宝箱の前まで駆けて行った。

「——宝箱を開けたらダメだ!!」

だが、宝箱は開けられてしまった。

次の瞬間、俺たちが居る場所が密閉空間になってしまったのだ。

そして、アラームトップが鳴り響くと周りの扉が次々開き、大量のモンスターが押し寄せて来たのだ。

その数、十体以上だ。

「皆!! 転移結晶を使うんだ!!」

「わ、わかった!! 転移、タフト!!」

黒猫団の一人がそう叫んだが、何も反応が無かった。

「な、なんで、転移出来ないんだ!？」

「(——結晶無効化空間か!?)」

俺は心の中でそう叫んだ。

結晶無効化空間。 全ての結晶を、使用不可能にさせる空間の事だ。

俺は即座に指示を出した。

「皆！ 真ん中へ固まるんだ!!」

俺の言葉を聞き、黒猫団のメンバーは真ん中に固まった。

出口は封鎖され逃げ道が無くなったということは、今出てきたモンスターたちを殲滅するしか道は残されていない。

俺はユウキに叫びかけた。

「ユウキ！ この数だが、いけるか!?!」

俺とユウキでも、この数を相手にするとなれば、かなりの苦戦を強いられるだろう。

もしかしたら、負ける可能性も……。

——だが、後ろには黒猫団のメンバーが居るのだ。

「うん！ 大丈夫だと思うー!」

この会話に、テツオが割って入った。

「で、でも……」

「いいか、そこから動くんじゃないぞ。 このモンスターたちは、最前線のモンスターと遜色ないんだ。 俺たちが危ないから加勢しようなんて考えるなよ。 加勢したら死ぬと思え。 いいな」

最後は脅しになってしまったが、この際は仕方がない。

「わ、わかった」

他の黒猫団のメンバーも頷いた。

俺は剣を構え直した。

「俺は正面から奴らを殺るから、ユウキは後方から奴らを殺ってくれ」  
「了解したよ!!」

俺とユウキは同時に地を蹴り、ソードスキルを繰り出し、モンスターのポリゴン体を四散させた。

時折、攻撃が掠りHPを削っていくが、そんなのには眼もくれなかった。

——そして、最後のモンスターが散った。

モンスターが全て倒された数秒後、閉ざされていた扉が開いた。

HPバーを確認した所、俺とユウキのHPは危険域<sup>レッド</sup>まで達していた。

「(今のモンスターたちは、最前線でPOPする奴らより手強かったんじゃないか……)」

俺の隣では、ユウキが回復結晶でHPを全快にしていた。

モンスターが全滅したので、この部屋に施されていた罠が解除されたのだろう。

ユウキは、片膝をつけている俺に手を差し伸べてくれた。

俺は、その手を取って立ち上がり、後方を見て安堵の息を漏らした。

——黒猫団メンバー全員が生還した。

「キリト、こっち向いて」

ユウキにそう言われ、前を向く。

すると、ユウキは回復結晶を掲げ、「ヒール」と叫び結晶を使用し、俺のHPを全快にしてくれた。

「サンキュー」

「どういたしまして」

俺は、黒猫団メンバーが居る方に体を向けてから、声をかけた。

「さて、こんな所からは、さっさとおさらばしようか」

黒猫団メンバーは、言葉を発しようとせず、ただ頷くだけだった。

まあ、あんな事の直後だから仕方ないが。

それからは、周囲を警戒しながら迷宮区出口へ向かった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「遅かったじゃないか? どうかしたのか?」

宿で待っていたケイタに、事の成り行きを説明したら、深く頭を下げてきた。

「本当にありがとう!! 団員の命を救ってくれて!!」

ケイタがそう言うと、黒猫団のメンバー1人1人が礼を述べてきた。

俺はたじろぎ、ユウキは笑みを浮かべながら、返答を返した。

「……ああ、礼をされる事なんかしてないさ」

「そうだね。当然の事をしたただけだよ」

「じゃあ、俺たちは、最前線へ戻るな。今日で一週間だし。もし、攻略組に入るなら、もっと力をつけて来いよ」

「それと、攻略には情報が命になるから、情報収集も怠ったらダメだよ」

黒猫団メンバーが領いたのを確認してから、俺とユウキは踵を返し、転移門を目指して歩き始めた。

因みに、ケイタには、全員の意思確認をしておけと言ってある。



その途中で、俺はユウキに相談していた。

「なあ、ユウキ。二刀流っていうスキル知ってるか？」

ユウキは暫し思索してから、

「……聞いたことないかな。ボクも相談があつたんだ。キリトは、黒燐剣っていうスキル知ってる？」

「黒燐剣？……俺も初耳だが」

俺はメニュー・ウインドウを開き情報リストを表示させると、スキル欄をスクロールさせ、今挙げたスキル名を確認した。

「情報屋のスキルリストにも無いぞ……」

「……このスキルって、ボクたち専用だったりして」

「うむむ……」

俺とユウキは同時に唸った。

もし、《ユニークスキル》だとしたら、ばれたら色々面倒になる。

剣士やら情報屋が、待ち伏せとか。

何それ怖い。

「てか、このスキルチートなんだよな」

「うん、ボクのスキルもチートだよ」

「はあく」

俺とユウキは、同時に深い溜息を吐いた。

面倒くさいスキル持ちだったな。

「ま、取り敢えず、この事は詳しく何処かで話そうぜ」



「そうだね」

俺とユウキは転移門を潜り、最前線の第三十層へ向かった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

第三十層の宿の一室。

俺は腕を組みながら、壁に背を預け、呟いた。

因みに、ユウキはベットの土上へ腰を下ろしている。

「やっぱり慣れんな。女の子と同じ部屋は」

「え、そうなの。第一層の宿では、ボクと姉ちゃんと一緒だったよね」

「いや、内心ではメツチャ緊張してたぞ。単に、ポーカーフェイスの

スキルが高いだけだ」

「そうなんだ。じゃあ、ボクのことを女の子として見てたんだね」

あれ、スキルの話をするはずだよな。

何か、盛大に話が逸れてる気がするんだが。

「んゝんツ。さて、スキルの話をしようか」

「……無理矢理話を戻したね。まあいいけど」

俺は索敵スキルを発動させ、ユウキは実際に扉を開け、周りに人が居ないか確認した。

「大丈夫だよ」

「俺も問題無しだ。——じゃあ、俺からな。俺が持つ《二刀流》は、通常ソードスキルの1.5倍の威力があるな。それと、剣が二本装備出来ることで手数が増える。武器防御も上がるらしい」

「じゃあ、次はボクだね。——ボクが持つ《黒燐剣》は、通常のソードスキルの2倍の威力がある。あと、スキル後の硬直時間が半減する。盾を持ってなくなるデメリットがあるらしいけど」

俺は思った事を口にした。

「これは《ユニークスキル》確定だな。てか、これがばれたら、俺が思っている以上にヤバいかも」

「……うん、ボクもそう思うよ。——これを使うのは、攻略が危険な時になるね……。二十五層のボス戦みたいな」

第二十五層のボス戦は過酷を極めた。

ボス戦での俺とユウキは、HPが危険域ドに入っても離脱する事はせず、前線へ立ち続けた。

だが、《軍》が多大な被害を受け、方針を変更してボス戦から退く事になり、残った攻略組も強化期間を設けた為、攻略が一時停滞してしまったのだ。

そしてボス戦以降、俺とユウキに二つ名が付けられた。

「……そうだな」

「何か、しみりしちやったね。——下で何か食べようよ」  
「了解だ」

俺とユウキは一階の酒場へ下り、食事を摂る事にした。

## 第10話《クリスマススイベント》

アインクラッド第四十九層主街区《ミュージエン》。

今日の日付は、十二月二十四日——クリスマスイブだ。

そして今日は、真つ白い雪が舞っていた。

広場には、イブを共に過ごすプレイヤーたちがゆっくり歩いている。

俺とユウキは、ベンチに座りながら空を眺めていた。

「あの人も見せてあげたかったな……」

「……うん、そうだね」

あの人は、俺たちを気に掛けてくれた女性プレイヤーの事だ。

その人の名は——レン。

俺たちにとってレンさんは、姉のような存在であった。

だが、レンさんは帰らぬ人となってしまった。

それは、第五十層ボス戦での出来事だった。

そのボスは、三つの顔と六本の腕を持つ阿修羅だった。

二本の腕しか使わなかったボスは、HPが三本目へ突入すると四

本、四本目へ突入すると六本の腕を振るってきた。

集中連打攻撃により、恐怖に染まった前衛のプレイヤーが離脱し、壁役が居なくなるという事態に陥ってしまった。

俺とユウキとレンさんは前衛へ立ち、壁役の代わりになる為、ボスのタゲを取り続けていた。

だが、俺とユウキが同時に攻撃を受け、ボスの眼の前で崩れ落ちた。

ボスはその瞬間を逃さず、俺たちの頭上目掛けて拳を振り下ろしてきたが、俺たちに直撃する事はなかった。

——レンさんが直撃コースへ飛び込み、俺とユウキを後方へ押し飛ばしたのだ。

レンさんはボスの攻撃を受け、俺とユウキの前まで吹き飛ばされた。

レンさんは俺たちの無事を確認すると、微笑みながら無数の結晶と なって散った。

俺とユウキは、怒りに飲み込まれ——鬼神と化した。  
ボスの攻撃を最低限の動作で避け、次の瞬間に猛烈な攻撃を与える。

恐怖と言う感情は一切なかった。

何分、何時間、剣を振るい続けたか解らなかった。

気付くと、眼の前のボスが倒されていたのだ。

このボス戦で、ヒースクリフに《ユニークスキル<sup>神聖剣</sup>》が出現したにも関わらず、新聞の見出しは、『攻略組に《鬼神》現る!!』、と言う記事で占められていた。

《神聖剣》の事は、隅っこに小さく書かれてただけだった。

そしてこのボス戦後、俺とユウキには、《鬼神》の二つ名がプラスされた。

物思いに耽っていたら、後方から声を掛けられた。

「せっかくのイブなんだカラ、辛気臭い顔をしてるナヨ」

心配そうに声を掛けてきたのは、情報屋の《鼠》のアルゴだ。

「キー坊、ユーちゃん。《背教者ニコラス》が出現するモミの木の木目は星は付いてるんだロ」

《背教者ニコラス》。

クリスマスが始まる午前零時に、モミの木の下に出現するボスのことだ。

このボスからドロップするアイテムの中には、——《蘇生アイテム》がある噂されていた。

実はプレイヤーの死は、ゲーム終了まで保留されていて、このアイテムで蘇生可能ではないか？と言う憶測が流れだし、希望を抱いた者は血眼になって情報を集めた。

「……うん、付いてるよ。先に言っとくけど、止めてもムダだからね」

「……俺からも忠告しておく、邪魔する奴は斬る可能性があるってな。

それが、お前でもだ」

アルゴは顔を俯けた。

「……キー坊。ユーちゃん」



すると、クラインの後方から三十人の大集団が現れた。

「……お前も尾けられたな、クライン」

「……ああ、そうみてエだな……」

クラインの隣に立つ《風林火山》メンバーが低く呟いた。

「あいつら、《聖竜連合》つす。フラグボスの為なら一時的にオレンジ化も辞さない連中つすよ」

《聖竜連合》は、《血盟騎士団》と並ぶ攻略組最大のギルドだ。

だが、人数が多くとも、個々のプレイヤーのレベルは俺たちより下だろう。

ざっと見積もって、三十人ちよいか。

——どうする、斬るか？

クラインの叫び声が、俺の手を押し止めた。

「くそッ！ くそつたれがッ!!」

クラインは放剣し、背中を向けたまま怒鳴った。

「行けッ！ 二人とも！ ここはオレらが食い止める！ お前エらはボスを倒せ！ だがなあ、死ぬなよ！ ぜってえ死ぬんじゃないぞ！」

「………すまない」

「………ごめんね」

俺とユウキは、クラインに背を向けると、最後のワープポイントへ足を踏み入れた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

午前零時前に、モミの木の下に到着した。

時刻が零時になると同時に、鈴の音が響き、櫓そりからボスが飛び降りてきてた。

盛大に雪を蹴散らして着地したのは、身の丈が俺の三倍はあろうかという人型ボスだった。

腕が異常に長く、前屈みの姿勢ゆえに地面に擦れそうだ。

ボスは、赤と白の上着に三角帽。右手に斧、左手には頭陀袋ずだたぐろをぶら下げている。

ニコラスは、クエストに沿った台詞を口にしようと、口を動かそうとした。

「うるせえよ。——いくぞ、ユウキ」

「……わかった」

俺とユウキは放剣し、思い切り地を蹴った。

◆◆◆◆◆

俺たちは、HPを危険域<sup>ドレ</sup>まで落としたが、《背教者ニコラス》のポリゴン体を四散させる事に成功した。

俺はアイテムストレージを開き、ドロップ品を確認した。

そこには、確かに蘇生アイテムがあった。——《還魂<sup>かんこんのせいしようせき</sup>の聖晶石》と。

俺はすぐにこのアイテムを実体化させ、宝石をタップした。

【このアイテムのポップアップメニューから使用を選ぶか、あるいは手に保持して《蘇生プレイヤー名》を発声する事で、対象プレイヤーが死亡してから、その効果光が完全に消滅するまでの間（およそ十秒）ならば、対象プレイヤーを蘇生させる事ができます。】

十秒。それがプレイヤーのHPが0になり、仮想体<sup>アバター</sup>が四散してから、ナーヴギアがマイクロウエーブを発して、プレイヤーの脳を破壊するまで時間だ。

俺は言葉を失った。

「……キリト、どうだったの？」

俺はユウキに、《還魂の聖晶石》を手渡した。

「……たった、十秒……」

「……ああ、レンさんは二度と帰ってこない」

「……そう」

暫しの沈黙が流れた。

その沈黙を、俺が破った。

「……戻るか」

「……うん」

俺は、ユウキから《還魂の聖晶石》を受け取り、歩き出した。

ユウキも立ち上がり、俺を追うように歩き出した。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

森の中に残っていたのは、《風林火山》メンバーだけだった。

俺は、胡座をかいていたクラインに近づいた。

「……キリト、ユウキちゃん……」

掠れた声で呟くクラインの膝の上へ、俺は《還魂の聖晶石》を放った。

「それが蘇生アイテムだ。過去死んだ奴には使えなかった。次にお前の眼の前で、死んだ奴に使ってやってくれ。——じゃあな」  
「またね」

俺たちは迷いの森を出る為、歩を進めた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

俺たちは、第四十九層で宿を取り、部屋の一室に居た。

「……ダメだったな」

「……うん、そうだね」

椅子から立ち上がるうとしたその時、アラーム音が俺の耳に届いた。

視界の端に、アイテムウインドウを開く事を促すマーカーが点滅している事に気付き、俺は指を振った。

アイテムウインドウの中で見付けたのは、録音クリスタルだった。

「——お茶した時、レンさんにこれを渡されたな。すっかり忘れてた」

俺はそれを取り出し、テーブルの上へ置いた。

「それは？」

「ああ、レンさんに渡された物だ。何が録音されてるかは、解らないが」

俺は点滅するクリスタルをタップすると、懐かしい美声が流れた。  
『キリト、ユウキ、こんばんは。これを聞いてるって事は、私、死んじゃったのね。もし生きてたら、クリスマスの前日に、このクリ



スタルを返して貰うはずだったから。何でこれを録音したか説明するよ。私、長く生きられない予感がしたの。ボス戦で命を落としちゃったりね。たぶん、これが当たったのかな。君たち、私が死んだからって無茶したでしょ。その気持ちは嬉しいけど、自分の命は大切にしないといけないわよ』

俺とユウキは苦笑した。

「俺たちの行動は、レンさんにバレバレだな」

「そうだね。レン姉には、隠し事できなかったもん」

録音の続きはこう流れた。

『キリトとユウキとは、約半年の付き合いになるね。君たちと出会って、色々な事を経験して、私は楽しかったよ。妹と弟ができたよ。そうそう、私、現実世界で保育士をやったの。帰ったら皆に顔を見せてあげてね。私の名前を言えば通してくれるから。』

私の本名は、高城綾たかしようあや。——キリトは、ビーターだから嫌われてるって言ってたけど、攻略組の皆は、君の事を頼りにしてるんだよ。——いい、ユウキはキリトを支えてあげるんだよ。キリトの背中には、重過ぎると思うから。あと、二人は私の分まで生きてね。あ、もう時間だ。最後に、キリト、ユウキ。メリークリスマス。また何処かで』

これで、録音音声は終了した。

いつの間にか、俺とユウキの瞳から、一筋の涙が流れていた。

「……レンさんの為にも、俺たちは生きないとな。絶対に死ねない」

「わかってる。レン姉の遺言だもんね」

レンさん、俺たちは、この世界で精一杯生きるよ。

だから、見守ってください。

## 第11話《運命の出会い》

約半年前の、ボス攻略会議での出来事だった。

会議では、いつも通り副団長様の話を聞き、ボスの対策を練って終了した。

「それでは、この作戦で明日のボス戦に望みたいと思います。各自解散してください」

すぐに此処から出たかったが、俺たちの元へ歩み寄り、話し掛けてきた女性プレイヤーがいた。

アメジストの瞳に小さな顔、茶色のストレートヘアを後頭部で束ねていた。

俗にいう、ポニーテールって奴だ。

「君たち、何時も端っこで会議に参加しているけど、何で？」

俺がぶっきら棒に答えた。

「いえ、俺はビーターなんで」

「そっか。でも、私は君のこと嫌いじゃないよ。あ、そうだ！これからお茶しようよ。どうかな？」

「え？」

俺とユウキは同時に声を上げた。

「えっと、俺は……」

「君たちで相談して決めていいよ。私は、どちらでも構わないから。外で待ってるね」

そう言うと、女性プレイヤーは出口を目指し歩き出した。

「ど、ど、どうしよう……。でも、悪い人には見えなかったんだよな」  
「行ってみようか。もしあれだったら、ボクがフォローするからさ」

「お、おう。頼んだ」

俺たちは小走りで、出口へ向かった。



俺たちは第八層の街《フリーベン》を訪れ、大通りを並んで歩いていった。

俺は何処へ行くか気になったので、女性プレイヤーに聞いた。

「あの、何処に向かっているんでしょか？」

「そういえば、言っただけじゃなかったわね。私のホームよ」

「は？」

何言ってるのこの人は。女の子と同室になった事はあるけど、部屋に入った事は一度もないんだぞ。言っている事は同じだと思うが、それとこれとは別だ。

うん、メツチャ帰りたいです……。

ユウキが俺の思考を読んだのか、小さな声で呟いた。

「……ボクは、このお姉さんとお茶したいんだけど。ダメかな？」

ユウキさん、上目遣いは反則だよ。

俺は小さく息を吐いた。

「はあ、今日だけだからな。俺は、人と関わりたくないんだから」  
「やった♪」

街の脇道を通り数分歩いた所で、女性プレイヤーのホームへ到着した。

「こんにちは」

女性プレイヤーはドアノブを捻り、扉を開けた。

俺たちは、女性プレイヤーの中にいるよう促され、扉を潜った。

「うわあ、綺麗な所ですね」

「確かに。まあ、ホームが無い俺には良く分からんけど」

部屋の内装は、リビング兼ダイニングと、隣接したキッチンには明るい色の木製家具が備え付けられ、周りはシンプルに飾り付けられている。

「今日の為に掃除しといてよかったわ。取り敢えず、二人とも座って頂戴。あ、そうそう。君たち、武装を解除したら」

「あ、はい」

俺たちは武装を解除してから、備え付けられてる椅子へ腰を下ろした。

「私は、隣の部屋で私服に着替えてくるから。……覗かないですよ」  
後半の言葉は、俺に言ったのだろう。

着替えと言っても、スターテスウインドウを操作するだけなんだが、表衣変更の数秒間は下着姿になってしまう為、女性は人前で着替えたりはしない。

「の、覗きませんよ！　な、何言ってるんですか!？」

俺は顔を真っ赤に染めた。

「ふふ、赤くなっちゃって」

「は、早く、着替えて来てください！」

「はい」

そう言うと、リビングの奥にある部屋へ消えて行った。

俺は息を吐き、呼吸を整えた。

「……ふうー、うん、凄い人だな」

「う、うん。　ボクも見ててそう思ったよ。　でも、人との距離の詰め

方が上手いね」

「まあ、確かに。　あの人となら仲良くなれそうな気がする。　弄ら

れそうな気もするが……」

「お待たせ」

奥の部屋から出て来た格好は、大きめのパーカーにショートパンツだった。

因みに、色はどちらとも白だ。

女性プレイヤーは、空いてる椅子へ腰を下ろした。

「まずは、自己紹介からでしょうか。　私の名前はレンよ。　あ、お姉ちゃんでもいいわよ」

「お、俺はキリトです。　よろしくお願いします。　レンさん」

「ボクはユウキだよ。　よろしく、レンさん」

「キリトにユウキね。　うん、覚えたわ。　てか、お姉ちゃんでもいいって言ったのに」

それは、レベルが高くないですかね。

俺がそう思っていたら、ユウキが頷いた。

「ん、わかった。　じゃあ、ボクはレン姉って呼ぶね」

「レン姉……。　うんうん、いい響きね」

レンは俺を見て、笑みを浮かべた。

「キリトも、お姉ちゃんって言うてみて」

「——なッ!？」

い、いやいやいや。無理。

無理ですって。

「《黒の剣士》さんは、お料理が好きって聞いたな。私、空きのスロットで料理スキルを取得したから、結構高いんだ。言うてくれれば、お料理作ってあげてもいいんだけどな。あ、リクエストも可よ」  
恐らく、レンが作る料理は、そこらのNPCレストランの料理より旨いだろう。

てか、何処でその情報知ったんだ。アルゴが情報源か？

「……俺が料理好きって、何で知ってるんですか？」

「いや、鎌かけただけだよ」

「え……マジツすか」

「うん、マジ。お姉ちゃんって言うてくれるだけでいいのよ。で、どうかな？」

暫し沈黙してから、俺は意を決し、言った。

「レン、お姉……ちゃん。……やっぱり、レンさんって呼び方が……」

「うーん、……ま、いっか。今度遊びに来た時、お料理を振舞ってあげるよ。もちろん、ユウキの分もあるわよ」

「ホント?」

ユウキは、きよとんと首を傾げた。

「ホントよ。そうだ! ユウキも料理スキル取りなさいよ。今度、私とスキル上げをしましょ」

「うん!」

ユウキは、元気良く頷いた。

「そういえば、キリトとユウキって、何時からの付き合いなの?」

この質問には、俺が答えた。

「ええ、このゲームが始まってからですな」

レンは眼を輝かせ、この話題に喰い付いた。

「じゃあさじやあさ、第一層からコンビ組んでたの?」

「ええ、まあ」

「ボス戦では、何でツーマンセルなの？」

「ああ、それは、俺たちの連携についてこれるのが、血盟騎士団の団長と、副団長様たちしか居ないからですよ。でもこの三人は、指揮を執らなきやいけないでしょ。だから、必然的にツーマンセルになるんですよ」

レンは感嘆の声を上げた。

「ほへへ、そうだったの。あ、そうだ。じゃあ、私もその中に入ろうかしら。頑張れば、私もそこに入れるわよ」

「へ？」

俺とユウキは、素っ頓狂な声を上げた。

「訓練すれば、連携を取れるようになるよ。訓練して貰えないかしら？ 《黒の剣士》さま。《絶剣》さま」

因みに、レンさんにも《七色の舞姫》という二つ名がある。

これは、俺たちと同じく、第二十五層ボス戦後に付けられた二つ名だ。

「じゃあ、ボクたちと訓練しようか」

「……はあ、分かりました」

レンは立ち上がると俺の背後へ回り、抱き付いてきた。

てか、何で俺!?

「おりゃ」

「ちよ、レンさん。離れて、離れてください。あ、当たってます。

当たってますから。何とは言いませんが、当たってますから」

「少年よ。お姉さんに抱き付かれて嬉しいのかな」

「嬉s……じゃなくて、そんな訳ないでしょー!」

隣に座るユウキを見たら、背後から黒いオーラが流れ出ていた。

やだッ。俺、死んじやう。

「れ、レンさん。お、俺、死んじやいます」

「あら、そう」

そう言うとき度は、ユウキを背後から抱き締めた。すると、黒いオーラがピタリと止まった。

「ふえ!？」

「うりうり♪」

レンは、ユウキに頬擦りをしていた。

……うん、カオスな光景だな。

取り敢えず、ユウキを救出しないと。

「あ、あのく、レンさん。 お茶するはずじゃ……」

レンは頬擦りを止め、抱擁を解いた。

「あ……、そうだったわね」

「つて、おい! 忘れてたんかい!」

「お、キリトくん。 ナイス突っ込み!」

「はあく、何か、もういいっす……」

この人には、一生勝てない気がしてきた……。

それからお茶会が開催された。

テーブルの上にはお菓子と紅茶が置かれ、三人は談笑をしながら、

この時間を過ごした。

この時間は、この世界に来て一番楽しかった時間だったかもしれない。

俺たちは立ち上がり、武装をしてから外へ出た。

「じゃあ、レンさん。 また、遊びに来ますね」

「じゃあ、またね。 レン姉」

「またね。 今度は、一緒にご飯を食べましょ」

「おう(うん)ー!」

俺たちはレンに手を振り、その場を後にした。

これが、俺たちとレンの初めての出会いだった――。

## 第12話《竜使いの少女との出会い》

俺たちが転移門前で見たのは、泣き喚く一人の男性プレイヤーだった。

「誰か……誰か……仲間の仇を取ってくれ……」

俺はそれを遠目に見ながら、隣に居るユウキに聞いてみた。

まあ、コイツの答えは解ってるが。

「なあ、ユウキ……。 どうする?」

「ボクはあの依頼を受けるよ……。 PK行為なんて許せないよ」

ユウキからは怒りがひしひし伝わってきた。

俺も、はらわた腸が煮え繰り返りそうだ。

俺たちはそのプレイヤーに歩み寄った。

「どうしたんだ?」

俺が男にそう問いかけると、俯いていた顔を勢いよく上げた。

「あんたら……オレの仇を取ってくれないか……。 オレはシルバーフラグスのギルドリーダーだ。 ……女性プレイヤーが、一緒に狩りしたいって言うから、オレたちは快く受け入れた。 そいつ先導の下、狩りに出たんだ。 ……だが、オレンジプレイヤーが後方から襲ってきた。 ……オレは逃げ切る事ができたが、仲間たちは……殺された。 だから、仇を取ってくれないか?……殺さなくていい、監獄へ入れてくれ!!」

「ああ、その依頼受けるよ。 ユウキも良いよな?」

「うん、いいよ」

俺とユウキは、その依頼を受ける事にした。

もし、このまま放置しておけば、また被害が出る可能性がある。

男性プレイヤーはメニュー・ウインドウ開いてアイテム欄を表示し、回廊結晶を取り出した。

「この回廊結晶は、出口を監獄エリアに指定してある。 これを使って監獄へ入れてくれ……」

そう言うと、男性プレイヤーは、俺に回廊結晶を手渡した。

でも、何処を捜せばいいのか?



そう思っていたら、ユウキが口を開いた。

「その女性プレイヤーさんって、何処に居るか解る？」

「……三十五層に居るはずだ。頼む、仲間の仇を取ってくれ……」

「ああ、任せろ」

「うん、ボクたちに任せて」

俺とユウキは転移門を潜り、第三十五層の街ミーシエへ転移した。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

俺たちは、第三十五層街ミーシエで、情報収集をしていた。

「あと回ってない場所は、迷いの森か？ でもなく、あの場所で情報収集が出来るか？」

「其処って一度だけ、ボクが迷子になった場所だよな？」

迷いの森は、専用の地図がないと突破が不可能なダンジョンだ。

前に、地図を持っていないユウキが先走って、迷子になった例がある。

この時俺は、数時間掛けてコイツを捜した事があるのだ。

「そうだぞ。ま、取り敢えず、行ってみるか」

「そうだね。じゃあ、レッツゴー」

俺とユウキは、迷いの森へ歩を進めた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「帰還後のアイテム分配なんだけど。あんたはそのトカゲが回復してくれるんだから、結晶は必要ないわよね」

カチンときたシリカは、即座に反論した。

「そういうあなたこそ、ろくに前衛へ出ないですから、結晶なんて使わないじゃないですか。——私、アイテムなんかありません。あなたとは絶対に組まない。あたしを欲しいっていうパーティーは、他にも沢山あるんですからね！」

シリカは、引き止めるリーダーの言葉に耳を貸さず、ムシヤクシヤした気分で迷いの森を歩き始めた。

相棒がいるシリカにとって、此処のモンスターはそれほど強敵では

なかった。

苦勞せず撃退し、主街区まで到着できるはずだった。——道に迷わなければ。

シリカが深い森にげんなりしながら歩いていると、肩の上でピナが「きゆるっ！」と鳴いた。

シリカは素早く腰から短剣を抜き、ピナが見据えている方向へ身構えた。

数秒後、苔むした巨木の陰から、低い唸り声が聞こえてきた。

モンスター名は《ドラंकエイプ》、迷いの森で出現する中では最強クラスだ。その数三体。

右手には粗末な棍棒を携え、左手には紐がついた瓢箪ひょうたんを提げている。

「グワアアア!!」

猿人が棍棒を振り上げ、雄叫びを上げている最中に、シリカは地を蹴った。

「はああああ!!」

シリカは、短剣突進技《ラピッド・バイト》を命中させてHPを削り、そのまま高速連撃技に持ち込んで圧倒する。

シリカは連撃技を的確に浴びせ、素早く跳び退って敵の攻撃を躲し、また踏み込むというヒットアンドアウェイを繰り返す。

四度目の攻撃で、連続技《ファッドエッジ》を放ち、猿人に止めを刺そうとしたその寸前——。

一瞬の隙について、右後方から猿人がスイッチしてきた。

そして、後方に下がった猿人は、瓢箪の中の液体を飲み体力を回復している。

シリカは唇を噛んだ。

このまま戦闘を続けてもキリがない。

ピナからの癒しのブレスで回復しているが、それは微々たるものだ。

猿人のHPを半分減らした時、深追いしすぎたシリカが、クリティカル攻撃を受けてしまった。

これにより、約三割HPが減少した。  
立ち上がり、回復する為腰に装備してあるポーチの中に手を伸ばすが、最悪な事に、手持ちの回復薬を切らしてしまった。

あと三回、同じ攻撃を受ければ確実に死んでしまう。

猿人の横薙ぎ攻撃が腹部に直撃し、吹き飛ばされ、後方の木へ叩き付けられ、座り込んでしまった。

HPは危険域レッドに突入していた。

そして、頭上目掛けて、棍棒が振り下ろされた。

だが、その寸前に入り込んだ小さな影があった。

重苦しい衝撃音とエフェクト光、水色の羽根がぱつと散り、地面に叩き付けられた。

「きゅる……」

ピナのHPバーが減少し、ポリゴン体を四散させた。

一枚の羽がふわりと空を舞い、地面に落ちた。

シリカは眼の前で起きた光景が受け入れられず、呆然としてしま  
う。

再び、棍棒が振り上げられ――。

だが、三体並んだ猿人は、ポリゴン体を四散させた。

呆然と座り込んだシリカの眼の前には、二人のプレイヤーが立っ  
ていた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

俺が索敵スキルを発動させながら歩いていたら、プレイヤー反応が  
あった。

「やばい、あの子モンスターに襲われてる！」

「あの木の下だね！」

「ああ！ 急ぐぞ！」

「了解！」

俺とユウキは地を蹴り駆け出した。

駆けながら、片手剣単発ソードスキル《ホリゾンタル》を発動させると、モンスターの背部を水平に斬りつけ、ポリゴン体を四散させた。

俺たちは、剣を左右に数回振り、鞘へ納めた。  
少女は、水色の羽根を優しく握っていた。

——この子は、ビーストティマーか。

「……お願いだよ……あたしを独りにしないでよ……ピナ……」

俺は少女の前で跪き、遠慮がちに声をかけた。

「……えっと、その羽根だけだな。アイテム名、設定されてるか？」  
シリカが羽根の表面をタップし、浮き上がったウインドウには、アイテム名が表示されていた。

——《ピナの心》。

それを見て、シリカが泣き出し——

「ちよ、待った待った。あ、えくと、どこだっけ？」

俺はユウキに助けを求めた。

「最近分かったことなんだけどね。第四十七層の南に、《思い出の丘》っていうフィールドダンジョンがあるんだ。そこに咲く花が、使い魔蘇生用のアイテムなんだよ」

シリカは、俯いていた顔を慌てて上げた。

「ほ、本当ですか?!?!」

だが、フィールドダンジョンの層を思い出し、肩を落とした。

「……四十七層……」

三十五層から十二も上のフロアだ。

シリカのレベルでは、安全圏とは言えない。

視線を地面に落しかけた時、二人の会話が聞こえた。

「うーん、俺らだけで行ってもいいけどな」

「でも、使い魔を亡くしたビーストティマー本人が行かないと、花が咲かないらしいよ」

「あ、なるほどな。どうすつか」

「じゃあさ。ボクたちも一緒に行つてあげれば良いんじゃないかな?」

「それもそうだな。……この子に合う装備が、ストレージにあったよ  
うな」

「じゃあ、それを装備すれば、五、六レベル程度なら、底上げできるか

もね」

「だな。何時渡s「……あの」

俺の言葉は、少女に遮られてしまった。

「……あの、どうしてそこまでしてくれるんですか？」

——《甘い話には裏がある》可能性がある。

「ボクは、助けたいからかな。キリトは？」

「ん、ああ、俺もユウキと同じだよ。——それに、君は妹に良く似てる」

「え、キリト。妹居るの!? 今度紹介してよ!？」

「わ、解ったから。落ちつけ。無事帰れたら紹介すつから」

ユウキは、大きく深呼吸をした。

「ふう、——うん、落ち着いた」

「まったたく」

俺は苦笑いをした。

——シリカは知らぬ間に、笑みを浮かべていた。

「（——悪い人じゃないんだ）」

シリカは二人の善意を信じる事にした。

立ち上がり、ペこりと頭を下げた。

「よろしくお願いします。助けてもらったのに、その上こんなこと

まで……」

俺は頭を下げられたので、両の手を左右に振った。

「いや、いいよ。俺たちが勝手にやってることなんだし」

「そうだね。ボクたちが来た目的と、被らないでもないから」

シリカは二人に自己紹介をした。

「あの……、あたし、シリカっていいいます」

「ああ、俺はキリトだ」

「ボクはユウキだよ。しばらくの間よろしくね」

「さて、街へ戻るか」

俺はベルトにぶら下がるポーチから地図を取り出し、出口に繋がるエリアを確認すると、歩き始めた。

その後ろに、シリカ、ユウキと続いた。



「お、お二人は仲が良いんですね」

「良くない！」

仲が悪いようには見えなかった。

逆に、良すぎるほどだ。

シリカは、心の中で呟いた。

「——お互い信頼してるんだ」

「んんんツ——さて、まずは此処から移動しようか」

「そうだね」

三人は歩き出し、《風見鶏亭》の前までやって来た。

シリカは、何も聞かず、ここまで連れて来てしまった事に気付いた。

「あ、キリトさんとユウキさんのホームはどこに……」

「ああ、いつもは五十層だな……。だけど、今から帰るのもな……」

「じゃあ、今日はここに泊まろうよ」

「そうですか！」

嬉しくなって、シリカは両手を叩いた。

「このチーズケーキが結構いけるんですよ」

その時、隣の防具屋から、二週間参加していたパーティーメンバーが現れた。

先頭を歩くのは、口論になった女性プレイヤーだ。

シリカは反射的に、数歩後ずさってしまった。

「あら、シリカじゃない」

「……どうも」

「へえーえ、森から脱出できたんだ。よかったわね」

女性プレイヤーは、口の端を歪ませ笑うと、言った。

「あら、あのトカゲ、どうしちゃったの？ あらら、もしかしてえ？」

シリカは唇を噛んだ。

「死にました……。でも、ピナは必ず生き返らせます！」

「へえ、てことは、《思い出の丘》へ行く気なんだ。でも、あんたの

レベルで攻略できるの？」

俺とユウキが、シリカの前に立った。

「あ、ゴメンおばさん。ボクたち急いでるんだ」





「……すなまい。暗くしちゃったな」

シリカは、顔を左右に振った。

「いえ、大丈夫です。ええと、さつきはありがとうございました」

「いいのいいの。ボクたちが勝手にやったことだから。それに、

あの人にはカチンときたしね」

「ああ、さつきのおばさんの事か」

俺の言葉を聞き、シリカは笑みを零していた。

「さつきは、笑いを堪えるの大変でした。私、この世界に来てこんな

に笑ったの初めてです」

「そっか」

「うん、シリカちゃんは笑顔が似合うよ」

俺が両の手を叩いた。

「さて、食事にしようか」

「うん（はい）！」

それから、各自で食事を摂った。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

俺たちは食事を摂った後、部屋に入った。

まあ、俺はユウキと同室なんだが。

「なあ、ユウキ。あの女性プレイヤーが、依頼人が言ってたプレイ

ヤーじゃないか？俺の勘だが」

「たぶん、そうかも」

その時、コンコンとノックの音が聞こえてきた。

「誰だ？」

「たぶん、シリカちゃんじゃないかな」

「ああ、なるほどな」

俺はドアノブを捻り、ドアを開けた。

そこに立って居たのは、竜使いの少女シリカだった。

「あ、あの、こんばんは。えっと、明日行く、第四十七層の事を聞いて

おきたくて」

「俺はいいけど」

俺はユウキを見た。

「うん、ボクもいいよ」

「お、おじやますます」

シリカが部屋に入ったのを確認してから、俺はドアを閉めた。

ユウキとシリカはベットの土上へ腰を下ろし、俺は中央に設けられた椅子へ座った。

テーブルの上へ置いた箱を開くと、中から水晶の球体が出現した。

「……それは、何ですか？」

「ああ、これは《ミラージユ・スファイア》っていうアイテムだよ」

水晶をタップすると、その上に大きな円形のホログラフィックが出現した。

「うわあ……！」

「シリカちゃん、ボクと同じ反応したね」

ユウキはこれを見た時、シリカと同じく感嘆の声を上げていた。

俺は人差し指を使い、第四十七層の地理を説明した。

「ここが主街区だよ。で、こつちが思い出の丘。この道を通るんだけど……この辺にちよつと厄介なモンスターが……。それで、この橋を渡ると、もう丘が見え……」

俺は唇に人差し指を当てた。

ユウキも厳しい表情をしていた。

俺は凄まじいスピードで椅子から立ち上がり、ドアを引き開けた。

「誰だッ……！」

俺の耳に、階段を駆け降りる足音が聞こえてきた。

俺はドアを閉め、再び椅子へ座った。

「……話を聞かれていたな……」

「……だね」

「え、でも、ドア越しの声は聞こえないんじゃない？」

シリカが言っている事は尤もだが、例外があるのだ。

「聞き耳スキルが高いとその限りじゃないんだ。そんなのを上げてる奴は……なかなかいないけどな……」

「でも、なんで立ち聞きなんか……」

「たぶん、すぐに分かるよ」

ユウキの言う通り、明日全てが分かる。

「俺とユウキは、今からちよつと作業をするな」

俺は隣の椅子にユウキを手招きする。

ユウキはベットから立ち上がり、椅子へ座った。

ベットの上へ横になったシリカは、いつの間にか眠りに就いていた。

### 第13話《《黒の剣士》と《絶剣》》

シリカは、耳元で奏でられるアラームで眼を覚まし、体の上に掛けてある毛布を剥いで上体を起こした。

大きく欠伸をしベットから降りようとした所で、テーブル上で腕を組み、それを枕にして眠ってる二人の姿が映った。

シリカは、昨夜何処で眠りに就いたかを思い出した。

「——あたし、昨日お二人の部屋で、そのまま……」

それを認識した途端、顔が真っ赤に染まり、シリカは両手で顔を覆って身悶えた。

数秒掛けて落ち着くとベットから降り立ち、そっと二人の前へ近づき、シリカは声を掛けた。

「キリトさん、ユウキさん。朝ですよ！」

声が耳に届き俺は顔を上げ、数回瞬きをした。

「あ……シリカ、おはよう」

「お、おはようございます。き、昨日はごめんなさい！ ベットを使ってしまった」

シリカは、ペこりと頭を下げた。

「別に大丈夫だぞ。この世界じゃ、筋肉痛とかないしな。まあ、コイツと同室の時、何時もこんな風に寝てるし。そういえば、ユウキは起きたか？」

「いえ、キリトさんの隣で眠ってます」

俺がユウキの顔を覗き込むと、寝言が聞こえた。

「むにやむにや……。もう、食べられないよ……」

「……どんな夢見てるんだか。——おい、起きろ。朝だぞ」

ユウキは顔を上げ数回瞬きをすると、ニツコリ笑った。

「あ、キリト、おはよう」

「おう、おはよう」

俺は二人を交互に見、言葉を発した。

「それじゃあ、メシを食べるか」

「OK (はい)」

俺たちは一階へ降り、朝食を摂り武装してから表通りへ出ると、転移門広場へ向かい歩き出した。

転移門へ飛び込もうとして、シリカは足を止めた。

「あ……あたし、第四十七層の街の名前、知らないです……」

「いいよ、俺たちで指定するから」

「シリカちゃんは、ボクの手を握って」

シリカは、ユウキの手を優しく握った。

「転移！ フローリア！」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

エフェクト光が薄れた途端、シリカの視界に色彩の乱舞が飛び込んできた。

「うわあ……！」

シリカは、思わず感嘆の声を上げた。

四十七層主街区転移門前は、花々で溢れかえってた。

円形の広場を、細い通路が十字に貫き、それ以外の場所は煉瓦に囲まれた花壇になっており、花々が咲き誇っている。

「すごい……」

「この層は通称『フラワーガーデン』って呼ばれてて、街だけじゃなく、フロア全体が花だらけなんだ。時間があつたら、北の端にある『巨大花の森』にも行けるんだけどな」

「ボクはそこ行つたよ。その場所は、此処では見られない花がいっぱいあつたね」

「そうなんですか。それはまたのお楽しみにします」

シリカは花壇の前でしゃがみ、花に顔を近づけ、そっと香りを吸い込む。

香りを楽しみ立ち上がると、周りを見渡した。

見れば殆んどが男女連れであり、手を繋ぎ、或いは腕を組んで談笑していた。

この場所と、キリトとユウキは凄くマッチしていた。

「——キリトさんとユウキさんは、王子様とお姫様みたい」

「ん、どうかしたの？」

ユウキにそう言われ、シリカは思った事を口に出した。

「いえ、王子様とお姫様みたいだな、って思いました」

これを聞いた俺たちは、頬を朱に染めた。

「お、俺が王子様って」

「ぼ、ボクがお姫様」

「はい、そうです」

色々イヤバい気がしたので、俺はこの話題を逸らすことにした。

「は、花を取りに行かないとなー！」

「そ、そうだね」

「わかりました」

広場を出ても、街は花で埋め尽くされていた。

街の南門を目指して歩き、門の前で歩みを止めた。

「さて……いよいよ冒険開始なわけだけど……」

俺は数歩下がり、腰に付いていたポーチの中から転移結晶を取り出し、シリカに手渡した。

「君のレベルとその装備なら、このモンスターは倒せない敵じゃない。だが、フィールドでは何が起るかわからない。俺たちが逃げろと言ったら、その結晶で何処かの街へ転移するんだ」

「ボクたちの心配はしないで。いい？」

シリカは頷いた。

「わ、分かりました」

俺は笑みを浮かべ、言った、

「それじゃあ、行こうか」

「OK♪」

「はい、よろしくお願いしますー！」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

フィールドを歩き出して数分後、最初のモンスターと遭遇したのだが……。

「ぎゃあああああ!? なにこれ——!? 気持ワル——!! やつやああ

あ!! 来ないで——!!」

草むらを掻き分け出現したモンスターを一言で現すと、《歩く花》だ。

シリカは殆んど眼を瞑りながら、短剣を振り回していた。

当然ながら、シリカが放ったソードスキルは空を斬った。

するりと滑り込んできた二つの蔦が、シリカの両脚を捉え、上空へ持ち上げた。

「わッ!?!」

視界が反転し、宙吊りになったシリカのスカートが、ずりりつと下がる。

慌てて左手で裾を押さえ、右手で蔦を斬ろうとするものの、この体勢では上手くいかない。

顔を真っ赤にしながら、シリカは助けを求めた。

「き、キリトさん。 助けて! 見てないで助けてください!」

「それ無理。 俺が死んじゃう……」

何故なら、掌で眼を隠している俺の首筋に、冷たい刃の感触があるからだ。

「……キリト、眼を開けたらどうなるか分かるよね?」

俺は頷く事しかできなかった。

だって怖いんだもん。

「シリカちゃん、両手使っているよ! キリトには絶対見せないから!」

「は、はい! 分かりました!——こ、この……いい加減にしろっ!」  
シリカはスカートの裾から左手を離し、蔦をその手で掴むと短剣で切断する。

ソードスキルを放つと、モンスターはポリゴン体を四散させた。

小走りでシリカが戻って来たが——。

「ゆ、ユウキさん。 う、後ろ!」

俺たちの背後に、同種のモンスターがPOPした。

そのモンスターは二本の蔦でユウキの脚を絡めたが、持ち上げられる寸前に俺が剣を振るい、相手のポリゴン体を四散させた。

「……キリト、ありがとう」

「当然の事をしたただけだ。 さ、行こうぜ」



シリカがレベルを一上げた所で、《思い出の丘》へ到着した。

「ここが、思い出の丘だよ」

「ようやく着いたね」

「ここに……その、花が……?」

俺たちは、剣を鞘へ納めた。

「ああ、真ん中の辺りに岩があって、そのてっぺんに……」

俺の言葉を途中まで聞き、シリカは走り出していった。

花畑の中央に、白く輝く大きな岩が見える。

シリカはそこへ駆け寄り、その上を覗き込む。

そこからは、純白の花が成長していた。

シリカは、右手でそつと茎に触れ、花を摘み取った。

「これで……ピナを生き返らせられるんですね……」

「ああ、心のアイテムに、花の中に溜まってる雫を振りかければいい」

「でも、街に戻ってからにしよう。 フィールドでは、何が起こるか分

からないから」

「はい!」

シリカは頷くと、《プネウマの花》をストレージへ格納した。

幸い、帰り道では殆どモンスターと出くわす事なく、麓へ到着し

た。

あとは街道を一時間歩くだけで、街へ到着する。

シリカが、小川にかかる橋を渡ろうとした時――。

俺はシリカの肩に手を掛け、歩みを止めた。

俺とユウキは、厳しい顔で橋の向こう、道の両脇に茂る木々を睨み据えた。

「――そこで待ち伏せてる奴、出てこいよ」

「隠れてもムダだよ」

橋の向こうから現れたのは、シリカの知っている顔だった。



真つ赤な髪、赤い唇、エナメル状に輝く黒いレザーアーマーを装備し、右手には細身の十字槍を携えている。

「ろ……ロザリアさん……!? なんでもこんな所に……!?」

ロザリアは、唇の片側を吊り上げ笑った。

「アタシのハイディングを見破るなんて、なかなか高い索敵スキルね、剣士サン。あなどっていたかしら?」

ロザリアは、シリカへ視線を移す。

「その様子だと、首尾よく《プネウマの花》をゲット出来たみたいね。おめでと、シリカちゃん。じゃ、さっそくその花を渡してちょうだい」

「……な、なに、言っているんですか……?」

俺はユウキに目配せをしてから、シリカの前へ立ち、口を開いた。

「そうは行かないな、ロザリアさん。いや、犯罪者ギルド《<sup>オレンジ</sup>タイタンズハンド》のリーダーさん、と言った方がいいかな?」

その言葉に、ロザリアの眉がぴくりと動き、笑いが消えた。

「え……で、でも……ロザリアさんは、グリーン……」

シリカの問いに、ユウキが答えた。

「オレンジギルドって言っても、全員がオレンジカーソルじゃない場合が多いんだ。グリーンメンバーがパーティーの中へ紛れ込んで、待ち伏せポイントまで誘導する。昨夜、ボクたちの会話を聞いていたのも、あの人たちの仲間だよ」

シリカは愕然としながら、ロザリアの顔を見る。

「じゃ……じゃあ……この二週間、一緒のパーティーにいたのは……」

ロザリアは笑みを浮かべ、言った。

「そうよオ。あのパーティーの戦力を分析すると同時に、冒険でたっぷりお金が貯まるのを待ってたの。本当なら今日ヤツちやう予定だったんだけど。一番楽しんでいた獲物が抜けちゃうから、どうしようかと思ってたら、レアアイテムを取りに行くって言うじゃない。《プネウマの花》って今が旬だから、とっても良い相場なのよね。やっぱり情報収集は大事よね。その剣士さんたちは、そこまで分かってながら、ノコノコとその子に付き合うなんて、バカなの

？」

シリカは憤りを覚え、腰から短剣を抜こうと腕を動かしかけた所で、ユウキに手で制された。

「そうじゃないよ、おばさん。ボクたちはアナタを捜していたんだよ」

ロザリアは、眉を顰めた。

「どういうことかしら？」

「あんた、十日前に第三十八層で《シルバーフラグス》って言うギルド襲ったな。メンバー四人が殺されて、リーダーだけが脱出した」

「あの貧乏連中のことね」

俺の言葉にロザリアは頷いた。

「リーダーだった男はな、最前線のゲートで泣きながら、仇討してくれぬ奴を探してたんだ。その男は、依頼を引き受けた俺たちに、あんたらを殺してくれとは言わなかった。黒鉄宮の牢獄へ入れてくれと頼んだんだ。——あんたに、奴の気持ち分かるか？」

ロザリアは、面倒そうに答えた。

「分かんないわよ。何よ、マジになっちゃって、馬鹿みたい。ここで人を殺しても、ホントにその人が死ぬ証拠ないし。だから、現実に戻った時、罪になるわけないし。だいたい、戻れるのかも分からないのにさ、正義とか法律とか、笑っちゃうわよね。アタシ、そういう奴一番嫌い。この世界に妙な理屈持ち込む奴がね。で、あんたたちは、その死に損ないの言葉を真に受けて、アタシらを探してたわけだ。暇な人だねー。ま、あんたたちの撒いた餌に引つかかったのは認めるけど……でもさあ、たった三人で、どうにかなると思ってるの……？」

ロザリアが右手を掲げると、向こう岸へ伸びる道の両脇の木々が激しく揺れ、次々とオレンジプレイヤーが現れた。その数九人。

シリカが、小さな声で呟いた。

「き、キリトさん、ユウキさん……人数が多すぎます、脱出しないと……！」

「大丈夫。俺が逃げろ、と言うまでは、結晶を用意してそこで見てれ

ばいいよ。まあ、ユウキが傍にいるから、心配ないと思うけどな」  
穏やかな声で答えると、俺はそのまま歩き出した。

シリカは、大声で叫びかけた。

「ユウキさん！ キリトさんが！」

その声がフィールドに響いた途端――。

賊の一人が呟き、眉を顰めた。

「キリト、ユウキ？――その格好……盾無しの片手剣……。――《黒の  
剣士》……？ いや、待てよ。《黒の剣士》には、女の相棒がいたはずだ。  
……じゃ、じゃあ、その女は《絶剣》……？ や、やばいよ、  
ロザリアさん。こいつら……攻略組の、鬼神だ……」

これを聞いたオレンジプレイヤーは、顔面を蒼白にして後ずさった。

同時に、シリカも驚愕した。

あつけにとられて、二人を交互に見た。

鬼神は、アインクラッド最強剣士と言われているのだ。

俺は苦笑しながら答えた。

「俺としては、その二つ名好きじゃないんだけどな」

俺の声を聞き、我に返ったロザリアは甲高い声で叫んだ。

「こ、攻略組がこんな所をウロウロしてる訳ないじゃない！ どうせ、  
名前を騙ったコスプレ野郎に決まってる。もし、ホントに《鬼神》だ  
としても、この人数でかかれれば余裕よ!!」

「そ、そうだ！ 攻略組なら、すげえ金とかアイテムとか持ってんぜ！

オイシイ獲物じゃねえかよ!!」

口々に叫びながら、オレンジは一斉に放剣した。

武器を構えると、橋を駆け抜け――。

「オラアアア!!」

「死ねやアアア!!」

俯いて立つ俺を半円状に取り囲むと、剣や槍の切っ先を次々に俺の  
体へと叩き込んだ。同時に九発の斬撃を受け、俺の体はぐらぐらと  
揺れた。

「いやあああ!!」

シリカは、両手で顔を覆いながら絶叫した。

「やめて！ やめてよ!! き、キリトさんが……し、死んじやう!!」  
だが、男たちが耳を貸すはずもなく、手を休めることなく斬撃を放ち続ける。

橋の中ほどに立ったロザリアも、顔に抑えきれない興趣の色を浮べ、食い入るように惨劇を見つめていた。

傍らに立つユウキが、優しく呟いた。

「大丈夫だよ。ほら、良く見て」

シリカは、HPゲージを見た。

HPは減少しても、数秒経つと右端まで回復しているのだ。

「あんたら何やってんだ!! さっさと殺しな!!」

苛立ちを含んだロザリアの命令により、再び斬撃の雨が降り注ぐが、状況は変わらない。

「お、おい……。どうなってるんだよコイツ……」

一人が異常なものを見るように顔を歪めながら、数歩下がった。

それが呼び水となり、残り八人も攻撃を中止し距離を取る。

「十秒あたり四〇〇、つてところか。それがあんたら九人が俺に与

えるダメージの総量だ。俺のレベルは78、ヒットポイントは一四

五〇〇。……さらに戦闘時回復バトルヒーリングスキルによる自動回復が十秒で六〇

〇ポイントある。何時間攻撃しても俺は倒せないよ」

男たちは愕然とし、口を開け、立ち尽くした。

その中で、一人が掠れた声で呟いた。

「……そんなの……、そんなのアリかよ……。ムチャクチャじゃ

ねえかよ……」

「そうだ。たかが数字が増えるだけで、そこまで無茶な差が付く。

それがレベル制MMOの理不尽さというものなんだ!」

「ツチ」

ロザリアは舌打ちすると、腰のポーチから転移結晶を取り出した。

それを掲げ、口を開こうと――。

だが、俺は一気にロザリアへ迫り、体を強張らせるロザリアから転移結晶を奪ってそのまま襟首を掴むと、ずるずると引き摺り中央へ投

げ捨てた。

俺は、腰に付いていたポーチの中から回廊結晶を取り出した。

「これは、依頼主が全財産をはたいて購入した回廊結晶だ。黒鉄宮の監獄エリアに出口が設定してある。あんたら全員、これで牢屋へ跳んでもらう。あとは、《軍》の連中が面倒を見てくれるさ」

ロザリアは強気な笑いを浮かべ、言った。

「……もし、嫌だと言ったら？」

「全員殺す。と言いたいとこだけだな。仕方ない。その場合はこれを使うさ」

俺がコートの内側から取り出したのは、小さな短剣だ。

この刀身には、薄緑色の粘液に濡れている。

「麻痺毒だよ。レベル五の毒だから十分は動けないぞ。全員をコ

リドーに放り込むのに、それだけあれば充分だ。……自分の足で入るか、投げ込まれるか、好きな方を選べ。——コリドー・オープン!!」

結晶が砕け散り、前の空間に青い光の渦が出現した。

「畜生……」

肩を落としながら、次々に男たちがその中へ飛び込んだ。

だが、ロザリアは、その場から動こうとはしなかった。

「やりたきや、やってみなよ。グリーンの私を傷て」もう、おばさんはじれったいな！ 早く監獄へ入りなよ!!」

言葉が終わらない内、ロザリアはユウキに首根っこを掴まれ、渦の中へ放り投げられた。

てか、いつの間にも移動したんだ。

「キリトは優しすぎだよ。ボクは、オレンジが大嫌いな」

「……ああ、そうだったな」

俺たちはシリカに歩み寄り、優しく声を掛けた。

「……ごめんな、シリカ。君を囮にするようなことになっちゃって。俺たちのこと、言おうと思ったんだけど……。怖がられると思って、言えなかった」

「ごめんね、怖かったでしょ」

シリカは、首を左右に振る事しかできなかった。



ね。兄ちゃんとお姉ちゃんの話も。

だからこれからも頑張っていこう

## 第14話《圈内事件》

二〇二四年。 四月。 第五十七層。

アインクラッドの四季は現実と同期している為、夏は毎日暑いし、冬は毎日寒い。

今日はポカポカと暖かく、柔らかな日差しが空気を満たし、そよ風がとても気持ちいい。

ここまでパラメータが好条件に設定される日は、年間通して五日もない。

そして、今俺たちは、主街区の外れの芝生に横になっていた。

此処は俺が見付けた場所であり、横になれば、桜の花弁の舞を見る事が出来る。

所謂、花見っていう奴だ。

「姉ちゃんたちも、誘ってみない？」

「了解だ。——じゃあ、俺はアスナに送るわ」

「ボクは、姉ちゃんだね」

俺とユウキは、副団長様たちにメッセージを送った。

俺がアスナに送った内容は、『花見しようぜ。』という文章だ。

そして数分後、返信が返ってきた。

内容はこうだ。『キリト君。初めてのメッセージが、〃花見しようぜ〃、だけって……。 もっと何か書こうよ。……今日は攻略が休みだから、行くけど。』

「おし、OKだ」

「姉ちゃんもOKだって。 とうか、飾り気のないメッセージ送ったんでしょ？」

「……何で分かったんだ」

「だって、ボクとメッセージをやり取りする時、そうだからさ」

俺がメッセージをやり取りする時の文章は、『了解した』、『分かった』、という業務的文章だ。

いや、だって、書く事なくね。

「他の女の子には、ちゃんとした文章で送らないとダメだよ」



「……おう、了解した」

横になって桜の舞を見ていたら、此方に歩み寄って来る足音が聞こえてきた。

「あ、こんな所に居た」

「お久しぶりです」

今俺たちに声を掛けたのは、血盟騎士団副団長様たちだ。

俺とユウキは上体を起こした。

「おう、久しぶり」

「久しぶりだね。姉ちゃん、アスナ」

アスナとランは桜の木を見上げて、言った。

因みに、アスナは血盟騎士団のユニフォームを、ランは青を基調にした装備だ。

これは、ランが入団する時に出した、装備は自由にするという条件だそうだ。

「それにしても、街の外れに桜の木があるなんてね」

「ですね。SAOでお花見が出来るなんて、嬉しいですね」

アスナは俺の隣に、ランはユウキの隣に横になった。

俺とユウキもそれに倣い、横になった。

四人が並んで横になっていたら、規則正しい寝息が聞こえてきた。

——もしかして、俺以外寝ちゃったの？

俺は再び上体を起こし左右を見渡すと、女子三人は気持ち良さそうに寝ていた。

俺は大きく溜息を吐いた。

「……無防備すぎだろ。俺を信用してくれてるのは嬉しいけど」

今この場所は《圏内》であるため、プレイヤーを傷付ける事は不可能だ。

武器で斬りかかっても、衝撃音と共に障壁に阻まれるだけで、HPが減る事はない。

無論、アイテムを盗む事など論外である。

つまり、圏内では、一切の直接的犯罪行為は犯せない。

だが、これには抜け道が存在するのだ。



フロアも約六割が踏破され、現在の最前線は五十九層だ。そして、中層以上のフロアはささやかながら、《生活を楽しむ余裕》が生まれている。

第五十七層主街区《マーテン》にも、そんな雰囲気は濃く存在していた。

此処は大規模な街で、必然的に攻略組のベースキャンプかつ観光地となっている。

夕刻になれば、前線からプレイヤーが降り立ったり、或いは下層から晩ご飯を食べに来たり、大いに賑わう事になる。

四人が大通りを歩いていたら、ほぼ視線を集めていた。まあ、こうなるのも仕方がない。

攻略組最強と言われる二人組と、血盟騎士団の高嶺の花が一緒に歩いているのだから。

因みに、四人とも二つ名持ちだ。

「……視線が凄いなだが」

「……うん、そうだね」

「……ええ、そうね。こんなに視線を集めるのは初めてだわ」

「……私たちはアインクラッドで有名ですから、仕方がないかと」

上から、俺、ユウキ、アスナ、ランである。

うん、帰りたくなってきた……。

だが、この店を薦めたのは俺だ。

ここで帰ったら失礼な行為だろう。

約五分歩いた所で、道の右側にやや大きめのレストランが現れた。

「ここだ。お薦めは、肉より魚だ」

ドアを俺が押し開け入り口を潜ると、後ろに三人が続いた。

NPCレストランの中でも、幾つもの視線が集中した。

「(俺たちって、どんだけ有名なんだよ……)」

と、俺は心の中で呟いた。

俺は奥の窓際のテーブル目指して歩き、俺とアスナはユウキ、ランと向かい合わせになるように腰を下ろした。

てか、ここまで来るだけで疲労が途轍もない。

取り敢えず、食前酒から前菜、メイン料理、デザートまで注文し、一息入れた。

「今日は助かったわ」

「ありがとうございます」

「ボクもありがとうね」

「気にしなくていいぞ。友達を守るのは当然だ。——それに、大切な人はもう失いたくない」

後半は、誰にも聞こえないボリウムで呟いたが、三人に聞こえていたらしい。

発生しかけた微妙な雰囲気、サラダを持ってきたNPCが払拭してくれた。

俺は、色とりどりの謎の野菜に謎のスパイスをかけ、フォークで頬張った。

「何時も思うけど、何か足らないんだよな」

俺の問いに、三人は思索した。

すると、アスナがハツとした。

「そうだわ。マヨネーズよ！ 今度マヨネーズ作るわ」

「そうだ！ 一緒に作ろうね」

「ええ、私も参加します。私、料理スキル結構高いんですよ」

「ユウキが料理スキルを取得したは知ってたが、アスナとランが取得してるのは意外だ。今度、何か作ってくれよ」

三人が作る料理は、メチャクチャ旨だろう。

考えただけで涎が出そうだ。

その時だった。外から悲鳴が聞こえるのは。

「……きゃあああああ!!」

四人は椅子が倒れる程勢いよく立ち上がり、急いで悲鳴の上があった場所へ向かった。

そこで信じられないものを眼にした。

教会中央の窓から一本のロープが垂れ、ロープで首を吊るす形でぶら下がっている男性プレイヤー。

分厚いフルプレート・アーマーを身に纏い、大型のヘルメットを

被っている。

そして、男の胸を深々と貫いている一本の黒い短槍。

男は、槍の柄を両手で掴み、口を動かしていた。

その間にも、胸の傷口からは、赤いライトエフェクト光が噴き出ている。あれは、《貫通継続ダメージ》。

俺は一瞬の驚愕から覚めると、叫んだ。

「早く抜け!!」

男がちらりと俺を見た。

両手が動き、槍を引き抜こうとするが、食い込んだ槍が抜ける事はなかった。

だが、この場所は《圏内》であり、あの槍によるダメージ発生は有り得ないのだ。

逡巡する俺の耳に、アスナの鋭い声が届いた。

「私とランさんは二階に行くわ。二人は下で受け止めて」

「了解!!」

俺たち四人は二手に別れ、駆け出した。

その途中で、男が何かを見ているのに気付いた。己のHPバーだ。

男が何かを叫んだ瞬間、無数のポリゴン片となって散った。

この場所<sup>圏内</sup>でプレイヤーがダメージを受け、HPを減少させる方法は一つしかない。

《完全決着モード》のデュエルを受諾し、死に至るまで戦う事だ。

何処かに、【WINNER／名前／試合時間】という形式のシステムウインドウが出現するはずだ。

それを見れば、男を殺したプレイヤーが誰なのか、即座に分かるのだ。

俺は周りを見渡し、《デュエル勝利者宣言メッセージ》を探したんだが――。

「……ないぞ……」

「……うん、ボクも見付けられなかった……。でも、まだ望みはあるよ」

俺は、ユウキが言った事を即座に理解した。

「アスナ、ラン！ そっちはどうだ！」

俺は、二階の窓から外を見ているアスナとランに声を掛けた。

「ダメだわ！ システムウインドウは見つからなかった！」

「教会の中には、誰もいませんでした!!」

ユウキ静かに呟いた。

「……三十秒経ったね」

三十秒。それが、システムウインドウが消滅するまでの時間だ。

三十秒経ってしまったということは、人物特定が不可能になってしまった。

「……ああ」

俺とユウキは人垣をすり抜け、教会の階段を上がり二階へ向かった。

俺たちに気付いたアスナとランが、此方を振り向いた。

「ランさんも言ったけど、教会の中には誰も居なかったわ」

「それに、隠蔽付きのマントで隠れてる可能性はないと思います。

居たら、私たちの索敵にかかりますからね」

暫し沈黙した後、ユウキが口を開いた。

「どういうことなんだろう？ 圏内でダメージを与えるのは不可能だよね」

俺は頷いた。

「ああ、ユウキの言う通り、圏内でダメージを与える事は不可能だ。

出来るとすれば、デュエルを申し込んで、受諾されるしかないからな。

——このままにして置くのはマズイな」

「だね。調べて、対抗手段を公表しないと」

「そうね。この事件は圏内で起きてるもの」

「ええ、私たちが調べましょうか。攻略は、この際仕方ないです」

上から、俺、ユウキ、アスナ、ランだ。

第一層以来、四人が再び集まり、一緒に行動する事が決まった。

## 第15話《調査開始》

証拠品のロープを回収し、俺たち四人は小部屋を出ると、教会出入り口へと戻った。

同じく証拠品である短槍は、小部屋に入る前にアイテムストレージに格納してある。

広場に出て、俺が野次馬たちに手を挙げてから大声で呼びかけた。「すまない。さっきの一件を最初から見ていた人、いたら話を聞かせてほしい！」

数秒後、おずおずという感じで、人垣ひとがきから一人の女性プレイヤーが進み出てきた。

「早速なんだが、話を聞かせてくれないか??」

そう言うと、俺の頭に軽いゲンコツが三つ降ってきた。

「いでッ!……あだッ!」

俺は頭を擦った。

「もう、キリト君は、この子怖い目にあっただばかりなんだから」

「そうですよ、キリトさん。デリカシーを考えましょうね」

「キリトは、少し気を使えるようにならないと」

「……はい。ごめんなさい」

俺は身を縮めた。

俺が変わって、アスナが優しい口調で聞いた。

「ごめんね、怖い思いしたばかりなのに。私の友人が失礼なことをしちやって。あなたのお名前は?」

「あ、あの私《ヨルコ》っていいいます」

そのか細い震える声に聞き覚えがあったので、思わず口を挟んでしまった。

「もしかして、さっきの最初の悲鳴も、君が?」

緩くウェーブする濃紺のうこん色の髪を揺らして、ヨルコは頷いた。

そして、大きな瞳からは、涙が浮かんでいた。

「は……、はい。私、さっき殺された人と、友達だったんです。今日は、一緒にご飯を食べに来て、でもこの広場ではぐれちゃって。」

……それで……、そしたら……」

これ以上言葉に出来ず、ヨルコは両手で口許を覆う。  
俺たち四人は顔を見合わせ、視線だけで会話をした。

「(おい、俺はどうすればいい?)」

「(そうですね。 キリトさんは、少し離れた所で待機しててくださいい。 ヨルコさんが落ち着くまでは、私たち三人に任せてください)」

「(そうですね。 それが良いわ)」

「(じゃあ、キリト。 ここはボクたちに任せてよ)」

「(なら、三人に任せるな。 ヨルコさんが落ち着いたら呼んでくれ)」

三人は、ヨルコを教会内部へ移動させた。

ヨルコとアスナが幾つかある長椅子の一つに座り、向かいの長椅子にランとユウキが着席した。

俺はやや離れた所へ立ち、ヨルコが落ち着くのを待った。

やがてヨルコが平静を取り戻し、消え入りそうな声で、「すみませ  
ん」と言った。

ユウキから手招きをうけ、俺はそれに頷いてから、教会内部へと移動をした。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

俺はユウキの隣に腰をかけ、耳を傾けた。

「あの人……。 名前は《カインズ》っていいいます。 昔、同じギルド  
にいたことがあって……。 今でも、たまにパーティー組んだり、お  
食事をしたりしてました……。 今日はこの街まで晩ご飯を食べべ  
きて……」

ヨルコは一度眼を瞑ってから、震えが残る声で続ける。

「……でも、あんまり人が多くて、広場で彼を見失っちゃって……。

周りを見回したら、いきなり教会の窓から……。 ——カインズが落ち  
てきて、宙づりに……。 しかも、胸に、槍が……」

「その時、誰か見なかったか?」

俺の問いに、ヨルコは黙り込んだ。

そして、ゆつくりと頷いた。



「……一瞬、なんです、カインズの後ろに、誰か立ってたような気が……、しました……」

ヨルコの証言によれば、犯人は、教会内部の小部屋に居たことになる。

そうなれば、カインズを窓から突き落とし、何らかの方法で小部屋から脱出したという事になる。

そうになると、ハイディング付きの装備を使ったはずだが、俺たち四人の索敵から逃れる事は不可能だ。

いや、もし、アンチクリミナルコードを無効化するスキルが存在したら、この犯行は可能なかもしれない。

俺は思考を止め、再びヨルコに聞いた。

「その人影に見覚えはあったか？」

ヨルコは、首を左右に振るだけだ。

俺の隣に座るユウキが、穏やかな声で質問した。

「……心当たりはあるかな……？ カインズさんが、誰かに狙われる理由に……」

すると、ユウキの小さな頭に、軽くゲンコツが降ってきた。

次いで、とても優しい声で、

「ごら、ユウキ。それは聞きすぎだよ」

「ご、ごめん。 姉ちゃん……」

まあ、ユウキの発言は配慮に欠ける問いであったが、聞かない訳にはいかない。

もし、カインズを恨んでいる人物に心当たりがあったなら、それは大きな手掛かりになるからだ。

しかし、ヨルコは首を左右に振った。

だが、カインズを殺した犯人は、《P K》プレイヤーキラーだろう。

つまり、アインクラッド全土のオレンジプレイヤーが容疑者候補になる。

その中からの人物特定は不可能に近い。

三人も、俺と同じ結論へ至り、息を吐いた。

「今日は、私たちが宿まで送るわ。 まだ、危険があるかもしれないか

ら

「……ええ、よろしくお願いします」

ヨルコは頷き、椅子から立ち上がった。

四人も立ち上がり、下層の宿屋まで送り届けてから、転移門前まで戻った。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

第五十七層　　転移門前広場

「さて……次はどうする？」

俺がそう聞くと、三人が即答した。

「そうね。　まずは、手持ちの情報を検証しましょう。　特に、ロープと短槍ね。　出所が分かれば、そこから犯人が追えるかもしれないわ」

「そうですね。　これを検証すれば、何か分かるかもしれません」

「でもでも、検証するには、鑑定スキルが必要になるよ」

四人は腕を組んで、「うーん」と唸った。

因みに、今の時刻は、19時過ぎだ。

「……リズは、鑑定スキル習得してたけど、今は忙しい時間帯だからね……」

「そうですね。　今の時刻は、装備のメンテナンスなどが殺到する時間帯ですから」

不意に、ユウキが声を上げた。

「あ、エギルさんが鑑定スキル習得してたんだっけ。　でも、今は雑貨屋さんも忙しい時間帯だ……」

ユウキの言葉は、どんどんと小さくなっていった。

「いや、エギルに頼もう。　あいつなら、OKしてくれるさ。　てか、メッセージ送っちゃったしな」

「「はあく」」

え、何で溜息は吐いたの。

俺、泣いちゃうよ。

いや、まあ、俺が勝手に決めたことだけどさ。

「そういう事なら、行きましようか」

「ええ、そうですね」

「OK。行こうか。——ほら、キリトも早く！」

「お、おう」

俺は小走りで三人の背中を追った。

◆◆◆◆◆

〈第五十層 転移門前〉

転移門から出て来た四人を出迎えたのは、わいぎつ けんそう 猥雑な喧騒だった。

転移門が有効化されてから僅かな時間しか経過してないのに、すでに目抜き通りの商店街には無数のプレイヤーショップが開店し、軒のきを連ねている。

理由としては、店舗物件の代金が下層の街と比べてとても安く設定されているからだ。

俺の先導の下、目的の場所へ到着した。

「三人は、ここで待機してくれ」

「二ええ（うん）」

扉を押し開け、俺は此方に背を向けている店主に呼びかけた。

「うーっす。来たぞー」

「……客じゃない奴に《いらっしやいませ》は言わん」

エギルは、店内の客に呼びかけた。

「すまねえ、今日はこれで閉店だ」

えーっ、と言う不満声に、エギルは頭を下げ謝罪しつつ全員を追い出し、店舗管理メニューから閉店操作を行った。

「あのなあ、キリトよ。 商売人の渡世とせいは一に信用、二に信用、三、四が無くて五で荒稼ぎ……」

エギル言葉が途切れた理由は、美少女三人が店内に足を踏み入れたからだ。

「キリト君、遅いよ」

「す、すいません。キリトさん。アスナさんが痺れを切らしてしまつて……」



「残念ながら、ロープはNPCショップで売っている汎用品だ。ランクもそう高くない。耐久度は半分近く減ってるな」

「ロープには期待していなかったさ。次が本命だ」

俺は、開いたままのストレージをタップし短槍を实体化させ、慎重にエギルに手渡した。

エギルは顔を顰めながら鑑定スキルを使い、口を開いた。

「……PCメイドだ」

PCメイド。つまり、鍛冶スキルを習得したプレイヤーによって作成された武器ならば、必ず作成者の《銘》が記録される。

この武器を作成したプレイヤーに話を聞けば、何か手掛かりになるかもしれない。

「で、誰なんだ。作成者は？」

エギルは、システムウインドウを見下ろしながら答えた。

「《グリムロック》……。綴りは《Grimlock》。聞いたことねえな。少なくとも一線級の刀匠とうしやうじゃねえな。まあ、自分の武器を鍛える為だけに、鍛冶スキルを上げてる奴もいないわけじゃないが……」

エギルが知らない鍛冶屋を、俺たち四人が知っているはずもなく、部屋は沈黙に包まれた。

この沈黙を破るように、ユウキが口を開いた。

「でも、ボクたちで探すことは可能なはずだよ。それに、中層の街で聞き込めば、《グリムロック》とパーティー組んだ人が見つかるかも」  
「なるほどな。——武器の固有名は、何て言うんだ？」

エギルは再び視線を落した。

「えーと……《ギルティソーン》となっているな。罪のイバラ、ってところか」

俺は、エギルから短槍を受け取り、もう一つの事を試そうとした。  
「これも試してみるか」

短槍の柄を握った左手を少しだけ上げ、右掌目掛けて振り落そうとしたその時。

——三つの手によって止められた。

……ん、三つ？

「キリト君。何をしようとしたのかな？」

「うん、ボクも教えて欲しいな」

「ふふ、キリトさん。それで悪戯したらいけませんよ」

……顔は笑っているのに、眼が笑っていないというのは、こういう事をいうのだろう。

メツチャ怖い。てか、女の子怖い。

そして、エギルも顔を引き攣らせていた。

「……いや、でもな。試してみないと……」

「ダメ（よ）」

「……あい、分かりました。これは、ストレージに格納します」

俺は、渋々短槍をストレージに格納した。

すると、エギルがおおずとおおずと声をかけてきた。

「き、キリトよ。自分を大切にしろよ。いいな？」

「……善処する」

——俺たちの調査は始まったばかりだ。

## 第16話《黄金林檎》

俺とユウキ、アスナとランはエギルの店を出てから、転移門から第一層の《はじまりの街》へと転移した。

目的は、黒鉄宮に安置された《生命の碑》を確認する為だ。

グリムロックを捜そうにも、生きていなければどうしようもないからだ。

時間が遅いせいか、内部には殆ど人の姿は無かった。

昼間この場所は、友人や恋人の死を信じられずに訪れ、名前上に刻まれた横線を目にして泣き崩れるプレイヤーの悲痛な声が後を絶たない。

——俺とユウキも過去同じような経験をし、自暴自棄になったものだ。

左右に数メートルに渡って続く《生命の碑》の前に到着すると、アルファベット順に並ぶ名前の、《G》のあたりを凝視する。

そして、名前を見付けた。

——《Grimlock》。横線は、無しだ。

俺はこれを見て、ほっと息を吐いた。

「カインズさんは、亡くなってるよ。死亡時刻は、四月二十二日、十八時二十七分だよ」

「手掛かりは、グリムロックさんだけね」

「ええ、そうですね。でも、どうやってコンタクトを取りましょうか？」

上から、ユウキ、アスナ、ランである。

全ての用事を終え、黒鉄宮を出た所で、再び息を吐いた。

「もう遅いし、今日はここまでにしようぜ」

俺がそう言うと、ランが拳手をした。

「私とアスナさんで、グルムロックさんの居場所を調べてみますので、明日は別行動にしませんか？」

「ええ、そうしましょうか。そっちの方が、効率がいいわ」

アスナは、ランの案に賛同した。

俺も、この案には賛成である。

「ああ、そうするか。ユウキもそれでいいよな?」

「うん、ボクもそれでいいよ。という事は、ボクとキリトは、ヨルコさんから事情聴取だね」

というように、明日の予定が決まった。

血盟騎士団副団長様たちは、俺とユウキに別れを告げ、ホームに帰る為歩き出した。

俺は、今日の一件を思い起こした。

今日は、最高の気象設定下で花見をし、美少女三人の昼寝番をし、その報酬として飯を奢ってもらう為、第五十七層のNPCレストランを訪れたが圈内事件に巻き込まれ、今は事件を解決する為に動く探偵兼助手だ。

何と言うか、凄まじい日になったな……。

「さて、俺たちも戻るか」

「だね。ボクお腹減っちゃった。食べないで出て来たから」

「おう、じゃあ、飯作ってくれよ。久しぶりに、お前が作った飯が食いたくなった」

「うん、いいよ」

俺たちは歩き出し、転移門を潜り、ホームがある第50層アルゲートへ転移した。

だが、突然、六、七人のプレイヤーが一斉に取り囲んだ。

集団の顔ぶれには見覚えがあった。

攻略組の中でも、血盟騎士団と並ぶ最大ギルド《聖竜連合》だ。

その中で、リーダーと思われる人物に声をかけた。

「シュミットさん? こんにちは」

「キリト、シュミットさんと合ってるよ」

「スマンな、見覚えがあるって程度だったからな」

シュミットは、眉間に皺を寄せて早口で言った。

「……聞きたい事があって、あんた等を待っていたんだ。鬼神さん」

「おい。それって、攻略組で定着してないか?」

「……定着してるかもよ。ボク、最近そう呼ばれたしね」



ユウキの言葉を聞いて、俺はがっくり肩を落とした。  
てか、俺は神じゃないし。人間だし。

って、そうじゃなくて、

「で、何を聞きたいんだ？」

「……今日の夕方、第五十七層で起きた圏内殺人のことだ。——デュエルじゃなかった……って噂は、本当なのか？」

この質問には、ユウキが答えた。

「そうだね。勝利者表示が見当たらなかったのは確かだよ。見落とした可能性も否定できないけど」

暫し沈黙した後、シュミットが口を開いた。

「殺されたプレイヤーの名前は……カインズと聞いたが、間違いないか？」

「ああ、そうだ。事件を目撃した人がそう言ってたな。さつき、黒鉄宮まで行って来たけど、時間も死因も一致してたぞ。てか、知り

合いなのか？」

「……あんた等には関係ない」

「うん、これは、ボクたちの話を聞いてくれないパターンだよ」

ユウキが言うように、シュミットは聞く耳を持ってなかった。

もしかしたら、頭に血が上っているのかもしれない。

すると、突然、右手が突き出された。

「あんた等が、現場からPKに使われた武器を回収した事は知ってるぞ。もう充分調べただろ。渡して貰う」

これは、明らかにマナー違反行為と言ってもいい。

SAOでのアイテムなどは、次に拾った人の物になるのだ。

という事は、あの槍は、システムの俺の所有物だ。

それに、あの槍は証拠品でもある。

俺は深い溜息を吐き、アイテムストレージを開いた。

「はあ、まあいいか。ほらよ」

実体化させた短槍の柄を右手で持ち上げ、俺とシュミットの間を音高く突き立てた。

シュミットは、気圧されたように半歩身を引いて、それを見下ろし

た。

「鑑定の手間を省いてやるよ。この短槍の固有名は《ギルティソー  
ン》。作った鍛冶屋は、——《グリムロック》だ」

これを聞いたシユミットは、両目をいっぱい開き、半開きにした  
口から掠れた声を漏らした。

間違いなくシユミットは、被害者カインスの知り合いだろう。

過去に何があったか知りたいが、教えてくれそうにない。

「……明日、ヨルコさんに聞いてみるか。何か知ってるかもしれな  
いし」

シユミットはアイテムストレージを開き、素早くスピアをアイテム  
欄に放り込み、勢いよく踵を返した。

「……あまりコソコソ嗅ぎ回らないことだ。行くぞ！」

シユミットは仲間を連れて、転移門を潜り、消えていった。

ユウキは、困ったような表情で、

「ねえ、キリト。姉ちゃんたちに許可なく、短槍を渡してよかったの  
？」

「あ……、いや、大丈夫だ。アスナたちの心は、海より広いからな。

きつと」

「それならいいけど……。物理攻撃はされないようにね。姉ちゃ

んたち、怒ったら怖いんだから」

「いや、その、今の初耳なんですけど……」

「だって、言ってなかったもん」

「えー、マジですか」

「ふふ、そうだよ」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

翌日、俺とユウキは、昨日の話をもう一度聞かせてもらうため、第  
五十七層NPCレストランの一番奥の席に座っていた。

この席なら入口から離れているので、大声を出さないかぎり、話し  
声は聞こえないはずだ。

俺は椅子に座ったまま、頭を下げた。

「悪いな、友達が亡くなったばかりなのに……」

「いえ……、大丈夫です。私も、早く犯人を見付けて欲しいから……」

「そうか……。まずは、報告なんだけど……昨夜、黒鉄宮の《生命の碑》を確認した所、カインズさんは、あの時間に亡くなっていた」

俺の言葉に、ヨルコは瞑目してから頷いた。

「そう……ですか。ありがとうございます。わざわざ遠い所まで行って頂いて……」

ユウキが、重要な質問をした。

「ううん、いいよ。ボクたち、ヨルコさんに聞きたい事があるの。」

ねえ、ヨルコさん。この名前に聞き覚えはある？ 一人は、鍛冶職人で《グリムロック》。そしてもう一人は、槍使いで《シユミット》。ユウキの言葉によって、俯けられていたヨルコの顔が、ぴくりと震えた。

やがて、ゆっくりと頷いた。

「……はい、知っています。昔、私とカインズが所属していたギルドのメンバーです」

俺は、「やはりそうか」と心の中で思った。

そして、そのギルドで、今回の事件の原因となる《何か》があったかも、確認しなければならぬ。

今度は、俺が質問した。

「ヨルコさん。答えにくい事だと思うけど……何か心当たりとか、思い当たる事はないか？」

すぐに答えは返ってこなかったが、長い沈黙のあと、ゆっくりと頷いた。

「……はい……、あります。昨日、お話しできなくて、すみませんでした……。私たちのギルドはある『出来事』……そのせいで、消滅したんです」

ギルドの名は《黄金林檎》。

半年前、一度も見た事のないモンスターを討伐したら、そのモンスターがあるアイテムをドロップした。

そのアイテムは、敏捷力が20上がる指輪であり、ギルドで使う意見と、売った儲けを分配しようという意見に割れた。

なので、多数決を取った。

結果は、《3対5》で売却することになった。

ギルドリーダーは、前線の大きい競売屋オークションニアに委託することに決め、前線に一泊する予定で出かけたが……リーダーは、帰ってこなかった。メンバーたちは嫌な予感がして、《生命の碑》を確認しに行ったら、リーダーの名前の上に横線が刻まれたという事だ。

つまり、黄金林檎のリーダーは亡くなっていたことになる。

「グリセルダさんの《死》を知ったのは、グリセルダさんが前線に行った、夜中でした。死亡理由は、貫通属性ダメージです……」

黄金林檎のリーダーの名前は、《グリセルダ》という名前らしい。

「そんなレアアイテムを抱えて圏外に出るはずがないよな……考えられるのは、睡眠PKか」

「……でも、偶然とは考えにくいかも」

ユウキが呟くと、俺は首肯した。

「ああ、そうだな。偶然が重なりすぎだ。こんな事は、一般的には有り得ないからな。とすると、リーダーのグリセルダさんを狙ったのは、指輪のことを知ってた人物……つまり……——黄金林檎、残り七人の誰か、と言う事になるな」

ヨルコが頷いた。

「黄金林檎の七人の中……の誰か？ 私たちも当然そう考えました。

なので、皆が皆を疑う状況になり……結果として、ギルドが崩壊しました」

重苦しい沈黙が包んだ。

その沈黙を、俺が破った。

「ひとつ、教えてほしい。そのレア指輪の売却に反対した三人の名前は……?」

俯いていたヨルコは、顔を上げ、

「カインズ、シュミット……。そして、私です。ただ私の反対理由は、彼らとは少し違いました。私は……当時、カインズと付き合

い始めていたからです。ギルド全体の利益よりも、彼氏への気兼ねを優先しちゃったんです。バカですよね」

ユウキが、柔らかい語調で訊ねた。

「ヨルコさん。カインズさんと、ギルド解散後もお付き合いをしていたの？」

すると、ヨルコは小さく首を左右に振った。

「……解散と同時に、自然消滅しちゃいました。たまに会って、近況報告するくらいで……。長く一緒にいれば、どうしても指輪事件のことを思い出しちゃいますから。昨日もそんな感じで、ご飯だけの予定だったんですけど……。その前に、あんなことに……」

「そっか。——ごめんね……。辛い事色々聞いてちゃって」

ヨルコは、再び頭を振った。

「いえ、いいんです。それで……グリムロックですけど……」

その名前を出され、俺は眉を寄せた。

何故、今になってグリムロックの名前が……？

「彼は——黄金林檎のサブリーダーでした。同時に、ギルドリーダーの《旦那さん》でもありました」

「リーダーのグリセルダさんは、女の人だったのか？」

アインクラッドのギルドリーダーは、男性プレイヤーが常だ。

なので、女性プレイヤーがリーダーなのは、珍しい事である。

「ええ。とっても強い。と言っても、あくまで中層レベルの話ですけど……。強い片手剣士で、美人で、頭もよくて……。私はすぐく撞れていました。だから……。今でも信じられないんです。

あのリーダーが、睡眠PKなんて粗雑な手段で殺されちゃうなんて……」

「……じゃあ、グリムロックさんも相当ショックだっただろうね。大好きだった相手が、亡くなっちゃって……」

ユウキの言葉に、ヨルコさんはぶるっと身体を震わせた。

「はい。それまでは、いつもニコニコしている優しい鍛冶屋さんだったんですけど……。事件直後からは、とっても荒んだ感じになっちゃって……。ギルド解散後は誰とも連絡取らなくなって、今はど



内容は、『うん、大丈夫そうだよ。キリト君が指定した、第50層に集合ね。』

「OKだって。じゃあ、行こうよ」

「そうだな。アスナたちと合流して、調査結果も聞きたいしな」

「じゃあ、第50層に、レッツゴー♪」

俺とユウキは、集合場所である第50層に向かう為、転移門を潜った。

## 第17話《ヒースクリフとの会合》

第50層アルゲート　↳転移門前広場

血盟騎士団副団長様たちと共に、そいつはアルゲート転移門前広場へやって来た。

男の姿を見た途端、転移門に居たプレイヤーたちが激しくざわめいた。

暗赤色のローブの背にホワイトブロンドの長髪を束ねて流し、一切武器を装備せずに現れた男。

血盟騎士団団長、——ヒースクリフ。

奴は、第50層のボス戦で、ユニークス<sup>神</sup>スキル<sup>聖</sup>を出現させた人物でもある。

ヒースクリフは俺を見つけ、こちらに近づいてきた。

「スマンな、行き成り呼んじまって」

「ちよ、キリト君。　団長にその言葉使いは……」

「そ、そうです。　団長、すいません。　このバ……いえ、私の幼馴染が」

ヒースクリフは右手を突き出した。

「ほう。　ラン君とキリト君は幼馴染なのか。　それでは、ユウキ君もかね？」

「うん、そうだよ、ヒースクリフさん。　あ、ちなみに、アスナは親友ね」

「ふむ。　それは、興味深い事を聞いたな」

話が脱線しそうなので、俺は咳払いをして話を戻した。

「——呼び出した理由だが、知恵を借りたくてな。　時間は大丈夫か？」

「私も昼食にしようと思つてたところだ。《鬼神》キリト君にご馳走してもらえる機会など、そうそうあろうとも思えないしな。　夕方から打ち合わせが入っているが、それまでなら付き合える」

「……鬼神はやめてくれ。　その二つ名、如何にかならぬのかよ」

「ふむ。　それでは、《黒の剣士》が良かったかね？」



「……それもやめてくれ」

「すまないね。 攻略組の皆が言うものだから、つい、口をついて出てしまった」

「はあ、まあいいや。 それより行こうぜ。 あんたには、殆どのボス戦でタゲを取ってもらった礼をしてなかったからな。 飯のついでに、興味深い話を聞かせてやるよ」

俺は、談笑していた女性陣に声をかけた。

「行くぞー」

「二〇〇〇（ええ）二二」

俺が案内したNPCレストランは、ここアルゲードでもっとも胡散臭い、謎のメシ屋だ。

迷路のような道を五分程歩き、現れた店を見て、アスナとランが言った。

「……帰りもちゃんと案内してよね。 私、広場まで戻れないよ」

「ええ、案内してくれませんか、——小さい時の秘密をばらしちゃいますよ」

俺の小さい時の秘密は、トップシークレット扱いだ。

何があったかは、聞かないでくれ。

「ちよ、ランさん。 それはダメだ。 俺、泣いちやうから。 ——ちやんと案内するから心配するな。 まあ、この噂じゃ、道に迷った挙句、転移結晶も持ってなくて、延々と彷徨ったプレイヤーが何十人もいるらしい」

俺の言葉に、ヒースクリフが注釈を加えた。

「道端のNPCに頼めば、10コルで広場まで案内してくれるのだ。

その金額すらも持っていない場合は……」

両の手を持ち上げ、店に入っていく。

何で、あんたその情報を知っているんだ？ と思つたが、SAOのシステムに詳しいなら、知っていても当然、と結論付けた。

四人は、ヒースクリフの後を追った。

狭い店内は、まったくの無人であった。

木で出来た簡素な五人がけのテーブルへ腰をかける。

《アルゲードそば》を五つ注文し、NPCがテーブルの上に置いた、水が入ったコップを煽った。

「……さて、本題なんだが、話して大丈夫か？」

「かまわんよ」

俺は、圈内殺人事件のことを詳細にヒースクリフに説明した。

ヒースクリフは、表情一つ変えずに俺の話聞いていた。

「と、いう事だ。 団長さまの意見を聞かせて欲しい」

「まずは、キリト君の考えを聞こうじゃないか。 この事件、キリト君はどう見ているのかな？」

そう聞かれ、俺は三本の指を立てた。

「俺の考えた可能性は三つだ。 一つ目は、正当な圈内デュエルによるもの。 二つ目は、既知の手段の組み合わせによるシステム上の抜け道。 三つ目は、アンチクリミナルコードを無効化する未知のスキル、あるいはアイテム」

「ふむ。 三つ目は、除外してよい」

俺を含む四人は、眼を、二、三回瞬きをした。

「……断言しますね、団長」

と、アスナが言った。

「アスナ君、想像したまえ。 もし君らがこのゲームの開発者なら、そのようなスキルや武器を設定するかね？」

これには、俺が答えた。

「……しないだろうな」

「何故そう思ったのかな、キリト君」

「フェアじゃないからさ。 だが一つだけ、あんたのユニーク<sup>神</sup>スキル<sup>聖</sup>を除いてだな」

これを聞いたヒースクリフは、微笑した。

内心、ギクツとしたが、表情に出す事は無かった。

そう。 二刀流、黒燐剣の存在を知ってるのは、——今は亡きレンさんと、ユウキだけだからだ。

「とりあえず、三つ目は除外だな。 残るは、一つ目と二つ目の可能性になるが……。 でも、一つ目の可能性は無いと考えてる……。 そ

もそも、勝利者表示が何処にも無かったんだ、教会の内部にも表示が無かった。もし、圈内デユエルだった場合は、俺たちの誰かと絶対  
に鉢合わせるはずだ。だが、それは無かった。だから、一つ目の可能性は無いはずだ」

「じゃあ、ボクたちに残された選択肢は、《システム上の抜け道》だね。……でも、ボク、何か引つかかるんだよね」

「え？ 何が」

「《貫通継続ダメージ》だよ。あの短槍は、圈内でPKを実現する為に、どうしても必要だった。ボクは、そう思うんだ」

その時、ランがコップを滑らせた。

そのコップは床に落ち、甲高い破碎音と共に砕け散った。

ランは、舌をぺろっと出し、

「お、落しちやいました」

「大丈夫だろ。安物だしな。余分に会計をすればOKだろう」

俺は何か引つかかったが、頭を振り、それを打ち消した。

「ところで、回廊結晶を使った場合はどうなんだ？ あの小部屋を出口に設定して、圏外から短槍を刺してレポートしてくる。で、縄をかけられ、教会の窓から突き落された。てか、この場合は、貫通継続ダメージはどうなるんだ？」

「止まるとも」

ヒースクリフは即答した。

「徒歩だろうと、回廊によるレポートだろうと、あるいは誰かに放り投げられようと、圏内……つまり、街の中に入った時点で、コードが適用され、貫通継続ダメージは止まるとも」

「……カインズのHPバーは、あの時点で、完全に止まっていたのか……。じゃあ、どうやってこの犯行を、……やっぱり、システムの抜け道が怪しいな。いや、もしかしたら、……二人目の、ユニークスキル使いが現れたとか。そのユニークスキルで犯行に及んだ、とか」

すると、ヒースクリフは肩を揺らし、微笑した。

「ふ……。もしそんなプレイヤーが存在するなら、私が、真つ先にK

OBに勧誘してるよ」

「で、ですよねー」

「……おまち」

やる気の無い声と共に、店主は、四角い盆から白い小さなドンブリを五つテーブルへ移した。

店主は、ドンブリを置き終わると、すたすたと元居た場所へと戻って行った。

全員は、テーブルに置かれた白いドンブリを眼前まで引き寄せ、箸入れから割り箸を取り、パキンと割った。

ドンブリの中身を見て、女性陣が、女性陣が低く言った。

「……なんなの、この料理？ ラーメン？」

「……アスナさん、これはどう見ても、ラーメンじゃありませんよ」

「……うん、ボクが作ったラーメンの方が美味しそう」

「ま、まあ、これは、一応ラーメンに分類されるな。 てか、ユウキは、ラーメンを開発してるのか、今度食わせてくれよ」

無言でラーメンを啜っていたヒースクリフは箸を止め、ユウキを見た。

「ユウキ君、是非とも、君の作ったラーメンを食べさせてはくれないかね。 こう見えて私は、ラーメン通なんだ」

「は、はい。 ボクが作ったのでよければ」

「うむ。 楽しみにしてる」

そう言ってヒースクリフは、ラーメンに似た何か？を啜るのを再開した。

これを見ていた俺、アスナ、ランは、唾然としてしまった。

いや、まあ、うん。 ヒースクリフって、こういうキャラだっけ？

そして暫くは、ラーメンを啜る音が、店内に響いた。

数分後、空になったドンブリをテーブルの端に押しやってから、俺はヒースクリフを見た。

「……で、団長殿は、何か閃いたことはあるかい？」

スープまで飲み干しドンブリを置いたヒースクリフは、

「……これはラーメンではない。 断じて違う」

「俺もそう思うよ」

「では、この偽ラーメンの味のぶんだけ答えよう。現時点の材料だけで《何が起きたのか》を断定することはできない。だが、これだけは言える。いいかね……。この事件に関して絶対確実と言えるのは、君らがその眼で見て、その耳で聞いた、一次情報だけだ」

「……どういう意味だ？」

「つまり、こういうことだよ。アイコンクラウドに於いて直接見聞きするものはすべて、コードに置換可能なデジタルデータであるということだよ。そこに、げんかくげんちよう幻覚幻聴の入り込む余地は無い。逆に言えば、デジタルデータではないあらゆる情報には、常に幻や欺瞞ぎまんである可能性が内包ないほうされる。簡単にいえば、この殺人……、《圈内殺人》を追いかけるならば、眼と耳、つまるところの己の脳がダイレクトに受け取ったデータを信じることだ」

俺は疑問符を浮かべ、ユウキとアスナとランは頷いていた。

ヒースクリフは、「ごちそうさま、キリト君」と呟いてから、席から立ち上がった。

俺たちも席を立ち、「ごちそうさま」と店主に声をかけ、暖簾を潜った。

◆◆◆◆◆

俺たちは、NPCレストランから少し歩いた場所で見つけた、ベンチに座ってる。

「お前ら、ヒースクリフが話してた言葉の意味、教えてくれないか？」  
「あれだわ。つまり、醤油抜き東京風醤油ラーメン。だから、あんなに怪しい味なんだわ」

「ええ、そうですね。マヨネーズを作るついでに、醤油も作りましようか」

「うん、ボクも作る」

「そうだな。って、違ーうツ！ 変なもん食わせたのは悪かった。

……ヒースクリフの言ってたあれ意味だよ」

アスナとランとユウキは、頷いた。

「こういう意味だよ。あれはつまり、伝聞でんぶんの二次情報を鵜呑みするなつてこと」

「この件では言えば、動機面……、ギルド・黄金林檎のレア指輪の話のことですね」

「うーん、ヨルコさんを疑うことになつちやうよね」

「ふむふむ、なるどな。分かりやすい解説、サンキュ」

俺は腕を組んだ。

「そういえば、アスナたちの調査結果はどうだったんだ？」

「それなんだけど。中層で聞き込みをして、グリムロックさん行き付けの酒場の情報を入れたんだけどね、これだけじゃ情報が少なすぎて……」

「ええ、顔も分かりませんから、手掛かりはなしですね……」

アスナとランは、しゅんとしてしまった。

「そうか……。まだ、当分は判断材料集めになるな。あともう一人の《関係者》に話を聞きに行こう。何か分かるかもしれないしな。

——んじゃ、行くか」

「「OK（ええ）」」

俺たちは歩き出し、もう一人の関係者が居る場所へ向かった。

## 第18話《第二の圈内事件》

第56層。 聖竜連合(Divine Dragons Alliance 略称DDA)ギルド本部前。

俺たちは、ヒーフクリフとの会合の後、聖竜連合のギルド本部がある層までやってきた。

「もし、シュミット氏が狩りに出てたらどうする?」

今の時刻は午前二時。

昼食を終え、迷宮区攻略を行っている時間帯だ。

ユウキが、口許に指先を当てて答えた。

「たぶん、それはないんじゃないかな」

「なんでだ?」

両手を腰の後ろで組み、ステップを踏むようにブーツの踵を鳴らしながら、アスナとランが答えた。

「ヨルコさんの話を信じれば、シュミットさんも指輪売却反対派の一人で……つまり、カインズさんと同じ立場にいるわけよね。シュミットさんは、謎の殺人者に狙われてると思ってるはず。そんな状況で圏外に出ると思う?」

「だからこそ、安全を確保しようと思えます。宿屋に閉じこもるか、DDA本部に籠城するかですね。なので、見知らぬ宿屋より、自身がいつも居る場所を選ぶはずですよ」

「なるほどな。 てことは、DDA本部に籠城してる可能性が非常に高いな」

そう話していたら、DDA本部の扉付近までやって来ていた。

「じゃあ、キリトはそのへんで待っててね。ボクと姉ちゃんとアスナで行ってくるから。ボクたちの門前払いはありませんね」

「そうね。 その方が何かと取り入りやすそうだし」  
「ですね」

上から、ユウキ、アスナ、ランである。

てか、この三人は策士すぎる。

「ああ、了解した」

ユウキたちは巨大な城門へ歩を進め、俺は手近な樹の幹に背中を預けた。

城門の前には、二人の重装鎗戦士が仁王像のように立っていた。

「こんにちは。 血盟騎士団のアスナですけど」

「わたしは、アスナさんの補佐をしてるランといいます」

「ボクは、攻略組のユウキだよ」

三人がペコリと頭を下げた。

すると、門番をしていた一人の男が、軽い声を出した。

「あ、ども！ ちゅーつす、お疲れさまっす！ どーしたんすか、攻略組の高嶺の花がこんなトコまで」

駆け寄ってきた男に、三人は用件を伝えた。

てか、ユウキが高嶺の花だとは知らなかった。

「ちよつとお宅のメンバーに用があつて寄らせてもらつたの。 シュ

ミットさんなだけど、連絡できますか？」

「ちよつと、ご本人に確認しいことがありまして」

「いなかつたら、また別の日に改めるけど」

三人がこう言うと、男たちが顔を見合わせた。

「あの人なら今頃、最前線の迷宮区じゃないっすか？」

「あ、でも、朝メシの時に『今日は頭痛がするから休む』みたいなこと言つてたかも。——もしかしたら、自分の部屋に居るかもしれないんで、呼んでみるッスね」

門番の一人がメッセージを送信し、僅か三十秒で返信が返つてきた。

文面を見た男は、困つたように眉を寄せた。

「今日は休みみたいっすけど……。でも、まず用件を聞け、とか言つているんすけど」

アスナは少し考えててから、短く答えた。

「じゃあ、『指輪の件でお話が』、と伝えてください」

効果は靦面であつた。

シュミットに指輪の話をする、過剰反応を見せた。

ヨルコに会いたいと言つたので、俺たちはシュミットと共に、ヨル



コが居る第57層マーテンの宿屋に足を運んだ。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

五人は第59層から第57層へと転移し、ヨルコが滞在している宿屋へと歩き出した。

数分で到着し、二階へ上がる。

ドアをノックしてから名乗り、返事が返ってきてからドアを引き開ける。

引き開けたドアの正面、部屋の中央に向かい合わせに置かれたソファアの片方に、ヨルコが腰をかけていた。

ヨルコは、俺たちと見ると立ち上がり、一礼した。

重い空気で口を閉ざしてしまっていたが、ユウキに俺の脇を小突かれ、口を開いた。

「ええと……まず、安全の為に確認しておくけど、二人とも武器は装備しないこと。また、ウインドウを開かないことを守ってほしい。不快だろうけど、よろしく頼む」

「……はい」

「分かってる」

二人は応じ、向い合せになるようにソファアに腰をかけた。

先に口を開いたのはヨルコだった。

「……久しぶり、シュミット」

「……ああ。もう二度と会わないだろうと思っていたけどな」

シュミットも掠れた声で応じた。

俺はドアがしっかりとロックされたかを確認し、俺とユウキが東側に立ち、反対側にアスナとランが立つ。

南の窓は開け放たれ、春の風が吹き込んでカーテンを揺らしていた。

窓もシステムに守られており、開いてても、誰かが侵入する事は不可能である。

ヨルコがポツリと呟く。

「シュミット、今は聖竜連合にいるんだってね。すごいね、攻略組の

中でもトップギルドだよね」

シュミットは、眉間に皺を寄せながら低く答えた。

「どういう意味だ。不自然だ、とも言いたいのか」

「まさか。ギルドが解散したあと、凄く頑張ったんだろうなって思っただけよ。私やカインズはレベルアップに挫けて上に行くのを諦めたからね」

ヨルコは濃紺の髪を払い、微笑む。

シュミットと比較にならないが、ヨルコは着込んでいた。

厚手のワンピースに革の胴衣を重ね、更に紫色のベルベットの短衣を羽織って、肩にはシヨールまでかけている。金属防具は無くとも、着込めばかなり防御力が加算させる。ここまで防御力を上げるということは、やはり彼女も不安なのか、と思ってしまう。

シュミットが身を乗り出した。

「オレのことはどうでもいい！ それより……聞きたいことはカインズのことだ。なぜ今になってカインズが殺されるんだ!? あいつが……指輪を奪ったのか？ GAのリーダーを殺したのは、あいつだったのか!？」

GAというのは、ギルド《黄金林檎》の略称だろう。

「そんなわけない。私もカインズも、リーダーの事は心から尊敬してたわ。指輪の売却に反対したのは、みんなが無駄遣いしちゃうよりも、ギルドの戦力として有効利用すべきだと思ったからよ。ホントは、リーダーだってそうしたかったはずだわ」

「それは……オレだってそうだったさ。忘れるな、オレも売却に反対したんだ。大体……指輪を奪う動機があるのは、反対派だけじゃない。売却派の、つまり、コルが欲しかった奴らの中にいたかもしれないじゃないか!？」

シュミットは自身の膝を叩き、頭を抱え込む。

「なのに……グリムロックはどうしてカインズを……。売却に反対した三人を全員殺す気なのか？ お前やオレも狙われているのか!？」

演技、には見えなかった。

シュミットの横顔には、はつきりとした恐怖が刻まれているように

思えた。

「まだ、グリムロックがカインズを殺したと決まったわけじゃないわ。彼に槍を作ってもらった他のメンバーの仕業かもしれないし、もしかしたら……リーダーの復讐なのかもしれないじゃない？ 圏内で人を殺すなんて、普通のプレイヤーにできるわけない」

「な……………」

ぱくぱくと口を動かし、シユミットは喘いだ。

シユミットは微笑むヨルコを見やり、言った。

「お前さつき、カインズが指輪を奪うわけがないって……」

すぐに答えず、ヨルコは立ち上がると、一歩右に動いた。

両の手を腰の後ろで握ると、俺たちの顔を見たまま、南の窓に向かってゆつくりと後ろに歩き出した。

「私、ゆうべ、寝ないで考えた。結局のところ、グリセルダさんを殺したのは、ギルドメンバーの誰かであると同時に、メンバー全員でもあるのよ。あの指輪がドロップした時投票なんかしないで、グリセルダさんに任せればよかったんだわ!!」

言葉が途切れると同時に、ヨルコの腰が南の窓枠に当たった。

腰かけながら、ヨルコは付け加える。

「ただ一人、グリムロックさんだけは、グリセルダさんに任せると言っていたわ。あの人だけが自分の欲を捨てて、ギルド全体のことを考えた。だからグリムロックさんには、私欲を捨てられなかった私たち全員に復讐して、グリセルダさんの敵を討つ権利があるんだわ……」

この言葉によって部屋の中は沈黙に包まれた。

やがて、小さな金属音が鳴り響いた。音の発生源は、シユミットのフルプレート・アーマーからだった。

「……………冗談じゃない。冗談じゃないぞ。今更……………半年も経つてから、何を今更…………。お前はそれでいいのかよ?! こんな、わけも解らない方法で殺されていいのか!」

全員の視線がヨルコに集まった。

その唇が何かを言おうとした時——。ヨルコの体がぐらりと揺れた。

よろめくように、開け放たれた窓枠に手をつく。

紫色のチョコニツク。その中央から、小さな黒い棒のようなものが突き出している。

あれは、投げ短剣スロイングダガーの柄だ。その刀身は、ヨルコの背に埋まっている。窓の向こうから飛来した投げ短剣スロイングダガーが、ヨルコの背を貫いたのだ。

前後に揺れていたヨルコの体が、大きく窓の奥へと傾いた。

「あつ……！」

「ダメ……！」

アスナたちが悲鳴じみた声を漏らした。同時に俺も飛び出していた。

手を伸ばし、ヨルコを引き上げようとするが――。

シヨールの端に指先が掠っただけで、ヨルコは窓の外にへと落下した。俺たちが見てる前で、ヨルコの体は青いエフェクトを纏って四散した。

一秒後、漆黒のダガーだけが甲高い音を立てて路上に転がった。

息が詰まり、俺はヨルコの消えた石畳から視線を外した。勢いよく顔を上げ、外の街並みを見る。

宿屋から二ブロックほど離れた、同じ高さの建物の屋根。

ひっそりと立つ黒衣の人影――。

「ツチ、後は頼んだ！」

俺はアスナたちの制止の声を振り切って、通りを隔てた向かいの建物の屋根へと一気に跳んだ。

剣を抜き、黒衣の人影を追う。

もし、投げ短剣スロイングダガーの攻撃を被弾すれば、俺も即死してしまうかもしれない。

だが、ここで奴を逃がせば、殺人犯を見逃すことになってしまう。

俺は、夕闇を切り裂いて跳び続ける。

不意に、暗殺者の右手がローブの懐に差し込まれた。俺は息を詰

め、剣を構える。

しかし、奴の右手には投げ短剣スロイングダガーではなく転移結晶が握られていた。

「くそっ！」

俺は剣を持っていない左手で、ベルトに装備していたピックを三本同時に抜き、投擲する。回避動作を取らせ、詠唱を遅らせることを狙ったのだ。

だが、奴はとても落ち着いていた。三本のピックは、システム障壁に阻まれてしまった。

瞬間、奴の詠唱と同時に、街全体に大きな鐘の音が響いた。

これを狙っていたかのように、奴は転移結晶を使用し、何処かの街に転移してしまった。

「……………逃がしたか」

俺は宿に帰る途中で、ヨルコを刺した投げ短剣スロインングダガーを拾い上げ呟いた。「ダガーを投擲するだけでHPを全損させることが可能なのか……………」

いや、有り得ない。もしかしたら、ヨルコの殺害も、何かのトリックがあるのかもしれない。

完璧な殺害に見せる為、漆黒のローブが現れた線も否めない。

宿屋の二階に上がり、ドアノブを回し部屋に入ると、放剣をしたアスナ、ユウキ、ランが俺の目の前に映った。

「えーと、どうしたんですか……………俺、なにかしちゃいました……………」

「キリト君、君には後でO☆SHI☆O☆KI☆が必要かもね」

「ふふ、キリトさん。自身を大切にとってあれだけ言いましたよね。

今の行動はなんですか？」

「キリト。ボクのお説教もあるから、覚えといてね」

「……………はは、お手柔らかにお願い致します」

俺は乾いた笑いしか出ない。

攻略組トッププレイヤーの迫力は、半端ないです……………。

攻略組女性プレイヤーは、溜息を吐いてから剣を鞘に戻した。

「ところで、あの人は誰かわかったの？」

ユウキの問いに、俺は首を左右に振った。

「わからない。転移結晶のレポートで逃げられた。顔も声も、

女が男かもわからなかった」

俺の言葉を聞き、シュミットはソファアの上で大きな体を丸め、小刻みに震えていた。

「……違う」

「違うって……なにがですか?」

尋ねたランを見ることなく、シュミットは顔を伏せながら呻いた。

「違うんだ。 あれは……屋根にいた黒ローブは、GAのリーダーのものだ。 彼女は街に行く時、いつも地味なローブを羽織っていた。

あれは……さっきのあれは、彼女だ。 俺たち全員に復讐に来たんだ。 あれは、リーダーの幽霊だ」

四人は、顔を見合わせ笑った。

「いや、ありえないね。 ならいっそ、幽霊にボスを倒してもらえばいい。 死なないんだからな」

俺は笑ってから、左手に握っていたダガーをシュミットの目の前に放り投げた。

だが、シュミットは弾かれたように上体を仰け反そらせた。

「ひっ……………」

「それはただのオブジェクトだよ。 SAOのサーバーに書き込まれた、プログラムコードだ。 あんたのストレージに入ったショートスピアと同じだよ。 信じられないなら、それを持って行って、好きなだけ調べればいい」

「い、いらない! 槍も返す!」

シュミットは絶叫し、メニューウインドウを開き震えた手でスピアをオブジェクト化し、払い落すように隣に転がす。

「あんたが幽霊を信じるのは構わないが、俺は信じないぞ。 この二度目の圈内事件は、トリックが隠されてる事は間違いない。 俺はそれを突き止めてみせる。 まあ、一人じゃ限界があるがな。 あ、ついでに、元黄金林檎メンバーの名前を教えてくださいませんか。 もしかしら、調査で必要になるかも知れないしな」

シュミットは頷き、ライティングデスクに歩み寄り、備え付けの羊皮紙と羽ペンを取って、名前を書き上げる。

書き上がった羊皮紙を片手に俺の前に来ると、それを差し出した。

「じゃあ、俺たちは調査の続きをするな。——攻略が遅れるが、付き合ってくれないか？」

「元よりそのつもりよ」

「ええ、私も手伝いますよ」

「ボクも手伝うよ。キリトにはボクがついていないとね」

俺は良き友人、幼馴染を持ったなと感謝した。

シュミットが口を開く。

「……………攻略組プレイヤーとして情けないが……………オレはしばらくフィールドに出る気になれない。ボス攻略のパーティは、オレ抜きで編成してくれ……………。それと、オレをDDA本部まで送って行ってくれ」

シュミットの言葉を嘲笑うことは、俺たちに出来なかった。

俺たちの誰かが極限状態に陥ったら、こうなる確率が高いのだから。

怯えきつたシュミットを守るように、俺たちは周囲に視線を走らせながら、DDA本部までシュミットを送った。

## 第19話《事の真実》

シユミットをDDA本部まで送った後、四人は各自解散となった。まあ、アスナとランは、二人で今日の調査を纏めるらしい。

俺たちは、第50層転移門前のベンチに座り、空を見ていた。

「俺が突き止める。とは言ったものの、糸口が全く見当たらない……。調子乗りすぎたかな」

唯一のヒントは、ヒースクリフが言っていた、『圏内殺人を追いかけるなら、目と耳、己の脳がダイレクトに受け取ったデータを信じるこ』とだけだ。

俺が目で見、耳で聞いた事か……。

「う——んっ」

俺は右手を顎に当て、長く唸った。

「もう、一人で考えすぎだよ」

俺を見て、ユウキは苦笑した。

まあ確かに、一人で考えるより、情報を共有して考えた方が効率が良い。

「俺たちが、目で見、耳で聞いたものを考えててな」

俺とユウキは考え込んだ。

「んと、ボクたちが最初に見たのは、カインズさんが亡くなった所からだね。その時カインズさんは、厚いフルプレート・アーマーと、大きなヘルメットを装備してたね。……あれ？ ご飯食べにくいよね？ せつかくの観光地なのに」

ユウキの言う通り、圏内でダメージは発生しないのに、観光地でこの装備は場違いな気もする。

だが、短ショートスピア槍が胸元に刺さったことで《貫通継続ダメージ》が発生し、短ショートスピア槍を掴みながら、己のHPバーを見ながら消滅した。

また、デュエルでないと確証済みであり、新たなユニークスキル使いの犯行ではない。

「となると、システムの抜け道だよな。——なあ、ユウキ。圏内の中で減少する物って、デュエルの決着以外に、何かあったけか？」



「ん——と。 お料理の耐久値かな。 最初の頃は、耐久値をすぐに切らしちゃって、色々大変だったよ」

失敗ばかりしちやってね。 と舌をぺろっと出し付け加えた。

まあ、上手くなった料理を、ほぼ毎日口にしてる俺なんだが。 うん、いつも美味しく頂いてます。

「……耐久値、か。 だがその前に、俺たちは、カインズ氏とヨルコさんのHPが0になった所を見たか？」

「ううん、そこまでは見てないかな。 カインズさんの時は距離があつて確認できなかったし、ヨルコさんの時は事態が急変したから、ボクたちは、そこまで見る余裕はなかったかも……」

俺は、耐久値とHPバーで一つの可能性を考えた。

「もしだぞ。 もし、耐久値を利用して、その隙に、欺瞞やトリックを差し込んだ。 とかありえると思うか？ 鎧とかの類なら、剣が刺さつたまま圏内に入っても、耐久値は削れるんだろ？」

「でもでも、カインズさんとヨルコさんの仮想体アバターが、青いポリゴンの破片になったのを、ボクたちは見たよ」

そこで俺は、転移結晶の残滓と、ランがラーメン屋で落としたコップの残滓が同じようだと、遅まきながら気づいた。

「……そうか。 カインズ氏は、あの砕けた鎧と同時に、転移結晶を使用したんだ。 カインズ氏が見てたのはHPバーじゃなくて、やっぱり、鎧の耐久値だったんだ」

「てことは、カインズさんは、圏外で短ショットスピア槍を鎧の胸元に刺してから、回廊結晶を使用し教会の二階に上がり、自身の首にロープかけ窓から跳び下り、鎧の破壊と同時に転移結晶を使ってどこかの街に転移した？」

「おそらく、それで正解だと思う。 最後の眩きは、転移コマンド、だったんだらうな」

ユウキは首を傾げた。

「——じゃあ、ヨルコさんは？」

「あれも同じ要領だ。 まず、ヨルコさんは、俺たちのメッセージを確認してから圏外に出て、わざと背中に投げ短剣スローイングダガーを刺したんだ。 圏内

に入る時、ローブなどで背中を隠せば見える事はないだろ。そんなで、急いで宿屋に戻ったヨルコさんは厚着をして投げ短剣を隠したんだ。タイミングを見計らってから窓側に移動し、壁を蹴ったりし効果音を立てて、投げ短剣スロウダガーが刺さったように見せかける為にな。んで、転移コマンドを聞かれない為に、俺たちの意識をローブの奴に向けたんだよ。そいつが、ヨルコさんを殺害したように」

「あ、そうか。それなら、ローブの中の人は——」

「おそらく、カインズだろうな」

その時、アスナからメッセージが送られてきた。

メインメニュー・ウインドウを開いてから、メッセージを確認する。内容はこうだった。

『キリト君。ランさんと調査を纏めていたら、重大な事が分かったわ』

メッセージを見ている俺たちは首を傾げた。

はて、重大な事とは、何ぞや？

『私たち、昨夜確認しに行った《黒鉄宮》の《生命の碑》には、カインズさんの名前に横線が入っていたでしょ。でも違ったの。カインズさんは生きてるわ。碑に横線が入っていた名前がK、a、i、n、sだったけど、シユミットさんに書いてもらった黄金林檎のメンバーの一覧表を見ると、カインズさんの本当の綴りは《C a y n z》なのよ。おそらく、ヨルコさんがKの綴りを、わざと教えたのね。Cと誤認させるためにね。つまり、Kのカインズさんは、去年の四月二十二日、18時27分に亡くなっていたのよ。これに気付いた時、思わず二人で叫んじゃったわ』

このメッセージを読み終えた俺たちは、深く息を吐いた。

「なるほどな。ヨルコさんとカインズ氏は、かなり早い段階で、同じカインズと読める見知らぬ誰かが、四月に死亡してるのを発見したのか。この偶然を使い、カインズ氏の死亡を偽装出来るのではないかと思いつき、圈内殺人という演出をつけたと」

「つまり、こう言うことだね。《指輪事件》の犯人を追い詰め、炙り出すこと。ヨルコさんとカインズさんは自らの殺人を演出し、《幻



の事件に終止符を打つはずだ。

ともあれ、圈内事件がこうして解決しようとしてたんだが、——俺は胸の何処かに、極小さな棘が引つ掛かったような違和感を覚えた。まだ何か考えるべき事はあるが、何を考えればいいか分からない。そんなもどかしさだ。

そう思った俺は、無意識に前に座るユウキに話しかけていた。

「なあ、ユウキ。お前って、結婚した事あるか？」

「……キリト。幼馴染でも、聞いていい事と悪い事があるよ」

この瞬間、絶対零度の視線が俺を射たのだ。

座ったままだが、右手で剣の柄を握っていた。いつでも放剣できる状態である。

俺は慌てて両手を前に突き出し、振ったのだった。

「う、うそ、なし、今のなしなし!!」

ユウキは柄から手を離し、溜息を吐きながら、

「……もう、結婚は女の子にとって、重要なイベントなんだよ」

「そ、そんなもんか。男の俺には全然分からんな」

「ボクたちには、まだ早い話かもね。結婚は」

「は、はあ、結婚ね……。てか、俺って結婚できんのかな。一生独り身って感じがするんだが」

まあ、元ボツチの俺には、ありえる未来だが。ともあれ、

「SAOで結婚すると、言い方は悪いが、特典みたいな物があるのか？」

「そうだね。SAOで結婚したら、ストレージが共有化されるよ」

「ストレージ……共有化……」

これが棘の正体のようなのだ。

この結婚のシステムに、俺はこんなにも引つ掛かっていたのだ。「じゃ、じゃあさ……離婚した時、ストレージはどうなるんだ？」

ユウキは、目を瞬いた。

「うーん。常識的に考えて、残った人の物じゃないかな……——あ！」

「俺もそれと同意見だ。……つまり、ギルド黄金林檎リーダー・グリセルダさんが何者かに殺害された瞬間、彼女のストレージに格納されていた指輪は、自動的にグリムリックの物になったんだ。……そう、指輪を奪いグリセルダさんを殺害したのは、グリムロックだ」

「で、でもちよつと待つてよ。あの短ショートスピア槍を作製したのはグリムロックさんだよ？ も、もしかして、今回の計画を利用して……」  
ユウキに戸惑いの色が見え、徐々に戦慄していく。

「もし、ヨルコさんたちが、この計画をグリムロックに話していたら、グリムロックはこの計画を使つて、ヨルコさん、カインズ氏、シユミット。最後に三人が集まる所を狙うはずだ——」

ユウキの顔から、血の気が引いていく。彼女には、俺の言葉の続きが即座に理解できたんだろう。

俺とユウキは立ち上がり、店を飛び出した。

何事だ!?と此方を見る客もいたが、そんなものにも目もくれず疾駆した。

◆◆◆◆◆

「ユウキ！ ヨルコさんたちは、第19層《ラーベルグ》から移動してないよな!? いや、ちよと待て。主街区から少し離れた場所つて、圏外じゃないよな!」

俺は転移前広場に駆けながら、ユウキに聞く。

「た、大変だよ、キリト。ヨルコさんが今いる場所はフィールドだよ」

まじかよ！ 最悪じゃなか!と叫びたくなるが、そんな余裕はない。

俺は並走するユウキに言う。

「もしかしたら、殺人者レドが出る可能性が高い。ユウキ、お前は待つてるんだ。危険すぎる」

「嫌！ それに、アスナと姉ちゃんも、最後までこの件には関わるつて言つてたよ!」

きつと女性陣は、俺が何を言つても身を引かないだろう。

……まったく、頑固なお嬢様たちだ。

転移門前に到着した所で、俺は口を開く。

「はあ、わかった。俺から離れるな。これが条件だ。あと、閃光

様たちに連絡を取ってくれ。間に合わなくてもいい」

「きつと、姉ちゃんたちは間に合うよ」

「まったく、お前らは。——いくぞ」

「ん、りようかい」

俺とユウキは、転移ポータルに飛び込み言葉を発した。

「転移、《ラーベルグ》！」

俺たちを、淡い光が包み込んだ――。

## 第20話《笑う棺桶》

俺たちは、第19層《ラーベルグ》の転移門前に降り立った。

俺は目的地とは逆の方向へ続く脇道を通り、ある場所へ向かった。アインクラッドには、所有アイテムとしての騎乗動物マウントは存在しないが、一部街や村には、NPCが経営する厩舎があり、其処で騎乗用の馬や、荷物を運ぶ牛を借りる事が出来る。だが、乗りこなす為には高度なテクニクが要求され、貸出の料金も高い為、まず使用するプレイヤーはいないだろう。まあ、俺は不真面目な攻略組生徒なので例外だが。

「ユウキ、乗れ。練習の成果を見せてやる」

俺は厩舎の中にいる一頭の馬の背に乗り、片手を差し出す。

「も、もう。またボクの知らない所で練習してたの？ お金の無駄遣いだよ」

「い、今は急がないと」

ユウキは俺の差し出した手を握り、後方へ飛び乗る。

手綱を握ると馬は一鳴きし、門を飛び出し疾駆した。腰に手を回したユウキから声が届く。 腰に手を回

「キリト。あとでお話しようね」

「お、おう。わ、分かった」

おそらく俺は、金銭関係のお叱りを受けるだろう。……まああれだ。 自業自得だ。

ユウキは、フレンド追跡でヨルコさんの跡を辿る。

「キリト。そのまま真っ直ぐ」

「おうー！」

闇夜に溶けるように、漆黒の馬が疾駆する。

「ユウキ、アスナたちからは返信があつたか？」

「う、うん。 さつき届いた。『絶対に間に合わせる』だって」

流石、頼りになる副团长様たちだ。

その時、索敵にかかるプレイヤーを感知した。 カラー・カーソルは、オレンジが三つとグリーンが三つだ。

おそらく、グリーンの光点はヨルコたちで、レッドはグリムロックが依頼した殺人者たちだ。

俺たちの予想通り、ヨルコたちを殺害し、《指輪事件》を闇に葬り去ろうとしたのだ。

索敵が補正され、殺人者の姿が露わになってくる。

「……選りにも選って、《笑う棺桶》かよ」

「……ボクも確認したよ。あれは、《笑う棺桶》の幹部たちだよ」  
殺人ギルド《笑う棺桶》。

アインクラッドでの消滅が、現実の死と直結するSAOにおいて、PKを行う快樂殺人集団。

《笑う棺桶》が結成されたのは、SAOが開始されてから一年後。それまでは、ソロ、あるいは少数数のプレイヤーを大人数で取り囲み、コルやアイテムを強奪するだけだった犯罪者プレイヤーの一部が、より過激な思想のもとに先鋭化した集団。

——その思想とは《デスゲームならば殺して当然》。

日本では許されない《合法的殺人》が、この世界でなら可能になる。何故なら、あらゆるプレイヤーの体は、現実世界で完全ダイブ中である為、無意識状態であり、本人の意思では指一本動かせないからだ。プレイヤーを殺すのは、ナーヴギアを設計、開発した《茅場晶彦》であり自分達では無い。

『ならば殺そう。ゲームを愉しもう。それは、全プレイヤーに与えられた権利なのだから』という劇毒じみたアジテーションによって、オレンジを誘惑、洗脳し、狂的なPKに走らせたのが《笑う棺桶》のリーダー《POH》であった。

状況は最悪だった。此方の人数は二人。《笑う棺桶》の人数は三人。

また、シユミットたちがあの場から動けない為、三人を人質に取った、ということにもなる。

《笑う棺桶》を退かせるには、殺す覚悟で臨まなければならない。果たして、其れが俺に出来るだろうか？

その時、ユウキの両手に、力が優しく込められた。



「大丈夫。ボクが傍にいるから」

「……そうだな。俺たちはいつも一緒だ」

俺は覚悟を決めた。

——殺すつもりで、あの場に飛び込む覚悟を。

おそらく、副団長様たちも、最悪を見越して覚悟を決めてくるだろう。左手で手綱を握り右手でアイテムストレージを開くと、耐毒ポーション  
POTを実体化させ口に含んだ。

徐々に距離が縮み、頂上の丘に近づく。《笑う棺桶》ラフィン・コライたちの視線も、俺たちに向けられてる。もう、後戻りは出来ない。

距離が縮まり、状況を把握する事が出来た。

麻痺状態で倒れるシュミット。顔を蒼白にして立ち尽くすヨルコとカインズ。其れを威嚇する、ずだぶくろ頭陀袋を思わせる黒いマスクで顔を覆っている毒ナイフ使い《ジョニー・ブラック》。

その隣に、顔に髑髏マスクをつけ、赤く目を光らせる針剣使いエストツク《赤目のザザ》。

そして、膝上までを包む、艶消しのポンチョ。目深に伏せられたフード。

中華包丁のように四角く、血のように赤黒い刃を持つ、肉厚の大型ダガーを扱う人物。

——《POH》。

馬がゆっくり減速し、やがて止まると、俺から順に馬から飛び下り地に着地する。

「シュミットさんよ。タクシー代はDDAの経費にしてくれよな」

俺は握っていた手綱を引き、馬に尻を向けさせ、その尻を叩き、レインタルを解除した。

俺の隣に、相棒のユウキが立つ。

「よう、POH。まだその趣味悪い格好してんのか」

「……貴様に言われたくないな。《鬼神》キリトよ」

POHの声は、隠しきれない殺意が含まれていた。

だが俺は、この状況にも関わらず肩を落とした。

ユウキが、俺の肩を優しく叩きながら、

「まあまあ、ボクもそこに入ってるんだから、気にしない気にしない」  
緊張感のない声で、ユウキが言う。

俺は頷き、

「お、おう。 そうだな」

直後、大きく一步踏み出したジョニー・ブラックが、上擦った声で叫んだ。

「ソの野郎……！ 余裕かましてんじゃねーぞ！ 状況解ってるのか！」

毒ナイフを振り回し喚くジョニー・ブラックの肩を、POHは、空いている方の手で叩いて窘めた。

「こいつの言う通りだぜ。 お前たちだけで、オレたち三人を相手にできると思ってるのか？」

「ま、無理だな。 でも耐毒<sup>ポーション</sup>POT飲んでるし、回復結晶ありっただけ持ってきたから、ユウキと合わせれば二十分は耐えられるよ。 それだけあれば、援軍が駆けつけるには充分だ」

直後、POHは目を細め、ジョニー・ブラックと赤目のザザは不安そうに周囲を見渡した。

POHは、ふっ、と笑い、

「嘘だな。 オレを騙すなら、もっと上手いブラフをかますんだったな」

俺は大きく溜息を吐いた。

「いやいや、耐毒<sup>ポーション</sup>POTは飲んでるし、援軍は呼んであるから」

「そうだね。 君たちがよく知ってる人だよ。 ボクたちと同格の存在って言うておくよ」

「が、二人だな。 其れまで俺たちが耐えれば、お前たちの負けだ。 ま、潔く牢獄に入るんだな」

POHがフードの奥で、軽く舌打ちしたのが聞こえた。

おそらく、《二人》が誰なのか分かったのだろう。

「……………Suck」

短く罵り声を上げたPOHが、右足を引いた。

左手の指を鳴らすと、ジョニー・ブラックと赤目のザザが数メートル

ル退く。

PoHは、《メイト・チョッパー友切包丁》を携えた手を上げ、真っ直ぐ俺たちを指し低く吐き捨てた。

「お前は、絶対に絶剣の嬢ちゃんの前で殺してやる……」

「できるならやってみろよ。無理だと思いがな」

PoHは、ジョニー・ブラック、赤目のザザを連れ丘を下りて行く。

そのまま、闇の中に溶け込み姿を消した。

これを確認した俺は、安堵の息を吐く。

「つ、疲れた。精神的に」

「ん、凄い緊張感だったからね」

その時だった。一通のメッセージが届いたのだ。差出人は、ラ

ンだ。

『現在、例の人物を連れて、アスナさんと共に向かっています。数分で到着しますから』だそうだ。

俺は、倒れてるシユミットの所で歩み寄り、ポーチから解毒POTポーションを取り出し、震えるシユミットの左手に手渡した。

「解毒POTだ」

「あ、ああ……すまない」

シユミットは、震える手で解毒POTポーションを持ち、口に含んでいた。

それを見届けてから、視線を少し離れた二人に移す。

「また会えて嬉しいよ、ヨルコさん。……初めましてと言うべきかな、カインズさん」

カインズは苦笑した。

「全部終わったら、きちんとお詫びに何うつもりだったんです……と言っても、信じてもらえないでしょうけれど」

「信じるかどうかは、奢ってもらおうメシの味によるな。言っとくけど、怪しいラーメンとか、謎のお好み焼きは無しだからな」

此れを聞いたユウキが、何かを思い出したような顔をした。

「そう言えば、キリトから何でも奢ってもらえる約束をしてたんだっけ。あの時、ジャンケンで勝ったしね」

「あれ、そうだったっけ？ 身に覚えがないぞ」

ユウキを見ながら、俺はポーカーフェイスでしらを切って見た。

——だが、

「キリトが嘘をつく時、右眉が若干吊り上がる癖があるんだよ」

「え、まじで？ そうなの？」

「冗談だけど」

「つて、おい」

俺とユウキは、いつもの平常運転に戻っていた

てか、緊張感解きすぎじゃね。俺たち。

俺は視線に気づき、ヨルコたちに顔を向ける。

「あ、すまない。話の途中だったな」

「い、いえ。お二人は仲が良いんですね」

「コイツとは、第一層からの付き合いだしな」

「そうだね。もう、一年も経つんだね」

微笑みながら、ユウキは頷いてくれる。

……あれ、話が盛大に逸れてるような。

その時、鎧を鳴らして上体を起こしたシュミットが聞いてくる。

「キリト、ユウキさん。助けてくれてた礼は言うが……。なんで

分かったんだ。あの三人がここを襲ってくるのが」

「分かったわけじゃない。あり得ると推測したんだ。相手がP O

Hだと最初から知ってたら、ビビって逃げたかもな。……カインズさ

ん、ヨルコさん。あんたたちは、あの二つの武器……短ショートスピア槍と

投げ短剣を、どうやって入手したんだ？」

俺の質問に、カインズとヨルコが目を交わしてから、

「……《圈内PKを偽装する》という私たちの計画には、継続ダメージ

に特化した貫通属性武器がどうしても必要でした。色々な武器屋

さんを見て回ったんですけど、そんな特殊な武器を販売してる所は見

当たらなくて……。鍛冶屋さんにオーダーすれば、武器に銘が残つ

てしまいます。その人に聞けば、オーダーしたのが、被害者である

私たちであることが分かっています」

「だから、僕たちやむなく、ギルド解散以来初めてあの人に……りー

ダーの旦那さんだったグリムロツクさんに連絡を取ったんです。

僕たちの計画を説明して、必要な武器を作ってもらおう為に。居場所は分かりませんでした。フレンド登録は残っていたので……。グリムロックさんは、最初は気が進まないようでした。返ってきたメッセージには、もう彼女を安らかに眠らせてあげたいって書いてありました。でも、僕らが一生懸命頼んだら、あの二つの武器を作ってくれたんです」

この台詞から、ヨルコとカインズは、グリムロックの事を、奥さんを殺された被害者だと信じている。

だが俺は、二人に衝撃を与えるであろう言葉を言う。

「……残念だけど、グリムロックが、あんたたちの計画に反対したのは、グリセルダさんの為じゃないよ。《圈内PK》なんていう派手な事件を演出し、大勢の注目を集めれば、いずれ誰かが気付いてしまうと思っただんだ。結婚によるストレージ共通化が、離婚でなく死別で解消されたとき……その中のアイテムがどうなるか」

「えっ……？」

意味が解らない、というようにヨルコたちが首を傾げた。

無理もない、アインクラッドではいくら仲が良くても、結婚まで行うプレイヤーはごく稀だ。

また、アインクラッドでの結婚はお互いを信頼し、信じ合わなければできないことだ。

この中で離婚する者たちはもつと少ないだろうし、その理由が死別となれば尚更だ。

俺たちもこの結論に至るまで、グリセルダさんが殺害された時、指輪は殺人者の懐にドロップしたのだろうと信じて疑わなかったのだ。「よく聞いてね。……グリセルダさんのストレージは、同時にグリムロックさんの物であったんだよ。だから、グリセルダさんが殺害されても、指輪は奪えなかった。グリセルダさんが亡くなった瞬間に、グリムロックさんの元に転送されちゃうから」

ユウキの言葉を、俺が引き継ぐ。

「シユミット……あんたは、計画の片棒を担いだ報酬を受け取ったんだろ？」

俺の質問に、シユミットは胡坐をかいたまま頷いた。

「そんな大金を用意する為には、指輪を今度こそ売却しなきゃならなかったはずだ。それが出来るのは、指輪を手に入れたグリムロックだけだし、彼はまた、シユミットが計画の共犯者だと知っていた。それはつまり……」

「グリムロックが……？ あいつが、メモの差出人……そして、グリセルダを圏外に運び出して殺した実行犯だったのか……？」

ひび割れた声でシユミットが呻いた。

「いや、直接は手を汚していないだろう。宿屋で寝てるグリセルダさんをポータルで圏外に運び出す時に、目を覚ましてしまうリスクがあるからな。その時顔を見られたら取り繕えない。おそらく、汚れ仕事は殺人者<sup>レド</sup>に依頼したんだ」

シユミットは何も言おうとせず、ただ空を見上げていた。

それ様子は、ヨルコとカインズにも同様に見て取れた。数秒後、

ヨルコが小さく頭を振った。

「そんな……嘘です。そんなことが！ あの二人はいつも一緒でした……グリムロックさんは、いつだってリーダーの後ろでニコニコしてて……それに、そうです。あの人が真犯人だって言うなら、何で私たちの計画に協力してくれたんですか!? あの人が武器を作ってくれなければ、私たちは何も出来ませんでした。《指輪事件》も掘り返される事もなかったはずです。違いますか?」

ユウキが口を開く。

「でも、ヨルコさん。グリムロックさんに、計画を全て説明したんだよね?」

ヨルコは口を噤んでから、小さく頷いた。

「グリムロックさんは、計画が成功したら、最後にどうなるか知っていたんだ。罪悪感に駆られたシユミットさんが、グリセルダさんのお墓で懺悔し、そこで死者に扮したヨルコさんとカインズさんが更に問い詰める所までね。つまり、《指輪事件》に関わった三人を一斉に殺害して、《指輪事件》を永久に闇に葬ることが可能なんだ」

「……そうか。だから……だから、あの三人が……」

虚ろな表情でシユミットが呟いた。

「その通りだ。《ラフィン・コライン笑う棺桶》のトップスリーが突然現れたのは、グリムロックが情報を流したからだ。この場所にDDAの幹部が、しかも、仲間なしで来てるってな。おそらく、グリセルダさん殺害実行を依頼した時から、パイプがあつたんだらうな……」

「……………そんな……………」

膝から崩れ落ちそうになったヨルコを、カインズが右手で支えた。

その顔は、月明かりの下で蒼白になっていた。

カインズの肩に掴まったまま、ヨルコが呟く。

「グリムロックさんが……私たちを殺そうと……？　でも……何で

……？　そもそも……何で結婚相手を殺してまで……指輪を奪わな

きやならなかつたんですか……？」

「俺たちにも、動機までは推測できない。でも、《指輪事件》の時、アリバイ確保の為にギルド拠点から出なかつただらう彼も、今回ばかりは見届けずにはいられなかつた。三人が殺害され、二つの事件が完全に葬られるのをね。だから……詳しい事は、本人から聞こうか」

丁度その時、丘の斜面を登ってくる三つの足音が、俺の耳に届いたのだった――。

## 第21話《二人の想いと事件解決》

まず目に入ったのは、夜闇でも鮮やかに浮き上がる白と赤の騎士服——《閃光》のアスナだ。

次に目には入ったのは、青を基調にした服を身に纏う《剣舞姫》のラン。

二人の右手に握られているのは、白銀の刃を持つ細剣と片手剣だ。その鋭い切っ先と、持ち主の剣呑な眼光に追い立てられるように、一人の男が歩いていった。

かなりの長身だ。裾の長い、ゆったりとした前合わせの革製の服を着込み、つばの長い帽子を被っている。

陰に沈む顔のなかで、時折月光を反射して光るのは眼鏡だろうか。鍛冶屋というよりも、香港映画に出てくる兇手ヒットマンを思わせる雰囲気だ。

銀縁の丸眼鏡の下にあったのは、どちらかと言えば、柔和な印象の顔だった。細面で、垂れ気味の目尻は優しげだ。だが、レンズの奥のやや小さめの黒目には、俺に警戒心を強く呼び起こす何か、確かにあった。

グリムロックは三メートル程離れた位置で止まり、シュミット、ヨルコとカインズ、最後に苔むした墓標——グリセルダさんのお墓を見て口を開いた。

「やあ……久しぶりだね、皆」

低く落ち着いた声に、ヨルコが応じた。

「グリムロック……さん。……あなたは……あなたは、本当に……」  
ヨルコが彼に聞きたい事は、何故グリセルダさんを殺して指輪を奪ったのか。その事件を隠蔽する為に、何故この場の三人を殺そうとしたのか。ということだろう。

だが、ヨルコの問いに、グリムロックはすぐに答えなかった。

背後で、ラン、アスナが得物を鞘に収め、俺たちの隣に移動するのを見てから、微笑を浮かべたまま口を開く。

「……誤解だ。

私はただ、事の顛末てんまつを見届ける責任があると思って



この場所に向かっていたただけだよ。其処の怖いお姉さん達の脅迫に素直に従ったのも、誤解を正したかったからだ」

確かに、POHに情報を流した証拠はないが、指輪事件の方はシステマ的に言い逃れが出来ないはずなんだが。

まあ、隠蔽スキルで隠れてたのは、俺たちに看破されてただけだよ。「嘘だわ！」

鋭く言葉を口にしたのは、アスナだった。

「あなた、プッシュの中で隠蔽してたじゃない。私たちに看破されなければ、動く気もなかったはずよ」

「仕方ないでしょう、私はしながない鍛冶屋だよ。この通り丸腰なのに、あの恐ろしいオレンジたちの前に飛び出して行けなかったからと言って、何故、責められなければならないのかな？」

穏やかに言い返し、グリムロックは両手を広げた。

何て苦し紛れな言い訳なのだろうか。と思いつつ、俺は口を開く。

「初めまして、グリムロックさん。俺はキリトっていう……まあ、部外者だけど。確かに、あんたがこの場所に居た事と、《ラフィン・コフィン笑う棺桶》襲撃を結びつける材料は何もない。奴らに聞いても、証言してくれるわけないしな」

まあ、グリムロックにメニュー・ウインドウを可視化して貰い、メツセージ送信欄を確認すれば、《ラフィン・コフィン笑う棺桶》暗殺依頼窓になっているはずなのだが。

だが、シユミット殺害未遂は兎も角、此方を言い逃れする術はない。「だが、ギルド《黄金林檎》解散の原因になった指輪事件……此れには必ずあんたが関わってる。いや、主導してる。何故なら、グリセルダさんを殺したのが誰であれ、指輪は彼女とストレージを共有していたあんたの手元に残ったはずだからだ。あんたは、その事実を明らかにせず、指輪を密かに換金して、半額をシユミットに渡した。

此れは、犯人にしか取り得ない行動だ。故に、あんたが今回の《圈内事件》に関わった動機もただ一つ……関係者の口封じをし、過去を闇に葬る事だ。違うか？」

グリムロックの口許が奇妙に歪み、僅かに声を低くした。

「なるほど、面白い推理だね、探偵君……でも、残念ながら、一つだけ穴がある。確かに、当時の私とグリセルダのストレージは共有化されていた。だから、彼女が殺された時、ストレージに格納されていた全アイテムは私の手元に残った……という推理は正しい。だが、あの指輪がストレージに格納されていなかったとしたら？　つまり、オブジェクト化され、グリセルダの指に装備されてたとしたら……？」

「「あつ……」」

この返答に、女性陣は声を洩らした。

確かに奴の言う通り、そのケースはまったく考えていなかった。

もし、グリセルダさんが殺害された時に指輪を装備していれば、指輪は殺人者の前にドロップする。其れならば、グリムロックのストレージに転送されずに殺人者の手に落ちた、という理論が成り立つ。「……グリセルダはスピードタイプの剣士だった。あの指輪から与えられた凄まじい敏捷力補正を、売却する前に少しでも体感してみたくなくても、不思議はないだろう。いいかな？　彼女が殺害された時、確かに彼女との共有ストレージに格納された全アイテムは、私の元に残った。しかし其処に、あの指輪は存在しなかった。そういうことだ、探偵君」

口を閉じた俺たちを見ながら、グリムロックは一礼した。

「では、私はこれで失礼させてもらう。グリセルダ殺害の首謀者が見つからなかったのは残念だが、シュミットの懺悔だけでも、彼女の魂を安らげてくれるだろう」

身を翻したグリムロックに、ヨルコの鋭い声が投げかけられた。

「待ってください……。いえ、待ちなさい、グリムロック」

ピタリと足を止め、顔を少しだけ此方に向ける。

「まだ何かあるのかな？　無根拠かつ感情的な糾弾なら遠慮してくれないか。私にとっても、此処は神聖な場所なのだから」

そう言ったグリムロックに向かって、ヨルコは一步前に踏み出した。

「グリムロック、あなたこう言ったわね。リーダーは問題の指輪を装備してた。だから転送されずに殺人者に奪われた。でもね……それは有り得ないのよ」  
「……ほう、どんな根拠で」

向き直ったグリムロックに、ヨルコは苛烈な言葉を浴びせる。

「ドロップしたあの指輪をどうするか？ ギルド全員で会議した時の事、あなたも覚えていてるでしょう？ 私、カインズ、シュミットは、ギルドの戦力にする方がいいと言って、売却に反対したわ。あの席上でカインズが、本当は自分が装備したかったはずなのに、リーダーを立ててこう言った。——《黄金林檎》で一番強い剣士はリーダーだ。だから、リーダーが装備すればいい」

ヨルコの隣で、シュミットがバツの悪そうな表情を浮かべた。

だが、其れを気にせず、ヨルコは話を続ける。

「それに対して、リーダーが何て答えたか、今でも一字一句思い出せるわ。あの人は、笑いながらこう言ったのよ。——SAOでは、指輪アイテムは片手に一つずつしか装備できない。右手はギルドリーダーの印章。そして……左手は結婚指輪で外せないから、私には使えないって。いい？ あの人は、其のどちらかを解除して、レア指輪のボーナスを試してみるなんて事、するはずないのよ！」

鋭い声が響いた途端、此処にいる全員が息を呑んだ。

確かに、メニュー・ウインドウの装備フィギュアに設定されてる指輪スロットは、右手と左手に一つずつだ。

両手が埋まっていれば、新たな指輪を装備する事は不可能だ。

だが、この証言では決め手に欠ける為、——弱い。

「何を言うかと思えば、《するはずがない》？ それを言うならば、まづこう言ってもらえないかな？——グリセルダと結婚してた私が、彼女を殺すはずがない、と。君の言ってることは、根拠なき糾弾そのものだ」

「いいえ。違うわ。根拠はある。……リーダーを殺した実行犯は、殺人現場となったフィールドに、無価値と判断した指輪をそのまま放置して行った。それを発見したプレイヤーが幸いにリー

ダーの名前を知ってて、遺品をギルドホームに届けてくれた。だから私は、……この墓標をリーダーのお墓にすると決めた時、彼女が使用していた剣を根元に置いて、耐久度が減少して消滅するに任せた。でもね……でも、それだけじゃないのよ。皆には言わなかったけど……私は、遺品をもう一つだけ、ここに埋めたの」

ヨルコは振り向き、墓標の裏に跪くと、素手で土を掻き始めた。やがて立ち上がったヨルコは、右手に載った物を差し出した。其れは、月光を受けて銀色に輝く小さな箱だった。

その箱は、マスタークラスの細工師だけが作成できる《耐久度無限》の保存箱。大型のアイテムは収納不可能だが、アクセサリの類なら、幾つか収納が可能だ。其れをフィールドに放置しようとも、耐久度が消滅する事はない。

ヨルコは左手を伸ばし、小箱を開けた。

白い絹布の上に鎮座するのは、二つの指輪。平らになっている天頂部に、林檎の彫刻が施されている。

それを、ヨルコが取り上げた。

「これは、リーダーがいつも右手の中指に装備してた、《黄金林檎》の印章。同じ物を私も持つてるから、比べればすぐに分かるわ」

それを戻し、次にもう一方——黄金に煌く細身の指輪を取り出す。

「そしてこれは——彼女がいつだって左手薬指に嵌めていた、あなたとの結婚指輪よ、グリムロック！ 内側に、あなたの名前もしっかりと刻まれてるわ……この二つの指輪がここにあるということは、リーダーは、圏外に引き出され殺されたその瞬間、両手にこれらを装備していたという揺るぎない証よ！ 違う!? 違うというなら、反論してみせなさいよ！」

語尾は、涙混じりの絶叫だった。

暫くは、誰も口を開こうとはしなかった。ただ、ヨルコとグリムロック。対峙する二人を見守り続けた。

グリムロックは口許を歪ませたまま、凍りついていた。

「その指輪……。確か葬儀の日、君は聞いたね、ヨルコ。グリセルダの結婚指輪を持っていたか、と。そして私は、剣と同じく消える

に任せてくれと答えた。あの時……欲しいと言ってさえいれば……」

俯き、帽子の広い鍔に顔を隠したグリムロックは、糸が切れたように、その場で両膝を突いた。

ヨルコは指輪を箱に戻すと、蓋を閉め、其れを胸に抱き寄せた。

「……なんで……なんでなの、グルムロック。なんでリーダーを……グリセルダさんを殺してまで、指輪を奪ってお金にする必要があったの」

「……………金？ 金だつて？」

膝立ちのまま、グリムロックが掠れた声で笑う。

左手を振り、メニユー・ウインドウを呼び出しオブジェクト化させたのは、やや大きめの革袋だった。持ち上げた革袋を、グリムロックは地面に放った。重い響きに、澄んだ金属音が重なる。

「これは、あの指輪を処分した金の半分だ。金貨一枚も減っちゃいない。そう、金の為ではない。私は……私はどうしても彼女を殺さねばならなかった。彼女が、まだ私の妻でいる間に」

グリムロックは、グリセルダさんの墓標を見ながら言葉を続ける。「グリセルダ。グリムロック。頭が同じなのは偶然ではない。

私と彼女は、SAO以前にプレイしたMMOでも常に同じ名前を使用していた。システムの可能ならば、必ず夫婦だった。何故なら……何故なら彼女は、現実世界でも私の妻だったからだ」

ここに居るメンバーは驚愕した。当然だ、現実世界で妻であった彼女を殺害したのだから。

「私にとっては、一切の不満のない理想的な妻だった。夫唱婦随ふしょうふずいという言葉は彼女のためにあったとすら思えるほど、可愛らしく、従順じゆっじゆんで、ただ一度の夫婦喧嘩すらもしたことがなかった。だが

……共にこの世界に囚われたのち……彼女は変わってしまった……。強要されたデスゲームに怯え、怖れ、竦んだのは私だけだった。

戦闘能力に於いても、状況判断に於いてもグリセルダ……。いや、《ユウコ》は大きく私を上回っていた。やがて彼女は、私の反対を押し切ってギルドを結成し、鍛え始めた。彼女は……現実世界にいた

よりも、遥かに生き生きとし……充実した様子で……。その様子を傍で見ながら、私は認めざるを得なかった。私の愛した《ユウコ》は消えてしまったんだと……。ゲームがクリアされ現実世界に戻れても、私の愛した《ユウコ》は永遠に戻ってこないのだと、ね」

前合わせの長衣ながぎぬの肩が小刻みに震える。グリムロックは、囁くように言葉を続ける。

「……ならば……。ならばいつそ、私が彼女の夫でいる間に、合法的殺人が可能なのこの世界にいる間に。ユウコを、永遠の思い出の中に封じてしまいたいと願った私を……。誰が責められるだろう?」

「……奥さんが言う事を聞かなくなったから……。自身の思惑通りに動かなくなったから……。そんな理由で、あんたは殺したのか? S AOから解放を願ってる人の為、自身を、仲間を鍛えて……。ゲームクリアを目指そうとした彼女を……。あんたは……。そんな理由で……」

背中に装備した剣の柄を右手で握ったが、抜剣される事はなかった。

「……ここでこの人を斬っても何の解決にもならないよ……」

そう。ユウキが、俺の右手を優しく包んでくれたからだ。

グリムロックは眼鏡の下端だけわずかに光らせ、俺に囁きかけた。

「そんな理由? 充分すぎる理由だ。君達もいつか解る。愛情を手に入れ、それが失われようとした時にね」

「……ふざけんな。そんな理由で、奥さんを殺していいわけがないだろうが」

俺は、感情を込めた声で言う。

「言ったはずだ。愛が失われようとしたその時に、君にも解ると」

グリムロックの視線が、ユウキに向けられた。

「そうだね。その中でも、君の剣を止めてるお嬢さんからの愛情、とかね」

「もし、彼女から愛情が注がれなくなっても、俺はお前のようににはならない」

「では、君は彼女の事を何とも思っていないかのね?」

「いつも一緒にいる女の子だ。好きに決まってるだろうが。彼女

に嫌われたから、彼女を殺すなんてありえないんだよ」

グリムロックは、不敵に笑うだけだ。

「本当の愛ではないから、君はそんな事が言えるんだよ」

「本当の愛なら、二人で大きくするもんじゃねえのかよ。俺だったらそうするはずだ。それ以前に、お前の感情は、愛じゃなくて独占欲だろうが！じゃあ聞くが、お前のその左手の革手袋を脱いでみろよ。もし、彼女を今でも愛してるなら、結婚指輪を嵌めていて当然だ。早く見せてくれ」

グリムロックの肩が小さく震え、右手が左手を掴んだ。

しかし、それ以上は動かず、グリムロックは黙ったまま革手袋を外そうとはしなかった。

鎧を鳴らして立ち上がり、シュミットは俺たち四人を見回した。

「皆さん。この男の処遇は、俺たち任せてくれないか？」

その落ち着いた声に、数分前までの怯え切った響きはなかった。

俺たち四人は頷いた。

「そうか、解った」

「殺したらダメだからね」

「ちゃんと罪を償わせなさい」

「あと、そうですね。この事件の詳細は、上には伝えないので安心してください。私たちの胸の中に留めて於きます」

「すまないな」

シュミットは、グリムロックの右腕を掴み立たせ、項垂れるグリムロックの右腕を自身の肩に回して丘から下りていく。

その後に、ヨルコ、カインズと続いた。

俺たちの隣で深く一礼すると、ヨルコが口を開いた。

「皆さん。本当に、なんてお詫びしていいか……。あなた方が駆けつけてくれなければ、私たちは殺されていたでしょうし、グリムロックの犯罪を暴く事もできませんでした。本当にありがとうございました」

ヨルコはもう一度俺たちに頭を下げ、横を通りすぎて行った。

俺たちは、その場に立ったまま、ヨルコたちの背中が見えなくなる

まで見送り続けた。

アスナとランが頷き、

「じゃあ、キリト君、ユウキちゃん。私とランさんは、先に街に戻るわ」

「二人には、話さないといけない事があると思いますから」

そう言つて、二人は踵を返し、丘から下りて行つた。

この時俺は、羞恥にかられていた。先程の自身の言葉を思い出したのだ。

あれはその場の勢いとはいえ、公開告白だ。

不意に、ユウキが話しかけてきた。

「キリト」

「ひゃ、ひゃい」

声が裏返つてしまうとは、我ながら情けない……。

「ボクのが好きって、本当？」

「あ、ああ。好きだよ。お前は、俺にとってかけがえのない大切な人だ」

ユウキも、意を決したように言う。

「ボクもね。 さっきのグリムロックさんの言葉を聞きながら、ボクは、キリトのことどう思ってるんだろうって考えて見たんだ」

この言葉に、俺は息を呑んだ。

「ボクもね。 キリト……ううん、和人のことが大好きだよ」

「ああ、ありがとう。俺も、木綿季のことが大好きだよ」

現実世界の名前で言うのは、ちよつと意外だ。と俺は思った。だが、嫌な気はしなかった。

「これからも一緒に行動しようね。 離れ離れはダメだよ。 今回は気持ちを確認できただけで良しとしよう」

「そうだな。 そうするか」

墓標の傍で薄い金色に輝き、半ば透き通る、一人の女性プレイヤーの姿があった。

彼女の瞳には、このデスゲームを終わらせるといふ強い意思が秘められていた。



「あなたの意思は……俺たちが確かに引き継ぐよ。いつか必ずこのゲームをクリアして、みんなを解放してみせる」

「約束するよ。ボクたちを見守っていてね、グリセルダさん」  
女性剣士の顔は、にっこりと笑みを向けてくれた。

次の瞬間、其処には誰も居なかった。

俺たちは、暫くその場に立ち尽くした。やがて、ユウキが俺の右手をそっと握ってくれた。

「街に帰ろうか、明日から頑張らなくちゃね。グリセルダさんの分まで」

「だな。今週中に、現在の層は突破したいな。てか、徒歩で帰るのか？」

「さ、最後ので台無しだよ」

ユウキは微笑んで言った。

俺は頬を掻きながら、

「悪い悪い、ついな」

「も、もう。バカ」

「あれ、何で怒られたの。理不尽過ぎないか？」

俺たちは丘を下りると、主街区目指して歩き出した――。

## 第22話《リズベット武具店》

今、俺たちが足を運んでいる場所は、第48層にある《リズベット武具店》だ。

何故此処に足を運んでいるかというところ、あのスキルの修行も終わったので、この剣と同等な得物を見繕おうと思ったからだ。

最近、Mobの動きも変化ししつつある為、あれと同等な剣が必要になってくるだろう。

スキルの途中で、剣が折れました。とかは洒落にならない。

「でも、鍛冶スキルとか大丈夫か？」

「そこは大丈夫。ボクの《黒紫剣》を打ってくれたのは、リズなんだよ」

ユウキが腰に下げる《黒紫剣》は、エリユシデータに劣らない性能がある。

アスナとランの剣も此処で打った物で、店主とユウキたちは、かなり仲が良いらしい。

——閑話休題。

あの後、俺たちが離れた事は一度もない。

俺は、最後の一瞬まで君と生きる<sup>ユウキ</sup>と決めているのだ。一方的な、俺の片想いなんだが。

「(コイツも、同じ事を考えてくれてたら嬉しいけどな)」

そう考えていたら、目的地に到着した。

巨大な水車がゆるやかに回転する職人クラス用プレイヤーホームだ。軒先には《リズベット武具店》と書いてある大きな看板が掲げられていた。

「(ここか?)」

「(こそ。ここだよ)」

俺の前に立ったユウキが、玄関を開け店内に入っていく。

俺もその後ろに続いた。

店内には様々な武器が陳列されていた。剣に五月蠅い俺の目から見ても、かなりレベルが高い代物だ。

「リズベット武具店へようこそー！ってユウキじゃない」

店主の名前はリズベット。

彼女の恰好は、ひわだいろ檜皮色のパフスリーブの上に、同色のフレアスカート。

その上から純白のエプロンをかけ、胸元には赤いリボン。

特徴的なのは、ピンク色のふわふわしたショートヘアーだ。

「久しぶりだね、リズ」

「そうね。元気だった？ 最近は、あんま見なかったからさ」

ユウキは頷いた。

「元気だったよ。色々あってね」

「そっかー。で、今日はどうしたの？」

「オーダーメイドを頼みたくて。ちなみに、使うのはボクじゃないよ」

ユウキの視線が俺に向く。

『キリトも挨拶をして。』という意味も込められている。

「初めまして、キリトです。今日は剣が欲しくて」

「店主のリズベットよ。リズでいいわ。あと、堅苦しいのはやめて。もっとフランクに接して頂戴」

「おう、了解だ。リズ」

「んー、見た所中層プレイヤーに見えるけど。でも、中層プレイヤーが《絶剣》と居るわけないしね」

まあ確かに。リズの言う通り、俺の装備は中層でも購入出来そうな代物ばかりである。

最初の印象から、この反応になってしまうもの致し方ない。

ユウキは苦笑してから、

「ボクの相棒で、ボクより強い攻略組プレイヤーだよ」

ユウキの言葉を聞き、リズは僅かに驚愕した。

だが、納得したように、

「真っ黒装備の攻略組プレイヤーって言ったら、《黒の剣士》ね。って、《鬼神》の方割れじゃない」

俺は肩を落とした。

此処まで《鬼神》が広まっているとは……。と言う事は、アインクラッド全体と考えるのが妥当かもしれない。

「そうも言われている。不本意だけど……」

「こんな人がねえ」

うっ、リズさん。俺の心を抉りにきますね。

俺、泣いちやうよ。

「で、《黒の剣士》様がオーダーメイドって事でいいのかしら？」

「そうだな。これと同等でどうだ？」

俺は背からエリユシデータを鞘ごと外し、リズに手渡した。

「重ッ！」

やはり、STRを鍛えてないと、かなりの重さらしい。

リズは鑑定スキルを使用し、エリユシデータを調べながら目を丸くしていた。まあそうなるのも頷ける。エリユシデータは、第50層のボスからドロップしたラストアタックボーナスであり、《魔剣》の類の剣であるのだ。

また、アインクラッドに存在する全ての武器は、大きく二つのグループに分かれている。

一つは鍛冶屋が作成する《プレイヤーメイド》。

もう一つは冒険によって入手できる《モンスタードロップ》だ。

「で、どうだ？ 作れそうか？」

「作れないことはないわ。でも一つだけ教えて。何で剣が二本必要なの？」

なるほど。交換条件みたいなもんか。

ユウキに目を配ると、『リズなら大丈夫。』と言っていた。

「了解だ。ちよつと離れてくれ」

ユウキたちには攻撃が届かない位置まで移動してもらい、俺は先ほど渡したエリユシデータを右手に装備し、左手には、アイテム欄からオブジェクト化した有り触れた片手剣を装備した。

スキル欄を二刀流に変更してから、全方位範囲技《エンドリボルバー》計二連撃を空撃ちした。

にも関わらず、店内のオブジェクトがぴりぴりと震えていた。

「とまあ、こう言う事だ。だから、エリユシデータと同等な剣が必要なんだ」

リズはおずおずと、

「あんた、それってユニークスキル？」

「まあな。二刀流っていうスキルだ」

「あ、ちなみにボクも持つてるよ。やっぱり、アスナと姉ちゃんにも言っという方がいいかな？」

……ユウキさん、何気に凄い事口にしてますよ。

てか、俺とユウキの言葉を聞き、リズが硬直してしまった。

「おーい、戻って来い」

「……私、今凄い人たちと一緒にいるのね。ユニークスキル使い二人とか」

リズは、しみじみと呟く。

「この事は、口外しないでくれると助かる。バレたら色々面倒になるし」

剣士や情報屋に待ち伏せされるようになったら、第50層に居られなくなってしまう。

まあその時は、第22層辺りに引越そう。

「分かってるわ。そこは安心して」

「助かる。んで、どうやって剣を作るんだ？ 当てでもあるのか？」

「えっとね。第55層のドラゴンから採れる金属を打って作るのよ」

「でも、ドラゴンを討伐しても不発に終わったんだろ」

取得には、何かの条件があるとか？

其れだと、じっくりくるが。

「ただドラゴンを討伐しただけでは出ないって事よ。《マスターメイサー》がないと駄目なんじゃないか？》っていう噂ね」

「なるほど。其れはありえるかもな。って事は、リズはマスターメイサーなのか」

「まあね。かなり腕は良い方と自負してるわ」

「ほう。近い内に手合わせしたいものだ」

リズは、げっ、と言う顔をした。

「あんたとは戦いたくないわよ。結果は目に見えてるわ」

俺は、そ、そうか。と言ってから、装備を一通り確認した。

「んじや、行くか。ドラゴン退治に」

「よし！ 話が纏まった所で、出発進行！」

店を出て、リズがドアの木札をCloseに裏返す。

転移門まで移動し、第55層へ転移した。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

俺たちは問題なく第55層の北にある小さな村に辿り着く事が出来たが、唯一の誤算が――。

このフロアは氷雪地帯だったと言う事だ。この層は約二日で突破出来たので、俺の記憶から抜け落ちていたのだ。

ともあれ、今は。

「ほら、これを着ろ。俺は問題ないから」

俺はウインドウを操作し、二着の厚手のコートを二人に手渡す。

「あんたは、大丈夫なの？」

「問題ない」

これ位なら、精神力で何とかなる。

ユウキが小声で、

「キリトは無理しすぎだよ」

……どうやら、ユウキにはバレてたようだ。

流石、幼馴染です。

「こ、ここは、カッコをつけさせくれ」

「も、もう、バカなんだから。これが終わったら、何か温かい物を作ってあげるから」

「うう、何かゴメン」

俺は情けない声を出す事しか出来ない。

――数分後。クエストのトリガーとなる村の長のNPCを発見し、話を聞くことに成功したのだが……。話がかなり長かった。

外は既に、夕暮れに包まれていた。

「……まさかフラグ立てでこんな時間を食うとは」

「でも、ドラゴンは夜行性なんだよね？ 倒しちゃう？」

ユウキの言う通り、ドラゴンは夜行性なのだ。 と言う事は、夜に  
ならないと現れない。

「そだな、今日倒しちゃうか。 ここまで面倒な事をしたんだし。 —  
—リズもそれでいいか？」

「いいわよ。 パパッと倒しちゃいなさい。 早く研磨の続きもしない  
といけないし」

「な、何か悪いな」

「気にしない。 さ、行くわよ」

目的の雪山を登ること数十分。 切り立った氷壁を回り込むと、西の  
山の山頂に到着した。

山頂には、巨大なクリスタルの柱が伸びている。 残照の紫光が乱  
反射して、虹色に輝くその光景は幻想的の一言だ。

「んじゃ、ユウキはリズの護衛を頼むな」

「任せて」

そう言うユウキとリズは、近場の水晶柱に身を隠した。

俺は回りを見渡しながら歩を進めるが、深い谷が見えるだけだ。

不発かもなあ。 と思った直後だった。 俺の目の前に巨大なポリゴ  
ンが出現し、形を整え始めた。 姿を現したのは、氷のように輝く鱗  
を持った白竜だった。

巨大な翼を緩やかにはばたかせ、宙にホバリングしている。

俺は背から放剣し中段に構える。

「グオアアアアア！」

ドラゴンは凶悪な口を開き、白く輝くブレスを吐いた。

俺は剣を目の前で回転させてブレスを防ぐが、完全に防ぎきれな  
かった為、HPが減少する。 だがそれは、戦闘時回復で問題なくや  
り過ぎず。バトルヒーリングスキル

「げッ、マジか」

俺は声を上げた。

そう、ブレスの特殊能力で当たった個所が数秒間凍り、動きを止め

られてしまうのだ。両腕は動かせるが、両脚は動かせない状態である。

「(この状態で、鉤爪はちよつとヤバい……かも)」

まあ、一撃耐えれば問題なしである。

だが、俺が攻撃を食らうことも、大きく吹き飛ばされることもなかった。

ユウキがクリスタルの陰から出てきて、片手剣ソードスキル《ホリゾンタル》でドラゴンの腹部を切りつけたのだ。

この攻撃によりドラゴンのHPはイエローまで落ちた。

「もう、何やってんのさ」

「す、すいません……。ちよつと油断しまして」

「まったくもう、二人で倒すよ」

「あッ、やば」

高く舞い上がったドラゴンが両翼を大きく広げた。其れが、体の前で打ち合わされると同時に、ドラゴンの真下の雪が舞い上がった。

——突風攻撃である。

俺たちは剣を雪に突き立てるが、それは用を成さなかった。

俺たちは空高く投げ出されたが、空中で手を繋ぐと、剣を握った腕を動かして振り抜いた。重い突き技の反動で俺たちは穴の壁面目指して角度を変えた。氷の絶壁へ迫っていく中、再び腕を振りかぶり、思い切り壁面に剣を突き立てた。

急ブレーキをかけたように、凄まじい火花が飛び散る。衝撃音と共に落下速度が鈍るが、完全停止には至らない。

金属を引き裂くような音を盛大に立てながら、二つの剣が氷の壁を削っていく。

下を見ると、雪が白く積もった底が見える。

俺たちは剣を手放し、着地する。

衝撃と轟音。

そう。俺とユウキは、何処かの穴の中に落ちたのだった——。



## 第23話《ドラゴンの巣とクリスタル》

「……落ちたな」

「……落ちたね」

俺たちは立ち上がり、近場に落ちた剣を鞘に収めてから、腰のポーチからハイポーションを取り出し飲み干した。

因みに、回復結晶を使用しなかったのは理由がある。ここがクリスタル無効化空間だからだ。これは、転移結晶も使用不可能、と言う事でもある。

「……申し訳ない、俺が油断したせいで」

「気にしない気にしない。これも良い経験だよ」

ユウキは、俺にニッコリ笑いかけてくれる。ユウキさんの優しさが身に沁みます……。

「リズはどうしたんだ？」

「リズには、第48層に転移してもらったよ。二日経って戻らなかつたら、救援をお願い。って言つといたから大丈夫っ」

もしかして、こうなる事が分かってたとか。

いや、ないか……。

その時、俺の腹の虫が鳴った。

「ふふ、ご飯にしようか」

「うう、度々申し訳ない……」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

飯を完食したら、外の夕焼けが消え、穴の中は深い闇に包まれようとしていた。

どうやら、野宿になるのは確かだ。

隣では、ユウキが野営用のランタンに火を灯していた。明るいオレンジ色の光が、周りを照らし出す。

それにしても——。

「何か、幼稚園の時のお泊り会みたいだな。その時、肝試しをしたっけ」

「そうだね。 楽しかったなあ」

幼稚園児の時は、ほぼ木綿季と藍子と一緒に居たと言っても過言ではない。

其れほどまでに仲が良かったのだ。

「皆が寝てから少しした頃、トイレが怖いからついて来てって、俺とランを起こしたよな」

ユウキの顔が紅潮する。

「ふ、ふんだ。 怖いのは治ったもんつ。 こ、怖いテレビも一人で見れるもんつ」

「ほほう。 現実世界に帰ったら、ホラー映画でも見るか？」

「い、いいけど。 も、もちろん、姉ちゃんとアスナも一緒だよね」  
「いやいや、完璧に怖がつてるよね。」

でも、アストラル系のMobは行けるんだよな。 不思議だわ。  
まあ取り敢えず、寝袋を二つ並べた。 実は俺たち、野営アイテム

は常時完備している。

ダンジョンで夜を明かす事が度々あるので。  
ランタンを挟み、一メートルほど距離を置いて横になった。

「インゴットの採取でこんな目に遭うとはな。 予想外だわ」

「ボクも同感だよ。 戻ったら、お説教かな」

俺は肩を僅かに震わせる。

「ぶ、物理だけは勘弁して欲しい……」

「それはないから大丈夫……だと思っようよ」

あれーっ、今の間は何や。

物理されちゃうの？ 俺、泣いちゃうの？

「寝よっか」

「そだな。 寝るか」

俺たちはそう言うてから、ゆっくりと瞼を閉じた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

俺が目を覚ますと、氷壁で幾重にも反射した朝陽が、底に積もる雪を輝かせていた。

ユウキは俺より先に目を覚ましたらしく、ランタン等を片していた。

俺は上体を起こし、

「おはよう、今日も早いな」

「もう慣れちゃったから。だってキリト、ボクが迎えに行かないと起きないんだもん」

そう言ってから、ユウキは頬を僅かに膨らませた。

これに対して、頬を掻く俺。

「その件は申し訳ないと……。つい、二度寝をしちゃいまして……」

「まったくもう」

俺も起き上がって寝袋を片していたら、視界の端の方に、銀色に輝くものが映った。

その場所まで歩み寄り膝をつくとき、両手で積もった雪を掻き分ける。

すると、銀色に透き通る直方体の物体が姿を現した。それをそっと両手で掴んで立ち上がる。

「ユウキ、お目当ての物を見つけたぞ」

俺がそう言っていると、ユウキは、不思議そうな顔をしながら此方に歩み寄ってきた。

「ん、どうしたの？——あ!？」

ユウキが金属の表面を叩くと、ウインドウが浮かび上がる。

アイテム名は《クリストライト・インゴット》。

「これが、俺らが採りに来た金属、だろうなあ……。でもなあ……」

「ああ、なるほどね……」

俺たちがこれ以上を口にする事はなかった。取り敢えず、俺のアイテム欄に収納した。

ともあれ、この穴はドラゴンの巣と言う事が明らかになった訳だ。ん？ ドラゴンは夜行性……。

俺たちが穴の入口を仰ぐと、滲むような黒い影が生まれた。それは次第に大きさを増していく。ドラゴンが巣に戻ってきたのだ。

「き、来た——ッ!？」

急降下して来たドラゴンは、俺たちを見ると甲高く鳴いて地表すれすれで停止した。

ドラゴンは、口を大きく開け雄叫びを上げた。翼の巻き起こす風圧で雪が舞い上がる。

「ゆ、ユウキ。 あ、あれで行こう！」

「お、OK！」

俺たちは助走をつけると、湾曲する壁面を水平に走り始めた。ドラゴンの追従を上回る速度でだ。ドラゴンも俺たちを見失い、首を左右に振って探している。

その隙に背に着地し、伸ばした右手で、ドラゴンの鶏冠を掴んだ。

その途端、ドラゴンが甲高い雄叫びを上げ、両翼をはばたかせ急上昇。凄まじい勢いで地表へ飛び出した。

「ユウキッ！」

「うん！」

俺たちはドラゴンの背から跳び、俺は空中でユウキを横抱きにする。と、両足を広げて着地姿勢をとる。

ポフィン！と着地し、勢いで雪が舞い上がった。あれだ。……全身

雪塗れだ。

俺たちは立ち上がり、全身についた雪を払い落した。

「ふう、助かった」

「一時はどうなるかと思ったよ」

俺は苦笑した。

「同感だ。 さて、戻るか」

「だね」

俺たちは剣を作ってもらう為、リズベット武具店へと向かった。

今日の空は、雲一つない快晴だった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

第48層リズベツト武具店。《リズベツト武具店》のドア前に立った俺たち。

ゆつくりとドアを開け、



最後の一打、槌を振るうと、金属は赤みを帯び、じわじわとその姿を変えていく。前後に薄く伸び始め、鏢と思しき突起が盛り上がっていく。

美しい、そう。美しい剣だ。

刀身は薄く、細剣<sup>レイピア</sup>ほどではないが細い。僅かに透き通っても見える。刃は眩い純白。柄は青みを帯びた銀だ。

「えーと、名前は『ダークリパルサー』ね。『闇を払うもの』って意味かしら？ 試してみて」

俺はダークリパルサーを左手に装備し、四、五回素振りしてみる。「重いな……。いい剣だ。んで、追加注文で鞘も見繕ってくれるか？」

リズはストレージから、エリユシデータの鞘と酷似した物を見繕ってくれた。

剣を鞘に収めた俺は、アイテム欄を開き剣を格納した。

「これで依頼は完了ね」

「おう、サンキュ。で、代金は？」

「それなら貰ったでしょうが。あんたのスキルの事よ。あれ、ユウキたち以外には、秘密なんですよ？」

「ああ、まあな。アスナたちには、これから話すつもりだ」

「そう、ならOKね」

そう言うってから、俺とリズは皆の所へ戻った。



「隠してるつもりはなかったんだが、俺とユウキはユニークスキル使いなんだ」

「ごめんね。早く言えば良かったんだけど、修行諸々が終わってなくて」

でも、と俺は前置きをする。

「緊急事態が起きるまで使いたくないっていうのが、俺たちの本音でもある」

「それも考慮して、ボス戦の編成を任せてもいいかな？」

血盟騎士団副団長様たちは思案顔だ。

てか、あんまり驚かないのかい。まあ二人からすれば『そんなので驚いてたら、この先が思いやられるわ。』の一言で終わらせちゃうと思っけど。

「ええ、任せて頂戴」

「団長の《神聖剣》もありますしね。二人は今のままでも、かなりの戦力ですから」

アスナとランの言葉を聞き、ホッと胸を撫で下ろす。

まあ、使ってくれて言われたら、隠さずに使用するつもりだったけど。

「悪いな」

「二人とも、ありがとう」

お礼を述べる俺たち。

このようにして、俺たちは秘密を打ち明け、二本目の剣も完成したのだった――。

## 第24話《笑う棺桶、討伐作戦》

——ギルド、笑う棺桶討伐作戦会議。

それは、第五十六層にある聖竜連合本部で行われている。会議の内容は、笑う棺桶メンバーを無力化し、黒鉄宮に押し込む事らしい。もちろん、《黒の剣士》《絶剣》《閃光》《剣舞姫》の二つ名を持つ俺たちも参加だ。

手元に届いた資料には、笑う棺桶のリーダーP.O.H、幹部プレイヤーの赤目のザザ、ジョニー・ブラックの情報が掲載させていた。

次にシユミットが立ち上がり口を開く。

「笑う棺桶の根城の場所は、下層のある小さな洞窟と判明した」

この言葉により、討伐隊に動揺の声が上がる。

そう、笑う棺桶のアジトを探すため、しらみ潰しに不動産シヨップを探したが空振りだったのだ。

幾つかのオレンジギルドのアジトは発見できても、肝心のラフコフの本拠地だけは、何時まで経っても発見できなかった。

展開されたマップが示すラフコフの根城と思われる場所は、デザイナ―が忘れてしまったような洞窟だったのだ。

「この後、各々にアイテムを配布したいと思う。作戦決行時間は——」

「ちよつと待て。——ユウキ」

俺はシユミットの言葉を遮り、隣に立つユウキにアイコンタクトを取った。俺は、一切の動揺を見せない討伐隊メンバーを見逃さなかった。

まあ俺の思惑が違ったら、ユウキと共に、下層で畑を耕そう。

「なるほどね」

「んじや、手はず通り頼んだ」

そう言つて、ユウキは剣抜き、扉付近に立ち塞がった。

これで、部屋に居るメンバーは退出する事は不可能である。俺とユウキの行動に、メンバーたちは疑問符を浮かべる事しか出来ない。

俺の親友と幼馴染は眉を寄せていたが。数秒すれば、二人も俺が



思ってる事に辿り着くはずだ。

俺は放剣し、剣にオレンジ色のライトエフェクトを纏わせ、ジェットエンジンのように前方へ突撃する。圏内でHPが減少する事はないが、代わりに凄まじいノックバックをするのだ。

そいつは、俺が発動させた《ヴォーパー・ストライク》を正面から受け、壁際まで吹き飛ばされた。

「さて、逃げ場はなくなったぞ。 ラフィン・コフィン 笑う棺桶の内通者」

討伐隊メンバーは目を丸くしてが、その中でも、アスナとランは『やつぱり……』と言う感じだった。

「という事なんだ。 大人しく捕まってね」

「ちッ！ そこを退けッ！」

奴は頭を振って立ち上がり、走りながら放剣して扉を塞ぐユウキに剣を振り下ろすが、軽くないなされ、柄でみぞおちを突かれ、膝を折るように気絶した。

「つたく、上手く隠れてたもんだな」

俺は剣を納めてから、そう呟いた。

奴は、血盟騎士団で功績を残してた奴だ。 おそらく、血盟騎士団メンバーの信用を得て、情報を上手く引き出す魂胆だったのだろう。 気絶したプレイヤーを調べると、奴の二の腕から棺桶のエンブレムが見つかった。

「このやり方は、ジョニー・ブラックね」

俺はアスナの問いに頷いた。

「だろうな。 P O H プーにしては、手段が小癪過ぎる。 ま、K O B、D Aの中に潜んで入れれば、かなり優良な情報が手に入るしな。 奴の狙いは、討伐隊の奇襲だな」

「それで、統制を乱すのが目的って事ね」

俺は、そうだろうな。 と首肯した。

「それにしても、良く解ったわね」

「まあな。 索敵スキルに加えて、俺は観察眼も鍛えてるから、その賜物って所か」

アスナは溜息を吐いた。

「まったく、もう驚くことはないと思ったんだけどね」

俺は苦笑してから顔を引き締めた。

「アスナ。もし、ラフコフの奴らが狂気してたら、死を覚悟して特攻も有り得るぞ。 そうなれば——」

もしこのような状況になれば、俺は躊躇なく奴らの首を刎ね飛ばすだろう。

そして、十字架を背負う事になる。

「ええ、その状況になれば、わたしは躊躇いを捨てる。 きっと、ユウキちゃんもランさんも、同じ事を思ってるはずよ」

「……そうだな」

出来れば、そのような事態は避けたい……。

「アスナ、作戦の決行は早い方がいい。 少なくとも、俺たちが討伐隊を編成してる事は知られてるはずだ」

「確かにそうね。 わたしは、ランさんの元へ行ってくるわ」

そう言って、アスナはランの元へ歩いて行き、彼女とすれ違うようにユウキが此方に歩み寄る。

「これで、奇襲の心配はなくなったね」

「ああ、そうだな」

俺たち四人は殺す覚悟を持って戦えるが、俺たち以外は、その覚悟を持つてる奴が少なかもしれない。

どんなに強固な装備をしていても、狂気に染まった奴らと対峙して、足が竦んでほぼ動けなくなってしまう場合もあるのだ。

「よし、《閃光》と《剣舞姫》と話し合った結果、深夜に決行する事が決まった。 異論のある奴は居るか!?!」

そう言って、シユミットは周りを見渡した。

そこには、不満や文句を言うプレイヤーは居なかった。 これが決まったとほぼ同時に、内通者は、ユウキとランの手によって黒鉄宮の牢獄に飛ばされた。

「では、各自にポーシヨン等を配布する。 また、必要な物があつた場合は言ってくれ。 ラフィン・コフィン ただちに用意する。 それと——」

このようにして、笑う棺桶討伐作戦は進行して行つた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

日付が変わった、翌日の午前一時。

この時間こそが、笑う棺桶ラフィン・コフィン討伐作戦開始時刻なのだ。

「これから回廊結晶を使い、奴らが根城にしている洞窟前に移動する」  
俺たちは、奴らの根城へ場所に向かった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

討伐隊は近場の茂みに隠れ、草むらに身を潜めている。

「よし、行くぞ」

先頭のシュミットの合図と時に、討伐隊は得物を抜いた。

そこから洞窟に続く坑道を通り、大部屋へ突入した。大部屋に居たのは、大勢の殺人者レッドだ。

奴らは、笑う棺桶ラフィン・コフィンのギルドメンバーで間違えない。

「なッ!? 攻略組の作戦決行は早朝だったはずだ!」

「何で攻略組がいるんだ!」

俺たち討伐隊は、スパイのメッセージを使用して、偽情報を流したのだ。尤も、マナー違反な行為に変わりはないが、人命が掛っているのだ。今は、目を瞑らせてもらった。

討伐隊に手足を斬り落とされ、奴らは拘束されていたが、一部の奴らは出来なかった。コイツらは格が違ったのだ。奴らの力量は、幹部の一步手前。と言った所だろう。

そいつらは得物を構え、狂ったような笑みを浮かべている。

だが、多勢に無勢である。奴らも、徐々にHPを減らしていた。

「お前らの負けだ。武器を捨てろ」

笑う棺桶ラフィン・コフィンメンバーは、既にHPゲージが危険レッドに突入していた。

だが、攻撃を休めようとはしない。捨て身で攻撃を仕掛けているのだ。

「オレがビビるとでも思っていたのかッ!」

結果、優勢に運んでいた討伐隊が押されて来た。このまま押され続けると、最悪、この場が血の海と化す。俺は剣を握り直し、覚悟

を決めた。そう、——殺す覚悟を。

俺は走り出し、スピードを緩めず、奴の胸に剣を突き刺した。HPゲージは目に見えて減少して行った。HPがゼロになれば、奴は、アインクラッドから永久退場する。もちろん、現実世界では脳が焼かれ死亡するはずだ。

「……………この……………人殺しが……………黒の剣士、お前も俺たちと——」

奴の体はポリゴンを四散させ、この世界から消滅した。

「……………ああ、俺もお前たちと同じ人殺しだ。……………だが、お前たちのようにはならない」

俺は、近くから襲ってきた両手剣使いの首を刎ねHPを吹き飛ばした。

それからは無我夢中だった。俺の目に映った笑う棺桶ラフィン・コフィンのメンバーは、躊躇なく首を刎ねHPを吹き飛ばす。

その数は、二桁に上るだろう。

振り返り剣を振るうと、剣の刀身と、針剣の刀身が衝突し甲高い音を立てる。

「……………黒の剣士、やってくれた、な……………」

俺の目の前に立っていたのは、赤い髪と目。髑髏仮面を被った男。——笑う棺桶ラフィン・コフィンの幹部、赤目のザザだった。

「……………骸骨野郎か。お前もP.O.Hプーのように、趣味の悪い恰好してるんだな」

「貴様に、言われたくない。人殺し、が」

俺は苦笑した。

「ああ、そうだな。俺もお前たちと同類だ。だが、お前たちと違う所は、快樂の為じゃない」

「それは、ただの、正当化だ。現実から、逃げてるだけ、だ」

「……………かもな。まあでも、貴様を生かしてたら危険だ。ここで死んでもらう」

剣を弾き、再び構えを取る俺と赤目のザザ。

「絶剣、たちはいいいのか。奴らは、ここで死ぬ」

「彼女たちを甘く見過ぎだ。彼女たちの芯は、俺より強い。俺な

んかが、到底敵わないほどな」

俺とザザは、再び剣をぶつけ合う。

ソードスキルを発動させない理由は、ザザはP O Hプーに続く戦闘能力を兼ね備えている。

僅かな隙が致命傷になるのだ。

だが、決定打がないのも事実。 また、笑う棺桶メンバーもかなり

の数の捕縛が完了してるのだ。

「ツチ、時間、切れか。……黒の剣士、貴様はいつか、殺す」

ザザは暗闇の中に消えて行った。

無暗に追跡するのは危険だ。 だが、ここまで壊滅状態に陥れたのだ。 殺人ギルドを再結成する事は不可能だろう。

俺が剣を振り払うと、甲高い声が聞こえてくる。

「ヒヤハハハ！ ワーン・ダウン！」

顔は黒い頭陀袋で確認できないが、狂喜な笑みを浮かべている確信が持てた。

ジョニー・ブラックの前には、二人の笑う棺桶ラフィン・コフィンのメンバーが横一列に並んで居た。

「さく、殺すぜ。 イッツ・シヨウ・タイム！」

死を覚悟した討伐隊メンバーに剣が振り下ろされるが――。

「させるかッ！」

俺は《ヴォーパール・ストライク》を発動させ、横一列になってる奴らに突撃した。

その結果、ジョニー・ブラックを除くメンバーは、この世から消えた。

前で踏み止まった俺は、左手をポーチ中に入れ解毒結晶を取り出し、後方へ投げた。

「す、すまない……」

「た、助かった……」

「……コイツは俺がやる。 お前らは別の奴の相手をしろ」

立ち上がったから領き、討伐隊は乱戦の中へ飛び込んで行った。

乱戦と言っても、ほぼ討伐隊の勝利だが。

「おい、おいおいおい!? オレの邪魔をするなよッ! 黒の剣士ツ! 殺す、麻痺させてゆっくり殺してやる!」

俺は剣を構えた。

「できるもんならやってみな。それと、お前のお友達は先に逃げたぞ」

「ツチ、ザザの奴、不利と見て逃げやがったか」

「で、お前は逃げなくていいのか? この勝負は、討伐隊の勝ちだ」

「そんなもん、オレには関係ねえよ!」

俺の挑発で頭に血が昇ったのか、ジョニー・ブラックは毒ナイフを構えて飛びかかって来た。その動きは、俺から見たら単調な動きであった。

ならば、奴の両足を狙うのも容易い。俺がすれ違いざまに剣を振ると、ジョニー・ブラックの両足が吹き飛び、部位欠損状態になり戦闘不能になった。

何とも、呆気ない幕引きである。

騒ぎを聞き付けた討伐隊のメンバーが、ジョニー・ブラックを縄で縛り上げ、捕縛した。残党の捕縛も完了しており、回廊結晶で開かれ、牢獄へ繋がるコリドーの中へ放り込んでいく。

「……貴様、黒の剣士。絶対に殺してやる。必ず、殺す……」

「……そんな日は来ないさ。牢獄で大人しくしてな」

俺はジョニー・ブラックをコリドーの中へ放り込んだ。

こうして、殺人ギルドラフィン・コフィン笑う棺桶は、アインクラッドから事実上消滅した。



アジトを出た討伐隊は、安全エリアで今回の作戦結果の報告をした。

「被害は討伐隊からは五人。ラフィン・コフィン笑う棺桶からは、二十名のプレイヤー

が消滅した」

ラフィン・コフィン笑う棺桶は二十人死亡。

そして、俺が殺した人数は十五人だ。そう、この中の半数以上は

俺が殺したのだ。

今になって人を殺した実感が湧いてくる。——止まらない震え。血塗られた手。死んで逝った奴らが残した——人殺しの言葉。これが、俺が背負った十字架の重さだ。

「……ボクは、ボクは、君の味方だよ。絶対に傍を離れないからね」  
「あ、ああ」

だが、俺は差し出された手を拒否してしまった。

カーソルはグリーンのままだが、俺は大量殺人者だ。血塗られた手で、彼女の手を握り返すなど出来ない。出来るはずがないのだ。

「笑う棺桶は事実上壊滅。これ以上被害が出る事はないだろう」  
ラフィン・コライン  
幹部である赤目のザザと、リーダーであるP O Hプーは行方不明。

だが、奴らも大人しくしてるはずだ。

俺は立ち上がり、

「……悪い、俺は先に帰る。今は、一人にしてくれ」

「……キリト」

俺は胸の中で、「……すまない」とユウキに頭を下げた。俺は歩き出し、転移門前に向かった。

この時俺は、親友と幼馴染が涙を流してるのに気付かなかつた——。

## 第25話《皆の笑顔》

ラフィン・コフィン  
笑う棺桶討伐作戦を終え、数週間が経過した。

ボクとアスナと姉ちゃんはテーブルの椅子に座り、アスナのホームで今回の事を話し合っていた。

それは、——キリトの事だ。

「……ボクたち、またキリトに助けられたね……」

あの時、キリトが覚悟を決めて斬り込まなかったら、討伐隊は死を覚悟で狂気した笑う棺桶メンバーたちに殺されていただろう。

ボクたちも、生きるか死ぬかの瀬戸際に立たせられたと思う。

「……キリト君の行動がなければ、あの場は血で血を洗う戦いになってたわ」

「……私たち、キリトさんに助けられてばかりですね」

アスナと姉ちゃんも、ボクと同じ事を思ってたんだ。

アスナたちが言うように、ボクたちはキリトに助けられてばかりだ。——そう。SAO開始当初からだ。

「なら、話は簡単じゃないでしょうか。——いえ、既に決まってる事かもしれません」

姉ちゃんが何を言おうとしているのか、ボクとアスナはすぐに分かった。

やっぱり、親友と双子の姉ちゃんだからかな？

「私たちは、キリト君の味方ですからね」

「うんうん、ボクもキリトの味方だよ。——世界に否定されてもね」  
アスナが言ってから、ボクがこう言った。

「……でも、キリトを探し出さない事には何も始まらないや……。  
どうしよう……。」

「ユウキ。フレンド登録でキリトさんの名前はあるかしら？」

姉ちゃんが真剣な眼差しでボクに聞く。

「……でも、キリトの事だし。フレンド登録解除してるよね……。  
きつと。」

ボクは左手を振ってからストレージを表示し、登録された名前をス



クロールさせ、フレンドの中からキリトの名前を探す。

——そして、ボクは手を止めた。

「あ、あったー！」

何であったんだろう？ いや、今はそういう事は置いて——

ボクはフレンド追跡で、キリトが居る場所を緑色の点で表示させた。

「ユウキちゃん、キリト君がいる場所を記憶しないと」

確かにアスナの言う通り、すぐに記憶しないと。いつ解除されるかわからないから。

そして、キリトが居る場所は、今の最前線である第74層の安全エリアだ。

この安全エリアの場所は目にした事がない。ということは、キリトは危険を顧みず、ソロで攻略してると言う事だ。

……安全マージンを取ってるとはいえ、最前線でソロは危険すぎるよ。

ボクは、勢いよく椅子から立ち上がった。

「姉ちゃん。ボク、キリトの処に行く。放っておけないよ」

姉ちゃんは、柔らかな笑みを浮かべた。

「そうね。ユウキ、行って来なさい。好きな人を迎えに」

「うん、わかった！……って、え!? なんてわかったの!?!」

驚いてるボクを見て、アスナと姉ちゃんは苦笑した。

「ユウキちゃん。キリト君と居る時、乙女の顔をしているもの。『ホントに好きなんだなあ』って、わかるくらいよ」

「その前に、公開告白をしたじゃないですか」

「そういうことは、攻略組に知れ渡るのは時間の問題ということでしょうか?」

「いえ、シユミットさんが広めなければ、バレることはないかと」

「あー、それもそうですね」

ボクは顔を真っ赤に染める。

んもー、姉ちゃんもアスナも言いたい放題言ってくれちゃって!

ボク、キリトのことが好きだもん！　愛してるもん！……………あれ、何か凄い事を言ったような……………。

と、とにかく、早くキリトを迎えに行かないと。

「姉ちゃん、アスナ。　行ってくるね！」

「ええ、行つてらっしゃい」

「気をつけてね」

姉ちゃんとアスナにそう言われ、ボクは玄関を出て、第74層迷宮区へ向かった。

また、ボクが玄関を出る時、アスナと姉ちゃんが、

『キリト君、一人で抱え込みすぎよ。　私たち、そんなに頼りないんでしようか？』

『おそろく、私たちに迷惑をかけないようにしてるんです。……………私は、どンドン迷惑をかけて欲しいんですけど』

『そうですね。　私も同じくです』

『——キリトさん。　帰ってきたらお説教ですね』

『——ですが、物理は止めましょうよ』

という会話が聞こえてきた。

……………キリト。　帰つて来て早々大変かも……………。　で、でも、これが

アスナと姉ちゃんの愛情表現と考えれば。　うん、これなら大丈夫そう。

——ボクも姉ちゃんもアスナも、君の帰りを待ってるんだよ。

◆◆◆◆◆

俺は、<sup>第74層</sup>最前線迷宮区に籠りマップピングに没頭していた。　そう、殺人者の俺にできる事は、攻略組の皆が罨や未知のMobに殺されないように常に最新のマップデータを提供する事。

つまり、死と隣り合わせの迷宮区を、ソロで攻略する事である。

だが、二刀流は使わない事に決めてる。　こんな俺が、リズが丹精込めて打ってくれた剣を使う訳にはいかないからだ。

だが、ふと考え耽っていたら、脳裏に浮かんだのは、幼馴染の顔と友人の顔だった——。

俺は頭を左右に振り、

「……つたく。何を考えてるんだか……後、アレをやっておくか……」

俺が言うアレとは、幼馴染と友人とのフレンド解除だ。討伐作戦後に解除しようと思ったのだが、繋がりを切る踏ん切りがつかなかったのだ。——だが、それも今日で終わりだ。

俺は左手を振ってからストレージを表示し、フレンド登録欄からユウキたちの名前を解除していく。これでユウキたちは、俺をフレンド追跡する事も不可能だ。

立ち上がり安全地帯から出てようとした時、紫の装備を基調とした女性プレイヤーが内部に入ってきた。

そう、今正しくフレンドを解除したユウキだ。

……つてことはあれか。俺がフレンド登録を解除するのが遅すぎたから、見つかったって言う事か……。何とも間抜けなミスである。——だがそれだけ、ユウキたちとの繋がりを切るのに躊躇いがあつたのだ。

そして俺は、久しぶりに見る幼馴染の顔を見て、——嬉しくもあり、すぐにこの場から離れたいとも思った。

「……和人。やっと見つけたよ」

俺は口籠った。ユウキに返す言葉が見つからないのだ。

俺は数秒考え込んでから、

「……木綿季。SAOでは、リアルネームは御法度だぞ」

ユウキは、てへへ、つと笑った。

その笑顔は眩しくて、太陽の陽だまりのようだ。

「ごめんって和人。つて、ボクはどうなるのさ。木綿季もユウキも同じだよ」

「……本名をアバターネームにするのが悪いぞ」

「うーん、そうなんだけど。てか、ボクは、MMORPGのこと全然わかってなかったからね」

そう言つて、ユウキは首を傾げた。

『何で教えてくれなかったのさ』、と言いたい表情だ。いや、小さ

い頃に教えた記憶があるんだが……。

「まあいいや。一緒に帰ろう、和人」

俺は顔を俯けた。

「……いや、俺は帰れない。——俺は殺人者だ。そんな奴が、お前たちと一緒に居ていいはずがないんだ」

ユウキは、バカなんだから。と言って俺の両手を包み込んだ。それはとても温かく、ユウキの体温が感じられるようだった。

仮想世界でも、今この瞬間はその垣根を取り払ったみたいだ——。

「ボクとアスナ、姉ちゃんは、一生君の味方だよ。——世界が君を否定しても、ボクたちは味方であり続けるよ」

ユウキは、それにね。と言葉を続ける。

「あの時、和人が斬り込まなかつたら、討伐部隊はほぼ全滅。あの場も、血の海になってたんだよね」

俺は顔を上げ、声を震わせる。

「……そうだな。でも、俺は人を——」

俺の言葉が途切れたのは、ユウキが優しく抱きしめたからだ。

そんな俺は、動揺が隠せない。

「もう、意地っ張りなんだからっ。ボクたちは決めたんだよ。和

人の背中を支えようって。——レンさんとの約束でもあるしね。

ただ、支えてくれる人が増えるだけだよ」

ユウキは俺から離れて、ニッコリと笑った。

「だから、皆の所に帰ろう」

俺はユウキが差し出した右手を、恐る恐る手を伸ばし握り返した。

ユウキは、ん、よし!と言って、優しく握り返してくれる。……幼

馴染なのに、今のユウキは、俺の姉ちゃんに見えるよ……。

「……わかった。これからも隣に居てくれ」

「これからもずっと一緒に。絶対に破らないって約束して」

「……ああ、約束だ」

そして、俺とユウキは安全地帯を出て、ホームへ帰る為、迷宮区に足を踏み入れた。

その帰り道では、迷宮区に人が居ない事もあって、二刀流と黒鱗剣

のユニークスキルを解禁。 上位、最上位剣技で、Mobを紙切れのように蹴散らしていった。

そう、俺たちはSAOの世界で、不確定要素イレギュラーになりつつあったのだ。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

今、俺は第61層《セルムブルグ》にあるアスナのホームのリビングで正座をしていた。

俺の前に立っているのは、ちよこつと？怒ってるアスナとラン。

隣で、俺を見守るようにユウキが立っている。 ちなみに、俺たち全員は武装を解除してる。

あの時、第50層のホームに帰ろうとしたのだが、ユウキに連行されたのだ。 何でも、『アスナと姉ちゃんに顔を見せないと』という事だったのだが。

「…………いや、これって顔を見せるだけで終わらないでしょ。…………つか、無言の二人が怖いです…………」

「キリト君。 まず最初に、お帰りなさい」

「ええ。 ホント心配したんですからね」

俺は、ユウキたちにこんなにも心配をかけたのか…………。 かなり申し訳ない気持ちに襲われる。

また、こんな俺に繋がりをくれた彼女たちに、かなりの感謝の気持ちもある。 ——だが、再びこれを言わなければならないと思った。

「…………アスナ、ラン。 俺は——」

一呼吸置き、アスナとランが話し始める。

「仕方がなかった。 で片付けちゃうのはダメなのかもしれないけど。 あの場合はキリト君の判断が正しかった。 私たち攻略組がこうしていられるのも、キリト君のお陰なんだよ」

「それに、キリトさんの十字架は、私たちも背負います。 分け与えるという言い方は変かもしれませんが、私たちはキリトさんの背負うものを軽くしてあげたいんです」

「キリト君は、私とランさんをもっと頼ってね。 たくさん迷惑をかけていいんだから。 だって、私たちは友達でしょ」

俺の目元に涙の滴が溜まっていく。堪える力を弱めると、大粒の涙が流れ落ちそうだ。

だが、ランさんや。罪を背負うのは俺だけで十分だ。俺が墓場まで、この十字架を背負って行く。

「……今まで心配させてすまなかつた……。これからは、皆を頼るようにする」

「ホントのホントね？ 今度一人で抱え込もうとしたら、ランさんと私の物理が落ちるからね」

「ゲンコツでは済みませんからね、キリトさん」

アスナとランにそう言われ、俺はコクコクと頷く事しかできなかつた。

そして、その声音はとても優しい。

「よし！ この件は、一件落着だね。今後もキリトは、ボクと行動を共にすること。——離れ離れは許しません」

俺は苦笑してしまった。

後半のユウキの口調は、ランに似せたからだ。

「ああ、あの時約束したからな。てか、お前がお姉さん口調とか、やっぱ似合わないな」

「な!? それはボクが子供っぽいって言うこと」

「……いや、俺らまだ中学生で子供だろ……」

だが、これに異を唱えたのはアスナだ。

ちなみに、既に周囲の警戒は済んでいるので、この会話を聞かれる事はない。

「私は、ピチピチのJK女子高生だからね！ この中では、一番年上なんですからっ」

「……アスナ。それ、リアル情報だぞ。てか、そこは張り合わなくても……」

仮想世界では、現実リアル情報を伏せておくことが暗黙のルールだ。

アスナは左手人差し指を唇に当てて、

「うーん、ユウキちゃんたちにならいいかなって。それにほら、現実世界で会う時に便利でしょ」

はいはい！と言い、右手を挙げたのはユウキだ。

「じゃあ、ボクの本名からだね。ボクの名前は、紺野木綿季っていうんだ」

「私は結城明日奈。改めてよろしくね、木綿季ちゃん」

アスナも、本名がアバターネームだったとは。

……てか、何でリアル情報を普通に言ってるんだよ……。いや、俺もさつき言ってしまったような気もするけどさ……。

「私は、紺野藍子です。木綿季とは双子の姉ですね」

「……俺の本名は、桐ヶ谷和人だ」

アスナは頷き、

「キリト君は本名をもじっただけんだ。……何か、安直のような気がする」

「な!? アスナは、本名がアバターネームじゃないか!」

「わ、私はいいのよ! MMOが初めてだったんだから」

俺とアスナの仲裁に入ったのは、ランだ。

ちなみにランは、漢字の《藍》の読みを変えただけだ。

「まあまあ。二人とも落ち着いてください」

「……はい。ごめんなさい」

俺とアスナはしゅんとした。

——そして俺は、この空間が大好きなんだと実感させられた。それからユウキが、ぷっ!と噴き出し笑いをし、俺たちは笑い合ったのだった——。

## 第26話《S級食材の晩餐》

第74層迷宮区から出て、俺たちは帰路についていた。

目の前には、うつそうと茂る暗い森を貫いて、一本の小路が伸びている。背後を仰ぎみれば、先程出てきたばかりの迷宮区が、夕暮れに染まっている。

「ボス部屋まで辿り着けなかったね」

「俺が無理してマッピングしたのが中盤までとか、虐めかよ。って思っただしな」

俺の言葉を聞いて、頬を膨らませるユウキ。

てか、メツチャ可愛い。ユウキはアインクラッドで、かなりの美少女に分類されている。アスナとランも同様だけど。

「そんなことは、ボクがもうさせないからねっ。攻略は、ボクと一緒にすること」

俺は苦笑し、

「ああ、分かってるって。心配するな」

ユウキは俺の言葉を聞いて、満足そうに頷いた。

そんなユウキを見て、俺は右手を伸ばし、ユウキの頭をくしやくしやくと撫でた。

「な、なにをするのさ、キリト」

「いや、いつもありがとうって思っただけ。その礼だと思ってくれ」

「んー、それだったら許す」

そう話していると、俺は足を止めた。索敵スキルに反応があったからだ。

また、ユウキも足を止めている。俺たちの索敵スキルのレベルは最大なのだ。……まあ、アスナとランも最大なんだけどさ。俺が口を酸っぱくして上げろって言ったしなあ。

やがて、十メートル程離れた、大きな樹の枝の陰に隠れてるMobの姿が浮かび上がった。

木の葉に紛れる灰緑色の毛皮と、長く伸びた耳。視線を集中させると、そのMobの名前が浮かび上がる。



それを見た途端、俺とユウキの息が詰まった。——《ラグー・ラビツト》、超がつくレアモンスターだったのだ。

俺は声を潜ませ、

「……ユウキ。 見えてるか？」

「……もちろんだよ。 今の感じなら、ファーストアタック先制攻撃のチャンスがあるかも」

「……ああ、分かっている。 俺に任せてくれ」

「……りようかい」

俺は腰のベルトから、投擲用の細いピックを抜き出した。俺は右手にピックを構えると、投剣スキル基本技《シングルシュート》のモーションを起こし、ピックを投げた。

鍛えた敏捷力パラメータによって、補正された俺の右手が稲妻のように閃き、放たれたピックは梢の陰に吸い込まれていった。

そして、《ラグー・ラビツト》のHPバーがゼロになり、一際甲高い音が届く。

即座に右手を振り、メニューウインドウを呼び出し、アイテム欄を開くと、その一番上にはその名前があった。《ラグー・ラビツトの肉》。——そう、S級食材だ。

「ど、どうだった」

ユウキが緊張の面持ちで聞いてきた。

俺は頷き、

「ああ。 S級食材ゲットしたぞ」

ユウキは、左手をグツと握った。

かなり嬉しいのだろう。

「で、どうする？」

「そりやもちろん、姉ちゃんとアスナと食べようよ。 腕がなるなよ！」

ちなみに三人とも、料理スキルはコンプリート完全習得済みだ。

なんつーか、三人で料理を作っていたら、いつの間にかコンプリート完全習得してたとか。 所謂、女子会である。

ちなみに、晩餐会が開かれるのは、ユウキのホームだ。 まあ、俺



俺たちが背後から声をかけると、エギルは此方を振り向きニンマリと笑った。

「よオ、キリトにユウキちゃんか。安く仕入れて安く提供するの、ウチのモットーなんでね」

悪びれもない様子で、そう呟くエギル。

「後半は疑わしいものだけどなあ。まあいいや、俺たちも買い取りを頼む」

「エギルさん。此処をアレの<sup>集</sup>場所にさせてね」

エギルは目を丸くしたが、構わん構わんと言い、豪快に笑った。

俺たちはトレードウインドウを表示させた。ある一点を見て、エギルの両目が驚きに丸くなった。

「おいおい、S級アイテムじゃねえか。《ラグー・ラビットの肉》か。

オレも現物を見るのは初めてだぜ……」

「今日は晩餐会でもある」

エギルは納得したように頷いた。

「な、なるほど。そういう事だったのか……。それにしても、お前らホント仲良いよなあ」

「まあな。命を預ける事ができる奴らだし。信用も信頼もしてるしな」

「お前ら、付き合いもかなり長いしな」

そう、俺たちの付き合いは、SAO開始当初と言ってもいい。とすると、約二年弱位か。いや、ユウキとランはもっと長いな。

そんな時、背後から誰かにつつかれた。どうやら、待ち合わせの人物たちが到着したらしい。

「お待たせ」

「お待たせしました」

俺とユウキは振り向き、

「おう。待ったぞ」

「いやいや、全然待ってないからね」

言わずとも、血盟騎士団副団長とその補佐であり、俺の友人と幼馴染でもある。

ちなみに、あの事件？の後、フレンド登録を再びしました。俺の望みでもあったしね。

つか、何。後方の二人の護衛は。彼女たちには護衛なんて必要ないと思うんだが。アインクラッド頂点に立つ存在だし。まあ、ギルドの方針じゃ仕方ないと思うけど。

「それで、さっきのメッセージ。ホントなんだよね？」

アスナにそう言われ、俺は嘆息する。

S級食材なんて滅多に取れるもんじゃないし、そうなるのも無理もないが。

「おう、マジだ」

俺はアスナとランを手招きし、アイテム欄を見せる。可視モードにせずとも、俺たちの仲なら問題ないからだ。

「……ホントだったんですね」

「……ランもそう言うのかよ」

ガクツ、と言う擬音が似合うように、肩を落とす俺。

そんな俺を励ますように、ユウキが、ポンと俺の右肩に手を乗せてくれた。ユウキの優しさが身に沁みます……。

「それで、ユウキのホームで開くんですよね？」

「そうだよ、姉ちゃん」

ランと問いに、ユウキが同意する。

だが、それに異を唱えたのは、後方で事の成り行きを見ていた、長髪男の護衛の一人だ。SAOにもう少し表情再現機能があったら、額に青筋の一本や二本は立っているであろう剣幕だ。……俺から見ると、かなりヤバイ奴に見えるんだが……。

「あ……アスナ様、ら……ラン様。《絶剣》様なら兎も角、男と、いや、鬼神の片割れと行動を共にするなど……と、とんでもないことです！」

その言葉に、俺は内心辟易へきえきとさせられる。《様》と来たか。こいつは、アスナとランの崇拜者だ。当人たちを見ると、うんざりした表情だ。……うん、心中お察しします。

ユウキも二つ名とは言え、名前を出され顔を顰めていた。かなり

嫌だったんだと思われる。

「いえ、この人は私の友人です。 攻略組の誰より信用があります」  
「なので、護衛はここまでで大丈夫です」

アスナとランの言葉は、かなり業務的だ。

「な、何を……。 わ、私がこんな奴に劣ると言いたいのですか……  
！」

男の半分裏返った声が路地裏に響き渡る。 三白眼ぎみの落ち窪んだ目で俺を憎々しげに睨んで、

「貴様の顔、下層で見たことがあると思っただが……。手前、貴様、ピーッ  
——」

男の言葉が途中で止まったのは、この空間の温度が一気に下がった錯覚に襲われたからだ。

そして、三人に殺気を向けられ硬直してる。

「……クラディール。 それ以上言ってみなさい。 《黒の剣士》様は、私の恩人なのよ」

「……それ以上言いますと、副団長補佐の権限を行使します」

「……ボクも、ただでは許さないかも」

ユウキに限っては、剣の柄に手をかけていた。 軽くノックバックをさせようか。 といった感じだ。 軽くノックバック

そんな時、この空気に割り込んだのは、もう一人の護衛だ。

「クラディールさん。 今日には帰りましょうか。 本来なら、副団長様たちには護衛なんて必要ないんですから。 副団長様たちが本気になる、オレたちはすぐに巻かれますから」

まあ確かに、もう一人の護衛が言うように、アスナたちの敏捷力も索敵も、俺たちと同等なのだ。 実行するのは容易だろう。

「……ライト。 貴様、アスナ様とラン様の護衛をなんだと思ってる  
！」

ライトと言われた護衛は思案顔をしてから、  
「いや、単なる暇潰しかと」

それを聞いたアスナとランは苦笑するだけだ。

ライトと言われた護衛にアスナとランが、これからは護衛は結構で



「私も賛成で」

二人も賛同した所で、《ラグー・ラビットの肉》は、シチューという事になった。

キッチンに入って行く三人を追いかけるように、俺もその後に行き行く。俺は料理をする事はできないが、料理を運ぶ。という事はできるからだ。

ユウキたちは、無駄のない動きで料理を作っていく。てか、三人の息はかなり合っている。

そして、僅か三分で豪華な料理がキッチンテーブルの上でできあがった。

目の前には、湯気を上げるブラウンシチューがたつぷりと盛りつけられ、鼻腔を刺激する香りの蒸気が立ち上がっている。照りのある濃密なソースに覆われた大ぶりの肉がゴロゴロ転がり、クリームの白い筋が描くマール模様を実に魅惑的だ。

そして、シチューを凝視してる俺を見て、苦笑する声があった。

「リビングのテーブルの上を持って行ってからだよ」

「お、おう」

ユウキにそう言われ、俺はコクコクと頷き、四人分の料理をリビングのテーブルの上に運んで行った。

そして、俺とユウキが、アスナとランが向かい合わせになる形で着席した。

それからユウキが、いただきます。と合掌し、俺たちはそれに続いた。

スプーンを取ってから肉を頬張ると、口の中に充満する熱と香りが広がり、柔らかい肉に歯を立てると溢れるような肉汁が迸る。

俺たちは一言も発さず、黙々とシチューを口に運んだ。

綺麗に食べ終わると、アスナが長い息を吐いた。

「……今まで頑張って、生き残ってよかった……」

「ホントだね。こんなにも美味しいものが食べられるなんて」

「現実での、高級店の料理と錯覚しましたよ。といっても、食べた事はないんですけどね」

ランの眩きに、無いのかよ！という俺の突っ込みは置いて、俺もまったくの同感だった。

俺たちは、原始的欲求を心ゆくまで満たした充足感に浸りながら、不思議な香りのするお茶を啜った。

そんな時、アスナがポツリと呟いた。

「不思議よね……。　　なんだか、この世界で生まれて今まで暮らしてきたみたいなの、そんな気がする」

「……。俺もだけど。　　だけどなあ、俺は現実に帰りたいと思ってるぞ。てか、皆と現実世界で会いたいし」

ランはコップを持ち、口許へ持つていってからお茶を啜った。

「私も想いは同じですが、その為の攻略ペースが落ちてますよね。今最前線で戦ってるプレイヤーは、五百人いないんじゃないでしょうか？」

「うん。　　攻略も危ないけど、みんな馴染んできてるんだよ。　　この世界に……」

ユウキがそう呟く。

俺は右手に持ったコップを口許へ持つていき、お茶を全て飲んでから、

「俺もそう思う。　　このゲームから脱出脱出と言つて、血眼になる奴が居なくなつたな……」

僅かな沈黙の後、ランが両手をポンと打った。

よし、明日の予定が決まりました。と言いたい表情である。

「明日はみんなで、74層の攻略に行きましょう！」

この四人で攻略とか、チートだね。　　いや、マジで……。

「つってもな、護衛はどうすんだ？」

「それなら問題ないわ。　　巻いて来るから」

そう言ったのは、アスナだ。

やっぱり巻いて来るのね。　　うん、知ってた。

「俺はいいけど」

そう言つて俺は、ユウキを見る。

「OKだよ。　　一緒に攻略しよう」



命懸けの攻略なのに、コンビ二行こうぜ。的な乗りだ。攻略中は緊張感を持ち合わせてるので、これといった危険はないが。

「それじゃあ、明日の九時。74層の転移門前広場に集合でいいですか?」

「俺はいいけど」

そう言ってから、ユウキとアスナと見る。

「ボクは、それでOKだよ」

「私も大丈夫です」

ユウキとアスナも賛成だそうだ。そういう事なので、俺たち四人の明日の予定が決定したのだった。

食事を終えた俺たちは帰宅する準備を終え、ユウキに玄関で送られた。

俺は明日、時間前に起きれるだろうか? 若干心配になり帰路に着くのだった――。

## 第27話《第74層迷宮区攻略》

翌日の午前八時三十分。

俺は案の定と言うべきか、ユウキに名前を呼ばれ起床したのだった。そしてユウキは、もう。と言い頬を膨らませていた。うん、朝一番から眼福です。

俺は目を擦りながら、上体を起こした。

「悪い。熟睡してた」

「そうだと思っただよ。キリトを起こすのはボクの習慣になってるからね」

「いつも助かってます。ユウキ嬢」

ユウキの頭に右手掌を乗せる俺。

当のユウキは、唇を尖らせていたが。

「……もう、上手いんだから」

俺はベットから降りて、メニューウインドウを操作して戦闘服と武器を装備した。

準備が済んだ俺を見て、ユウキが呟く。

「ん、行こうか」

「おう」

俺とユウキは、玄関を開けて家から出て、転移門広場まで移動するのだった。

それから、第50層の転移門を潜り、待ち合わせ場所である第74層の転移門広場へ向かった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

く第74層転移門前広場く

時刻は午前九時。丁度待ち合わせの時間だ。

俺が、遅刻かな。と思っていたら、転移門から青いテレポト光が発光し、二人の人影が現れた。

血盟騎士団副団長とその補佐——閃光のアスナと剣舞姫のランである。

途中から付いた護衛は巻いて来たらしい。 うん、知ってた。

「さて、全員揃った事だし。 行きますか」

「その前に、ペアを決めないと」

ユウキがそう言い、俺たち四人は二人組のペアを作る事になった。俺とユウキ。 アスナとラン。 という形だ。 でもまあ、攻略の途中で違うペアを組むと思うけど。

陣形が決定した所で、俺たち四人は第74層迷宮区を目指して歩き出した。

また、俺たち四人が集まって攻略するのは、第1層以来である。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

↳第74層迷宮区↳

現在俺たちは、迷宮区の最上部近く、左右に円柱に並んだ長い回廊の中央地点で戦闘の真っ最中だ。

敵は、デモニツシュ・サーバントの名を持つ骸骨の剣士だ。 身長二メートルを超えるその体に青い燐光を纏い、右手には長剣、左手には円形の金属盾を持っている。

俺はデモニツシュ・サーバントが振り降ろした剣をタイミングよく弾き、パリイを成功させる。 これによってデモニツシュ・サーバントは大幅に態勢を崩し、俺と変わるようにアスナが前に飛び出す。 | 仲間と交代、場を入れ替わるのが《スイッチ》と呼ばれるものだ。

アスナは、細剣を中段にして突きを入れ、中段の突きを三連続させた後、ガードの上がり気味になったデモニツシュ・サーバントの下半身に、一転して斬り払い攻撃を往復。 斜めに撥ね上がった剣先が上段に二度の突きを叩き込む。

細剣ソードスキル《スター・スプラッシュ》計八連撃だ。 かなりハイレベルの剣技でもある。

重い攻撃を受け、約二割HPを残したデモニツシュ・サーバントは仰け反り、僅かな硬直時間が課せられた。 もちろん、大技を繰り出したアスナもだが。

「キリト君。 スイッチ！」

凜としたアスナの声を聞き、間髪入れず敵の正面に飛び込んだ。

隙だらけのデモニツシユ・サーバントの懐に潜り込んだ俺は、片手剣ソードスキル《ホリゾンタル・スクエア》の水平四連撃を放つ。

これが綺麗に入り、デモニツシユ・サーバントはHPをゼロにし、ポリゴン片に爆散した。

俺は、デモニツシユ・サーバントの完全な消滅を確認してから、アスナの方へ振り向く。

「なんつーか。 敵に同情しちゃうんだが。 やっぱ、この四人での攻略はチートに近いな」

「ふふ、そうかもね」

そう言つて、アスナは笑みを浮かべる。

ちなみに、ユウキと二人で攻略する時は、ここまでの無双はできない。

いや、ユニークスキルを解禁すれば可能なのかもしれない。 ……たぶんだけど。

近場で戦っていた、双子姉妹ペアも、ユウキの片手剣単発重攻撃《ヴォーパル・ストライク》が綺麗に入り、この攻撃を受けたデモニツシユ・サーバントは、ポリゴンを四散させた。

「やったね、姉ちゃん」

「ユウキにしては、良い連携だったわ」

ユウキは、ぶー、と抗議した。

そして、笑い合う俺たち。

俺たちは武器の刀身部分を鞘に戻し、先を進む事にした。 その間もMobに四回ほど遭遇したが、難なく切り抜けた。

マップデータの空白部分もあとわずか、後は、一直線に進むだけである。

回廊の突き当たりには、灰青色の巨大な二枚扉が俺たちを待ち受けていた。 扉にも、円柱を同じような怪物のレリーフが施されている。

俺たちは扉の前で立ち止まると、顔を見合わせた。

「……………これって、やっぱり……………」

「……たぶん、そうだろうな。ボスの部屋だ」

「ど、どうする……。覗いて見る……?」

「……ボスは守護する部屋から出ませんし、大丈夫だと思いますが……」

かなり弱気な俺たちである。さすがに俺たちがチートと言われても、ボス相手では訳が違う。こうなるのは当然の反応である。

「……覗くだけ覗いて見ようか。一応、転移結晶を用意しといてくれ」

「「りようかい」」

俺たちは、アイテムストレージから転移結晶を取り出し、左手に握り締めた。

「いいな……。開けるぞ……」

全員頷いたのを確認してから、結晶を握っている左手を鉄扉てつびにかけ、ゆっくりと力を込めた。この動作により、ゆっくりと扉が開いていく。

部屋の中は暗闇に包まれていた。いくら目を凝らしても部屋の奥を見る事ができない。

俺たちは一歩だけボス部屋に足を踏み入れた。すると突然、少し離れた場所の床の両側に二つの青い炎が灯った。

次の瞬間、ボボボボ……と連続音と共に入り口から中央に向かって、真つすぐに炎の道ができて上がる。そして、激しく揺れる火柱の後ろから徐々に巨大な姿が出現した。

見上げるようなその姿は、全身に縄のごとく盛り上がった筋肉に包まれている。肌の色は周囲の青い炎に負けぬ深い青、分厚い胸板の上に乗った頭は、人間ではなく山羊やぎそのものだ。

頭の両側からは、ねじれた太い角が後方にそそり立つ。目は、青白く燃えているかのような輝きを放って、下半身は濃紺の長い毛に包まれている。簡単に言えば悪魔の姿そのものだ。

恐る恐る視線を凝らし、出てきたカーソルの文字を読む。《The GleameEyes》。グリーンムアイズ、輝く目。名前に定冠詞がつくのは、ボスモンスターの証である。

グリームアイズは右手に持った巨大な剣をかざし、轟くような雄叫びを上げて、此方に真つ直ぐ地響きを立てながら猛烈なスピードで走り寄って来た。

「うわあああああつー！」

「『きやあああああつー！』」

俺たちは、ほぼ同時に悲鳴を上げ、出口に向き直ると全速力で安全エリアまで走り出した。ボスは部屋から出ないと分かってても、怖いものは怖いのだ。鍛え上げた敏捷力を最大に生かし、俺たちは長い回路を疾風のように駆けた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

安全エリアに指定されている広い部屋に飛び込み、並んで壁際にずるずるとへたり込む。

俺たちは大きく一息を吐いた後、どちらともなく笑いがこみ上げてきた。

冷静になりマップを確認すれば、あの悪魔が部屋から出てこないのはすぐに判ったはずだが、どうしても立ち止まる気にはならなかったのだ。

「こんなに一生懸命走ったのはすっごい久しぶりだよ。 私たちより

キリト君のほうが凄かったけどね」

「こ、怖かったんだし、仕方ないだろ！」

声を上げて反論する俺の表情を眺めながら、三人はくすくすと笑い合っていた。

「……あれは苦勞しそうだね……」

アスナは表情を引き締めて言った。

「そうだね。 武装は大型剣ひとつだけど特殊攻撃アリかもね」

「前衛に堅い人を集めて、どんどんスイッチしてくかないですね」

ユウキとランがそう言った。

このボスでかなりの苦戦が強いられるのは必須かもしれない。

すると、ランとアスナが真剣な表情で、俺とユウキを見た。俺は、二人が言いたいことがすぐに分かった。——ユニークスキルのこと

だろう。

「解ってる。解禁するかもな」

「うん。躊躇はしないよ」

まあでも、ユニークスキル使いが現れたという事になれば、俺とユウキは注目の的になるが。待ち伏せ等に会おうなら、第50層から引越そう。

「その後の対処は、私たちも協力するわ」

「そうですね。私たちが頼ってください」

アスナとランがそう言ってくれた。

二人の提案は、もの凄く助かる。頼りにさせてもらいます。ともあれ、ユウキが時計を確認した。

「わ、もう三時だ。遅くなっちゃたけど、お昼にしよっか」

ユウキは手早くメニューを操作し、紫革の手袋の装備を解除して、小ぶりなバスケットを出現させ、バスケットから大きな紙包みを三つ取り出し俺たちに配ってくれた。

丸パンをスライスして、焼いた肉や野菜をふんだんに挟み込んだサンドイッチだ。胡椒こししょうに似た香ばしい匂いが漂う。

これは、ユウキたちが考えたオリジナルレシピで作ったものらしい。まあ、今回はユウキが料理を作るということだったので、ユウキがこのレシピを見て作ったそうだ。

俺たちは、口を開けてかぶりついた。

「……うまい」

俺の率直な感想だ。

これが弁当に入るとなると、飯の楽しみが増える。毎日俺は、ユウキお手製の弁当を食べてるからである。

「うん、なかなかいい出来だよ。ユウキちゃん」

「もつと、スパイスを効かせた方が美味しくなるかもですね。今度試してみませんか?」

「OKだよ」

まあ、ユウキたちは女子トークを始めてしまったが。こうなってしまうっては、俺は昼食を摂った後、大人しくしてるだけである。

そんな時、不意に下層側の入り口からプレイヤーの一団が鎧を鳴らして入って来た。

俺たちは警戒したが、それは徐々に薄まっていく。そう、現れた六人パーティーは、ギルド《風林火山》だったからだ。

「おお、キリト！ ユウキちゃん！ しばらくだな」

俺とユウキに気付いて笑顔で近寄って来た《風林火山》のリーダー、クラインに腰を上げて挨拶を交わす。

「まだ生きていたか、クライン」

「久しぶりだね。クラインさん」

「相変わらず愛想のねえな野郎だな、キリの字よ。ユウキちゃんも久しぶり。……キリトの後ろにいる人……は……」

立ち上がったアスナとランを見て、刀使いは額に巻いた趣味の悪いバンダナの下を丸くした。

「あー、っと、ボス戦で顔を合わせているだろうけど、一応紹介するよ。

こいつはギルド《風林火山》のクライン。で、こつち二人は、血盟騎士団《閃光》のアスナ、その補佐の《剣舞姫》のランだ。俺の友人たちでもある」

俺の紹介に二人はちよこんと頭を下げたが、クラインの目のほかに口も丸く開けて完全停止した。

「おい、何とか言え。ラグってんのか？」

肘でわき腹をつついてやるとようやく口を閉じ、凄い勢いで敬礼気味に頭を下げる。

「こつ、こんにちは！ くく、クラインという者です。二十四歳独身」

どさくさに紛れて妙なことを口走る刀使いの脇腹を、強めにどやしつける。

「おいこら！ 俺の友人たちに妙なこと言うんじゃないやねえ！」

「お、お前。キリト！ 両手に花以上じゃねエかよ！」

クラインが俺の足を思い切り踏みつける。結構痛いんですが……。

クライン俺の腕を掴むと、抑えつつも殺気の籠った声で聞いてき



た。

「どつどど、どうゆうことだよキリト！ 何でお前が、血盟騎士団副団長様たちといるんだよ!？」

「色々成り行きでな。 つーか、クラインは俺たちの仲は知ってるだろ」

クラインは、アスナが俺の親友であり、ランが俺の幼馴染だということを知ってるのだ。

なので、この光景を目の当たりにしても不思議ではないと思うんだが。

「そ、それでもよ。 お前、羨やましすぎるぞ！」

「アホー！ 興奮しすぎだー！」

俺とクラインのやり取りを見た、ユウキたちは苦笑した。

その時、先程ギルド《風林火山》メンバーが通って来た通路から、新たな一団の訪れを告げる足音と金属音が響いてくる。

「キリト。《軍》だよ」

ユウキが俺に囁いた。 軍の連中は、俺たちとは反対側の端に部隊を停止する。 先頭にいた男が『休め』と言い、軍のメンバーは腰を下ろしたが、軍のメンバーには疲弊の色が見て取れる。

そして、先頭に立っていた男がこちらに向かって近づいてきた。

男の装備は、他のメンバーの装備とやや異なる。 金属鎧も高級品だし、胸部分には、何やらアインクラッド全景を意匠化したらしき紋章が描かれている。 おそらく、このパーティーのリーダーなのだろう。

「私はアインクラッド解放軍所属、コーバツツ中佐だ」

《軍》というのは、その集団外部の者が揶揄的につけた呼称のはずだったが、いつから正式名称になったんだ。 その上《中佐》と来た。

そして俺は、『鬼神の片割れだ』と名乗った。

男は軽く頷き、横柄な口調で聞いてきた。

「君らは、この先も攻略しているのか?」

「……ああ。 ボス部屋の手前まではマップピングしてある」

「うむ。 では、そのマップデータを提供して貰おう」

当然だ、と言わんばかりの男の口調に俺は少なからず驚いたが、後ろにいたクラインはそれどころではなかった。

「な……て……提供しろだ?! お前エ、マップピングする苦勞が解つて言つてんのか!」

未踏破のマップピングデータは貴重な情報だ。トレジャーボックス狙いの鍵開け屋の間では高値で取引されている。

クラインの声を聞いた途端男は片方の眉を動かし、顎を突き出すと、

「我々は、君たち一般プレイヤーの開放の為に戦っている!」

大声を張り上げた。アホか。と俺は言いそうになりかけたが、寸前で言葉を飲み込むことに成功した。

リーダーらしき男は、言葉を続ける。

「諸君が協力するのは当然の義務である!」

傲岸不遜ごうがいふそんとはこのことだ。この一年、軍が積極的にフロア攻略に乗り出してきたことは殆んどないはずだ。

「て、てめえなア……」

「ちよつと、あなたねえ……」

「傲岸不遜ごうがいふそんのいい見本ね……」

「……ボク、物理やつちやおうかな」

クラインに続いて、アスナ、ラン、ユウキだ。 てか、ユウキさん。

迷宮区で物理はヤバイかと……。

まあここは穩便に済ませよう。

「どうせ街に戻つたら公開しようと思つていたデータだ、構わないさ」

「おいおい、そりゃ人が好すぎるぜキリト」

「マップデータで商売する気はないよ」

そう言いながらトレードウィンドウを出し、コーバツツ中佐と名乗る男に迷宮区のデータを送信する。

男は表情一つ動かさずマップデータを受信すると『協力感謝する』と、感謝の気持ちなど欠片も無さそうな声で言い、くるりと後ろを向いた。 いや、何。俺も物理をかませようと思つちやつたじゃんか。

ともあれ、俺はその背中に向かって声をかける。

「ボスにちよつかい出す気ならやめといたほうがいいぜ」

コーバッツは僅かに此方を振り向いた。

「……それは私が判断する」

「さつきちよつとボスの部屋を覗いてきたけど、生半可な人数でどうこうなる相手じゃないぜ。仲間も消耗しているみたいじゃないか」

「……私の部下はこの程度で音を上げるような軟弱者ではない！」

部下、という所を強調してコーバッツは苛立ったように言ったが、床に座り込んだままの当の部下たちは、同意している様には見えなかった。

「貴様ら、さつきと立て！」

コーバッツの声に応えるように、よろよろ立ち上がり二列縦隊に整列する。コーバッツは最早こちらには目もくれずその先頭に立つと、片手を上げて振り下ろした。

軍のメンバーは一斉に武器を構え、重々しい装備を鳴らしながら進軍を再開した。

「……大丈夫なのかよ、あの連中……」

軍の部隊が上層部へと続く出口に消え、規則正しい足音が聞こえなくなった頃、クラインが気遣わしげな声で言った。

「いくらなんでも、ぶつつけ本番でボスに挑んだりはしないと思うけど……」

「でも、どこか無謀さを感じました」

「一応、様子だけでも見に行く？」

「そうだな」

俺たちがそう言うと、《風林火山》メンバーも相次いで首肯してくれた。ここで脱出して、さつきの連中が未帰還だ。などという話を聞かさせたら寝覚めが悪すぎる。

俺たちは装備を確認した後、何もなければいいんだが。と思いつながら連中の後を追った――。

## 第28話《青眼の悪魔、輝く目》

運悪くMobの集団と遭遇してしまい、俺たちが最上階の回路に到着した時には、安全エリアを出てから既に三十分が経過していた。

その間、《軍》のパーティに追いつく事はなかった。

「ひよつとして、もうアイテムで帰っちまったんじゃねえ？」

おどけたようにクラインがそう言うが、俺たち四人は嫌な予感がしてならなかった。

長い回廊を半ばまで進んだ時、不安が的中した事を知らせる声が回廊内を反響し耳に届く。

「あああああ……っ！」

その声は悲鳴だった。Mobではない、人の声だ。俺たち四人は顔を見合わせると、敏捷力を最大に駆け出した。《風林火山》を引き離してしまう形になってしまったが、この際は構っていられない。

俺たちが風の如く疾駆していると、目の前にボスの大扉が出現した。扉は左右に開き、内部は闇で燃え盛る青い炎の揺らめきが見て取れる。そして、その奥で蠢く巨大な影。断片的に届く金属音と、人の悲鳴。

「……ちよつかい出すなって言っただろうが、あのアホ！」

「……今はそれを言っても意味ないかも」

「……そうですね。私、傲岸不遜ごうがんふそんは大嫌いです」

「……同感です。ランさん」

俺たちは、そう言いながら加速度を上げる。

扉の手前で急激な制動をかけ、ブーツの鋏から火花を撒き散らしながら、俺たちは入り口ギリギリで停止した。

俺は、扉の手前に到着したと同時に叫ぶ。

「おい！ 大丈夫か!？」

叫びつつも半身を乗り入れる。

部屋の内部は、——地獄絵図だった。

床一面、格好状に青白い炎が噴き上げてる。その中央で此方に背を向けて屹立する、グリーンムアイズだ。

禍々しい山羊の頭部から燃えるような呼気を噴き出しながら、右手に携える巨剣を振り回している。悪魔のHPは九割も残っている。そして、部屋の奥で必死に逃げ回っている、軍の部隊。陣形がバラバラになっており、統制も何もあつたものではない。

咄嗟に人数を確認するが、二人足りない。転移結晶で離脱してればいいのだが。

そして、一人が巨剣に薙ぎ払われ、床に激しく転がった。彼のHPは危険域だ。最悪な事に、軍と俺たちが居る場所は反対側で離脱も間々ならない。

俺は倒れた彼に、大きく叫ぶ。

「何をしている！早く転移結晶を使え！」

だが彼は、此方に顔を向けると絶望の表情で叫び返してきた。

「だめだ……！けっ……結晶が使えない！」

このボス部屋は《結晶無効化空間》ということだ。——つまり、全ての結晶アイテムは使用できない事を意味する。その時、一人のプレイヤーが剣を高く掲げ怒号を上げた。——コーバッツだ。

「何を言うか……ッ！我々解放軍に撤退の二文字は有り得ない！」

戦え！戦うんだ！」

「馬鹿野郎……！」

俺は思わず叫んでいた。

結晶無効化空間で二人居なくなっているという事は、消滅した<sup>死</sup>ということだ。あつてはならない事態なのに、この男は何を言ってるのか、俺は憤りを覚える。

そして、クラインたち六人も追い付いてきた。

「おい、どうなっているんだ!？」

俺は手早く事態を伝える。クラインの顔が歪む。

「な……、何とかできないのかよ……！」

俺たちが斬り込んで、退路を拓くことはできるかもしれない。だが、この空間での戦闘は危険すぎる。こちらに死者が出る可能性は捨てきれない。あまりにも人数が少なすぎる。

俺が逡巡している内、部隊を立て直したらしいコーバッツの声が響

いた。

「全員……突撃……！」

十人の内、二人は瀕死状態だ。

残る八人を四人ずつの横列に並べ、その中央に立ったコーバツツが剣をかざして突進を始めた。

「やめろ……っ！」

俺の叫びは届かない。

余りに無謀な攻撃だった。八人一斉に飛び掛かっても、剣技を繰り出す事ができず混乱するだけだ。通常なら防御主体の態勢で、一人が少しずつダメージを与え、スイッチしていく戦法を取るべきなのだ。

グリーンアイズは仁王立ちになると、地響きを伴う雄叫びと共に、口から眩い噴気を撒き散らした。あの息にもダメージ判定があるらしく、輝きに包まれた八人の突撃の勢いが緩む。

そこに、巨剣が突き立てられ、一人がすくい上げられるように斬り飛ばされ、グリーンアイズの頭上を越えて俺たちの眼前の床に激しく落下した。

その人物は、——コーバツツだった。

自分の身に起きたことが理解できないという表情で、口がゆっくりと動いた。——有り得ない、と。

直後、コーバツツの体はポリゴンを四散させた。余りにあつけない消滅だった。

リーダーを失い、パーティーは瓦解し、喚き声を上げながら逃げ惑う軍のメンバー。

既に全員のHPが半分を割り込んでいる。

——俺は覚悟を決めた。だが、俺だけではどうしようもできないのは事実だ。

「……皆、死地につき合ってくれるか？」

「もちろんだよ」

「無茶を言う友人を持ったわね、私」

「私は慣れましたよ」

俺たちはそう言ってから、放剣した。

俺はクラインに声をかける。

「クライン、軍の連中を任せた。俺たち四人で注意を引く」

「そ……それはいいが。お前らで何とかなんか……？」

クラインの声には、俺たちを気遣ってくれる声音も混じっている。

「まあ……何とかなるでしょ、出たところ勝負で」

「そうそう、出たところ勝負だよ」

「初めてですね。このようなボス戦は」

「通常はこういうのはありませんからね、ランさん」

俺たちは剣を構える。

そして、俺がクラインに『頼んだぞ』と一言。

「行くぞー！」

「二りようかい！」

そう言ってから、俺たちは内部に向かって突入を開始した。

内部に入り、アスナが放った一撃が、不意を突く形で背中に命中した。グリームアイズは怒りの雄叫びを上げると、アスナに向けて斬馬刀を振り下ろしたが、俺の剣とグリームアイズの携える斬馬刀がぶつかり、僅かに軌道を逸らす。

「ユウキ！ スイッチー！」

「OK！」

ユウキは、片手剣ソードスキル《ホリゾンタル・スクエア》水平四連撃を放ち、次にランがスイッチし、ユウキを狙う斬馬刀の攻撃軌道を逸らす為剣を衝突させる。

斬馬刀の振り降ろし攻撃は、ほぼ一撃必殺の威力を兼ね備えているのか、衝突した床に深い孔が穿たれている。

アスナは、ランが作ったスペースに入り、細剣ソードスキル《スター・スプラッシュ》計八連撃を放つが、HPが減少する気配がない。俺たちは全神経を集中させ攻撃を繰り返していたが、時々掠める刃によってHPがジリジリと削られていく。

視界の端では、《風林火山》が倒れた軍の連中たちを部屋の外に連れ出そうとしているが、中央で俺たちがグリームアイズと戦闘を行って

いるので、その動きは遅々として進まない。

このままではじり貧だ。元々、俺たちの装備とスキル構成は、壁仕様タンクではないのだ。そう、俺たち四人は攻撃特化仕様ダメージディラー。そして、最早離脱する余裕は無くなってしまった。

残された選択肢は一つだけだ。俺たちの全てを以て立ち向うしかない。

「あれを使う！ ユウキ！」

「りようかい！——アスナ、姉ちゃん！」

アスナとランは頷き、俺とユウキは後方に下がる。そして、アスナとランが注意を引きつけてる間に、俺は高鳴る鼓動を押さえ、右手を振りメニユーインドウを呼び出す。左指を動かす、所有アイテムのリストをスクロールし、一つを選び出してオブジェクト化。装備フィギュアの空白になっている部分にそのアイテムを設定。スキルウインドウを開き、選択している武器スキルを変更。

全ての操作が終了し、OKボタンにタッチしてウインドウを消すと、背に新たな重みが加わった。

隣でスキル変更の操作をしていたユウキを見ると、黒紫剣が紫と赤が入り混じったような色をしている。黒麟剣に変更を完了したという事だ。

「——いいぞー！」

アスナとランが斬馬刀を弾き、無理やりブレイクポイントを作った後方に転がった。

まずは俺が叫んでから、グリーンムアイズの正面に飛び込んだ。硬直から回復した奴が斬馬刀を振り降ろすが、右手に携える剣で弾き返すと、間髪入れず左手で新たな剣ダイクリパルサーの柄を握り、抜剣の一撃を銅に見舞う。

初めてのクリーンヒットで、奴のHPが目に見えて減少する。

「グオオオオー！」

憤怒の叫びを洩らしながら、グリーンムアイズは上段斬り下ろし攻撃を放ってきた。俺は剣を交差し、受け止め押し返す。

グリーンムアイズは態勢を崩し、そこに間髪入れず、俺は右手の剣で



中段を斬り払う。そして、左の剣を突き入れる。右、左、右と剣を振るう。

これが俺のユニークスキル。二刀流上位剣技、《スターバースト・ストリーム》計十六連撃。

「うおおおおあああー！」

途中攻撃の幾つかがグリーンアイズの巨剣に阻まれるが、俺は絶叫しながら斬撃を奴に叩き込む。時々、グリーンアイズの攻撃が俺を捉えるが、俺は剣を振り続ける。

そして、最後の十六撃目がグリーンアイズの胸を薙ぎ払った。

「ゴアアアアアアアアアア！」

天を仰ぎ、仰け反ったグリーンアイズが無防備を晒している。

「ユウキ！ 今だー！」

「りようかい！」

大技で硬直した俺と変わるように、ユウキが俺の前に飛び込む。

「やあああああああー！」

ユウキも絶叫しながら放った攻撃は、黒鱗剣、最上位剣技《マザーズ・ロザリオ》計十一連撃。

右肩、右腕、右脇、右腰、右脚、左脚、左腰、左脇、左腕、左肩、胴体中央の順で、円を描くように星のように交錯し、グリーンアイズと捉える。

グリーンアイズは最後の一番強烈な十一撃目の突きを受け、後方に弾き飛ばされた。そして、グリーンアイズが悲鳴に似た雄叫びを上げる。

俺とユウキは硬直で動けないが、——俺たちの攻撃はまだ続く。

「——アスナ！」

「——姉ちゃん！」

——後方から、回復を終えたランとアスナがスイッチし、ランが片手剣ソードスキル《エターナル・ブレイク》計九連撃を放ち、アスナは細剣ソードスキル《スター・メモリー》計九連撃を繰り出した。

このソードスキルは、片手剣、細剣を極めた者に与えられるスキルだ。そう、アスナは細剣を扱う頂点に、ランは片手剣を扱う頂点に

立った。という事だ。

「はああああああ！」

絶叫したアスナとランの最後の攻撃が、グリーンアイズの胴体中央に貫き、膨大な青い欠片となって爆散した。部屋中に、青く輝く光の粒が降り注ぐ。

また、俺たちはスキルの途中で攻撃を受けていたので、HPは危険域<sup>レッド</sup>まで落ちていた。

「……終わった……のか？」

「……た、たぶん……」

「……ええ、私たちの勝ちです……」

「……ボス戦は、暫くはやりたくないわ……」

俺たちは刀身部分を鞘に戻してから、その場に崩れ落ちた。

こうして、俺たち四人と青い悪魔の戦闘が終了したのだった――。

## 第29話《紅の聖騎士・ヒースクリフ》

グリーンアイズとの戦闘が終了し、俺たちはポーチに手を入れ小瓶を取り出し、レモンジュースの味に似たハイポーションを口にした。その結果、俺たちのHPは徐々に回復し全快となった。

「……疲れた、一生分働いた感じ……」

重い空気を払拭するように、俺が冗談めかしにそう言うと、苦笑する気配。

てか、冗談ならぬ位の倦怠感けんたいかんが襲ってきてる。

ともあれ、今は現状の確認だ。

俺は顔を上げると、クラインが遠慮がちに声をかけて来た。

「生き残った軍の連中の回復は済ませたが、コーバツツとあと二人死んだ……」

「……そうか。ボス攻略で犠牲者が出たのは、六十七層以来だな……」

「こんなのが攻略って言えるかよ。コーバツツの馬鹿野郎が……」

死んじまったら何にもなんねえだろうが……」

吐き出すようにクラインが言う。クラインは頭を左右に振ると、

気分を替えるように聞いてきた。

先程のスキルの事だろう。

「そりゃあそうと、お前ら、何だよさっきのは!?!」

クラインの言葉は、俺、ユウキ、アスナ、ランに向けられているのだろう。

俺は面倒くさそうな表情を作り、

「言わなきゃダメか?」

「つたりめえだ! 見たことねえぞあんなの!」

気付くと、俺たちを除いた、部屋にいる全員が沈黙して言葉を待っている。

俺は溜息を吐いた。

「ユニークスキルだよ、《二刀流》」

「ボクもユニークスキル、《黒鱗剣》」

「細剣を極めた者に与えられる、《スター・メモリー》っていうスキルよ」

「私も、片手剣を極めた者に与えられる、《エターナル・ブレイク》というスキルですわね」

クラインが、『……なるほどなア』と頷き、おお……と、軍の生き残りやクラインの仲間の間にとよめき声 flowed。

アスナとランのスキル、極めし者に与えられるスキルは噂として広がっていたが、これで確信に変わるだろう。

「つたく、水臭えなお前ら。そんなすげエ裏技黙ってるなんてよう」

「アスナとランはともかく、俺とユウキのユニークスキルは、知らない内にスキルウインドウに名前が出現したんだよ」

そう言つて、俺は肩を竦める。

「……はあ、これから面倒になるな……」

遠い目をする俺。

ユウキは苦笑し、

「まあまあ、ボクもなんだし元気出して」

「……いやまあ、そうだけどき」

明日からほぼ確実に、剣士やら情報屋が家の前で待ち伏せをしてるはず。まあ、アスナとランはどのように取得できるか解るスキルなので、問題ないはずだ。

クラインは振り向き、軍の生存者達の方へと歩いて行った。

「お前達、本部まで戻れるか？」

クラインの言葉に一人が頷く。まだ、十代とおぼしき男だ。

「はい。……あ、あの……有り難うございました」

「礼なら奴らに言え」

こちらに向かって親指を振る。軍のプレイヤーたちは、よろよろと立ち上がると、座り込んでいる俺たち四人に深々と頭を下げ、部屋を出て行った。回廊に出た所で次々に転移結晶を使いテレポートしていく。

クラインは、軍全員のテレポートを見届けてから俺たちに声を掛けてきた。

「んじや、オレたちは七十五層の転移門をアクティベートしに行くけど、お前たちはどうする？ 今日の上役者だし、お前らがやるか？」

「いや、俺たちは疲れた。このまま帰る」

「そうか。……気を付けて帰れよ」

クラインは頷くと仲間に合図した、それから六人で部屋の奥にある大扉の方へ向かって歩き出す。その向こうには上層へと繋がる階段があるはずだ。扉の前で立ち止まると、クラインはこちらに振り向いた。

「その……、おめエらがよ、軍の連中を助けに飛び込んでいった時な……」

「……なんだよ？」

「オレあ……、なんつうか、嬉しかったよ。そんだけだ、またな」

まったく意味不明だ。首を傾げる俺にクラインは右手親指を突き出すと、扉を開け仲間たちと一緒にその扉の向こうへ消えて行った。

広いボス部屋に、俺たち四人だけが残された。床から噴き上げていた青い炎は静まり、部屋全体に渦巻いていた妖気も消え去っている。周囲には回廊と同じような柔らかな光が満ち、先程の死闘の痕跡すら残っていない。

「つか、今日から避難しないとマズイ感じ？」

「……うん、マズイかもね」

「明日には、剣士やら情報屋が家の前に溢れ返ってるかもしれないね」

避難するって言っても何処に？……エギルの店の二階が妥当か？

すると、アスナが――、

「キリト君とユウキちゃん、私の家に避難する？」

クラディールのストーキングは、今日はランのホームの為、四人が一つ屋根の下。という事になる。

「……いや、信用されてるとはいえ、それは拙くないか」

「大丈夫よ。キリト君にそんな甲斐性はないって知ってるからね」

……仰る通りです、アスナさん。



ドにして、ユウキに先程の内容を見せた。

ユウキは、あー、なるほどね。と言い、肩を竦めていたが。数分後、そいつはやって来た。

『キリト君。開けるよ』

アスナの声がして、玄関の扉が開かれる。部屋に足を踏み入れた

人物は、血盟騎士団団長ヒースクリフ。

奴は、最強の男。生きる伝説。聖騎士。血盟騎士団のギルドリーダーに与えられた二つ名は手の指で足りないほどだ。

そしてこの男は、唯一のユニークスキルを持つ男として知られていた。

十字を象った一対の剣と盾を用い、攻防自在の剣技を操るスキル。そのスキルの名は《神聖剣》。

圧倒的なのはその防御力だ。彼のHPバーがイエローゾーンに陥った所を見た者はいないと言われている。

大きな被害を出した第50層のボスモンスター攻略戦において、崩壊寸前だった前線を俺たちと共に支え続けた逸話は今でも語り草となっているほどだ。

「キリト君、ユウキ君。君たちは私に次ぐユニークスキル使いと聞いた」

ヒースクリフは、俺と向かい合わせになるように座り、そう言った。

また、ヒースクリフの特徴的なのは目だ。真鍮色しんちゆういろの瞳からは、対

峙した者を圧倒する強烈な磁力が放出されている。会うのは初めてじゃないが、正直に言うと言圧される感覚に陥る。つつても、俺も負けじと見返すけど。

ちなみに、ユウキは俺の隣の椅子に座り、アスナたちはヒースクリフの後ろに立っている。

「――断る。俺たちにメリットがない」

俺が最初に釘を刺す。

こいつが俺たちに会いに来た理由は薄々解る。『どちらが強いかデュエルをしないか?』とでも言いに来たのだろう。

「さすが話が早い。私が言わん事に気づくとはね」

ユウキたちは、話が見えず疑問符を浮かべるだけだ。  
そんな時、ヒースクリフが口を開く。

「私は、キリト君かユウキ君。どちらかとデュエルを申し込む為に訪れたのだよ」

なるほど。とユウキたちは納得したようだった。

ヒースクリフは不敵に笑った。

「キリト君たちにメリットはあるさ」

「……それは何だ？」

俺が問う。

「私に勝てば、キリト君かユウキ君。どちらかの願いを聞こう。

もし負ければ、君たちは共に血盟騎士団に入るのだ」

確かに、この条件なら文句なしだ。

おそらくヒースクリフは、俺たちを血盟騎士団に入団させ、戦力を増強したいのだろう。いつまでも、コンビのまま放って置けないとも言っているのだ。

だが何故だ？ 何故、そこまでギルドの育成に拘る？ 奴の考えが読めない。

「(……どうする、ユウキ)」

「(……うーん、キリトに任せるよ)」

俺は、そうか。と頷いた。

そして、ヒースクリフの問いに応えた。

「ああ、俺が受ける……。んで、その願いつてのは、ここで言わなくちやいけないのか？」

「どちらでも構わない、好きにするといい。どちらにしても、勝つのは私だからね」

「言ってる、団長様」

俺はニヤリと笑った。

「——要求するのは、俺たち四人の休暇だ」

ヒースクリフは少し驚いたように、ほう。頷く。 当の二人も目を丸くしてる。

俺は言葉が続ける。



「俺たちは、約二年間休まずに戦い続けている。攻略は遅れるかも知れないが、休暇を貰ってもいいはずだ。俺たちの代わりにお前が前線に立ち、指揮を上げばいいだけだしな。……そうだな。休暇の資金も要求する。この条件を呑まないなら、俺はデュエルを断る」

……まあうん。我ながら無茶苦茶だな。

だが、ヒースクリフは僅かに逡巡したが頷いた。

「ふむ。いいだろう、その条件を呑もう」

「契約成立だな。んで、何処でやるんだ」

「第75層、"コロニア"の闘技場はどうかかな？」

「ああ、それでいい」

それから詳細を決めた。

デュエルの開始時刻は午前十時。場所は、第75層"コロニア"の闘技場であり、勝負は初撃決着形式だ。

それを決めた後、ヒースクリフは『お邪魔したよ』と言って、アスナとランと共に第55層《グランザム》に帰って行った。

部屋に残ったのは、俺とユウキだけだ。隣に座るユウキが、俺の顔を見ながら微笑した。

「キリトが、あんな事を考えてたなんて予想外だったよ」

「俺たちにも、そろそろ休暇が必要だったろ」

「まあそうだけど」

「だろ」

このようにして、俺とヒースクリフの決闘が決まったのだった――

### 第30話《二刀流 VS 神聖剣》

第75層の主街区《コロニア》はローマ風の造りだ。既に多くの剣士や商人プレイヤーが乗り込み、新たな街を見たいという見物人も詰め掛けて活気づいている。

街は四角く切り出した白亜の巨石を積んで造られ、何よりも特徴的なのが、転移門前に聳え立つ巨大なコロシウムだ。俺とヒースクリフの決闘はそこで行われることになっているのだが――、

「火噴きコーン十コル！ 十コル！」  
「黒エール冷えているよ〜」

コロシウム入り口には、口々にわめき立てる商人プレイヤーの露店がずらりと並び、見物人に怪しげな食い物を売り付けている。コロシウムの入り口の上には、この様な看板が大きく掲げられていた。

《二刀流剣士キリト VS 紅の聖騎士ヒースクリフ。アインクラッド最強剣士はどちらのプレイヤーか！》

「……どうゆうことだ、これは」

俺は呆気にとられて、隣にいるユウキに聞いた。

「さ、さあ、ボクにもわからないかな……」

……いや、何。この歓声の中で決闘を<sup>デュエル</sup>しなくちやいけないの？

てか、コミュ症の俺とっては、ほぼ虐めに近いと思うんですが……。

「……な、なあ、ユウキ。俺帰っていいかな。てか、一緒に逃げよう」

「……ボクはそれでもいいけど。姉ちゃんたちの立場もあるし、ボクたちの今後にも関わってくるよ」

『鬼神の片割れが、血盟騎士団との決闘<sup>デュエル</sup>に臆して尻尾を巻いて逃げた』的な新聞が配られたら、俺に関わる皆に迷惑をかけてしまうのは間違えなかった。

そして、俺は肩を落とした。

「……だよな。腹を括るしかないか」

まあそういうことなので、俺は大民衆の中で決闘<sup>デュエル</sup>をする事になった。

儲け分を、俺たちの休暇資金にしてやる。　じゃないと、割に合わない。

「キリト、あそこ見て」

ユウキの視線の先に目をやると、そこには血盟騎士団の制服を着たポツチャリした奴が映る。

俺の予想だと、あいつがこの元凶だ。……分かってても、今更なんだけど。

「……おそらく、KOBの経理担当だろ」

「ボクもそう思う。　それにしても、用意周到だね」

「……だな」

この後、アスナたちと合流し、控室へ案内してもらった。

控室は、闘技場に面した小さな部屋だ。　また、既に観客は満員であり、歓声がうねりながら届いてくる。

「私たちはここまでね」

「キリトさん、頑張ってください」

そう言つて、アスナたちは控室から出て観客席へと向かって行った。

俺は溜息を吐く。

「……帰りたいわ」

「そう思うのも無理ないよ。　キリト、昔からコミュ症だもんね」

俺は苦笑してから、だな。と頷いた。

「まあでも、あの時、お前たちに声をかけて正解だった」

「ふふ、そうだね。　ボクと姉ちゃんが砂遊びしてた時に、『あ、あの、一緒に遊んで、いいいかな』だっけ？」

と言つて、ユウキはクスクス笑った。

「おいやめろ。　それ、俺の黒歴史の一つだからね」

でも、仲良くなつてから、俺が引越して離れ離れになっちゃったんだが。

あの時、俺泣いたなあ……。　まあ、口が裂けても本人には言わんが。　てか、これから決闘デュエルなのに、和みすぎだよ俺たち。

「さて、そろそろ行きますか」



俺は意識を戦闘モードに切り替え、ヒースクリフの視線を正面から受け止めた。そして、大歓声が徐々に遠ざかっていく。

ヒースクリフは視線を外すと、俺から距離を取り右手を掲げた。この動作により、俺の目前にデュエルメッセージが出現した。

もちろん受諾。 オプションは初撃決着モード。

カウントダウンが始まり、周囲の歓声は俺の耳には届かない。

俺は、背中から二振りの愛剣を同時に抜き放ち、ヒースクリフも盾の裏から細身の長剣を抜き構える。【DUEL!!】の文字が閃くのと同時に俺と奴は地を蹴った。

俺は沈み込んだ体勢から一気に飛び出し、地面ギリギリを滑空するように突き進み、ヒースクリフの直前で体を捻り右手の剣を左斜め下から叩きつける。十字盾に迎撃され、激しい火花が散るが、攻撃は二段構えだ。

右にコンマ一秒遅れて、左の剣が盾の内側へと滑り込む。二刀流突撃技、《ダブルサーキュラー》。

左の一撃は脇腹に達する直前で長剣に阻まれてしまったが、この一撃は挨拶代わりだ。技の余勢で距離を取り、向き直る。

今度は、ヒースクリフが盾を構えて突撃して来た。巨大な十字盾の陰に隠れて、奴の右腕がよく見えない。なので、俺は右への回避を試みた。盾の方向に回り込めば、初期起動が見えなくても攻撃に対処する余裕が出来るかと踏んだからだ。

ヒースクリフは盾自体を水平に構えると、尖った先端で突き攻撃を放ってきた。純白のエフェクト光を引きながら巨大な十字盾が迫る。

「ぬんッー！」

「チッー！」

俺は咄嗟に両手の剣を交差して防御した。激しい衝撃が全身を叩き、数メートルも吹き飛ばされる。右の剣で床を突いて転倒を防ぎ、空中で一回転して着地する。また、あの盾にも攻撃判定があるらしい。

「(……盾と剣で二刀流だな。 反則だろ、あれ……)」

手数で上回れば一撃勝負では有利、と思っていたがこれは予想外だ。

ヒースクリフはダツシユで距離を詰め、十字を象った右手の長剣が突き込まれてくる。連続技が開始され、俺は両手の剣を使って防御に徹した。

連撃最後の上段斬りを左の剣で弾くと、俺は間髪入れず右手で単発重攻撃《ヴォーパル・ストライク》を放つ。ジェットエンジンめいた金属質のサウンドと共に、赤い光芒こうぼうを伴った突き技が十字盾の中心に突き刺さる。岩壁の様な重い手応えにも講わず、そのまま撃ち抜く。

「う……らあッ！」

凄まじい衝撃音が轟き、今度はヒースクリフが撥ね飛ばされた。

盾を貫通するには至らなかったが、多少のダメージは《抜けた》感触があった。

奴のHPバーが僅かに減っているが、勝敗を決するほどの量ではない。ヒースクリフ軽やかな動作で着地すると、距離を取った。

「……素晴らしい反応速度だな」

「……アンタの防御も堅すぎるぜ」

言いながら俺は地面を蹴った。ヒースクリフも剣を構え直して間合いを詰めて来る。超高速で連続技の応酬が開始された。俺の剣は奴の盾に阻まれ、奴の剣を俺の剣が弾く。周囲では様々な色彩の光の連続的に飛び散り、衝撃音が闘技場の石畳に突き抜けていく。

例え、強攻撃が命中しなくても、どちらかのHPバーが半分を下回ればその時点で勝者が決定する。

俺は、攻撃のギアを上げていく。そして、剣戟けんげきの応酬が白熱した。奴のHPが五割見える所まで来た。だが、俺もそれに近いだろう。

「らあああああ！」

俺は全ての防御を捨て去り、両手の剣で攻撃を開始した。二刀流上位剣技《スターバースト・ストリーム》。恒星から噴き出すプロミネンスほんりゆうの奔流の如き剣閃けんせんがヒースクリフに殺到する。

ヒースクリフが十字盾を掲げて防御するが、構わず上下左右から攻撃を浴びせ続ける。

「――抜ける！」

俺は、最後の一撃がガードを超える事を確信した。

盾が右に振られすぎたそのタイミングを逃さず、左からの攻撃がヒースクリフの体に吸い込まれていく。

その時、世界がブレた。

俺を含む全てが一時停止した様な、そんな気がした。ただ、ヒースクリフ一人を除いて。右に振られたはずの奴の盾が瞬間的に左に移動し、俺の必殺の一撃を弾き返した。だが、弾かれたのはヒースクリフの盾も同じ。

「なッ……」

大技をガードされた俺は、致命的な硬直時間を課せられる。

「……だが、まだだ！ ユウキたちが見てる前で負けたくないッ！――

――動け、動けよ！ 俺の体！」

ヒースクリフは、決闘デュエルを終わらせる右手剣の単発突きを与えようとするが、俺の左腕が動き、胸元に迫る突き攻撃を、剣を衝突させ寸前で逸らす。

体勢を立て直そうとバックステップで下がろうとするが、下半身の自由が効かない。動かせるのは、右腕だけだ。

「う……らぁッ！」

俺は力を振り絞り、右腕を振るう。

無造作な横薙ぎ攻撃だが、今はこれで十分だ。ヒースクリフの盾

は弾け、剣も手元へ戻す事も不可能だ。

――いける！

そう思った俺だが、俺は驚愕する事になる。

そう――盾が手元に戻っていたのだ。

「(なッ!?)」

「ぬんッ！」

ヒースクリフが放った盾の突き攻撃が俺の腹部を襲い、数メートル飛ばされた。

だが、俺の攻撃も入ったはずだ。ならば、どちらかの攻撃が早かった方に軍配が上がるはず。そして、決闘<sup>デュエル</sup>ウインドウに目をやるとそこには——【DRAW】と表示されていた。

「……引き分けか」

攻撃は、ほぼ同時だった。という事だ。

つつても、俺の今の姿は惨めだよなあ……。尻餅を突いてるし、剣は吹き飛ばされた時に放したので、前の方で落ちてるし。

「キリトっ！」

声が出た方に目を向けると、ユウキが小走りで向かって来てくれて、俺の隣に座ると、回復結晶でHPを全快にしてくれた。

それから、俺に抱きついてしまった。……てか、ここ民衆の前だよ、ユウキさん。

とまあ、抱擁が終わった所で、ユウキに肩を貸してもらい俺はゆっくり立ち上がった。

「……ヒースクリフ。こういう場合、勝負の結果はどうなるんだ？」  
元ボツチが、血盟騎士団は以外にきつかったりする。まあ、あの時は言っていなかったけどさ。

「……この勝負は私の負けだよ」

こう言ってるヒースクリフには、動揺の表情が浮かんでいた。

そして俺は、ある予想が立ってしまったのだった。だが、確信がないので、無暗に手を出すのは危険すぎる。

「……そうか。俺たちは遠慮なく休暇をもらおう」

「……承知した」

ヒースクリフは身を翻し、ゆっくりと控え室に消えて行った。

俺とヒースクリフの決闘<sup>デュエル</sup>は、引き分けという形で勝負がついたのだった——。



### 第31話《新居とヌシ釣り》

第22層は、アインクラッドで最も人口の少ないフロアだ。その大部分は常緑樹の森林と湖に占められており、主街区も小さな村と云っていい規模だ。フィールドにはモンスターは出現せず、自然豊かな層だ。

俺は、その22層の森の中で小さなログハウスを購入し、そこで暮らす事になった。小さなログハウスと言っても、並大抵の金額では済まない。だが、俺たちには血盟騎士団からの資金提供があったので、その辺は問題なかった。

「うわー、綺麗だねー！」

ユウキは、二階の寝室の南側の窓を大きく開け、身を乗り出した。確かに絶景である。外周部が間近にある為、輝く湖面と、濃緑の木々の向こうに大きく開けた空を一望することができる。

「いい眺めだからって外周に近づいて落ちるなよ」

俺は家財道具アイテムを整理する手を休め、背後からユウキの体に手を回した。突然の事に、ユウキが驚いたように肩を揺らしたが、俺を受け入れるように力を抜いてく。

「いきなり抱きついたら驚くよ」

ユウキは、優しい声音でそう言った。

また、俺の顔は僅かに赤くなっているだろう。普段は、抱きつく。という事はしないからなあ。

「お、おう。すまん」

ユウキは、もう。と言い、ぷんぷんと頬を膨らませた。

頬を撫でる風を浴びながら、無言で景色を眺めていたら、ユウキが沈黙を破る。

「そういえば、和人。結婚はどうしよっか？」

「うーん、現実で挙げよう。明日奈や藍子、親父たちの前でさ」

SAOでの結婚もいいが、現実で挙げたい気持ちの方が強い。

つつても、俺と木綿季は、現実で結婚できる年齢に達していないんだけど。

「そうだね。SAOの結婚システムも素敵だけど、現実で皆から祝福されたいかも」

「だろ。それまでは、幼馴染でいようぜ」

「うん、賛成。……ねえ、和人。頭撫でてよ」

「まあいいけど。てか、木綿季は昔に戻った感じだな」

双子姉妹と知り合い遊んでいく内に、妹である木綿季は、俺に甘える事が多々あったのだ。

俺が抱擁を解き、ユウキの頭に手を乗せると、優しく撫でていく。

ユウキは、小猫のように目を細めながら言う。その表情は、とても愛らしい。

「ん、気持ちいいよ。……和人、大好きだよ」

「俺も大好きだぞ、ユウキの事が」

そう言つて、俺たちは笑い合った。

それからは、家財家具の整理をし、引越しの作業を終わらせた。

この日は、準備等で疲れてしまった為、夕食を摂った後、俺たちは寝室のベットで眠りに就いた。



湖面に垂れた糸の先に漂うウキはぴくりともしない。水面に乱舞する柔らかい光を眺めていると、徐々に眠気が襲ってくる。

俺は大きく欠伸をして、竿を引き上げた。糸の先端には銀色の針が空しく光るのみだ。付いていたはずの餌は影も形もない。

第2層に引越してから、5日が過ぎていた。俺は食料を手に入れる為、スロットスキルから両手剣スキルを削除して、代わりに釣スキルを取得したのだ。スキル熟練度も600を超え、大物までもいかなくてもそろそろ掛かってもいい頃合いはずなのだが。村で購入した餌を空にする毎日である。

「やつてられるか……。でも、ユウキに『今日は釣つて来る！』って言っちゃったんだよなあ……」

溜息を吐いてから竿を傍らに投げ出し、芝生にごろりと寝転んだ。寝転がっていると、不意に頭の上の方から声を掛けられた。

「釣れますか？」

仰天して飛び起き、顔を向けると、そこには一人の男性プレイヤーが立っていた。重装備の厚着に耳覆い付きの帽子、鉄縁の眼鏡をかけ、釣り竿を携えている。50代に近い男性プレイヤーだ。

しかし、SAOでの高年齢プレイヤーは珍しい。まさかとは思うが――、

「NPCじゃありませんよ」

俺の思考を読んだように苦笑すると、ゆっくり土手を降りてきた。

「す、すいません。まさかと思つたものですから……」

「いやいや、無理もない。私は此処<sup>SAO</sup>では突出して高年齢でしょうか」

男は体を揺らして、わ、は、は、と笑う。

ここ失礼します。と言つて、俺の傍らに腰を下ろした男は、腰のポーチから餌箱を取り出すと、不器用な手つきでポップアップメニューを出し、釣り竿の針に餌を付けた。

「私はニシダといいます。ここでは釣り師。日本では東都高速線という会社の保安部長をとりました。名刺が無くてすみません」

東都高速線はアーガスと提携していたネットワーク運営企業であり、SAOのサーバー群に繋がる経路を手掛けていたはずだ。

「俺はキリトといいます。最近上の層から越してきました。……ニシダさんは、やはり……SAOの回線保守の……？」

頷いたニシダを俺は複雑な心境で見やった。ニシダは、業務の上で事件に巻き込まれたことになるわけだ。

「いやあ、何もログインまでせんでいいと上には言われてたんですが、自分の仕事はこの目で見ないと収まらない性分です。年寄りの冷や水がとんでもない事になりましたわ」

笑いながら竿を振る動作は見事なものだ。また、話好きなのか、俺の言葉を待たず喋り続ける。

「私の他にも、同じような理由で此処に来てしまったいい歳の親父が、

二、三十人ほど居るようすな。大抵は最初の街で大人しくしとるようすだが、私はコレが三度の飯より好きでしてね」

竿をくいと引いて見せる。

「良い川やら湖を探してたら、こんな所まで登ってきてしまいましたわ」

「な、なるほど……。この層にはモンスターが出ませんしね」

ニシダは、俺の言葉にニヤリと笑っただけで答えなかった。

「どうです、上の方には良いポイントがありますかな？」

「うーん……。61層は全面湖、というより海で、相当な大物が釣れると思いますよ」

「ほうほう！ それは一度行ってみませんか」

その時、垂らした糸の先で、ウキが勢いよく沈み込んだ。間髪入

れずニシダの腕が動き、釣り竿を引き上げる。

「うおっ、で、でかいー！」

慌てて身を乗り出す俺の横で、ニシダは竿を操り、水面から青く輝く大きな魚が飛び出した。魚は暫しニシダの手許で跳ねた後、自動でアイテムウインドウに格納され、消滅する。

「お見事……！」

『「ここでの釣りはスキルの数値次第ですから」と言っつて、ニシダは照れたように笑った。

「ただ、釣れるのはいいんだが料理の方がどうもねえ……。煮付けや刺身で食べたいんですけど、醤油無しじゃどうにもならない」

「あー……つと……」

俺は一瞬迷った後、口を開いた。

ニシダになら、俺たちがいる場所が露見しても問題ないと思っただか  
らだ。

「……醤油に似ている物に心当たりがありますか……」

「なんですとッ！」

ニシダは眼鏡の奥で目を輝かせ、身を乗り出して来た。





俺は立ち上がり、キッチンから各料理をテーブルの上に並べた。  
自家製醤油の香ばしい匂いが部屋中に広がり、旨そうな匂いが鼻腔を  
擦る。

ユウキは俺の隣に座り、合掌してから箸を取り、俺たちは料理を口  
にした。

たちまち食器は空になり、熱いお茶のカップを手にしたニシダは  
陶然とした顔で長い溜息を吐いた。

「……いや、堪能しました。ご馳走様です。しかし、まさかこの世  
界に醤油があつたとは……」

「自家製なんです。よかつたらお持ち下さい。あ、マヨネーズも  
あるんです」

ユウキは、キッチンから小さな瓶を持ってきてニシダに手渡した。  
恐縮するニシダに向かって、『お魚を分けていただきましたから』と  
言って笑う。

「ところで、キリトが釣ってきたお魚さんは？ 今日を取ってくるつ  
て意気込んでたんだから、一匹くらいは……」

ユウキは、こちらを振り向いて聞いてきた。

俺は肩を縮めながら、

「……えーと……。一匹も釣れませんでした……」

「え、また一匹も釣れなかったの？」

「……そ、そう。俺が釣りをしていた湖の難易度が高すぎるんだよ。

うん、間違えない」

「いや、そうでもありませんよ。難易度が高いのは、キリトさんが  
釣っていたあの湖だけです」

「な……」

ニシダの言葉に俺は絶句した。ユウキは、お腹を押さえて笑って  
いるし。いや、いいけどさ。

「なんでそんな設定になっているんだ……」

「実は、あの湖にはですね……」

ニシダは声を潜めるように言い、俺たちは身を乗り出す。

「どうやら、主がおるんですわ」

「又シ？」

ニシダはニヤリと笑うと、眼鏡を押し上げながら続けた。

「村の道具屋に、一つだけ値が張る釣り餌がありましたな。物は試しにと使ってみたことがあるんです」

俺たちは固唾を呑む。

「ところが、これがさっぱり釣れない。散々あちこちで試した後、ようやくあそこ、唯一難度の高い湖で使うんだろうと思いきや当たりました」

「大当たりと……」

ニシダは深く頷くが、残念そうな顔になる。

「ただ、私の力では取り込めなかった。竿ごと取られてしまいましたわ。最後にちらりと影だけ見たんですが、大きいなんてもんじゃありませんでしたよ。ありや怪物、そこらにいるのとは違う意味でモンスターですな」

両腕いっぱいに広げてみせる。あの湖で、俺が此処にはモンスターは居ないと言った時、ニシダが見せた意味深な笑顔はこういふことだったのか。

ニシダは、そこで物は相談なんですが、と俺に視線を向けてきた。

「キリトさん筋力パラメーターの方に自信は……？」

「う、まあ、そこそこには……」

筋力パラメーターならば、アインクラッドの頂点だろう。これ、冗談抜きで。

「なら一緒にやりませんか！ 合わせる所までは私がやります。そこから先をお願いしたい」

「は、はあ、釣り竿の《スイッチ》ですか……。できんのかなあ、そんなこと……」

「やろうよ、キリト！ 面白そう！」

ユウキのテンションが最高潮まで上がっている。相変わらず、好奇心旺盛の所は昔も今も変わらない。

「……やりますか」

俺がそう言うと、ニシダは満面に笑みを浮べて、そうこなくちや、





た。

「わ、は、は、晴れてよかったですなあ！」

「こんにちはニシダさん」

「ご無沙汰してます」

俺たちは、頭をぺこりと下げる。年齢にバラつきがある集団は、ニシダが主催する釣りギルドのメンバーだという事で、俺たちの事は露見する事はないだろう。

「え、それではいよいよ本日のメイン・イベントを決行します！」

長大な竿を片手に進み出たニシダが大声で宣言すると、ギャラリイが大いに沸いた。俺はニシダが持つ、竿の太い糸を視線で追い、先端にぶら下がっている物に気付いてぎよっとした。

トカゲだ。だが大きさが尋常ではない。大人の二の腕位のサイズがある。赤と黒の毒々しい模様が浮き出た表面は、新鮮さを物語る様にぬめぬめと光っている。

「……デカイ餌だな。大物が釣れそうだ」

「……だね」

俺とユウキは、顔を引き攣らせて言った。

ニシダは湖に向き直ると、大上段に竿を構えた。見事なフォームで竿を振ると、巨大なトカゲが宙に弧を描いて飛んでいき、やや離れた水面に盛大な水飛沫を上げて着水した。

俺たちは固唾を呑んで水中に没した糸に注目した。やがて釣り竿の先が、二、三度びくびくと震えた。だが、竿を持つニシダは微動だにしない。

「き、来ましたよ。ニシダさん！」

「なんの、まだまだ！」

ニシダは、細かく振動する竿の先端をじっと見据えている。

と、その時、一際大きく竿の穂先が引き込まれた。

「いまだッ！」

ニシダが体を仰け反らせ、全身で竿を煽った。傍目にも判るほど糸が張り詰める。

「掛りました！ 後はお任せしますよー！」

ニシダから竿を手渡された途端、猛烈な力で糸が水中に引き込まれた。

「うわっ」

慌てて両足で踏ん張り、竿を立て直す。

確かに、これは通常の筋力パラメーターで釣る事は不可能だ。

「こ、これ、力一杯引いても大丈夫ですか？」

「最高級品です！ 思いっきりやって下さい！」

俺は竿を構え直すと、竿が中ほどから逆U字に大きくしなる。

「あつ！ 見えたよ！」

ユウキが水面を指差した。俺は岸から離れ、体を後方に反らせているので確認することができない。

見物人は大きくどよめくと、我先にと水際に駆け寄り、岸から急角度で深くなっている湖水を覗き込んだ。俺は好奇心を抑えきれず、全筋力を振り絞って竿を引っ張り上げた。だが突然、俺の眼前で湖面に身を乗り出していたギャラリーたちが揃って二、三度後退する。「どうしたん……」

俺の言葉が終わる前に、連中は一齐に振り向くと猛烈な勢いで走り始めた。俺の左をユウキ、右をニシダが顔を蒼白で駆け抜けて行く。呆気にとられ俺が振り向こうとするとその時、突然両手から重さが消え、俺は後ろ向きに転がり尻餅を突いた。

「キリトー、逃げないのー」

振り向くと、ユウキたちは岸辺の土手を駆け上がり、かなりの距離まで離れている。すると、盛大な水音が響いた。途轍もなく嫌な予感を覚えながら俺は背後を振り向いた。

——魚が立っていた。

そいつは、六本脚で岸辺の草を踏みしめて俺を見下ろしていた。

おそらく、全長は二メートルある。

いや、こいつは魚じゃない。自動で黄色いカーソルが表示されたという事は、モンスターだ。

俺は引き攣った笑みを浮かべ、数歩後退した。そのままくると後ろを向き、脱兎の如く駆け出す。

背後で巨大魚は轟くような雄叫びを上げると、地響きを立てながら俺を追って来た。

敏捷度全開で空を跳ぶように駆けた俺は、数秒でユウキの傍まで到着すると、

「ず、ずずずるいぞ！ 自分だけ逃げるなよ！」

「ごめんごめん。今日は好きなご飯作ってあげるから」

そう言っつて、ユウキは苦笑した。

「う、うむ。許してしんぜよう」

振り向くと、動作鈍いものの、確実に巨大魚は此方に駆け寄りつつある。

「おお、陸を走っている……。肺魚のかなあ……」

「お料理にすると美味しいのかな？ キリトはどう思う？」

「どうだろうか、食ってみないと分からん」

「キリトさん、ユウキさん。そんな事言っつてないで、早く逃げんと！」

ニシダが慌てて叫ぶ。数十人のギャラリーたちも、余りの事に硬直してしまつたらしく、中には座り込んだまま呆然としているだけの者も少なくない。

「どつちが殺る？」

「うーん、久々に戦闘がしたいかも」

「この場は任せた」

「ん、りようかい」

ユウキは、アイテムウインドウを操作し片手剣を装備した。

そして、スカーフと分厚いオーバーを同時に剥ぎ取つた。オーバーの下は紫を基調にしたワンピースという恰好だが、その左腰には黒光した片手剣の鞘が眩く光っている。ユウキは右手で剣を抜き放ち、地響きを上げて殺到する巨大魚を待ち構える。

俺の横に立っていたニシダは、ようやく思考が回復した様子で俺の右腕を掴むと大声で叫んだ。

「キリトさん！ 奥さんが、奥さんが危ない！」

「いやいや、任せておいて大丈夫です」

巨大魚は突進の勢いを落とさぬまま、無数の牙が並ぶ歯を開けると、ユウキを丸飲みする勢いで身を躍らせた。

その口に向かってユウキは走り出し、剣を構え、オレンジ色のライトエフエクトが剣に纏う。

片手剣単発重攻撃、《ヴォーパル・ストライク》。ジェットエンジンめいたサウンドと共に一気に詰め、口から尾まで貫通させ着地した。直後、巨大魚は膨大な光の欠片となって四散した。一瞬遅れて巨大な破碎音が轟き、湖の水面に大きな波紋を作り出した。

剣を鞘に収めると、ユウキは此方に歩み寄る。

「どうだった、久しぶりの戦闘は？」

「うーん、楽しかったけど。あんまり手応えがなかったかな」

「そりやそうだよ。お前にとつては、あれは雑魚だしな」

「そ、そうだけだよ」

俺とユウキが緊張感がないやり取りをしてると、ニシダが目をパチパチさせながら口を開く。

「……いや、これは驚いた……。奥さん、ず、ずいぶんお強いんですね。失礼ですがレベルは如何ほど……？」

俺たちは顔を見合わせた。

言っても問題はないのだが、この話題は引つ張ると危険だ。

「そ、そんなことよりホラ、今の魚からアイテムが出ましたよ」

ユウキがウインドウを操作すると、その手の中に白銀に輝く一本の竿が出現した。イベントモンスターから出現したという事は、かなりのレアアイテムだろう。

「お、おお、これは?!」

ニシダが目を輝かせ、それを手に取り、周囲の参加者も一斉にどよめく。

何とか誤魔化せたか。と思いつながら俺とユウキが安堵してる時、

「あ……あなたたちは、攻略組最強の、鬼神、ですよ?」

一人の若いプレイヤーが二、三步進み出て来て、俺たちをまじまじと見つめた。

「やっぱり間違えない。オレ、ヒースクリフさんとの決闘見デュエルました。

カツコよかったです。相棒の《絶剣》さんも可愛いです。じかで見れるとか、感動です」

うっ、あの時フードが取れたのか。顔がバレてる。

もちろん、ユウキも顔を隠してないので、バレてるけど。ちなみに、男性プレイヤーにしか、俺たちの素性は露見してない。

「いい、いやー。何かの見間違えじゃないかな」

そう言っつて、苦し紛れな言い訳を試みる。

だが、俺とユウキは深く溜息を吐いた。

「……鬼神で合ってるよ。んで、今は休暇中」

「……この事は内緒にしといてくれないかな」

俺とユウキは、『何か書くものはあるかな?』と言っつて、黒ペンと色紙に似た物を受け取り、そこにサインをした。これで手を打つてもらおうと考えたからだ。

「わ、わかりました。この事は、オレの中に留めておきます」

「おう、頼んだわ」

「お願いね」

『は、はい。分かりました』と言っつて、男性プレイヤーはそそくさに、この場から離れて行った。

それから、俺とユウキは顔を再び隠し、ニシダに向き直る。

「私も秘密にしときます」

「そうですか、助かります」

「ありがとう、ニシダさん」

「いえいえ、こんな貴重な体験をさせてもらっただけです。キリトさんたちは休暇を楽しまない」と

ニシダは笑みを浮かべた。そして、俺とユウキは、ニシダに感謝の言葉を述べ、この場を後にした。

こうして、ヌシ釣りというイベントが終了したのだった――。

### 第32話《眠れる森の少女》

ヌシ釣から数日が経過し、俺たちは変わらず休暇を楽しんだ。街に赴いて遊んだり、買い物したりとかだ。

そして今、俺はベツトの上で上体を起こし大きく伸びをした。

「……よく寝たわ」

隣を見やると、寝巻姿のユウキが規則正しい寝息を発している。

暫く寝顔を見ていたら、

「……うむゆ……もう、食べられないよ……」

「ったく、どんな夢を見てるんだか。大体、予想はつくけど」

片頬を突くと、ユウキは可愛らしい声を上げる。それにしても、いつもの元気っ子がない代わりに、幼い少女のようである。

それから数秒後、ユウキが僅かに身を動かし、瞼を開けた。

「……和人、おはよう」

と言って、ユウキは微笑んだ。

てか、リアルネームは御法度なんだけど。まあ、この場には俺たちしか居ないから構わないけど。まあ、この場には俺たち

「おはよう、よく寝てたな」

「うん、そうかも。現実で、和人とボクの新婚生活の夢を見てたよ」  
上体を起こしたユウキは、そう言って微笑んだ。まあ何だ、この生活は新婚生活の予行演習的な感じらしい。俺も、『そうかもな』と言って、笑みを浮かべる。

「ご飯にしようか？」

「そうだな。朝飯にしよう」

という事なので、ベツトから降り立った俺たちは、朝食の準備を始めた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

目玉焼き食パン、サラダにコーヒーの朝食を終え、数秒でテーブルの上を片付けると俺は一息吐く。

「なあ、ユウキ。今日ちよつと行ってみたい所があるんだけど」

「うん、いいけど」

ユウキは可愛く頷いた。

俺は右手を振ってマップを呼び出し、ある一点に指差す。

「よしや、ここなんだけどな」

指差した場所は、ログハウスから少し離れた森の一角だ。

俺は、昨日村で聞いた噂話をする。

「昨日の買い物物の時に耳にしたんだけどな。この辺の、森が深くなってるって……。出るんだってさ」

「なにが？」

ユウキはきよとん顔となり、俺に聞き返す。

「――幽霊」

「……う、うん、幽霊ね。ぼ、ボク、怖くないよ。ぜ、全然、怖くないよ」

いや、何処からどう見ても怯えてる感じでしょ。まあいいけどさ。

とにかく、話を続ける俺。

「といっても、噂だけだな。この世界で、本当の幽霊とか怖すぎだろ」

「そ、そうだよ。圈内事件で幽霊の話は否定してたもんね」

「そういう事だな。でもまあ、行くなら何か起きそうな所がいいだろ。てか、そのままピクニックにもなるしな」

「う、うう……。そうだけど」

ユウキは肩を縮ませながら、窓の外に目を向けた。

冬も間近なこの季節にしてはいい天気である。ポカポカと暖かそうな陽光が、庭の芝生に降り注いでいる。アインクラッドでは、早朝と夕方を除いて太陽を直接見る事はできないが、しかし、日中は十分な面光源ライティングによってフィールドは明るく照らされている。

「行こっか、その森に」

「よし、決まった。んじや、行くか」

椅子から立ち上がり、手早くハンバーガーの弁当をランチボックス

に詰め、ログハウスを出た時には、午前九時になっていた。

庭の芝生に降りた所で、俺の隣を歩いているユウキが振り向いた。

「ねえねえ、キリト。昔みたいに肩車して」

「……マジで」

「うん、マジで」

「いやいや、可愛い笑顔で言われても。」

俺は溜息を吐いてからしゃがみ込み、背中をユウキに向けた。そのまま、ユウキは俺の肩を跨ぐように両足を乗せる。

「出発進行！ ほら、キリトも」

俺は立ち上がると、

「……出発進行だ」

小道を歩き、22層に点在する湖の一つに差し掛かった。穏やかな陽気に誘われてか、朝から数人の釣り師プレイヤーが湖水に糸を垂らしている。小道は、湖を囲む丘の上を通り、左手に見える湖畔まで距離はあるが、近づく内に俺たちに気付いたプレイヤーが此方な手を振ってきた。

皆笑顔で、中には声を出して笑ってる者もいる。こういう時こそ、平静に平静に。てか、ユウキは手を振り返してるし。

「キリトも手を振ろうよ」

「……いや、俺はいいや。ユウキを肩車する事だけで忙しいからな」  
「も、もう。つれないんだから」

やがて道は丘を右に下り、深い森の中に行く。杉に似た巨大な針葉樹が聳える間を縫って、ゆっくり歩く。小鳥の囀り、小川のせせらぎが、森景色に美しく色を添えてる。

だが、歩いて行く内に、森は殆んど暗くなっていく。小鳥の声も、梢を抜けて届く陽光も控えめになってくる。

「ねえキリト。あとどれくらいで到着？」

俺は右手を振り、マップで現在位置を確認する。

「もうそろそろだな。あと、数分ってとこだ」

「ね、ね。その噂話の詳細ってどんなのだったの？」

「好奇心旺盛なのはいいが、お前、怖がってたのにそれを聞くか？」



「だって、気になるもんっ」

ユウキさん、頬を膨らませないで。人差し指を両頬に押し当てたくなっちゃうからね。

まあ要望に答えますか。

「ええと、一週間くらい前、木工職人ウッドクラフトプレイヤーがこの辺に丸太を拾いに来たんだそうさ。この森で採取できる木材は質が良いらしくて、夢中で集めている内に暗くなっちゃって……。慌てて帰ろうと歩き始めた所で、ちよつと離れた木の陰に。……ちらりと、白いものが」

「……う、うん。そ、それでどうだったの？」

かなり怖がりすぎだろ。と思ったが、俺の話は続く。「モンスターかと思つて慌てたけど、どうやらそうじゃない。人間、小さい女の子に見えたつて言うんだな。長い黒い髪に、白い服。

ゆっくり、木立の向こうを歩いて行く。モンスターでなければプレイヤーだ、そう思つて視線を合わせたら……——カーソルが出ない」

「………ね、ねえキリト。あれのことかな」

ユウキが指差した方に目をやると、そこには少女が立っていた。

白いワンピースを纏った幼い少女が無言で佇み、俺たちをじつと見ている。

「………冗談だろ」

すると、ふらりと少女の体が揺れ、少女の体は地面に崩れ落ちた。

次いで、どさり、という微かな音が届いてくる。

「……あれ、NPCじゃないぞ」

俺は、ユウキを肩から下ろし、ユウキと共に倒れた少女へと駆け寄つて行く。

「大丈夫かな？」

ユウキは、少女の顔を覗き込みながら言った。

俺が少女の体を抱え起こすが、少女の意識は戻っていない。長い睫毛まつげに縁まぶたどられたまぶた瞼は閉じられ、両腕は力なく体の脇に投げ出されている。

俺も少女の顔を覗き込みながら言った。

「うーん、消滅していない……っことは生きているって、ことだよな。」

しかしこれは……、相当妙だぞ……」

「だよ。触れてるのに、カーソルが出ないもんね」

アイコンクラウドに存在する動的オブジェクトなら、プレイヤー、モンスター、NPCはターゲットにした瞬間必ずカラー・カーソルが出現する。だが、少女からはカーソルが出現しなかったのだ。

「何かの、バグかな？」

「そうだろうな。普通のVRMMOならGMを呼ぶってケースだけど、SAOにはGMがないしな。それに、プレイヤーにしては若すぎるよ」

少女の年齢十歳にも満たないだろう。ナーヴギアには建前ながら年齢制限が設けられており、十三歳以下の子供は使用が禁じられていたはずだ。

「とりあえず、ログハウスに連れて帰ろう。目を覚ませば、色々分かるかもしれないしね」

「たしかに、そうだな」

俺は少女を横抱きにしたまま立ち上がった。俺たちは周囲を見回したが、近くには朽ちかけた切り株が一つあるくらいで、少女がこの場にいた理由となる物は見つからなかった。



森を抜けてログハウスに辿り着いても、少女が目覚ます事はなかった。少女は、ユウキのベットに横たえ、毛布をかけ、俺たちは向かいの俺のベットに並んで腰を落とすした。

「まず一つだけ確かなのは、NPCではないという事だ」

システムが動かすNPCは、存在座標を一定範囲内に固定されており、プレイヤーの意思で移動させる事はできない。手で触ったり抱きついたりすると、数秒でハラスメント警告の窓が開き、不快な衝撃と共に吹っ飛ばされるのだ。

「それに、何らかのクエストの開始イベントでもない。それなら、接触した時点でクエストログ窓が更新されるはずだしな」

「じゃあ、やっぱり。この子はプレイヤーで、あそこの道に迷って

たつて事かな？」

俺は頷いた。

「今の所、それが一番有力だな。それに、クリスタルを持っていない、転移の方法を知らないんだとしたら、ログインしてから今まで《はじまりの街》にいたと思うんだ。何で22層にいるのかは分からないけど、《はじまりの街》にならこの事を知ってるプレイヤーが……いや、親御さんがいるんじゃないか？」

「ボクもそう思う。こんなに小さい子が一人でログインするとは考えられないもんね。家族が一緒に来てるはず。……無事だといんだけど……意識戻るよね？」

「そうだな。まだ消えてないって事は、ナーヴギアとの間に信号のやり取りはあるんだ。睡眠状態に近いと思う。だから、きっとその内に、目を覚ます……はずだ」

ユウキは立ち上がると、少女の眠るベットの前に跪き右手を伸ばした。そつと少女の頭を撫でる。

俺もユウキの隣に歩み寄り、腰を落とし、右手を伸ばし少女の頭に触れる。

「十歳はいつてないよな……。八歳くらいか」

「それくらいかも。ボクたちが見た中で最年少だよ」

「だよな。とりあえず、俺たちも飯にしようぜ」

「もう、食いしん坊さんなんだから」

そう言つて、ユウキは苦笑した。

それから夕食を食べたが、外周から差し込む赤い陽光が消える時間になつても、少女は変わらず眠り続けたままだった。

リビングのカーテンを引き、壁のランプを灯し、俺が街で聞き込み行つた時に購入した何種類かの新聞に目を通したが、収穫はゼロだった。

「……ないな」

「……うん、ないね」

そう言つて、俺たちは肩を落としした。

「今日はもう寝よつか。明日、本人が目を覚ましたら聞いて見よう」

「そうだな、そうするか」

リビングの明かりを消し、二階の寝室に入り、もう片方のベッドに俺たちは横になった。少女が目を覚ます事を祈って。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「キリト！ 起きて！」

俺はユウキの声によって目を覚まし、ベッドから上体を起こした。

「……おはよう。どうかしたのか？」

「早く、こっちに来て！」

隣のベッドを覗き込んだ俺は、目を丸くした。そう、歌っていたのだ。てか、いつの間にユウキは隣のベッドに移動してたんだろうか？

取り敢えず、隣のベッドに移動し腰を下ろす。

ユウキは、腕の中の少女の体を軽く揺すり、呼びかける。

「ね。起きて……。目を覚まして」

やがて、長い睫毛がかすかに震え、ゆっくり持ち上がった。黒い瞳が、至近距離から真っ直ぐに俺の目を射た。数度の瞬きに続いて、色の薄い唇がほんのわずかに開かれる。

「あ……………」

少女の声は極薄の銀器を鳴らすような、儚く美しい響きだった。

ユウキは、少女を抱いたまま体を抱き起こした。

「……よかった、目を覚ましたんだね。自分がどうなったか分かる？」

ユウキが少女に問いかける。

少女は数秒のあいだ口をつぐみ、小さく首を振った。

「君の名前は……？ ゆっくりでいいからな」

今度は、俺が少女に問いかけた。

「……な……………まえ…………… わた……………しの……………なまえ……………」

少女が首を傾げると、艶やかな黒髪が一筋頬にかかった。

「ゆ……………い。 ゆい。 それが……………なまえ……………」

「ユイか、いい名前だ。俺はキリトだ。 んで、こっちが」



イに向い合うように座った。

俺は、明るい声でユイに話し掛けた。

「やあ、ユイちゃん。……ユイって、呼んでいい?」

カップから顔を上げたユイが、こくりと頷く。

「そうか。じゃあ、ユイも俺のこと、キリトって呼んでくれ」

「き……と」

「キリト、だよ。き、り、と」

「……………」

ユイは難しい顔をして黙り込んでしまった。

「……………」

「ちよつと難しかったかな。何でも、言いやすい呼び方でいいよ」

再びユイは長い時間考え込んでいた。やがて、ユイはゆつくり顔を上げると、俺の顔を見て、恐る恐る、という風に口を開いた。

「……パパ」

次いでユウキを見上げて、言う。

「ゆう……………きは……………ママ」

本当の両親を間違えてるのか、あるいは、この世に居ない親を求めてるのか分からなかったが、ユイが俺たちを親と間違えてる事は確かだった。

ユウキは悲しみを抑えつけ、微笑んだ。

「そうだよ。……ママだよ、ユイちゃん」

それを聞くと、ユイは初めて笑みを浮かべた。

「ママー!」

「おいで、ユイちゃん」

ユウキは椅子からユイの体を持ち上げ、しっかりと抱きながら、色々な感情が混じり合った涙を流した。だが、この時ユウキは、何かを決心したような面持ちであった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

ホットミルクを飲み、小さな丸パンを一つ食べると、ユイは椅子の上で頭を揺らし始めた。おそらく、眠くなってきたのだろう。

俺は立ち上がりユイを横抱きにすると、ソファアの上に寝かせ毛布を掛けて上げる。再び、俺は座っていた椅子まで移動し、椅子に腰を下ろした。

「ボク、ユイちゃんのお父さんとお母さんを探すよ」

「そうか。それじゃあ、はじまりの街に行って聞き込みをしようか」  
「うん、りょうかい」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

ユイは昼食の準備が終わる頃に目を覚ました。

テーブルについたユイは、俺がかぶりつくマスタードたっぷりサンドイッチに興味を示し、俺たちを慌てさせた。

「ユイ、これはな、すごく辛いぞ」

「う〜……。パパと、おんなじのがいい」

「そうか。そこまでの覚悟なら俺は止めん。何事も経験だ」

俺がユイにサンドイッチを一つ差し出すと、ユイは小さな口を大きく開けてサンドイッチにかぶりついた。

俺たちが固唾を呑んで見守る中、口をもぐもぐさせていたユイは、ごくりと喉を動かすにつこり笑った。

「おいしい」

「中々根性のある奴だ」

俺は笑いながらユイの頭をぐりぐりと撫でる。

「晩飯は激辛フルコースに挑戦しような」

「もう、調子に乗らない。そんなもの作らないからね！」

ユウキに怒られた俺は、ユイの方に振り向き、

「……ユイ。パパはママに怒られてしまった」

「ママ、怒ったらだめ」

ユウキは、うっ、と言葉を詰まらせた。何というか、一瞬で家族攻勢ができた感じである。

結局残りのサンドイッチは、俺とユイで全て平らげてしまい、満足そうにミルクティーを飲むユイに向かって、ユウキが言った。

「ユイちゃん。午後は、パパとママとでお出かけしよう！」

「おでかけ？」

ユイは、ユウキの言葉にきよとんとした。

「ユイの友達を探しに行くんだ」

「ともだち……って、なに？」

俺たちは顔を見合わせた。

「お友達っていうのは、ユイちゃんのことを助けてくれる人のことだよ。さ、準備しよう」

ユウキは、優しい声音でユイに言い、ユイはこくりと頷いて立ち上がった。

ユイの纏う白いワンピースは、短いパフスリーブで生地も薄く、初冬のこの季節に外出するには如何にも寒そうだ。寒いと言っても、風を引いてダメージを受ける。という事はないのだが、不快な感覚であるのには変わりない。

ユウキは、アイテムリストをスクロールさせて次々と厚手の衣類を实体化させ、ユイに似合いそうなセーターを発見すると、そこで動きを止めた。

通常、衣類を装備する時は、スターテスウインドウから装備フィギュアを操作する事になる。布や液体などの柔らかいオブジェクトの再現は、SAOの苦手分野であり、衣類は独立したオブジェクトと言うより、肉体の一部として扱われるのだ。

「ユイ。ウインドウ、開けるか？」

ユイは、何の事か分からない。という風に首を傾げる。

「右手の指を振ってみるんだ。こんなふう」

俺が指を振ると、手の下に四角い窓が出現する。それを見たユイは、覚束ない手つきで動きを真似たが、ウインドウが開く事はなかった。

だが、ユイが左手を振った途端、手の下に紫色に発光するウインドウが表示された。

「でー！」

嬉しそうになつこり笑うユイの頭上で、俺とユウキは呆気に取られたように顔を見合わせた。



もう何がなんだか解らない。

「ユイちゃん、ちよつと見せてね」

ユウキが屈み込むと、ユイのウインドウを覗き込んだ。だが、スターテスは通常本人しか見る事ができず、そこには無地の画面が広がってるだけだ。

「ユイちゃん、ちよつとごめんね」

ユウキはユイの右手を取ると、その人差し指を移動させ、勘で可視モードボタンがあると思われる辺りを触れた。

狙い変わらず、短い効果音と共にウインドウの表面に見慣れた画面が浮かび上がってきた。基本的には、他人のスターテスを見るのは重大なマナー違反であるが、こういう状況だ、仕方がないだろう。

「な、なにこれ!?!」

「な、なんだこれ!?!」

俺とユウキは、ユイのスターテス画面を見て声を上げた。

メニューウインドウのトップ画面は、基本的に三つのエリアに分けられている。最上部に名前の英語表示と細いHPバー、EXPバーがあり、その下の右半分に装備フィギア、左半分にコマンドボタン一覧という配置になっている。

だが、ユイのウインドウの最上部には《Yu i | M H C P O O 1》という奇妙なネーム表示があるだけで、HPバーもEXPバーも、レベルの表示すら存在しなかった。僅かに《アイテム》と《オプション》の二つだけが存在するだけだ。

「……システムのバグか?」

「ボクにはバグというよりは、元々こういうデザインになっている様にも見えるけど……」

ユウキは、改めてユイの指を動かし、アイテム欄を開かせ、その表面にテーブルから取り上げたセーターを置くと、一瞬の光を発してアイテムウインドウに格納された。次いでセーターをドラッグし、装備フィギアとドロップする。

直後、鈴の音のような効果音と共にユイの体が光の粒に包まれ、淡いピンク色のセーターがオブジェクト化させた。

「わあー」

ユイは顔を輝かせ、両手を広げて自身の体を見下ろした。ユウキは、更に同系色のスカートと黒タイツ、赤い靴を次々に装備させ、最後に元々着ていたワンピースをアイテム欄に戻すとウインドウを消去した。

「それにしても、お前ってピンク色の服持ってたのな」

「むっ、それはどういう事かな」

「い、いやー、深い意味はないんだぞ。ユウキは、紫っていうイメー

ジがあるからさ。何か以外でな」

「そうかも。でも、ボクはピンクも好きだよ」

「ん、そうか。ピンク色の服期待してます」

とまあ、いつものようにやり取りをしていたら、

「パパ、だっこ」

ユイは屈託なく両手を伸ばし、俺は苦笑しながらユイの体を横抱きにして抱え上げた。

「一応、すぐに武装できるように準備してくれ。街からは出ないつもりだけど……あそこは《軍》のテリトリーだからな」

「ん、りようかい。気を抜かない方がいいね」

頷いて、アイテム欄を確認すると、俺たちはドアへと歩き出した。

向かう先は、第1層である《はじまりの街》だ――。

### 第33話《軍の徴税部隊》

第1層《はじまりの街》に降り立ったのは、数カ月ぶりの事だった。はじまりの街は、アインクラッド最大の都市であり、冒険に必要な機能は他のどの街よりも充実している。

物価も安く、宿屋の類も存在し、効率だけを考えるならここをベースタウンにするのがもつとも適しており、戦う事が出来るプレイヤーは、はじまりの街に留まっている者はいない。

そして、この中央広場に立って大空を仰ぐと思い出す。全てが終わり、全てが始まった事を。

俺たちは、転移門を出たところで立ち止まり、巨大な広場と、その向こうに横たわる町並を見渡した。

「ユイちゃん、見覚えのある建物とか、ある？」

ユウキが俺におんぶされているユイの顔を覗き込んだ。

ユイは難しい顔で、広場の周囲に連なる石造りの建物を眺めていたが、やがて首をふった。

「わかんない……」

「はじまりの街はおそろしく広いし、仕方ないんじゃないか。まあ、歩いていけばそのうち何か思い出すかもしれないし、とりあえず、中央広場に行くか」

「だね」

頷き合い、俺たちは南に見える大通りに向かって歩き始めた。

それにしても、歩きながら広場を見渡すが、意外に人がいない。

見える人影はゲートか広場の出口に向かってする移動して人ばかりで、立ち止まったり、ベンチに腰をかけたリ掛けたりする者は、殆んどいない。

「ねえ、キリト」

「ん、どうした？」

「はじまりの街って、今プレイヤー何人くらい居るんですっけ？」

「うーん、そうだな……。生き残っているプレイヤーが約六千人、《軍》を含めるとその三割くらいがはじまりの街に残っているらしい

から、二千弱ってどこじゃないか？」

「そのわりには、人が少ないと思わない？」

「はじまりの街はアインクラッドで一番広く、尚且つ安全な層だ。」

「一般プレイヤー、戦えないプレイヤーは、はじまりの街に留まっ  
ているはず。」

「マーケットの方に集まっているんじゃないか？」

大通りに入り、店舗と屋台が建ち並ぶ市場エリアに差し掛かっ  
ても、相変わらず街は閑散としていた。元気のいいNPC商人の呼び  
込みが、通りを虚しく響き渡っていく。

どうにか、通りの中央に立つ大きな木の下に座り込んだ男性プレ  
イヤーを見つけ、声をかける。

「あの、すみません」

ユウキが口を開く。

真剣な顔で高い梢を見上げている男は、顔を動かさなまま面倒く  
さそうに口を開いた。

「なんだよ」

男は、俺たちを遠慮ない目つきでじろじろと見てきた。

「なんだ、あんたらよそ者か？」

「ああ……、この子の保護者を探しているんだ」

俺は背中であうとうとしてユイを指し示す。

男は、ユイを見やると多少目を丸くしたが、すぐに視線を頭上の梢  
に戻した。

「……迷子かよ、珍しいな。……東七区の川べりの教会に、ガキのプレ  
イヤーがいつぱい集まって住んでいるから、行ってみな」

「ありがとう、おじさん」

ユウキが男性プレイヤーにぺこりと頭を下げた。

俺たちがこの場を離れようとした時、男が声を掛けてきた。

「お前さんたち、軍の徴税部隊には出くわすなよ。 奴ら、よそ者だか  
らって容赦ないぜ」

男の話では、体のいいカツアゲらしい。

「ああ、わかった」

俺はマップを覗き込みながら教会へと向かい、その隣に、ユウキが並ぶようにして歩く。

相変わらず人影が少ない広い道を、南東目指して数十分歩くと、やがて広大な庭園めいたエリアに差し掛かった。色づいた広葉樹の林が、初冬の寒風の中侘しげに梢を揺らす。

「えーと、マップではこの辺が東七区なんだけど。……男が言ってた教会ってどこだ？」

「あ、あそこじゃない？」

ユウキが道の右手に広がる林の向こうに一際高い尖塔を見つけ、視線でその方角を見やった。

青灰色の屋根を持つ塔の天辺に、十字に円を組み込んだ金属製のアークが輝いている。間違えなく教会の印だ。

「あそこで間違えなさそうだ。行ってみるか」

「ん、りょうかい」

俺たちは頷くと、教会に向かって歩き出した。

教会の建物は、街の規模に比べると小さなもので、二階建てで、シンボルである尖塔も一つしかない。

ユウキが、正面の大きな扉に到着すると、右手で片方の扉を押し開けた。内部は薄暗く、正面の祭壇を飾る蠟燭の炎だけが石敷きの床を照らしている。

入口から上半身だけ差し入れ、ユウキが呼びかける。

「どなたかいませんか？」

だが、声の残響エフェクトの尾を引きながら消えていっても、誰も出てくる様子はない。

「誰もいないのかな……？」

「……いや、人がいるよ。右の部屋に三人、左に四人……。二階にも何人か。ユウキも、索敵を試みれば分かる」

「……あっ、本当だ。それはそうと、何で身を隠してるのかな？」

「うーん、さっきの男が言ってた事に関係してるのかもな」

俺たちは、そつと教会内部に足を踏み入れたが、静寂が周囲を包み、その中で息を潜める気配がある。

「あの、すみません、人を探しているんですけど!」

ユウキがもう一度呼びかける。

すると、右手ドアが僅かに開き、その向こうから細い女性の声が響いてきた。

「……《軍》の人じゃ、ないんですか?」

「違いますよ。上の層から来たんです」

俺がそう言った。

俺とユウキは、剣はおろか戦闘用の防具ひとつ身に付けていない。軍所属のプレイヤーは、常にユニフォームの重装備を纏っているので、格好だけでも軍とは無関係であることが解るはずだ。

やがてドアがゆっくり開くと、一人の女性プレイヤーがおずおずと姿を現した。

暗青色のシヨートヘア、黒縁の大きな眼鏡をかけ、その奥で怯えをばらんだ深緑色の瞳をいっぱいに見開いている。簡素な濃紺のプレーンドレスを身に纏い、手には鞆に収められた小さな短剣。

「ほんとうに……、軍の徴税隊じゃないんですね……?」

ユウキは、安心させるように微笑みかける。

「ボクたちは人を探していて、今日上から来たばかりなんです」

「だからまあ、軍とは何の関係もないですよ」

——その途端、

「上から!? ってことは本物の剣士なのかよ!」

甲高い、少年めいた叫びと共に、女性の背後のドアが大きく開き、中から数人の人影がばらばらと走り出て来た。直後、祭壇の左手の扉も開け放たれ、同じく数名が駆け出してくる。どれもこれも少年少女と言つていい若いプレイヤーたちだった。下は十三歳、上は十五歳といったところだろう。

「こら、あんたたち、部屋に隠れてなさいって言ったじゃない!」

慌てたように子供たちを押し戻そうとする女性だけが、二十歳前後だと思われる。もっとも、誰一人として命令に従う子はいないが。

だが、真つ先に部屋から走り出てきた、赤毛で短髪のつんつん逆立てた少年が失望の叫び声を上げた。

「なんだよ、剣の一本も持ってないじゃん。ねえあんた、上から来たんだろう？ 武器くらい持ってないのかよ」

「いや……、ないことはないけど」

俺が答えると、子供たちの顔がぱつと輝いた。見せて見せてと、口々に言い募る。

「こらっ、初対面の方に失礼なこと言っちゃだめでしょう。——すいません、普段お客様なんてまるでないものでしたから……」

いかにも恐縮したように頭を下げる眼鏡をかけた女性。

「そういえば、幾つかアイテムストレージに入れっぱなしの武器があつた気がする」

「ああ、あつたかもな。ドロップしてそのまま放置してたやつが。んじゃ、頼む」

「OK」

ユウキはウインドウを開き、指を動かした。十五個ほどの武器アイテムがオブジェクト化され、傍らの長机の上に積み上げられている。く。

ユウキがウインドウを閉じると、子供たちは、剣やメイスに手を出しては「重ーい」「かっこいい」と歓声を上げてその周囲に群がった。

中には、武器で遊んでいる子供もいる。

圏内では、武器をどう扱おうとそれによってダメージを受けることは有り得ないので大丈夫だろう。

「……すみません、ほんとうに……」

眼鏡をかけている女性が、困つたように首を振りつつも、喜ぶ子供たちの様子に笑みを浮かべて言った。

「……あの、こちらへどうぞ。今お茶を準備しますんで……」

礼拝堂の右にある小部屋に案内された俺たちは、振舞われた熱いお茶を一口飲んでほつと息をついた。

「それで……、人を探していらっしやるということでしたけど……？」

向かいの椅子に腰掛けた眼鏡をかけた女性プレイヤーが小さく首を傾げて言った。

「ええ、そうです。あつそう言えば自己紹介をしていませんでした。

ボクはユウキ」

「俺はキリトだ」

「私はサーシャです」

ペコりと頭を下げ合おう。

「で、俺の膝の上で眠っている子がユイです」

俺は、膝で眠っているユイの頭を撫でながら言った。

そして、ユウキが口を開く。

「この子、22層の森の中で迷子になっていたんですよ。記憶を

……なくしていて」

「まあ……」

サーシャの、大きな深緑色の瞳が眼鏡の奥でいっぱいに見開かれる。

「装備も、服以外は何もなくて、上層で暮らしていたとは思えなかった  
ので……。 はじまりの街にこの子を知っている人がいるん  
じゃないかと思って探しに来たんです。 こちらの教会で、子供たち  
が集まって暮らしていると聞いたので」

「……そうだったんですか」

サーシャは、お茶をひとくち飲んでから話し始めた。

「……この教会には、小学生から中学生くらいの子供たちが二十人く  
らい暮らしています。 多分、現在この街にいる子供プレイヤーのほ  
ぼ全員だと思います。 このゲームが始まった時……」

サーシャは言葉を続ける。

「それくらいの子供たちの殆んどは、ゲームが始まってパニックを起  
こして、多かれ少なかれ精神的な問題をきたしました。 勿論ゲーム  
に適応して、街を出て行った子供もいるんですが、それは例外的なこ  
とだと思えます。 当然ですよ、まだまだ親に甘えたい盛りには、い  
きなりここから出られない、ひよつとしたら二度と現実に戻れない、  
なんて言われたんですから……。 そんな子供たちは大抵虚脱状態  
になって、中には何人か……。 そのまま回線切断してしまった子もい  
たようです」

サーシャの口元が固く強張る。



「私、ゲーム開始から1ヶ月くらいは、ゲームクリアを目指そうと思ってフィールドでレベル上げしていたんですけど……。ある日、そんな子供たちの一人を街角で見かけて、どうしても放っておけなくて、連れてきて宿屋で一緒に暮らし始めたんです。それで、そんな子供たちが他にもいると思っただら居ても立ってもいられなくなって、街中を回っては独りぼっちの子供に声を掛けるようなことを始めて、気付いたら、こんなことになっていたんです。だから……。お二方みために、上層で戦っていらっしやる方もいるのに、私はドロップアウトしちやっただのが申し訳なくて」

「……そんなことないですよ、サーシャさん」

「サーシャさんは立派に戦っている」

「ありがとうございます。でも義務感でやっているわけじゃないんですよ。子供たちと暮らすのはとっても楽しいです」

ニコリと笑い、サーシャは俺の膝の上で眠るユイを心配そうに見つめた。

「だから……。私たち、二年間ずっと、毎日一エリアずつ全ての建物を見て回って、困っている子供がいなか調べているんです。そんな小さい子が残されていれば、絶対気付いたはずですよ。残念ですけど……。はじまりの街で暮らしていた子じゃあ、ないと思います」

「そうですか……」

俺とユウキは俯いてしまった。

俺が口を開いた。

「そういえば、毎日の生活費、どうしているんですか？」

「あ、それは、私の他にも、ここを守ろうとしてくれる年長の子が何人か居て……。彼らは街の周辺のフィールドなら絶対大丈夫なレベルになっていきますので、食事代くらいはなんとかなっています。贅沢はできませんけどね」

「へえ、それは凄いな」

「だから、最近目を付けられちゃって……」

サーシャの穏やかな目が一瞬にして厳しくなった。言葉を続けようと口を開けた、その時――。



硬い声でサーシャが言う。

「人聞きの悪いこと言うなって。すぐに返してやるよ、ちよつと社会常識つてもんを教えてやったらな」

「そうそう。市民には納税の義務があるからな」

わははは、男たちが甲高い笑い声を上げた。固く握られたサーシャの拳がぶるぶると震える。

「ギン！ ケイン！ ミナ！ そこにいるの?!」

サーシャが男たちの向こうに呼びかけると、すぐに怯えきった少年少女の声があった。

「先生！ 先生！……助けて」

「お金なんていいから、全部渡してしまいなさい！」

「先生……だめなんだ……！」

今度は、しぼり出すような少年の声。

「くひひっ」

道を塞ぐ男の一人が、ひきつるような笑いを吐き出した。

「あんたら、ずいぶん税金を滞納しているからなあ……。金だけ

じゃ足りないよなあ」

「そうそう、装備も置いていってもらわないとなア。防具も全部

……何から何までな」

男たちは下卑<sup>げび</sup>た笑いを見せ、俺は路地の奥で何が行われているか咄嗟に察した。恐らくこの《徴税隊》は、少女を含む子供たちに、着衣も全て解除しろと要求しているのだ。

俺は、この屑野郎共に殺意にも似た憤りが芽生えるが、この場で爆発寸前なのはユウキだ。そこら辺のモンスターならば、殺気だけで蹴散らす事ができるであろう。

そして、ユウキはアイテムストレージから《黒紫剣》取り出し、鞘を腰に装備する。

「……キリト、後ろはお願いね」

「お、おう。任せとけ」

頷き、無造作に地を蹴ると、敏捷力を全開にし跳躍する。それを呆然と見上げるサーシャと軍のプレイヤーの頭上を飛び越え、四方の

壁に囲まれた空き地へと降り立った。

その場にいた数人の男たちが後ずさる。

空き地の片隅には、十代前半と思しき二人の少年と少女が固まって身を寄せ合っていた。防具はすでに除装され、簡素なインナー姿だ。

俺はユイを右手で抱き上げ、アイテムストレージから《エリユシデータ》取り出し、背に装備した鞆から、柄を握り抜剣した。

「もう、大丈夫だよ。装備を元に戻して」

ユウキがそう言うと、目を丸くした少年たちは頷き、慌てて足元から防具を拾い上げ、ウインドウを操作し始めた。

そして俺は、後ろに隠れているサーシャと子供たちの護衛をすることにした。

「おい……。 オイオイオイ!!」

ユウキから見て、先頭に立っていた軍のプレイヤーの一人が喚き声を上げた。

「おい……。 嬢ちゃん……。 《軍》の任務を妨害すんのか!」

「まあ、待て」

それを押し留め、ひときわ重武装の男がユウキの前に進み出てきた。 どうやらリーダー格らしい。

「あんたら見ない顔だけど解放軍にト「おじさん、うるさい……」

顔を引き攣らせた男は、腰から大ぶりなブロードソードを引き抜くと、わざとらしい動作で刀身を掌に打ち付けながらユウキに歩み寄る。

「……おじさん、剣を抜いたって事は、斬られる覚悟はあるんだね……」

ユウキは、腰に装備している鞆から黒紫剣の柄を握り抜剣する。

「おお、解放軍と戦おうってかい、戦うんなら《圏外》でやるか!」

その一言を聞いた途端、ユウキの怒りが頂点に達した。

「……うん……。 戦おうか。 圏外でやってもいいけどね……。 でも、そしたら君、死ぬよ……」

そしてユウキは、軍のリーダー格の隣に瞬時に移動し、黒燐剣最上

位剣技《マザーズ・ロザリオ》計十一連撃を放った。

軍のリーダー格は、ユウキが放った攻撃を受け、後方の壁に穴を開けながら思いっきり後方へ吹き飛ぶ。おそらく、十五の壁を突き破って吹き飛ばされたと予想される。まあ、《マザーズ・ロザリオ》を受けて、それだけで済んだのは奇跡に近いけど。

「……安心していいよ、HPは減らないから。さあ、次は誰」

ユウキは、残りの軍の連中に言った。

また、犯罪防止コード圏内では、武器による攻撃をプレイヤーに命中でも不可視の障壁に阻まれるのでダメージが届くことは無く、ソードスキルの威力によっては、僅かながらノックバックが発生するだけだ。

だが、慣れない者にとっては、HPが減らないと解っていても耐えられないものではない。

「ひあつ……、た、助けて」

ユウキの奴、今の攻撃で完全に恐怖を植え付けたな。てか、《マザーズ・ロザリオ》はやりすぎだと思ったが、軍の連中の自業自得である。

そして、軍の連中はリーダー格を見捨て、この場から逃走した。

まあ、当然の結果だけど。

ユウキは、軍のプレイヤーの処理を確認してから、黒紫剣を腰の鞆に収めた。

「スツキリしたー」

ユウキは伸びびをしていた。

振り返ると、先程の戦闘を見ていた、サーシャと教会の子供たちは絶句して立ち尽くしていた。

「あ……」

ユウキは、先程の戦闘を思い出し息を詰めて一步後ずさった。だが突然、子供たちの先頭に立つ赤毛で逆毛の少年が、目を輝かせながら叫んだ。

「すげえ……、すげえよ姉ちゃん！ 初めて見たよあんなの！」

「このお姉ちゃんは無茶苦茶強いだろう」

俺はユウキの元へ歩み寄る。

「だけどもあ、《マザーズ・ロザリオ》を使うとは予想外だった」

「だ、だって、頭にきたんだもん」

「俺も否定はしないけど」

俺はユイを右手で抱き、左手には剣を下げている。

その時だった。

「みんなの……みんなの、こころが」

俺の腕の中で、ユイが宙に視線を向け、右手を伸ばしていた。俺とユウキは、その方角を見やったが、そこには何も無い。

「みんなのこころ……が……」

「ユイ！ どうしたんだ！ ユイ！」

俺が叫ぶとユイは二、三度瞬きして、きよんとした表情を浮かべた。

ユウキは、ユイの手を握る。

「ユイちゃん……。何か、思い出したの!？」

ユウキが声を上げて言った。

「……わたし……わたし……」

眉を寄せ、俯く。

「わたしは、ここには……いなかった……。ずっと、ひとりで、くらいところにいた……」

何かを思い出そうとするかのように顔しかめ、唇を噛む、と、突然――。

「うあ……あ……あああ！」

その小さな体が仰け反り、細い喉から高い悲鳴が迸った。

S A O 内で初めて聞くノイズじみた音が俺の耳に響いた。直後、

ユイの硬直した体のあちこちが、崩壊するように激しく振動した。

「ゆ……ユイちゃん……！」

ユウキが悲鳴を上げ、その体を両手で必死に包み込む。

「ママ……パパ……こわいよ」

かほそい悲鳴を上げるユイを、ユウキは俺の右腕から抱き上げ、ユウキはぎゅと胸に抱きしめた。数秒後、怪奇現象は収まり、硬直し

たユイの体から力が抜けた。

「なんだよ……今の……」

俺のうつろな弦きが、静寂に満ちた空き地に低く流れた――。

## 第34話《アインクラッド解放軍》

第一層 教会へ

「ミナ、パンひとつ取って！」

「ほら、余所見しているところですよ！」

「あーっ、先生ー！ ジンが目玉焼き取ったー！」

「かわりにニンジンやったらろー！」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「これは……、すごいな……」

「……ボクはこれくらい賑やかな方が好きだな」

俺たちは、眼前で繰り広げられる、戦場さながらの朝食風景に、呆然としてしまった。

はじまりの街、教会の一階広間。 巨大な長テーブル二つに所狭しと並べられた大皿に載る、卵やソーセージ、野菜サラダを、二十数人の子供たちが盛大に騒ぎながらパクついている。

「でも、楽しそうだな」

「だね」

俺とユウキ、サーシャは、少し離れた丸テーブルに座り、微笑しながらお茶を口許に運んだ。

「毎日こうなんですよ。 いくら静かになっても聞かなくて」

そう言いながら、子供たちを見るサーシャの目は心底愛おしそうに細められている。

「子供、好きなんですネ」

ユウキがサーシャに言うと、サーシャは照れたように笑った。

「向こうでは、大学で教職課程取っていたんです。 ほら、学級崩壊とか長いこと問題になっていたじゃないですか。 子供たちを私が導いてあげるんだーって、燃えてて。 でもここに来て、あの子たちと暮らし始めたら、何もかも見ると聞くでは大違いで……。 むしろ私が頼って、支えられている部分のほうが大きいと思います。 でも、それでいいって言うか……。 それが自然なことに思えるんです」



「何となく解る気がします」

ユウキは頷いて、隣の椅子に座り、食事をしてるユイの頭をそつと撫でた。ユイの存在がもたらす温かさは驚く程だ。目に見えない羽根で包み、また包まれるような、静かな安らぎを感じる。

昨日、謎の発作を起こし倒れたユイは、幸い数分で目を覚ました。だが、すぐに長距離を移動させたり、転移ゲートを使わせる気にはならなかった。

また、サーシャの熱心な誘いもあり、教会の空き部屋を一晩借りることにした。

今朝からはユイの調子も良いようで、俺たちは安心したのだが、しかし基本的な状況は変わっていない。微かに戻ったユイの記憶によれば、はじまりの街に来たことは無いようだった。

そもそも、保護者と暮らしていた様子すら無いのだ。という事は、ユイの記憶障害、幼児退行といった症状もまるで不明で判らないのだ。これ以上何をしてもいいか思いつかない。——もしかしたら、これ以上出来る事が無いのかもしれない。

だが、そうなった場合は、俺たちはユイと一緒に過ごそうと思う。休暇が終わり、前線に戻る事があつたとしても、何らかの方法は存在するはずだ。——これは、昨夜にユウキと決めた事柄なのだ。

俺はカップを置き、話し始めた。

「サーシャさん……」

「はい？」

「……軍のことなんです。俺が知っている限りじゃ、あの連中は専横が過ぎることはあつても治安維持には熱心だった。でも昨日見た奴等はまるで犯罪者だった……。いつから、ああなんです？」

サーシャは口許を引き締めると、答えた。

「軍の方針が変更されたのは、半年くらい前ですね……。徴税と称して恐喝まがいの行為を始めた人たちと、それを逆に取り締まる人たちがいて。軍のメンバー同士で対立している場面も何度も見ました。噂じゃ、上のほうで権力争いか何かあつたみたいで……」

何かの派閥があるのか？ まあでも、軍は千人以上の巨大集団だ。

一枚岩ではないだろう。　奴は、この状況を知ってて放置してるのか？

だが、奴が攻略組を動かす事はないだろう。《笑う棺桶》ラフィン・コライン討伐作戦の指揮等は、君たちに任せる。の一言だけ。となると、俺たちだけでできる事はたかが知れてしまう。

俺が考え込んでいた時、ユウキが口を開いた。

「誰か来るよ」

俺も索敵スキルを使用し、

「ああ、間違いなく一人こちらに近づいて来ているな」

「え……。　またお客様かしら……」

サーシャの言葉に重なるように、教会内に音高くノックの音が響いた。

教会の扉を開けた先に佇むのは、長身の女性プレイヤーだった。

銀色の長い髪をポニーテールに束ね、れいり伶俐という言葉がよく似合う、鋭く整った顔立ちをしているプレイヤーだった。

鉄灰色のケープに隠されているが、女性プレイヤーが身に纏う濃緑色の上着と大腿部だいたいぶがゆつたりとしたズボン、ステンレススチール風に鈍く輝く金属鎧は、間違いなく《軍》のユニフォームだ。

右腰にはショートソード、左腰にはグルグルと巻かれた黒革にウイツプが吊るされている。

女性の身なりに気付いた子供たちも一斉に押し黙り、瞳に警戒の色を浮かべて動きを止めている。　だが、サーシャは子供たちに笑いかけると、安心させるように言った。

「みんな、この方は大丈夫よ。　食事を続けなさい」

サーシャの言葉により子供たちは、ほっとしたように肩の力を抜き、食事を続けた。

礼をして歩いてきた女性プレイヤーは、俺たちが座っている丸テーブルまで歩を進め、サーシャに椅子を勧められると一礼して腰をかけた。

俺とユウキは、いきなりの事で事情が呑み込めていない。

「ええと、この方はユリエールさん」

ユリエールと紹介された鞭使いは、真っ直ぐな視線を向かいに座る俺たちに向け、頭を下げて口を開いた。

「初めまして、ユリエールです。ギルドALFに所属しています」  
「ALF?」

初めて聞くギルド名に、俺とユウキは首を傾げた。

「あ、すみません。『アインクラッド解放軍』の略称です。正式名は、どうも苦手で……」

女性の声は、落ち着いた艶やかなアルトだった。

「……失礼ですが、鬼神、で合ってますか?」

「……ああ、そうだ」

「……やっぱり、戦場に出てる人の前ではすぐにバレちゃうね」

そう言つて、俺たちは肩を落とした。

「……連中が軽くあしらわれるわけだ」

連中、というのが昨日の暴行恐喝集団のことだと悟った俺たちは、警戒心を強めた。

「つまり、昨日の件で抗議に来たの」

「とんでもない。その逆です、よくやってくれたとお礼を言いたいくらい」

事情が掴めず沈黙すると、ユリエールは姿勢を正した。

「今日は、お二方をお願いがあつて来たんです」

「お願い……?」

ユリエールは、銀色の髪を揺らして頷いた。

「はい。最初から説明します。軍というのは、昔からそんな名前だったわけじゃないんです……。軍の名前がALFになったのは、嘗てのサブリーダーで現在の実質的支配者、キバオウという男が実権を握ってからのことです。最初はMTDという名前で……、聞いたこと、ありませんか?」

ユウキは首を傾げていたが、俺が即答した。

「『MMOトウデイ』の略だろう。SAO開始当時の、日本最大のネットワーク総合情報サイトだ。ギルドを結成したのは、その管理者だったはずだ。名前は……シンカー」

その名前を口にした時、ユリエールの顔が僅かに歪んだ。

「彼は……決して今のような、独善的な組織を作ろうとしたわけじゃないんです。情報とか、食料とかの資源をなるべく多くのプレイヤーで均等に分かち合おうとしただけで……」

危険を極力減らした上で安定した収入を得て、それを均等に分配しようという思想自体は間違っていない。だが、MMORPGの本質はリソースの奪い合いであり、SAOのような異常かつ極限的状态のゲームになっても変わらない。

故に、理想を実現する為には、組織の現実的な規模と強力なリーダーシップが必要だった。だが、軍は大きくなりすぎた。得たアイテムの秘匿が横行し、粛清、反発が相次ぎ、リーダーは徐々に指揮権を失っていった。

「そこに台頭してきたのがキバオウという男です」

キバオウって奴は、第1層ボス攻略会議の時に暴れた尖がり頭の事だ。

「彼は、シンカーが放任主義なのをいいことに、同調する幹部プレイヤー達と体制の強化を打ち出して、ギルドの名前をアインクラッド解放軍に変更させました。更に公認の方針として犯罪者狩りと効率のいいフィールドの独占を推進したのです。それまで、一応は他のギルドとの友好も考え狩場のマナーを守ってきたんですが、数の力で長時間の独占を続けることでギルドの収入は激増し、キバオウ一派の権力はどんどん強力なものとなっていきました。シンカーはほとんど飾り物状態で……。キバオウ派のプレイヤーは調子に乗って、街区圏内でも《徴税》と称して恐喝まがいの行為すら始めたのです。昨日、あなた方が痛い目に遭わせたのは、そんな連中の急先鋒だった奴等です」

ユリエールは一息つくくと、サーシャの淹れたお茶を含み、続けた。「ですが、キバオウ派にも弱みはありました。それは、資財の蓄積だけに現を抜かせて、ゲーム攻略をないがしろにし続けたことです。本末転倒だろう、と言う声が末端のプレイヤーの間で大きくなって……。

その不満を抑えるため、最近キバオウは無茶な博打に出まし

た。配下の中で、ハイレベルプレイヤー十数人による攻略パーティーを組んで、最前線のボス攻略に送り出したんです」

俺たちは顔を見合わせた。74層迷宮区フロアボス《ザ・グリーンアイズ》に挑み、無残に散った軍のプレイヤーたち。

コーバッツを攻略に向かわせたのは、尖がり頭だという事になる。「いかにハイレベルと言っても、もともと我々は、攻略組の皆さんに比べれば力不足は否めません。……結果、パーティーは敗退、隊長は死亡という最悪の結果になり、キバオウはその無謀さを強く糾弾されたのです。もう少しで彼を追放できる所まで行つたのですが……」

ユリエールは強く唇を噛んだ。

「三日前、追い詰められたキバオウは、シンカーを罠に掛けるという強硬策に出ました。……シンカーをダンジョンの最奥に置き去りにしたんです。シンカーは、キバオウの『丸腰で話し合おう』という言葉を信じてしまい、……転移結晶も持っていかなかったんです……」

俺は、アホか。とも言いそうになつたが、途中で止める事に成功した。

「それで、シンカーさんは!?」

ユウキはユリエールに問いかけた。

「彼は、まだ生きています。《生命の碑》の彼の名前はまだ無事なので、どうやら安全地帯までは辿り着けたようです」

俺たちは胸をなで下ろした。

「ただ、場所がかなりハイレベルなダンジョンの奥なので、身動きが取れないようで……。ご存知のとおりダンジョンにはメッセージを送りませんし、中からはギルドの倉庫ストレージにアクセスできませんから、転移結晶を届けることもできないのです」

出口を死地のだ真ん中に設定した回廊結晶を使う殺人は《ポータルPK》というメジャーな手法で、当然シンカーも知っていたはずだ。反目していたとは言え、同じギルド仲間、サブリーダーがそこまでするとは思わなかつたのだろう。

ユリエールは『いい人過ぎたんです』と呟き、続ける。

「……ギルドリーダーの証である《約定のスクロール》を操作できるのは、シンカーとキバオウだけ、このままシンカーが戻らなければ、ギルドの人事や会計までもがキバオウの好いようにされてしまいます。シンカーが罠に落ちるのを防げなかったのは彼の副官である私の責任、私は彼を救出に行かなければなりません。ですが、彼が幽閉されたダンジョンは、とても私のレベルでは突破できませんし、《軍》の助力は当てにできません。そんなところに、恐ろしく強い二人組が街に現れたという話を聞きつけ、いてもたってもいられずにこうしてお願いに来た次第です。キリトさん、ユウキさん」

ユリエールは深々と頭を下げ、言った。

「お会いしたばかりで厚顔極まると思いますが、どうか、私と一緒にシンカーを救出に行つて下さいませんか」

悲しいことだが、SAO内では他人の言うことを簡単に信じることは出来ない。今回の事にしても、俺たちを圏外に誘き出し、危害を加えようとする陰謀である可能性は捨てきれない。同じくユウキも沈黙してるといふ事は、俺と同じ事を考えているのだろう。

「……いや、力を貸すのは構わない。だが、話の裏付けがないと厳しいかもな」

「それは、当然ですよね……」

ユリエールは、僅かに俯いた。

「無理なお願いだって事は、私にも解ってます……。でも、黒鉄宮の《生命の碑》にシンカーの名前に、いつ横線が刻まれると思うと、もうおかしくなりそうで……」

確かに、助きたい気持はある。俺もユウキも、大切な人の為に自暴自棄になった経験があるのだから。

——その時だった。今まで沈黙してたユイが、ふとカップから顔を上げた。

「だいじょうぶだよ、パパ、ママ。その人、うそついていないよ」

俺とユウキは呆気にとられ、ユイをまじまじと見つめた。

また、昨日までの言葉のたどたどしさが嘘のような立派な日本語である。

「ユ……ユイちゃん、そんなこと、判るの……？」

ユウキがユイの顔を覗き込んで問いかけると、頷いた。

「うん。……うまく……言えないけど、わかる……」

俺はユイの頭に右手掌を置き、くしゃくしゃと撫でてあげた。

「そうだな、疑って後悔するよりは信じて後悔しようか。きっと何とかなるよ」

「……もう、キリトは相変わらずなんだから」

そう言つて、ユウキは苦笑し、ユリエールに言った。

「シンカーさん救出に手を貸します」

「ありがとう……。ありがとうございます……」

ユリエールは、瞳に涙を溜めながら、深々と頭を下げた。

「ごめんね、ユイちゃん。これからママとパパは、お出かけするからお留守番していてね」

ユウキがユイの頭を撫でて言った。だが――、

「いやだ！ パパとママと一緒に行くー！」

ユイが足をバタバタさせて言ってきた。

お、お。これが反抗期つてやつか。

「いいか、ユイ。これから遊びに行く場所は危ないんだ。だから、

サーシャさんたちと、良い子にお留守番だ」

「やだやだやだ！ 一緒にいくー！」

ユイは、首を左右に振り出した。

結果、俺たちは折れてしまい、ユイを連れてダンジョンに向かうことになった――。

### 第35話《ユイの涙》

教会の扉から出た後、俺たちは転移結晶を持ったのを確認してから、戦闘服を身に纏い武装した。

俺、ユウキ、ユイは、ユリエールの先導に従って足早に街路を進んでいる。ちなみに、ユイは、ユウキと手を繋いで歩を進めている。俺は、前を歩くユリエールに声を掛けた。

「あ、そう言えば肝心なこと聞いていなかったな。　問題のダンジョンってのは何層にあるんだ？」

「ここです」

ユリエールの答えは簡素だった。

「ここ？」

俺とユウキは、疑問符を浮かべた。

「はじまりの街の……中央部の地下に、大きなダンジョンがあるんです。シンカーは……多分、その一番奥に……」

「マジかよ。　ベータテストの時にはそんなのなかったぞ。不覚だ……」

俺は呻くように言った。

「そのダンジョンの入り口は、黒鉄宮——つまり軍の本拠地の地下にあるんです。　恐らく、上層攻略の進み具合によって開放されるタイプのダンジョンなんでしょうね。　発見されたのはキバオウが実権を握ってからの事で、彼はそこを自分の派閥で独占しようと計画しました。……もちろん、私たちに秘密にして」

「なるほどな、未踏破のダンジョンには一度しか出現しないレアアイテムも多いからな。　さぞかし儲かったろう」

「それが、そうでも無かったんです」

ユリエールの口調が、僅かに痛快といった色合を帯びる。

「基部フロアにあるにしては、そのダンジョンの難易度が恐ろしく高くて……。　基本配置のモンスターだけでも、六十層相当位のレベルがありました。　キバオウ自身が率いた先遣隊は、モンスターに追い回されて、命からがら転移脱出する羽目になったそうです。　使いま



くったクリスタルのせいで大赤字だったとか」

「ははは、なるほどな」

俺の笑い声に応じたユリエールだが、すぐに沈んだ表情を見せた。「でも、今はそのことがシンカー救出を難しくしています。キバオウが使った回廊結晶は、モンスターから逃げ回りながら相当奥まで入り込んだ所でマークしたものらしくて……。シンカーが居るのはそのマーク拠点の先なのです。レベル的には、一対一なら私でもどうにか倒せなくもないモンスターなんです。連戦はとて無理です。——ですが……。鬼神のお二人ならば……」

「まあ六十層位なら……。なんとかなる、よね」

ユウキさん。何故後半は疑問形？

ユリエールが不安がつてしまうので、俺が言葉を被せよう。

「そうだな。てか、七十層レベルのModを二人で撃破してたし、楽勝だろ」

六十層ダンジョン攻略に必要なマージンはレベル70だが、俺たちのレベルは90を超えている。これならば、ユイを守りながらもダンジョンを突破出来るだろう。

だが、ユリエールは気がかりそうな表情のまま、言葉が続けた。

「……それと、もう一つだけ気がかりな事があるんです。先遣隊に参加していたプレイヤーから聞いたんですが、ダンジョンの奥で……。巨大なモンスター、ボス級の奴を見たと……」

俺たちは顔を見合わせる。

「六十層のボスって、どんなボスだっけ」

「えーと、確か……。石でできた鎧武者みたいな奴だっけか？つーか、『さっきのソードスキル、オーバーキルだよね！』ってアスナに指摘されたろ」

この事柄は、俺とユウキで、HPが数ドットしか残っていないかったボスに上位ソードスキルで止めを刺したのだ。

ユウキは苦笑する。

「そうだったね。ボクも姉ちゃんに指摘されたんだっ」

俺たちは、ユリエールに頷きかける。

「数十分もあれば撃退できる」

「だから、気を確かに持って下さい」

「そうですか、良かったー！」

ようやく口許を緩めたユリエールは、何か眩しい物でも見るように目を細めながら言葉を続けた。

「そうかあ……。 お二方は、ずっとボス戦を経験しているんですね……。 すいません、貴重な時間を割いていただいて……」

「気にするな、今は休暇中だから問題ない」

俺は手を振りながら答えた。

話をしている内に、前方の街並みの向こうに黒光りする巨大な建築物が姿を現し始めた。 はじまりの街最大の施設、《黒鉄宮》だ。 正門を入ってすぐの広間にはプレイヤー全員の名簿である《生命の碑》が設置され、そこまでは誰でも入れるが、奥に続く敷地の大部分は軍が占拠してしまっている。

ユリエールは宮殿の正門には向かわず裏手に回った。 高い城壁と、それを取り巻く深い堀が侵入者を拒むようにどこまでも続いている。 人通りはまったくない。

数分歩き続けた後、ユリエールが立ち止ったのは、道から堀の水面近くまで階段が降りている場所だった。 覗き込むと、石壁に暗い通路がぽっかりと口を開けている。

「ここから宮殿の下水道に入り、ダンジョンの入り口を目指します。

ちよつと暗くて狭いんですが……」

ユリエールはそこで言葉を切り、気がかりそうな視線をちらりとユウキと手を繋いでいるユイに向けた。

すると、ユイは心外そうに顔を顰め、

「ユイ、こわくないよー！」

そう主張した。

その様子に、俺たちは思わず微笑を洩らしてしまう。 ユリエールには、ユイの事は『一緒に暮らしている』としか説明していない。

彼女もそれ以上のことは聞こうとしなかったが、流石にダンジョンに伴うのは不安なのだろう。



確かに、ユウキも又シ釣りの時、かなり楽しそうに戦闘してたしなあ。

まあこれは置いて、

「ユリエールさん。シンカーさんの位置まで、後どれくらいですか？」

ユウキがユリエールに問いかけた。

ユリエールは、右手を振ってマップを表示させると、シンカーの現在位置を示すフレンドマークの光点を示した。このダンジョンのマップが無いため、光点までの道は空白だが、もう全体の七割を詰めている。

「シンカーの位置は、数日間動いていません。多分安全エリアに居るんだと思います。そこまで到達できれば、後は転移結晶で離脱できますから……。すみません、もう少しだけお願いします」

ユリエールに頭を下げられ、俺は慌てて手を振った。

「い、いや、好きでやっているんだし、アイテムも出るし……」  
「へえ、どんなアイテムなの？」

ユウキがそう聞いてきたので、俺は『おう』と返事を返し、俺は手早くウインドウを操作し、赤黒い肉塊を出現させた。

グロテスクなその質感に、ユウキの顔を引き攣らせる。

「……何それ」

「カエルの肉！ ゲテモノほど旨いって言うからな、後で料理してくれよ」

「……う、うーん。……ぎりぎり……いけ……る……かなあ」

「ま、マジか！」

俺は声を上げる。

ダメ元で頼んだが、OKが出るとは。まあでも、かなりの葛藤があったらしいけど。んじゃま、いっちょ頑張りますか。

「じゃあ、行こうか」

俺はそう言ってから、最奥に向かって歩を進めた。

ダンジョンに入ってから暫くは水中生物型が主だったモンスター群は、階段を降りる程にゾンビやゴーストといった系統に変化した。

だが、俺は携える二刀は、現れる敵を瞬時に屠り続けた。

マップに表示される現在位置。シンカーが居るとおぼしき安全エリアに着実な速度で近づき続けた。そして遂に、暖かな光が洩れる通路が目に入った。

「あつ、安全地帯だ！」

ユウキが叫ぶと同時に、俺は索敵スキルを使用した。

「奥にプレイヤーが一人居る。グリーンだ」

「シンカー」

もう我慢が出来ないという風に一声叫んだユリエールが、金属鎧を鳴らして走り始めた。剣を両手に掲げた俺と、ユイの手を引くユウキも慌ててその後を追う。

右に湾曲した通路の明かり目指して数秒間走ると、やがて前方に大きな十字路とその先にある小部屋が目に入った。

部屋は眩い程の光に満ち、その入り口に一人の男が立っている。

逆光のせいで顔はよく見えないが、おそらくシンカーだろう。男は、こちらに向かって激しく両腕を振り回している。

「ユリエール——ル！」

こちらの姿を確認した途端、男が大声でユリエールの名を呼んだ。

ユリエールは左手を振り、走る速度を速める。

「シンカー——！」

涙混じりのその声に被さるように、男が叫んだ。

「来ちゃだめだ——っ！ その通路には……っ！」

俺とユウキは、それを聞いて走る速度を緩めたが、ユリエールには聞こえていない。部屋に向かって一直線に駆け寄って行く。

——その時。

部屋の数メートル手前で、通路と直角に交わっている道の右側死角部分に、不意に黄色いカーソルが出現した。

表示された名前は《The Fatalis cythe》。

《運命の鎌》という意味であろう固有名とそれ飾る定冠詞。ボスモンスターの証だ。

「ダメ——！ ユリエールさん、戻って！」



「……………いつ、やばい。俺の識別スキルでもデータが見えない。強さ的には多分90層クラスだ……………」

アインクラッドで一番レベルが高い俺が識別できないのだ……………こいつはやばすぎる。

死神は徐々に空中を移動し、こちらに近づいて来る。

「俺が時間を稼ぐ、早く逃げろ！」

最終的離脱手段である転移結晶も、万能のアイテムでは無い。

クリスタルを握り、転移先を指定してから、実際にテレポートの時間が完了するまで、数秒間のタイムラグが発生する。

その間にモンスターの攻撃を受けると転移がキャンセルしてしまうのだ。なので、時間を稼ぐ殿が必要になる。——これは、俺の役目だ。

「……………ユリエールさん、ユイちゃんを頼みます！」

ユウキがそう叫ぶと、凍りついた表情でユリエールが首を縦に振る。

「バカ！ 早く逃げろ！」

「な!? バカじゃないからね！」

「じゃあ、アホ！」

「あ、アホじゃないもん！」

俺は内心で呆れていた。死ぬかもしれない場面なのに、こんな掛け合いができるなんて……………。

俺は『敵わないなあ』と思いながら溜息を吐いた。

「……………死ぬなよ」

「もちろん。まだ結婚してないしね！」

「お前なあ……………」

それから戦闘が開始された。

死神の鎌を紙一重で回避し、ソードスキルを繰り返すが、全くダメージが与えられていない。また、二人だという事は、スイッチが封じられ、HPを回復させる事が不可能な事を意味していた。

この死神は学習するのか、俺たちの動きを捉え始めた。徐々に鎌が掠るようになり、HPがジワジワを削られていく。

——そして、動きを完全に捉えられたユウキに、大鎌が命を狩り取ろうと迫る。鎌の一撃を、一人で防ぐのは不可能だ。

「させるかッ！」

俺は瞬時にユウキの前に立ち、咄嗟に二刀を十字に交差させた。ユウキも、二刀と合わせる。そして、死神は大鎌を俺たちの頭上めがけて振り下ろしてきた。凄まじい衝撃音と同時に、俺たちバラバラに吹き飛ばされ、床に落下する。

朦朧とした意識のまま、HPを確認すと、俺たちのHPバーはレッドゾーンに割り込んでいた。そしてこれは、次の一撃には耐えられない事を意味している。立ち上がりそうと思うが、体が動かない。

——と、思ったその時。

小さな足音が耳元から聞こえてきた。

視線を向けると、細い手足。長い黒髪。背後の安全地帯に居たはずのユイの姿だ。

「ばかっ！ はやく逃げろー！」

「ユイちゃん、行っちゃダメ！」

俺たちは、必死に上体を起こそうしながら叫んだ。

死神は再び重々しいモーションで大鎌を振りかぶる。この攻撃を受けてしまえば、ユイのHPは確実に消し飛んでしまう。しかし次の瞬間、信じられない事が起こった。

「だいじょうぶだよ、パパ、ママ」

言葉と同時に、ユイの体がふらりと宙に浮いた。

見えない羽根を飛ばたかせた様に移動し、死神の目の前で止まった。あまりにも小さな右手を、そつと宙に掲げる。

死神の大鎌が容赦なくユイに向けて振り下ろされたが、その寸前、紫色の障壁に阻まれ大音響と共に弾き返された。ユイの掌の前には、システムタグが浮かび上がり表示された。【Immortal Object】、不死存在——プレイヤーが持つはずの無い属性。

直後、ユイの右手を中心に紅蓮の炎が巻き起こった。紅蓮の炎が凝縮し、巨大へ姿を変えていく。そして巨剣は、ユイの身長を上回る長さを備えている。



死神は大鎌を前方に掲げ、防御の姿勢を取った。そしてユイは、躊躇せず、炎の刀身を死神に向けて振り降ろす。死神が携える大鎌と、ユイが振り降ろした炎の巨剣が衝突し、炎の刃は、死神の持つ大鎌にじわじわと食い込んでいく。

やがて――、

死神の大鎌が真つ二つ断ち割れた。

炎の刀身は、死神の顔の中心に叩きつけられ、死神は断末魔を響かせながら消滅した。その真ん中に、ユイが俯いて立ち尽くしている。

俺たちはようやく力が戻った体を動かし、剣の刀身を支えにして立ち上がり、ゆっくりとユイに向かって歩み寄った。

「ユイ……」

「ユイ……ちゃん……」

俺とユウキは、ユイに呼びかけたが、ユイは音もなく振り向いた。小さな唇は微笑んでいたが、大きな漆黒の瞳にはいつぱいの涙が溜まっていた。そしてユイは、俺とユウキを見上げたまま、静かに言った。

「パパ……ママ……。　　ぜんぶ、思い出したよ……」

### 第36話《ユイの心》

黒鉄宮地下迷宮最深部の安全エリアは、完全な正方形だ。入り口は一つだけで、中央には磨かれた黒い立方体の石机が設置されている。

俺たちは、石机にちよこんと腰を掛けていたユイを無言で見つめている。また、ユリエールとシンカーには先に脱出してもらったので、今は三人だけだ。

記憶が戻った、と一言を言ってから、ユイは数分間沈黙を続けた。その表情は何故か悲しそうだ。言葉を掛けるのは躊躇われたが、俺は意を決して訊ねた。

「ユイ……。思い出したのか……？ 今までの事、全部？」

ユイは暫く俯き沈黙していたが、こくりと頷いた。泣き笑いのような表情のまま、小さく口を開く。

「はい……。全部、説明します——キリトさん、ユウキさん」

ユイの丁寧な言葉を聞いた途端、何かが終わってしまったのだという、切ない確信があった。

部屋の中に、ユイの言葉がゆっくりと流れ始めた。

「《ソードアート・オンライン》と言う名のこの世界は、一つの巨大なシステムによって制御されているのです。システムの名前は《カードイナル》、それがこの世界のバランスを自らの判断に基づいて制御しているのです。カードイナルは元々、人間のメンテナンスを必要としない存在として設計されました。二つのコアプログラムが相互にエラー訂正を行い、更に無数の下位プログラム群によって世界の全てを調整する……。モンスターやNPC、AI、アイテムや通貨の出現バランス、何もかもがカードイナル指揮下のプログラム群に操作されています。——しかし、一つだけ人間の手に委ねなければならぬものがありました。プレイヤーの精神性に由来するトラブル、それだけは同じ人間でないと解決できない……。その為に、数十人規模のスタッフが用意されるはずでした」

「GM……」

俺がそう呟いた。

「ユイ、つまり君はゲームマスターなのか……？　アーガスのスタッフ……？」

ユイは暫し沈黙した後、ゆっくりと首を振った。

「……カーディナルの開発者たちは、プレイヤーのケアすらもシステムに委ねようと、あるプログラムを試作したのです。　ナーヴギアの特性を利用してプレイヤーの感情を詳細にモニタリングし、問題を抱えたプレイヤーの元を訪れて話を聞く……。《メンタルヘルス・カウンセリングプログラム》、M H C P 試作一号、コードネーム《Y u i》。それが私です」

俺たちは驚愕のあまり息を呑んだ。　言われたことを即座に理解できない。

「じゃあ、ユイちゃんはA I。　プログラムなの……」

ユウキは、ユイに問いかけた。

ユイは、悲しそうな笑顔のままこくりと頷いた。

「プレイヤーに違和感を与えないように、私には感情模倣機能が与えられています。――偽物なんです。　全部……この涙も……。　ごめんなさい、キリトさん、ユウキさん」

ユイは両目からぽろぽろと涙が流れ、涙は光の粒子となり蒸発した。　ユイは言葉を続ける。

「……二年前。　正式サービスが始まった日、カーディナルが予定に無い命令を私に下したのです。　プレイヤーに対する一切の干渉禁止……。　それでも、私はプレイヤーのメンタル状態のモニタリングだけ続けました」

その《予定に無い命令》を下したのは、S A Oでのゲームマスター、茅場晶彦だ。

ユイは、幼い顔に沈痛な表情を浮かべ言葉を続ける。

「――状態は、最悪と言っていいものでした……。　殆んど全てのプレイヤーは、恐怖、絶望、怒りといった負の感情に常時支配され、時として狂気に陥る人すらいいました。　私はそんな人たちの心をずっと見続けてきました。　本来であれば、すぐにそのプレイヤーの元に

赴き、話を聞き、問題を解決しなくてはならない……。しかし、私はプレイヤーに接触する事はできない……。義務だけがあり、権利のない矛盾した状況の中、私は徐々にエラーを蓄積させ、崩壊していききました……」

地下迷宮区の底に、ユイの細い声が流れる。

「ある日、いつものようにモニターをしていると、他のプレイヤーとは大きく異なるメンタルパラメーターを持つ五人のプレイヤーに気付きました。その中でも、二人のプレイヤーのメンタルパラメーターが突出していたのです」

ユイが言う五人とは、俺、ユウキ、アスナ、ラン、今は亡きレンさんの事だろう。

その中でも、俺とユウキのメンタルパラメーターは、飛び抜けていたらしい。だからこそユイは、その二人が気になった。

「喜び、安らぎ……。でもそれだけじゃない……。そう思って私は、二人のモニターを続けました。会話や行動に触れるたび、私の中に不思議な欲求が生まれました。あの二人の傍に行きたい……」

私と話をして欲しい……。私は毎日、二人の暮らすプレイヤーホームから一番近いシステムコンソールで実体化し、彷徨いました。その頃には、もう私はかなり壊れてしまっていたのだと思います……」

「それが、あの22層の森なの……?」

ユウキの言葉に、ユイはゆっくり頷いた。

「はい。キリトさん、ユウキさん……。私、とっても会いたかった……。おかしいですよ、私、ただのプログラムなのに……」

涙をいっぱい溢れさせ、ユイは口をつぐんだ。

そして、ユウキがゆっくり口を開いた。それは、とても優しい声音であった。

「ユイちゃん。ユイちゃんは、プログラムなんかじゃないよ。ボクたちの大切な娘だよ」

俺はユイの前まで行き、頭を撫でてあげた。

「ユイは俺たちの娘だよ。ユイは、もうシステムに操られるだけのプログラムじゃない。だから、自分の望みを言葉にできるはずだ」

よ。ユイの望みはなんだい？」

「私は……私は……」

ユイは、細い腕をいっぱいに広げて伸ばしてきた。

「ずっと、一緒にいたいんです。……パパ……ママ……」

ユウキは溢れる涙を拭いもせず、ユイに駆け寄るとその小さな体をぎゅっと抱きしめた。

「ずっと、ずっと、一緒だよ。ユイちゃん」

だが——ユイは、ユウキの胸の中で、そつと首を振った。

「もう……遅いんです……」

「なんでだ……。 もう遅いつて……」

俺は、途惑った声でユイに問いかける。

「私が記憶を取り戻したのは……あの石に接触したせいなんです」

ユイは部屋の中心に視線を向け、黒い立方体の石机を小さな手で指差した。

「あれは、ただのオブジェクトじゃないんです……。 GMがシステムに緊急アクセスするために設置されたコンソールなんです」

直後、黒い石に突然数本の光が走り、表面に青白いキーボードが浮かび上がった。

「さっきのボスモンスターは、ここにプレイヤーを近づけないようにカーディナルの手によって配置されたものだと思います。 私はこのコンソールにアクセスし、《オブジェクトトレイサー》を呼び出してボスモンスターを消去しました。 その時にカーディナルのエラー訂正能力によって、破損した言語機能を復元できたのですが……。

それは同時に、今まで放置されていた私にカーディナルが注目してしまったということでもあります。 今、コアシステムが私のプログラムを走査しています。 すぐに異物という結論が出され、私は消去されてしまうでしょう。 もう……あまり時間がありません……」

「……嫌だよ……お別れなんて……」

「何とかなるはずだ！ この場所から離れれば」

俺たちの言葉に、ユイは黙って微笑するだけだった。

そして、ユイの白い頬を涙が伝った。

「パパ、ママ、ありがとう。これでお別れです」

「やだよッ！ お別れなんて！ ボクはユイちゃんとたくさん遊んで、たくさんさんの思い出を作りたいよ！」

ユウキは必死に叫んだ。

「暗闇の中……。いつ果てるとも知れない長い苦しみの中で、パパとママとの存在だけが私を繋ぎとめてくれた……。パパとママの温かい心で、みんなが笑顔になれた……。私、それがとっても嬉しかった。お願いです、これからも……。私のかわりに……。みんなを助けて……。喜びを分けてあげてください……。」

ユイの黒髪やワンピースが、その先端から朝露のように儂い光の粒子を撒き散らして消滅を始めた。ユイの笑顔がゆっくり透き通り、重さが薄れていく。

「やだよ！ やだよ！ ユイちゃん、いけないで、いけないでよ、お願いだから！」

溢れる光に包まれながら、ユイはにっこりと笑った。消える寸前、ユイの右手が、ユウキの頬をそつと撫でる。

「ママ、笑って。泣かないで」

溢れる光に包まれながら、ユイはにっこりと笑った。

ひととき眩く光が飛び散り、それが消えた時にはもう、ユウキの腕の中にはからっぽだった。

「うわあああああ！」

抑えようもなく声を上げながら、ユウキは膝を突いた。

「カーディナル！ そう簡単に……。思い通りになると思うなよ！」

俺は部屋の天井を見据え絶叫し、中央の黒いコンソールに飛びついた。表示されたままのホロキーボードを素早く叩く。

「キリト……。何を……。!?!」

「今なら……。今ならまだ、GMアカウントでシステムに割り込めるかも……。俺がゲーム関係に強いのは知ってるだろ」

ここから先は《黒の剣士》キリトの出番は無い。ここからは現実世界でコンピューターに長けていた桐ヶ谷和人の出番だ。

俺は高速で必要なコマンドを立て続けに入力した。そして、不意

に黒い岩でできたコンソール全体が青白くフラッシュし、破裂音と共に後方に弾き飛ばされた。

「ぐわあ！ い、痛え！」

「大丈夫!？」

ユウキは、床に倒れた俺慌てて歩み寄る。

俺は頭を振りながら上体を起こし笑みを浮かべると、右手に握っている大きな涙の形をしたクリスタルを見せた。石の中央では、白い光が瞬いている。

「それは……？」

「……ユイが起動した管理者権限が切れる前に、ユイのプログラム本体をシステムから切り離して、オブジェクト化したんだ……。このクリスタルはユイの心だよ」

俺は涙の形をしたクリスタルを、ユウキの手の中にゆつくりと落としました。再び床に寝転がり、目を閉じた。そしてユウキは、クリスタルを抱きしめて言った。

「ユイちゃん……。そこにいるんだね……」

ユウキの両目からは、とめどなく涙が溢れ出した。

——パパ、ママ、がんばって……。と、俺たち耳の奥に、微かにそんな声が聞こえてた気がした。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

昨日までの冷え込みが嘘のような、暖かい微風が芝生を拭き抜けていた。そして、この教会の芝生の上で大テーブルが設置され、サーシャや子供たち、軍の最高責任者のシンカーと副官のユリエールを含め、バーベキューが催され束の間の時間を楽しんだ。

シンカーに軍の内情を聞いた所、キバオウとその配下は除名。——軍事態も解散させるといふ事だ。解散させ、改めて平和的な組織を創るといふ事。なので、はじまりの街にも、徐々に活気が戻ってくるであろう。

シンカーとユリエールにはユイの事を聞かれ、俺たちは顔を見合わせ微笑した後、シンカーとユリエールを再び見やり『——ユイは、

お家に帰った』と伝えた。その時、ユウキの首には、細いネックレスがかけてある。光っている華奢な銀鎖の先端には、同じく銀のペンダントが下がり、その中央に大きな透明の石が輝いている。そう――ユイの心だ。

「それじゃあ、また」

「楽しい時間をありがとう」

現在、俺たちは転移門前で、別れを惜しむサーシャ、ユリエール、シンカーと子供たちに手を振り、転移ゲートを潜り、22層へ戻った。

俺たちは、我が家へ向かい途中で、こうも思っていた。

――近い内に前線へ戻ろう。SAOからの解放はプレイヤーの願いであり、ユイの望みなのだから。

「ね、キリト」

「ん？ どした」

「もしゲームがクリアされて、この世界がなくなったら、ユイちゃんはどくなっちゃうの？」

「容量的にはぎりぎりだけど、クライアントプログラムの環境データの一部として、俺のナーヴギアのローカルメモリーに保存させるようになってる。向こうで、ユイとして展開させるのは大変だろうけど……。絶対展開してみせるよ。そう、絶対な」

俺が強く頷くと、ユウキは苦笑し、首にかけられたユイの心を見下ろした。そして再び、――パパ、ママ、がんばって……。というユイの声が微かに聞こえた気がした。

――だが、俺たちは知る事になる。これから訪れる、死神の足音を。



### 第37話《骸骨の狩り手》

第五十五層 血盟騎士団ギルド本部

「偵察隊が、全滅したのか——!?!」

二週間ぶりに全線に復帰した俺たちを待っていたのは、衝撃的な知らせだった。

ギルド本部の塔の最上階、幹部会議で使われている硝子張りの会議室がある。半円形の大きな机の中央にはヒースクリフのローブ姿があり、左右にはギルドの幹部連が着席している。

ヒースクリフは両手を組み合わせ、眉間に深い谷を刻んでゆっくり頷いた。

「昨日のことだ。七十五層迷宮区のマッピング自体は、時間が掛かったが何とか犠牲者を出さず終了した。だがボス戦はかなりの苦戦が予想された……」

それは俺も考えていた。

何故なら、今まで攻略してきたフロアの内、二十五層と五十層のボスモンスターは抜きん出た巨体と戦闘力を誇り、攻略に於いて多大な犠牲を出したからだ。

「……そこで、我々は五ギルド合同パーティー二十人を偵察隊として送り込んだ。偵察は慎重を期して行われた。十人が後衛としてボス部屋入口で待機し……最初の十人が部屋の中央に到着して、ボスが出現した瞬間、入り口の扉が閉じてしまったのだ。ここから先は後衛の十人の報告になる。扉は五分以上開かなかつた。鍵開けスキルや直接の打撃等、何をしても無駄だったらしい。ようやく扉が開いた時——」

ヒースクリフの口許が固く引き結ばれた。一瞬目を閉じ、言葉を続ける。

「部屋の中には、何も無かつたそうさ。十人の姿も、ボスも消えていた。転移脱出した形跡も無かつた。彼らは帰ってこなかつた……。念の為、はじまりの街最大の施設《黒鉄宮》まで、血盟騎士団メンバーの一人に彼らの名簿を確認しに行かせたが……」

その先は言葉に出さず、首を左右に振った。

「……………人も……………」

ユウキは絞り出すように呟いた。

そして俺は、合点がいったように頷いた。

「結晶無効化空間か……………」

俺の問いにヒースクリフは小さく首肯した。

「そうとしか考えられない。アスナ君たちの報告では七十四層もそうだったということから、おそらく今後全てのボス部屋が結晶無効化空間と思っただろう」

脱出不可能となれば、思わぬアクシデントで死亡する者が出る可能性が飛躍的に高まる。だが、ボスを倒さなければクリアも有り得ない。

「いよいよ本格的なデスゲームになってきたか……………」

「だからと言って攻略を諦めることはできない」

ヒースクリフは目を閉じると、囁くような、だがきつぱりとした声で言った。

「結晶による脱出が不可能な上に、今回はボス出現と同時に背後の退路も断たれてしまう構造らしい。ならば統制の取れる範囲で可能な限り大部隊をもって当たるしかない。休暇中の君たちを召喚するのは本意ではなかったが、了解してくれ給え」

俺は肩を竦めて答えた。

「協力はさせて貰いますよ。だが、俺にとってはユウキの安全が最優先です。もし危険な状況になったら、パーティー全体よりも彼女を守ります」

ヒースクリフは微かな笑み浮かべた。

「アスナ君たちもそう言ってたよ。そうなった場合、お互いを守るよね。——何かを守ろうとする人間は強いものだ。君たち勇戦を期待するよ。攻略開始は三時間後。予定人数は、君たちを入れて三十五人。七十五層コリニア転移門前に午後一時集合だ。では解散」

それだけ言うと、ヒースクリフとその配下の男たちは一斉に立ち上



がれ、どうにか生かされている状況であるなら、何年も無事に続くとは思えない。

そう、俺たちには時間が残されてないのかもしれない。——SAOでも、現実世界でも。

「……それでも、私たちは望みを捨てたくありません」

「生き延びて、四人一緒に現実世界で会うって約束したでしょ。私たちが引つ張る君たちが弱気になってどうするのよ」

「……ごめん」

アスナの言う通りである。攻略組最強と呼ばれている俺たちが弱気になってしまえば、全体の指揮が落ちるのは目に見えている。

だが、アスナとランの瞳が慈愛に満ちた。

「でも、今だけはただの女の子と男の子なつても構いませんよ」

「そうですね。この場には私たちしか居ませんし」

この言葉を皮切りに、俺たちの口からは、弱みや不安事が漏出していく。

これを聞いた、アスナとランは『大丈夫、私たちがついてますから』と言って、俺たちを優しく包んでくれた。



七十五層の主街区コリニアの転移門前には、一見してハイレベルと判るプレイヤーたちが集結していた。

俺たち四人が転移門から出て歩み寄って行くと、皆びたりと口を閉ざし緊張した表情で目礼を送ってきた。中にはギルド式の敬礼をしている連中まで居る。

それもそのはずだ。俺とユウキはユニークスキルホルダーであり、アスナとランは剣を極めし者なのだから。

取り敢えず、途中で立ち止まり、俺たちはペコリ頭を下げる。

「ようー」

肩を叩かれて振り返ると、刀使いのクラインの姿があった。その

横には、両手斧で武装したエギルの姿もある。

「なんだ……お前らも参加するのか」

「なんだってことはないだろう！　今回はえらい苦戦しそうだって言うから、商売を投げ出して加勢に来たんじゃねえか。　この無理無欲の精神を理解できないとはなあ……」

憤慨したように野太い声を出して主張しているエギルの右腕を、俺はポンと叩き、

「無欲の精神はよく解った。　じゃあお前は、戦利品の分配から除外していいのな」

そう言っつてやると、途端に頭に手をやり、眉を八の字に寄せた。

「いや、そ、それはだなあ……」

情けなく口籠るその語尾に、俺、ユウキ、ラン、アスナ、クラインの朗らかな笑い声が重なった。　笑いは集まったプレイヤーたちにも伝染し、皆の緊張が徐々に解れていくようだった。

そして午後一時になり、転移門から新たな人影が数人出現した。

真紅の長衣に十字盾を携えたヒースクリフと、血盟騎士団の精鋭たちである。　彼らを目にすると、プレイヤーたちの間に再び緊張が走った。

ヒースクリフは、プレイヤーの集団を二つに割りながら、真っ直ぐに俺たち四人の元に歩いて来た。　威圧されたようにクラインとエギルが数歩下がる中、俺たち四人は涼しい顔でそれを受け流す。

立ち止まったヒースクリフは、俺たち四人を見て軽く頷きかけると、集団に向き直っつて言葉を発した。

「欠員はないようだな。　よく集まってくれた。　状況はすでに知っていると思う。　厳しい戦いになるだろうが、諸君の力なら切り抜かれると信じている。――解放の日のために！」

ヒースクリフの力強い叫びに、プレイヤーたちは一斉に声を上げた。　ヒースクリフは俺たちに、微かな笑みを浮かべ言った。

「頼りにしているよ。　君たち四人の力を」

俺たちが無言で頷くと、ヒースクリフは再び集団を振り返り、軽く片手を上げた。

「では、出発しよう。　目標のボスモンスタールーム直前の場所までコリドーを開く」



「——はい、約束です」

「——私も約束する」

俺、ユウキ、ラン、アスナの順で言い、右腕を突き出し掌を重ねる。正に、円陣を組む時のようだ。そして、掌を下げた後、俺たちも最終確認をして皆の場所へ戻った。

十字盾をオブジェクト化させたヒースクリフが鎧を鳴らし、口を開く。

「皆、準備はいいかな。今回、ボスの攻撃パターンに関しては情報が無い。基本的にはK○Bが前衛で攻撃を食い止めるので、その間に可能な限りパターンを身切り、柔軟に反撃をして欲しい」

攻略組の全員は無言で頷く。

「では——行こうか」

ヒースクリフが黒曜石の大扉に歩み寄り、中央に右手を掛け、全員に緊張が走る。

俺は、並んで立っているエギルとクラインの肩を背後から叩き、振り向いた二人に向かって声を掛けた。

「死ぬなよ」

「へっ、お前こそ」

「今日の戦利品で一儲けするまでは、くたばる気はないぜ」

エギルとクラインとが言い返した直後、大扉がゆっくり動き出した。プレイヤーたちは一斉に抜剣する。

俺も背から《エリユンデータ》、《ダークリパルサー》を引き抜いた。その隣では、ユウキたちも抜剣し、剣を構える。そして、俺たち四人は視線を送り、頷きかける。

最後に、十字盾の裏側から長剣を音高く引き抜いたヒースクリフが、右手を高く掲げ叫んだ。

「——戦闘、開始！」

完全に開ききった扉の中へ走り出し、全員が続く。

内部は、かなり広いドーム状の部屋だった。全員が部屋に走り込み、陣形を作って立ち止まった直後——背後で轟音を立てて大扉が閉まった。

最早開けることは不可能だ。　ボスが死ぬか、俺たちが全滅するまでは。

数秒の沈黙が続き、広い周囲に注意を払うがボスは出現しない。限界まで張り詰めた神経を焦らすように、一秒、また一秒と時間が経過していく。

「おい——」

誰かが、長い沈黙に耐え切れず声を上げた、その時——、  
「上よ！」

隣で、アスナが叫んだ。その声とほぼ同時に、全員頭上を見上げる。それは、ドームの天頂部に貼りついていた。　巨大で途轍もなく大きく長い。　例えるなら、あれは——百足だ。

見た瞬間そう思った。　全長は十メートル程、複数の体節に区切られたその体は、虫というより人間に近い背骨のようだ。　灰白色の円筒形をした体節一つ一つからは、骨？き出しの鋭い脚が伸び、その体を追って視線を動かしていくと、徐々に太くなる先端に凶悪な形をした頭蓋骨があった。　流線型に歪んだその骨には二対四つの鋭く吊りあがった眼窩がんかがある。　大きく前方に突き出した顎の骨には鋭い牙が並び、頭骨の両脇からは鎌状に尖った巨大な骨の腕が突き出している。

視線を集中させると、イエローのカーソルと共に、モンスターの名前が表示される。《The Skullreaper》——骸骨の狩り手。

こいつは、無数の脚を蠢かせながら、不意に全ての足を大きく広げ——俺たちの真上に落下してきた。

「固まるな！　距離を取れ！」

ヒースクリフが鋭い叫び声を上げ、凍り付いた空気を切り裂いた。我に返ったように全員が動き、俺たちも落下予測地点から慌てて跳び退く。

だが、落ちてくる骸骨の狩り手のちょうど真下にいた三人の動きが、僅かに遅れた。　どちらに移動していいのかと迷うように、足を止めて上を見上げている。



「こつちだー！」

俺が慌てて叫ぶと、呪縛の解けた三人が走り出す――。

だが、その背後に、骸骨の狩り手が地響きを立てて落下して瞬間、床全体が大きく震えた。足場を取られた三人がたたらを踏む。

そして、三人に向かって巨大な大鎌が横薙ぎに振り下ろされた。

三人が背後から同時に切り飛ばされ、宙を吹き飛ばす間にも、HPバーが猛烈な勢いで減少していく――黄色の注意域から、赤の危険域と――そして、あっけなくゼロになった。

空中にあつた三人の体が、立て続けに無数の結晶を撒き散らしながら破碎し、消滅音が重なって響く。

「……一撃で……死亡……だと」

俺は絞り出すように呟いた。

SAOでは数値的なレベルさえ高ければそれだけで死にくくなる。特に、今日のパーティーは高レベルプレイヤーだけが集まっている為、例えボスの攻撃といえど、数発の連撃技なら持ちこたえられる――はずだったのだ。それが、たった一撃で――。

「こんなの……無茶苦茶だわ……」

掠れた声でアスナが呟く。

一瞬にして三人の命を奪った骸骨の狩り手は、上体を高く持ち上げて雄叫びを上げると、猛烈な勢いで新たなプレイヤーの一団目掛けて突進した。

「わあああ――!!」

その方向にいたプレイヤーたちが恐怖で悲鳴を上げ、再び大鎌が高く振り上げられる。その真下に飛び込んだ人影があつた。ヒースクリフだ。ヒースクリフは巨大な盾を掲げ、大鎌を迎撃し、凄まじい衝撃音。火花が飛び散る。

――だが、鎌は二本あつた。左側の腕でヒースクリフを攻撃しつつも、右の鎌を振り上げ、凍りついたプレイヤーの一団に突き立てようとする。

「くそっ……!」

俺は飛び出していた。

瞬時に距離を詰め、大鎌の落下地点に移動

し、左右の剣を交差させ大鎌を受け止め、凄まじい衝撃。　だが――  
大鎌は止まらない。

火花を散らしながら剣を押しつけ、大鎌が迫ってくる。  
――重すぎる。

その時、新たな剣が空気を切り裂き、下から大鎌に命中した。　勢いが緩んだその隙に、俺は全身の力を振り絞って大鎌を押し返す。

真横にはユウキが立ち、俺を見て言った。

「二人同時に受ければ――いけるよ！　ボクとキリトならできるよ！」

「ああ、頼む！」

俺は頷いた。

横薙ぎに繰り出されてきた大鎌に向かって、俺とユウキは同時に右斜め斬り降ろし攻撃を放ち、完璧にシンクロした三本の剣が、光の帯を引いて鎌に命中する。　今度は、敵の大鎌を弾き返した。　俺は声を振り絞って叫んだ。

「鎌は俺たちが食い止める！　皆は側面から攻撃してくれ！」

「姉ちゃん！　アスナ！」

「了解！」

これだけで何が言いたいか伝わるとは、流石俺たちって所だ。

その声に、全員の呪縛が解けたようだった。

俺たちは雄叫びを上げ、武器を構えてスカルリーパーの体に向かって突撃する。　ようやく数発の攻撃が敵の体に食い込み、ようやく初めてボスのHPバーが僅かに減少した。

だが、直後、複数の悲鳴が上がった。　大鎌を迎撃する隙を縫って視線を向けると、スカルリーパーの尾の先についた長い槍状の骨に数人が薙ぎ払われ、倒れるが見えた。

「くっ……」

歯齧みをするが、俺とユウキにも、少し離れて左の大鎌を捌いているヒースクリフにも、これ以上の余裕は無い。

「キリト……！」

ユウキの声に、ちらりと視線を向ける。

『——向こうに気を取られると、ボクたちやられちゃうよ!』

『……ああ、わかった!——左斬り上げで受ける!』

『——了解!』

俺とユウキは瞳を見交わすだけで意思を疎通し、完璧に同期した動きで大鎌を弾き返した。まるで思考がダイレクトに接続されたような一体感。息もつかせぬペースで繰り出される敵の攻撃を、瞬時に同じ技で反応し、受け止める。

時折、繰り出される強攻撃を受ける余波で、僅かにHPが減少していくが、俺たちはそれすらもすでに意識していなかった。

戦いは一時間以上の激戦の果てに、決着がついた——。

### 第38話《世界の終焉》

骸骨の狩り手との戦いは一時間以上にも及んだ。

無限と思えた激戦の果てに、遂にスカルリーパーの巨大な骨が青い欠片となって爆散した。だが、誰一人として歓声を上げる余裕のある者はいなかった。

皆倒れるように床に座り込み、あるいは仰向けに寝転がって荒い息を繰り返している者も居る。

終わった——の……？

ああ——終わった——。

この思考のやりとりを最後に、俺とユウキの《接続》も切れたようだった。不意に全身を重い疲労感が襲い、床に膝を突く。

俺とユウキは、背中合わせに座り込み。暫く動く事はできそうになかった。遠目で奥を見ると、アスナとランも、俺たちと同じように背中合わせに座り込み、荒い息を吐いていた。

俺たち四人は生き残った——。だが、犠牲者は余りにも多すぎた。

「何人——やられた……？」

左の方でしやがみ込んでいたクラインが、顔を上げて掠れた声で聞いてきた。その隣で、手足を投げ出したエギルも、顔だけを此方に向けてくる。

俺は右手を振ってマップを呼び出し、プレイヤーを示す光点を数え、出発時の人数から犠牲者の数を逆算する。

「——十四人、死んだ……」

自分で数えておきながら信じることができない。

皆、トツプレベルの歴戦のプレイヤーだった筈だ。例え、離脱や瞬間回復不可能な状況でも、生き残りを優先した戦いをしていればすぐに死ぬことはないはずだった。

「……嘘だろ……」

エギルの声は掠れていた。

ようやく四分の三——まだこの上には二十五層もある。一層ご

とにこれだけの犠牲者を出してしまえば、最後のラスボスに対面できるのはたった一人になってしまう可能性がある。おそらくその場合は、間違いなくあの男だろう……。

俺は視線を部屋の奥に向けると、そこには、他の者が床に座り込んでいる中、背筋を伸ばして立っている人物の姿。——ヒースクリフだ。

無論、俺も無傷では無かった。視線を合わせてカーソルを表示させると、HPバーがかなり減少している。俺とユウキが二人がかりで如何にか防ぎ続けたあの巨大な鎌を一人で捌き切ったのだ。数値的なダメージに留まらず、疲労困憊で倒れても不思議ではないのに。

だが、ヒースクリフの立ち姿には、精神的消耗など皆無と思わせるものがあつた。そして、奴の視線、無言で床に蹲るKOBメンバーや、他のプレイヤーを見下ろしている。謂わば、精緻な檻の中で遊ぶ子ネズミ群を見下ろすような——。

ヒースクリフのこの視線は、傷ついた仲間を労わる表情ではない。あれは、遙か高みから慈悲を垂れる——神の表情だ。

俺は、嘗てヒースクリフとデュエルした時の、奴の恐るべき超反応を思い出していた。そう、あれはSAOシステムに許されたプレイヤーの、限界速度を、だ。

プレイヤーでは出来ない事を可能にする存在。デスゲームのルールに縛られなく、NPCでも無く、一般プレイヤーでも無い。となれば、残された可能性はただ一つだ——。

そして、ヒースクリフのHPバーは、ギリギリの所でグリーン表示に留まっている。未だかつて、ただ一度もHPバーをイエローゾーンに落としたことが無い男。圧倒的な防御力。

俺とのデュエルの時、ヒースクリフの表情が動いたのは、半分を割り込もうとした寸前だ。そして、【DRAW】で終わらせた理由は——、

俺はゆつくりと剣を構え握り直し、ごく小さな動きで、徐々に右足を引いていく。腰を僅かに下げ、ヒースクリフに突進する準備姿勢

を取る。

仮に俺の予想がまったく的外れなら、俺は犯罪者プレイヤーになつてしまふだろう。そして容赦ない制裁を受ける事になる。

俺は、隣で床に座っているユウキを見やった、ユウキの視線が交錯した。

「どうしたの……？」

「(……御免な)」

俺は声を出さず口だけ動かし、地面を蹴った。

床ぎりぎりの高さを全速で駆け抜け、右手の剣を捻りながら突き上げた。片手剣、基本突進技《レイジングスパイク》。威力が弱い技なので、ヒースクリフに命中しても殺してしまうことは無いが、俺の予想通りなら――。

剣は、青い閃光を引きながらヒースクリフの左肩目掛けて剣を振り下ろされる。ヒースクリフは流石の反応速度で気づき、目を見開いて驚愕の表情を浮かべた。そして、咄嗟に左手で盾を掲げ、ガードしようとする。――だが、俺の方が早い。

寸前で、目に見えぬ障壁に激突し、同時に俺の腕に激しい衝撃が伝わり、同時にヒースクリフからシステムカラーのメッセージが表示された。[Immortal Object]。不死存在。俺たちプレイヤーにはありえない属性だ。静寂の中、ゆつくりとシステムメッセージが消滅した。

俺は剣を引き、後ろに跳んでユウキの隣に着地し、周囲を見回し言った。

「これが伝説の正体だ。この男のHPバーは、どうあろうとイエローまで落ちないようにシステムに保護されているのさ。……不死属性を持つ可能性があるのは……システム管理者以外有り得ない。

だが、このゲームには管理者は居ないはずだ。ただ一人を除いて。……この世界に来てからずっと疑問に思っていたことがあった……。あいつは今、何処から俺たちを観察し、世界を調整しているんだろう、ってな。でも俺は単純な真理を忘れていたよ。どんな子供でも知っていることさ」

俺はヒースクリフを真つ直ぐ見据え、言った。

「《他人のやっているRPGを傍から眺めるほど詰まらないことはない》。……そうだろう、茅場晶彦」

全てが凍りついたような静寂が周囲に満ち、ヒースクリフは無表情のままじつと俺に視線を向けている。

ヒースクリフは俺に向かって口を開く。

「……なぜ気付いたか参考までに教えて貰えるかな」

「……最初におかしいと思ったのはデュエルの時だ。最後、あんた余りにも速過ぎたよ」

「やはりそうか。あれは私にとつても痛恨事だった。君の動きに圧倒されてついシステムのオーバーアシストを使ってしまった。……いや、君の行動にも驚かされたが」

「それで、システムの機能を使って、『DRAW』に終わらせたんだろ？」

デュエル時、お互いの最後の一撃は、茅場はGM権限を行使して同じダメージ量に調整し【DRAW】に終わらせたんだろう。その保護が露見しないように。

ヒースクリフは頷き、苦笑いを浮かべる。

「……君の観察眼には舌を巻くよ」

ゆつくり周囲を見回し、堂々と宣言した。

「——確かに私は茅場晶彦だ。付け加えれば、最上階で君たちを待つはずだったこのゲームの最終ボスでもある」

「……趣味が良いとは言えないぜ。最強プレイヤーが一転最悪のラスボスか」

「なかなか良いシナリオだろう？ 盛り上がったと思うが、まさか四分の三地点で看破されてしまうとはな。……君はこの世界で最大の不確定因子だと思っただけだが、ここまでとは」

茅場は薄い笑みを浮かべながら肩を竦め、言葉を続けた。

「……最終的に私の前に立つのは、キリト君とユウキ君。君たちだけだと思っていたよ。……だが、私の予想は裏切られ、君たち四人に変わっていた。全十種存在するユニークスキルの内、『二刀流』スキ

ルは全てのプレイヤーの中で最大の反応速度を持つ者に与えられ、その者が魔王に対する勇者の役割を担う。《黒燐剣》スキルは勇者の姫に与えられる。……そこに、絆の力が加わるとは思ってもいなかったよ。……君たちには、本当に驚かされるばかりだ。まあ、……この想定外の展開もネットワークRPGの醍醐味と言うべきかな……」

その時、凍りついたように動きを止めていたプレイヤーの一人がゆっくりと立ち上がった。

血盟騎士団の幹部を務める男だ。朴訥そうなその瞳に、苦悩の色が宿っている。

「貴様……貴様が……。俺たちの忠誠を——希望を……よくも……よくも……」

両手剣を握り締め、

「よくも——ッ！」

絶叫しながら地を蹴った。そして、大きく振りかぶった両手剣が茅場へと——。

だが、茅場の動きの方が一瞬早かった。左手を振り、出現したウインドウを素早く操作したかと思うと、男の体は空中で停止し、床に音を立て落下した。HPバーにグリーンの色が点滅しているという事は、麻痺状態だ。茅場は手を止めずにウインドウを操り続けた。

「キリト……」

ユウキの声で横を振り向くと、俺以外のプレイヤー全員が麻痺状態になっていた。

俺は手に携えていた剣を背の装備している鞆に収めると、跪いてユウキの上部を抱え起こし、茅場に声を掛けた。

「……どうするつもりだ。この場で全員殺して隠蔽する気か……？」

「まさか。そんな理不尽な真似はしないさ」

ヒースクリフは微笑を浮かべたまま左右に首を振った。

「こうなってしまうては致し方ない。予定を早めて、私は最上階の《紅玉宮》にて君たちの訪れを待つことにするよ。九十層以上の強力なモンスター群に対抗し得る力として育ててきた血盟騎士団。



そして攻略組プレイヤーの諸君を途中で放り出すのは不本意だが、何、君たちの力ならきつと辿り着けるさ。だが……その前に……」茅場は言葉を切ると、俺を見据えてきた。剣を軽く床に突き立て、高く澄んだ金属音がドーム内に響く。

「キリト君、君には私の正体を看破した報奨ほうしょうを与えなくてはな。

チャンスをあげよう。今この場で私と一対一で戦うチャンス。無論不死属性は解除する。私に勝てばゲームはクリアされ、全プレイヤーがこの世界からログアウト出来る。……どうかな？」

その言葉を聞いた途端、俺の腕の中でユウキが自由のならない体を動かし、首を振った。

「受けちゃダメだよ……。今は、今は引いて態勢を立て直そう……。確かに、ユウキの意見は正しさを認めていた。奴は、システムに介入できる管理者だ。口ではフェアな戦いと言つても、どのような操作を行うか判らない。この場は退き、皆で意見を交換し、対策を練るのが最上の選択だ。

しかし、俺は決戦前の言葉を思い出していた。——俺たちには命の刻限が迫っているということだ。良くて一年。悪くて半年だろう。

ユウキは、俺の思ってる事を理解してか、笑みを浮かべた。

「……受けるんでしょう……？」

「……ああ」

「でもね、約束を破ったらいけないからね」

「……わかった」

俺はヒースクリフに視線を向けてから、ゆっくり頷いた。

「……受けてやるよ……。此処で全て終わらせてやる……」

そう言ってから、ユウキの体を黒曜石の床に横たえ手を放し立ち上がる。無言で此方を見ている茅場にゆっくり歩み寄りながら、両手で音高く二本の剣を抜き放つ。

「キリト！ やめろ……っ！」

「キリト——ッ！」

「ダメよ！ キリト君！ 今すぐ引いて！」

「キリトさん！ 行かないで下さい！」

声の方向を見ると、エギルとクライン、アスナとランが必死に体を起こそうとしながら叫んでいた。俺は皆が居る方向に向き直ると、まずエギルと視線を合わせ、小さく頭を下げた。

「エギル。 今まで、剣士クラスのサポート、サンキューな。 知ってたぜ、お前の儲けの殆んど全部、中層ゾーンのプレイヤー育成に注ぎ込んでいたこと」

目を見開くエギルに微笑み掛けてから、顔を動かしクラインに視線を向ける。

「クライン。 ……あの時、お前を……一緒に連れて行けなくて、悪かった。 ずっと、後悔していた」

クラインは涙を流しながら、再び起き上がろうと激しくもがき、声を張り絶叫した。

「て……てめえ！ キリト！ 謝ってんじゃねえ！ 今謝るんじゃねえよ！ 許さねえぞ！ ちゃんと向こうで、メシの一つも奢ってやらじゃねえと、絶対に許さねえからな！」

俺は頷き、

「解った。 次は、向こう側でな」

右手を持ち上げ、親指を突き出す。

そして最後に、親友と幼馴染の顔を見る。 きっと、彼女たちも解ったはずだ。 俺が考えてる事を。 その証拠に、彼女たちは口をきつく結んでいる。

「……アスナ、ラン。 お前たちと一緒に居た時間は忘れない。 俺にとつては最高の時間だった。 ありがとう」

アスナとランの目許に涙が溢れ、一筋の光となって零れ落ちる。

俺は茅場と向き合い、二刀流での戦闘スタイルなり、剣を構える。茅場がウインドウを操作すると、俺と奴のHPバーが同じ長さに調整された。 レッドゾーン手前、強攻撃のクリーンヒット一発で決着がつく量だ。

そして、奴の頭上に、「changed into mortal object」——不死属性を解除したというシステムメッセージ

が表示される。茅場はウインドウを消去すると、床に突き立てた長剣を右手で抜き、十字盾を後ろに構えた。

俺と茅場の間緊張感が高まっていく。空気さえその圧力に震えてるような気がする。

これはデュエルでは無い。単純な殺し合いだ。そうだ、俺はあの男を——、

「殺す……ッ！」

言葉と同時に、俺は床を蹴った。

遠い間合いから右手の剣を横薙ぎに繰り出し、茅場が左手の盾でそれを難なく受け止める。

金属がぶつかり合う衝撃音が戦闘開始の合図だったでも言うように、一気に加速した二人の剣戟の応酬の衝撃音が周囲に響いた。

俺と奴は、一度お互いの手の内を見せている。その上《二刀流》スキルをデザインしたのは奴だ。単純な連撃技は全て読まれる。

俺と茅場の剣戟の応酬が続くが、茅場は正確な攻撃で、俺の攻撃を次々に叩き落とす。その合間にも、此方に隙ができる鋭い一撃を浴びせてくる。それを俺が瞬時的反応だけで迎撃する。少しでも敵の思考、反応を読もうと、俺は茅場の両目に意識を集中させた。そして、俺と茅場の二人の視線が交錯した。

茅場——ヒースクリフの瞳は冷ややかであった。人間らしさは、今は欠片も無い。俺が今相手にしているのは、四千人もの人間を殺した男なのだ。

「うおおおおお！」

俺は心の奥に生まれた恐怖を吹き飛ばすように絶叫した。だが、俺の攻撃は十字盾と長剣を操る茅場に全て弾き返される。

もう、これしかないと思い。——俺はソードスキルを放つ。

二刀流最上位剣技《ジ・イクリップス》計二十七連撃。太陽なコロナの如く全方位から噴出した剣尖が超高速で茅場へと殺到する。

そして、奴の口許に始めて表情が浮かんだ。それは——勝利を確信した笑み。茅場は、俺がシステムに規定された連続技を繰り出すのを待ち構えていたのだ。

劍の飛ぶ方向を予想して、目まぐるしく動く茅場の十字盾を空しく攻撃を打ち込む。

二十七連撃の最後の左突き攻撃が、十字盾の中心に命中し、火花を散らした。直後、硬質の悲鳴を上げて、左手に握られた《ダークリパルサー》が碎け散った。

「さらばだ——キリト君」

動きの止まった俺の腹部目掛けて、茅場が右手で握っている長劍がクリムゾンの光を迸らせ狙いを定める。そして、血の色の帯を引きながら、劍が俺の腹部に迫る。

——だが俺も、茅場がソードスキルを放つのを待っていたのだ。ソードスキルは途中で止める事は不可能。裏を返せば、茅場もソードスキルに身を任せるしかないのだ。

俺はニヤリと笑い、茅場は目を丸くする。

スキルコネクト  
——  
劍技連携。

そう、システム外スキルだ。瞬間、俺が右手で握る《エリユシデータ》の刀身にオレンジ色の光が迸る。片手劍単発重攻撃、《ヴォーパル・ストライク》。ジェットエンジンめいたサウンドと共に一気に距離を詰め、茅場の長劍が俺の腹部を貫き、俺の劍が茅場の腹部を貫

く。

これこそが俺の狙い。——同士討ちだ。HPバーも目に見えて減少し、HPバーがゼロになり、俺の視界にはメッセージが表示された。【You are dead】死の宣告だ。——だが、俺はまだ死ぬ訳にはいかない。死ぬのは、茅場の最期を見てからだ。俺は抗った。システムという名の神に。

茅場は、僅かに開いた口元に穏やかな笑みを浮かべていた。そして、——茅場の体は青い破片となって砕け散った。

また俺も、砕けかけていた全身を繋ぎ止めていた力を解き放ち、青い欠片となって破碎した。

意識が遠ざかっていく中で、無機質なシステムの音声が届いてきた。意識が遠ざかっていく中で、無機質なシステムの音声が聞こえてきた。

——ゲームはクリアされました——ゲームはクリアされました——ゲームは……。

こうして、俺とヒースクリフとの決闘に終止符が打たれたのだ。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

気付くと、俺は不思議な場所に居た。

足場は分厚い結晶の板だ。透明な床の下には、赤く染まった雲が連なりゆっくりと流れている。どこまでも続くような夕焼け空。

赤金色に輝く雲の空に浮かぶ小さな水晶の円盤、その端に俺は立っていた。

……ここはどこだろう。確か俺の体は、無数の破片となって砕け散り、消滅したはずなのに。まだSAOの中に居るのか……。それとも本当に死後の世界に来てしまったのか？

自分の体に視線を落としてみる。黒いレーザーコートや長手袋といった装備類は死んだ時のままだ。だが、その全てが僅かに透き通っている。

右手を伸ばし、指を軽く振ってみると、聞き慣れた効果音と共にウインドウが出現する。ということは、此处はまだSAOの内部だ。

だがそのウインドウには、装備フィギアやメニュー一覧が無い。た

だ無地の画面に一言、小さな文字で「最終フェイズ実行中 現在54%完了」と表示されているだけだ。 ウィンドウを消去した時、不意に背後から声がした。

「……キリト」

綺麗な美声。 振り向くと、俺の最愛の人が立っていた。 彼女も同じように全身が僅かに透き通っていた。 夕焼け色に染まり、輝くその姿は、この世に存在する何よりも美しい。

だが、感動の再会。とはいかなかった。 ユウキが勢いよく、俺の胸に飛び込んで来たからだ。

「……バカバカバカバカ、和人のバカ！」

「ば、バカって言うなよ」

ユウキは、俺の胸から顔を上げた。 瞳からは、涙が零れ落ちていた。

「……じゃあ、何でボクを置いていったのさ……」

「あの時は、あの方法しかなかったからな。 …… ……ごめん」

「……許す、こうしてまた会えたから。 ……アスナと姉ちゃん、号泣してたんだからね」

「……マジか。 アスナたちに謝る事ってできんのかな？ てか、俺死んだんだよな？ 何でユウキが此処に居るんだ？」

俺が茅場を倒したという事は、SAOから、皆のログアウト開始されてるはずだ。

てつきり、ユウキも現実世界に帰還したと思ったのだが。

「ボクが光に包まれてログアウトしたと思ってたなら、此処に転移してたんだ」

「……ということとは、俺って生きてるのか？」

何と言うか、今一そこがハッキリしない。

ユウキは、首を傾げて聞いてきた。

「で、どこどこかな？」

「うくん、どこだろうな？」

本当に此処は何処だろう？

「あれ見て」

ユウキが視線を向けた場所を見る。

俺たちが立っている小さな水晶板から遠く離れた空一点に――それが浮かんでいた。円錐形えんすいけいの先端を切り落としたような形。薄い層が無数に積み重なって全体を構成している。目を凝らせば、層と層の間には小さな山や森、湖、そして街が見える。

「アインクラッド……」

俺の呟きに、ユウキは頷いた。間違いない、あれはアインクラッド。俺たちが二年間の長きに渡って戦い続けた剣の世界だ。

――鋼鉄の城は――今まさに崩壊しつつあった。

俺たちが無言で見守る間にも、基部フロア一部が分解し、無数の破片を撒き散らしながら浮遊城の一つ一つの層がゆっくり崩壊していく。そう、思い出の場所も。

俺とユウキは手を繋ぎ、水晶板の端に腰を下ろした。

「全部無くなっちゃうんだね」

「そうだな」

「なかなか絶景だな」

不意に傍らから声がした。

声が出た方向に振り向くと、そこには一人の男が立っていた。――

――茅場晶彦だ。

今の茅場はヒースクリフの姿では無く、SAO開発者としての本来の姿だ。白いシャツにネクタイを締め、長い白衣を羽織っている。線の細い、鋭角的な顔立ちの中で、金属的な瞳が、消えゆく浮遊城を眺めている。茅場の全身も、俺たちと同じように透き通っていた。

この男とは、数分前までお互いの命を懸けた死闘を繰り広げていたはずなのに、俺の感情は静かなままであった。

俺は茅場から視線を外し、崩れいく浮遊城を見やり、口を開いた。

「此処は、どうなるんだ？」

「現在、アーガス本社地下五階に設置されたSAOメインフレームの全記憶装置データの完全消去作業を行っている。後十分ほどでこの世界の何もかもが消滅するだろう」

「皆は……どうなったの?」

ユウキがポツリと呟いた。

茅場は右手を動かし、表示されたウインドウを眺めた。

「心配には及ばない、生き残ったプレイヤー、六一四七人のログアウトが完了した」

「……死んだ連中は? 死んだかもしれない俺が此処に居るんだから、今まで死んだ四千人だって元の世界に戻してやる事ができるんじゃないか?」

茅場はウインドウを消去し、浮遊城を眺めながら言った。

「命は、そんなに軽々しく扱うべきではないよ。彼らの意識は帰ってこない。死者が消え去るのは何処の世界でも一緒さ」

それが四千人を殺した人間の台詞か——と思ったが、不思議と腹は立たなかった。

「……かもな。命は、何にだって一つだ。だからこそ、人は苦しくても、汚れようともし、必死に生きようとする……。俺が言える台詞じゃないと思うがな」

「意外だね。君からそのような言葉が出てくるとは、私はてっきり、君に糾弾されると思ったのだが」

「……俺が奪った命も多いからな。俺もそれに該当するだけだ」  
そして俺は、根本的な疑問、恐らく全プレイヤー、いや、この事件を知った全ての人が聞きたいと思う疑問を問いかけた。

「なんで——こんなことをしたんだ……?」

「なぜ——、か。私も長い間忘れていたよ。何故だろうな。フルダイブ環境システムの開発を知った時——いや、その遙か以前から、私はあの城を、現実世界のあらゆる枠や法則を超越した世界を創り出すことだけ欲して生きてきた。そして……、私の世界の法則を超越するものを見ることが出来た……」

茅場は静謐な光を湛えた瞳を俺たちに向け、すぐに顔を戻した。

「子供は次から次へと色々な夢想をするだろう。空に浮かぶ鉄の城の空想に私が取りつかれたのは何歳の頃だったかな……。その情景だけは、いつまで経っても私の中から去ろうとしなかった。年経



るごとにどんどんリアルに、大きく広がっていった。この地上を飛び立って、あの城に行きたい……。長い、長い間、それが私の唯一の欲求だった。私はね、キリト君。まだ信じているのだよ。——何処か別の世界には、本当にあの城が存在するのだと——」

「……そうだといいな。……なあ茅場。俺は死んだのか？」

俺はそう呟き、茅場は穏やかな笑みを浮かべる。

「……——この場に君たちを私が呼び寄せた。と言っておこう」

茅場はゆっくり俺たちに向かって歩き始めた。

「……言い忘れていたな。ゲームクリアおめでとう。キリト君」

茅場は穏やかな表情で俺たちを見下ろしていた。

「——さて、私はそろそろ行くよ」

風が吹き、それにかき消されるように——気付くと茅場の姿はもう何処にも無かった。水晶板を、赤い夕焼けの光が透過し、控えめに輝いている。俺たちは、再び二人きりになった。

浮遊城は、既に尖端を残すのみだった。結局、俺たちが目にする事の無かった七十六層より上層が崩壊していく。——そして、アインクラウドは完全に消滅し、世界には幾つかの夕焼け雲の連なりと、小さな水晶の浮島。そこに腰掛けた、俺とユウキ、二人が残された。そして、この世界に留まる時間は余り残っていないだろう。

「……お別れだな」

「……ううん、違うよ。お別れじゃなくて、またねだよ」

「……そうだったな。またなだ」

俺たちは抱き合い、ユウキ顔を上げ、俺の顔を真っ直ぐ見てきた。「……ねえ和人。アスナと姉ちゃんの物理には気をつけるんだよ。約束を一時的にだけど、破っちゃったんだから」

俺は若干顔を青くする。

「お、おう。解ってる。……覚悟はしとくよ」

脳裏には、鬼の形相で俺を正面から見ている、アスナとランの顔が浮かんだ。……かなり怖いと予想される。雑魚のモンスターなら、威圧だけで殺せるんじゃないか？ そんな俺を見て、ユウキは苦笑していた。

俺たちは固く抱き合い、最後の時を待った。そして、視界が光に満たされていく。全てが純白のヴェールに包まれ、極小の粒子となつて舞い散る。

——現実世界でね。和人。

最後に残つた意識の中に、鈴のような声が響いた。

この瞬間、アインクラッドの「黒の剣士」の役目は終わったのだ。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

空気に、匂いがある。

鼻腔に流れ込んでくる空気には、鼻を刺すような消毒薬の匂い、果実の甘い匂い、そして、自分の体の匂い。ゆっくり目を開けると、その途端、脳の奥まで突き刺すような強烈な白い光を感じ、慌てて瞼をぎゅつと閉じる。

恐る恐る、もう一度目を開けてみる。様々な色の光の乱舞。強すぎる光に目を細めながら、首を動かし周囲を見渡す。そして、今気付いた。俺は全裸でジェル素材のベット上に横たわっており、上には天井らしきものが見える。オフホワイトの光沢のあるパネルが格子状に並び、その幾つかは、奥に光源があるらしく柔らかく点滅している。金属でできたスリットが視界の端にあり、低い唸り声を上げながら空気を吐き出している空調装置。——これらの情報から導き出されるのは、現実世界。——そう、無事に帰還する事ができたのだ。

だが、全身に力が入らない。右肩が数センチ上がるが、すぐに沈んでしまう。右手だけは如何にか動かせそうだった。自分の体に掛けられてる薄い布から右手を出し、目の前に持ち上げてみる。

驚く痩せ細った右手、皮膚の下に青みかがった血管が走り、間接には皺が寄っている。肘の内側には注射装置と思しき金属管がテープで固定され、其処から細いコードが延びている。コードを追っていくと、左上方で銀色の支柱に吊るされた透明なパックに繋がっている。

パックにはオレンジ色の液体が七割溜まっており、下部のコックか

ら滴が一定のリズムで落下している。　今までの情報から、此処は病室のようだ。

「(……俺が生きてるのは、茅場からのゲームクリアの報酬って所か)」俺が目を覚ましたという事は、約束を交わした明日奈たちも目覚めてるはずだ。

俺は顎の下に固定されている硬質のハーネスを手探りで解除し、力を振り絞り、頭に被るナーヴギアを取り外す。　耳を澄ませると、様々な音が聞こえてくる。

大勢の人の話し声、叫び声、慌しく行き交う足音、キヤスターを転がす音が聞こえてきた。　おそらく、此処の病院で眠っていたSAOプレイヤーたちが目を覚ましたのだろう。

俺は必死に上体を起こし、体に絡みついていたコード類を力を振り絞り無造作に外した。　点滴の針も引き抜き、自由の身になると足を床に付けた。

点滴の支柱に掴まって体を支え、如何にか立ち上がる。　部屋を回るすと、花籠の中に置いてある診察衣を取り、裸の上から羽織る。

俺は点滴の支柱を握り締め、それ体を預けて、ドアに向かって最初の一步を踏み出す。―――約束を交わした、少女たちを探しに。

SAO編　　く完結く

## 第39話《彼女たちの元へ》

SAOからの帰還後、俺は病院を内を片っ端から探したが、紺野木綿季、紺野藍子、結城明日奈の名前は無かった。そう、彼女たちと会いたくても、情報がないのだ。

俺がベットに寄り掛かっていたら、病室のドアがノックされ、俺が返事を返すとドアが開かれ、スーツ姿に太い黒縁の眼鏡にしゃれつ気の無い髪形、生真面目そうな線の細い顔立ちの男性は此方に歩み寄り、俺を正面から見るようにした。つーか、どう見ても国の役人だよなあ……。

「こんにちは、僕は総務省の者ですが。桐ヶ谷和人さんで宜しいでしょうか？」

受け取った名刺を確認すると、本当に政府の者だった。

総務省の役人の名前は菊岡誠二郎。所属するのは、総務省総合通信基盤局高度通信網振興課第二別室。省内での名称は、通信ネットワーク内仮想空間管理課。通称《仮想課》。

「……俺に何の用ですか？ いや、その前に政府組織には《仮想課》なんてなかったはずだ」

「桐ヶ谷君。僕たち《仮想課》は君たちが囚われてから結成された組織だよ。……といっても、SAO被害者に病院を用意したり、プレイヤーをモニタリングしたりするだけで、此方からSAOを終わらせたりと、出来た事が余りなかったけど……」

「でしようね。それはSAOを生きてた俺がよく解ってるますから」

おそらく、総務省の菊岡は、SAO内について俺から聞き出そうとしているのだろう。——そう、SAOで茅場の一番近い位置に居た俺に。菊岡も俺から情報を聞き出す為にある程度の手札は用意してるはずだ。

——だが、上手く誘導できれば、彼女たちの情報が手に入る確率が

かなり高い。——さて、情報戦といきますか。



俺と菊岡は、SAO内部で起きた事、外部で起きた事について話していた。だが俺は……肝心な部分は伏せてる。まだカードを切る場面ではないからだ。てか、腹の底が見えねえな。この役人。「言ったでしょう。SAOプレイヤーはアインクラッドに幽閉された時、どんな方法で閉じ込めたか聞いたんです。それに茅場は言いました、外部からの干渉は一切受け付けないと。もし干渉したら、俺たちSAOプレイヤーは死んでしまいますからね。……それと菊岡さん。——詳しく茅場の事について聞きたいですよね」

「……じゃあ聞くね、桐ヶ谷君。ゲームをクリアする手段は一つだったはずだ。だけど、僕たちのモニタリングでは最上階では無く、第75層でクリアとなってるんだ。SAO帰還者の何人かに話を聞いたたら、ボスに挑んで倒した事までは解った。……でも、その後はよく解らないっていうんだ。……いや、黒の剣士が茅場の正体を見破ったとは言っていたかな」

菊岡は俺に「君のことだよな？」と問いかけた。

「俺のことで合ってますよ。てか、菊岡さん。素直に言ったらどうですか。……『お前はどんな風にして、SAOから皆を解放したんだって』」

この辺で、カードを切る鎌をかけるか。

「それに、——手札、もう無いんですよ。さつきから同じ事の繰り返しです」

「——ッ!？」

菊岡は、俺の言葉に目を見開く。……ってことは、凶星って事だ。

俺は更にカードを切る畳み掛ける。

「菊岡さん。さつき、他のプレイヤーに話を聞いたって言ってましたよね。という事は、個人情報も知ってるんですか?」

「いや、僕らがSAOプレイヤーについて知ってる事といえば、レベルと座標のデータ位だよ。流石、茅場晶彦って言えばいいのかな、プ

レイヤーの個人情報の保護は、国家レベルで守られたよ。でも、上位プレイヤー《攻略組》の情報は知ってた。その攻略組で一番名を馳せていたのは、『黒の剣士』、鬼神と片割れって解ったんだ。その子の特徴は、男の子で年齢は中学生くらい。中世的な顔立ちに、漆黒の瞳だよ」

菊岡は「この人物像を先に言ったのは僕じゃないからね」と言うてから言葉を続ける。

「SAOでは、仮想体<sup>アバター</sup>に現実の顔や体格が反映されていたようだから、病院を手配する時に撮った顔写真のデータで確認する事ができたんだ。桐ヶ谷君みたいなSAOプレイヤーは珍しいからね。すぐに解ったよ」

菊岡は笑みを浮かべ「それじゃあ、早速話を聞かせてくれるかな」と言うて、ボイスレコーダーやメモ帳、ノートPCを取り出した。……てか、こいつ不利だと解ったら強引にきたな。まあいいけど。

—— 閑話休題。

俺は右手を顎に当て、考える仕草をする。

「……なら、SAO帰還者がどの病院に居るかも把握してるんですよね?」

「おっと、その情報は教えられないよ。国が管理してる個人情報なんだから」

「教えちゃったら始末書を書かないといけないんだよ」と菊岡は言うていたが、俺の表情は真剣そのものだった。

「……菊岡さんの始末書で済むなら、教えて欲しい人の場所が知りたいです」

「……そんなこと言われてもなあ。言っただろう、SAO帰還者の個人情報は国家レベルで管理してるんだよ」

「……そうですか、残念です。この条件が飲めないのなら、俺は何も話しません。SAO開始からゲーム終了までの経緯。SAO内で茅場が何をしていたのかは、永遠に闇の中ですね」

「……これって半分は脅しだよね……。政府の役人に脅しとか、やりすぎたか……。でもまあ、あいつらの情報が手に入るなら、手段

は選ばない。

菊岡は眉を寄せ、意を決したようにスマートフォンで電話を掛ける。完全に諦めが入ってるね、あれ。

「……桐ヶ谷君。それは何人だい？」

「三人です」

菊岡は「その子たちのプレイヤーネームと、本名は解るかな？」と言った。

「プレイヤーネームは、ユウキとラン。本名は、紺野木綿季と紺野藍子。二人は双子姉妹です。もう一人はアスナ、本名は結城明日奈。俺の幼馴染と親友です」

菊岡は頷き、通話口を耳に当て話し始めた。菊岡の話によると、紺野木綿季と紺野藍子、結城明日奈は、埼玉県所沢市——その郊外に建つ最新鋭の総合病院に居るといふ事だ。既にリハビリも終わり、日常生活が送れるまで回復してるらしい。

「今、その病院と電話が繋がっているんだけど、彼女たちと話すかい？」

俺は頷いた、とても有難い申し出だ。

菊岡は、俺にスマートフォンを手渡す。彼女たちは、既にナースステーションの電話の通話口を耳にしてるらしい。菊岡は、「電話が終わるまで失礼するね」と言つて、退席した。

「……もしもし、桐ヶ谷和人だけど」

『あー、本当だ！ 和人と繋がってるよ！』

この無邪気な声を発したのは、——紺野木綿季だ。

「……和人君、生きててくれたんだ」「……本当に、心配をさせる人ですよ」という、聞き慣れた声もする。——結城明日奈と紺野藍子の声だ。……てか、時折、『お仕置き』って単語が聞こえるんだが……。

『和人は、リハビリ終わったの？』

『何とかな。だからまあ、明日退院だ』

『ボクたちも、あと二日くらいで退院らしいよ』

『そうか。——明日会いに行くよ、木綿季たちに』

俺がそう言うと、木綿季は嬉しそうに笑った。

『うん！ 待ってるね、和人。 明日奈が変わりたいらしいけど、いいかな？』

俺が了承し、木綿季が電話を替わると、おっとりした優しい声音が聞こえてくる。

『もしもし、和人君。 結城明日奈です』

『おう、久しぶりだな』

『……うん、あの決戦以来だね』

明日奈の声音が、若干暗くなる。

俺は苦笑し、

『暗くなるなって、俺は生きてるんだから』

『そ、そうだね。 明日会えるのを楽しみにしてるね。 ——最後に、藍子さんに変わるね』

再び電話が変わると、凜とした声が耳に響く。

『和人さん、お久しぶりです。 木綿季の姉、紺野藍子です』

『おう、久しぶり。 てか、明日奈もそうだけど、他人行儀すぎるぞ』『す、すいません。 どうやって声をかけていいか思い浮かばなくて。 それにしても、どうやって私たちの場所を見つけたんですか？』

藍子の意見は尤もだ。 S A O 帰還者の中から、彼女たちを見つめるのは雲を掴むと同じ事なのだから。

『あー、そのことか。 簡単に言えば、政府の役人を脅して、情報を聞き出した』

俺の言葉に、藍子は呆れていた。

また、今の言葉が聞こえたのか、明日奈と木綿季は息を呑む。

『……和人さんは、本当、無茶苦茶すぎます』

『いや、そこは神経が凶太いって言うってくれよ』

藍子は溜息を吐き、

『じゃあ、それでいいです』

『おいこら、随分投げ槍になったな。 まあいいけど』

俺は一拍置き、

『木綿季にも言ったけど、明日、会いに行くよ。 んで、何階に行けばいいんだ？』





## 第40話《再会と笑顔》

病院を出た車は、数分で埼玉県所沢市の病院に到着した。この総合病院の最上階に、木綿季たちが居るのだ。

取り敢えず、車から降り、病院の玄関を潜り一階ナースステーションで受け付けを済ませてから、来客用のパスを貰い一階の右端にあるエレベーターに乗り込むと、加速度を殆んど感じさせないまま最上階に到着し、エレベーターの扉が滑らかに開いた。

長い廊下を歩き、左端に曲がった所で、目的の場所へ到着した。――其処には、紺野木綿季様、紺野藍子様、結城明日奈様、と、ネームプレートに名前が彫られていた。内部からは、楽しそうな話声も聞こえてくる。

俺は扉をノックし、

「……桐ヶ谷和人だけど、約束通り来たぞ」

『あ、和人。今開けるね』

そう言ったのは、木綿季だ。

ドアが滑らかに開き、木綿季がひよこりと顔を出し、優しく微笑んだ。

「会えて嬉しいよ」

「ああ、俺もだ」

そして俺は、木綿季に手を引かれ、病室内部へ入って行く。前を

見ると、妖精のような少女たちが微笑んでいた。――俺の幼馴染、紺

野藍子。

親友友達である結城明日奈だ。

俺は二人を見ながら、右手を上げた。

「よう、昨日ぶりだな」

「ええ、そうですね」

「待ってたよ、和人君」

それから俺も用意された椅子に座り、現在に至るまでの話をする事にした。





そう言つて微笑んだのは、彰三氏だ。結城彰三氏は、総合電機メーカー《レクト》の最高経営責任者らしい。

彰三氏は、SAO事件で莫大な負債を抱え消滅しそうになった《アーガス》からSAOサーバーを引き継ぎ、維持をしてるらしい。結果としては、SAOそのものは消滅してないって事だ。

SAOのサーバーをコピーして、アルヴ Heim・オンラインってゲームを運営してるとは驚きだ。SAO事件があつたのに世間に出したって聞いた時は、『かなりの博打だなあ』って思った。でもまあ、ナーヴギアの後継機と開発したアミューズファイアは、ナーヴギアと違い、〃被る〃ではなくて、〃付ける〃の違いがある。

微弱な電磁波も出る事はないし、内臓バッテリーも無い。外から強制終了が可能ということ。つまり、安全は保障されてるってわけだ。何といつても、アルヴ Heim・オンラインのコンセプトは〃妖精の世界〃だそうだ。

「……つーことは、ナーヴギアのデータをアミューズファイアに移行させて、アルヴ Heim・オンラインの中で〃ユイの心〃をオブジェクト化をすれば、ユイに会えるって事だよな……」

《アルヴ Heim・オンライン》は《ソードアート・オンライン》コピーサーバーなのだ。可能性は十分にある。……後は、レベルとか熟練度がとんでもないことになつてる位か。……ニュービーが、ほぼ最強プレイヤーとかチートすぎだろ……。

「私からは、お礼を言わせて頂戴。桐ヶ谷君。——いえ、桐ヶ谷君と紺野さんね。明日奈を<sup>変えて</sup>支えてくれてありがとう」

京子さんが言うには、結城家の両親は明日奈に期待し、彼女をエリートに育てる為人生のルールを敷いていた。だが、明日奈がSAOに囚われ、自分たちが間違えてた事に気付いた。——そう、自分たちの理想像を明日奈に押し付けてるだけだと。彰三氏と京子さんは反省し、そして明日奈の帰還を願い、今後の人生は明日奈の自由にさせると決めたそうだ。

まあ、エリート共が明日奈のお見舞いに来た時色々あつたそうだが、明日奈は涼しい顔で全て受け流したらしい。流石、血盟騎士団

副団長といった所だ。かなり肝が据わってる。

「…………今となったから言えるけど、SAOの経験って凄えな……。まあ、俺たちにも言える事だけだ)」

すると、明日奈は微笑み、

「お母さん、お父さん。これからは自分で決められるし、一生の友達もできた。SAOの経験も悪い事だけじゃなかったのよ」

「…………そうか。俺たちはもう何も言わない。明日奈の人生だ」

「私たちの手から離れたのかもね。もう、一人前の大人に見えるわ」

明日奈は、頬を可愛らしく膨らませる。

「…………それって、私が老けたって言いたいのかしら」

「違うわ。精神が既に大人になってるといえばいいのかしら、そんな感じなのよ。今の明日奈は、怖いものなんてないでしょ?」

…………いや、京子さん。明日奈はまだ怖いものはありますよ。暗い所とかお化けとかですけど。

すると、結城家の両親は頭を下げた。

「桐ヶ谷君、紺野さん。明日奈を救ってくれたありがとう」

「もし困った事があつたら、遠慮なく相談してくれ」

俺と紺野姉妹はあたふたする。当然だ、かなり偉い人たちが、まだ未成年の俺たちに頭を下げているのだ。

「ちよ、頭を上げて下さい!俺たちは友達に当然の事をしたままです」

時々、ぶつかりあつた事もありましたけど。と付け加える。でもまあ、それがあつたからこそ、今があるともいえるんだよなあ。

「そ、そうです。だから、頭を上げて下さい」

「わ、私たちこそ、明日奈さんにはお世話になつたんですよ」

結城家は、『ありがとう』と言って、頭を上げてくれた。…………つか、今のでどつと疲れたんだが…………。

しかし、これだけで終わらかつたんだなあ…………。俺と明日奈がだけど。

「和人君、明日奈さん。オレと妻からもお礼をさせてくれ」

「ええ、そうね。あの世界から無事に帰つて来れたのは、和人君と明

日奈ちゃんの方があつたからこそだと思っっているわ」

紺野家は、俺と明日奈と見ながら頭を下げた。……何故か知らんが、俺の精神がガリガリ削られていくんだが……。ともあれ、

「あ、頭を下げないで下さい」

……正直、対応に困るんですよ、はい。

明日奈も、『どうしよう……』つて顔である。……まあ当然の反応だと思うぞ。

「いえ、私も助けられた立場です。私もMMOの事は初心者域だったんですから。全ては、和人君のお陰です」

おいこら、俺に押し付ける？なよ、明日奈さんや。だってほら、紺野夫婦が俺だけを見るようになったじゃんか……。

「ま、まあ、木綿季たちと再会できたのも奇跡だったんですから、全ては天のお陰ですよ。俺は何もしてないですよ、はい」

そう言ったら、何とか頭を上げてくれた。でもまあ、一万人の中から再会できるなんて奇跡に近いと思う。……運命、だったのかなあ……。いや、それはないか。

——閑話休題。

紺野夫婦の話によると、罪悪感で押し潰されそうになっていたらしい。——なぜ、あの時、ナーヴギアとSAOのソフトと購入してしまったとか、もつとナーヴギアの特製を理解してればとか。その他諸々である。

だが、木綿季と藍子が常にトッププレイヤーと行動し、最前線で戦っている事を聞いて、自分たちが落ち込んでる場合じゃないと。今、自分たちができる事をやって、帰還した時に笑顔で迎えられるようにと。そう思いながら行動をしてたらしい。

「……私たちはこれで失礼するよ。和人君たちは、積もる話もあるだろう」

「そうね。そうしましょう」

「皆さん、明日奈をお願いしますね」

「……そうだ。後、これを」

彰三氏が傍らの鞆から取り出したのは、四つのアミュスファイアとアルヴヘイム・オンラインのパッケージだ。

俺たち四人は、彰三氏からそれを受け取る。『あんな事があつた後だが、お礼の品だと思って受け取ってくれ』という事らしい。

おそらく俺たちは、SAOというゲームに囚われたのに、アルヴヘイム・オンラインに確実にログインするだろう。てか、妖精の世界”ってもの気になるし。

それから、紺野家と結城家は、病室から退席した。



紺野家と結城家が退席し、俺たちは元の席に座っていた。

「んで、木綿季たちは、彰三氏から貰ったアミュスファイアは使うのか？」

「そりゃもちろん！　『妖精の世界』っていうのも気になるしね」

木綿季がそう言うってから、明日奈がパッケージを見ながら口を開く。

「『妖精の世界』っていうからはほのぼの系だと思ったけど、これはかなりハードだね」

ドスキル制、プレイヤースキル重視、PK推奨。《レベル》が存在せず、各種スキルが反復使用で上昇するだけで、ヒットポイントは大して上がらないそうだ。戦闘もプレイヤーの運動能力依存で、ソッドスキル剣技なし、魔法ありのSAOって所だ。

「妖精なので《飛べる》らしいですよ」

藍子が言うには、フライト・エンジンとやらを搭載してて、慣れるとコントローラ無しで自由に飛び回れるらしい。中々、冒険心に駆られるゲームでもある。

俺もパッケージの説明書を見やる。

「妖精にも、沢山種族があるんだな」

妖精の種類は、九種だ。種族によって得意、不得意もあるらしい。

「(ふむ。影妖精族スプリガンがいいかもな。一番黒いし。よし、これで決定と)」

なぜか知らないが、木綿季たちに一斉に見られる。

「なるほどなるほど。和人は影妖精族スプリガンなんだね」

「そうだね。黒いし」

「魔法効果とか、その他諸々も見ないで影妖精族スプリガンに決めるとか、さすが和人さんです」

木綿季、明日奈、藍子の順である。

てか、何で解った。こいつらエスパーか!？」

「(和人(さん)(君)が解りやすいん(だよ)(です)」

「……さいですか」

ちなみに、明日奈と藍子は水妖精族ウンデイーネ。木綿季は闇妖精族インブらしい。

ともあれ、……あの時間がやってきてしまった。

「それじゃあ、和人君。その場で正座」

「私たちが、何を言いたいかわかりますよね?」

「……はい、解ります」

洩々、その場で正座をする俺。木綿季は安全地帯で苦笑だ。

そして、殺気に似たものを醸し出し、俺を見やる明日奈と藍子。

「……いや、何。マジで怖い……。本当怖い……。俺、死ぬん

じゃね。

「……和人君。貴方はいつも無茶をしすぎです」

「……私たちに、どれだけ心配をさせるんですか?」

「……いや、あの時はあの方法しかなかっただろ? あ、あの判断

は間違ってたははははは」

あそこで茅場を倒さなければ、犠牲者が増えていた事は否めない。

だから、俺の行動は正しいはすなんだが……。

「そ、それはそうだけど。……それはそれ、これはこれなの!」

「そ、そうです。和人さんは、いつも心配をかけすぎなんです!」

「……お、お二人さん。何か、矛盾してる気がするんだが……。ま

あでも、俺の行動でいつも心配させたのは事実だしなあ」

俺たちは面会時間が終わるまで積もる話をした。やはり、四人で

集まって話をしていると、時が経過するのが早い。

面会時間が終了し、エレベーターで一階まで下り、ナースステ



ジョンに來客用のパスを返し、俺は駐車場へ向かった。その途中  
で、再び病院の最上階を見やったのだった――。

## 第41話《初めてのデート》

退院から数日が経過し、俺は木綿季とデートの為、黒のジーパンに黒のVネックTシャツにジャケットを羽織り、真っ黒装備で、とある公園のベンチに座り時間を潰していた。

あの後俺たちは、種族を決めALOにダイブしたのだが、今後のアップデートの為メンテナンス期間に入るといふ事なのでログアウトしたのだった。もちろん、ALO内でユイを展開するのに成功した。今は思考錯誤して、ユイが仮想世界から、現実世界を見る為のカメラを製作中である。

その時、パタパタと足音を鳴らし、待ち合わせの人物が到着した。白のワンピースにふんわりとしたコートを羽織り、下はブウランにブーツ、肩には小さめのシヨルダーバックが下げられている。そして、長い黒髪はストレートに流してある。

木綿季は、俺の視線に気づき、頬を僅かに朱色に染める。

木綿季は、俺の隣に座り、

「……和人、見すぎだよ」

……かなり凝視してたらしい……。変態じゃないからね。

「お、おう。すまん。木綿季の私服姿は、始めて見るからな」

木綿季は、そうだったね。と頷いた。

「SAOではほぼ戦闘服で、病院では患者着だったしね」

「そうだな。木綿季が白って新鮮だよ。よく似合ってる、可愛いよ」

木綿季は、僅かに目を丸くする。

「……か、和人が素直に褒めた」

「もう、唐変朴は卒業したしな。……てか、今はハッキリ言えるしな。お前の事が好きって」

……かなり恥ずかしいだが……。公共の広場だし。

木綿季は、可愛くもじもじしながら、

「ぼ、ボクも、和人の事大好きです」

「……木綿季さん。恥ずかしいなら言わなくていいですよ」

「だ、だって、和人に負けた感じがして」

「……いや、何にだよ」

俺は、「よし！」と言って、両手で両膝を叩いた。

俺は立ち上がり、

「んじゃ、行くか」

「OK！」

木綿季も立ち上がり、駐輪場に止めたバイクの元まで歩き出す。

目的地は、近場に建設されたデパートだ。

まあそういう事なので、後ろに座った木綿季がヘルメットを被り、俺も被った所でエンジンをかけ、駐輪所から出た。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

〜某デパート入口〜

俺たちはデパートの二重ドアを潜り、デパート内部へ入った。

案内図を見るとデパート内部は、グラウンドモール、ファミリーモール、ペットモール、アクティブモールという4つのモールがあるらしい。

「……でかい……」

これが、俺たちの第一声だった。……これは、厳選して回らないとアレだな。つーか、同じ店？在りすぎだろ……。

木綿季は悪戯な笑みを浮かべながら、

「ファミリーモールにも行ってみる？ 将来の予行練習として」

「……いや、俺らの歳じゃマズイからね」

主婦の方から、好奇心の目で見られる可能性も否めない。……もしかしたら、『嘘っ、あの歳で父親と母親なの!?!』的な声が聞こえてきそうだ。

「……行くとしたら大学生になってからだな」

木綿季は思案顔をした。

「てことは、学生結婚ってこと?」

「そうなるのかな。まあ、式は挙げられないと思うけど」

大学生になれば、俺たち個人で籍を入れる事も可能だろう。その

前に、両親に挨拶しなくちゃいけないんだけど。まあでも、俺の予想だとすんなりクリアできる感じなんだよなあ。

「結婚するまでは我慢してくれ」

「う、うーん……。そういうことならいつか」

……ファミリーモールに行く気だったのね。てか、俺たちの将来設計が既に完成してる。実は、俺たち四人で話し合った結果、進学する大学も決定してるのだ。それは——東京大学である。

つーか、俺たち四人は、二人暮らしの案が出ていたりする。駄目もとで両家の両親に話した所、OKが出たりもした。『まだ学生なのにいいのかよっ!』的な感じだったけどさ。まあ、SAOの経験があるから、家事等の心配はないだろう。

「んじゃ、グランドモールを回ろうぜ」

「ん、りょうかい」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

グランドモールを物色していると、とある指輪店を発見した。店の看板によると、指輪を銀色の細いチェーンに通して、ネックレスにする事もできるらしい。取り外しも可能だそうだ。

「入ってみるか?」

「う、うん。場違いじゃないよね」

「気にすんな。こっちは客なんだし、問題ないだろ」

そういう事なので、木綿季の右手を引いてドアを開け店内に入る。

その時、扉のベルが、カランカラン、と響いた。

やはりとすべきか、店内は二十〜三十代のお客さんばかりだ。

十代の俺たちは、少し場違いな感じもする。まあ俺は気にしないけど。

一通り指輪等を見たけど、一番高いので五十万円台だ。てか、店の奥には、一〇〇万代の宝石が眠っているのだろう。んで、一番安いのが一万円台である。

周りを、木綿季と回っていたら、シルバーの指輪が目に入った。値段も、約一万円と手が伸びる範囲である。ちなみに、親に木綿季





た。

ちなみに、俺がチョコで、木綿季はイチゴだ。

「和人。ボク、チョコ食べてみたいな」

「いいぞ」

俺がパフェを、木綿季も目の前に移動させようとしたが――、

「むう。食べさせてくれないの？」

木綿季さん、頬を膨らませないで。こいつは表情がコロコロ変わるよな。可愛いけどさ。

俺は息を吐いてから、右手で持っていたスプーンでチョコパフェを掬い、

「ほれ。あーん」

「ん、あーん」

パフェに乗ったスプーンを口許へ持っていくと、パクリと食べた。表情を見るからに、お気に召したようだ。

「うん、美味しい。和人もイチゴ食べる？」

「うーん……うん、頂くよ」

俺は一瞬迷ったが、木綿季の申し出を受ける事にした。

木綿季は、スプーンでパフェ掬い、俺の口許へ持ってくる。

「はい、あーん」

「おう、あーん」

パクリと食べると、イチゴパフェが口の中で蕩けた。うん、旨いな。

ともあれ、このように食べさせ合いをしながら、お互いのパフェを完食した。

それから、会計をして店を後にした。もちろん、金は俺が出したぞ。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

店を出て、休憩所にあるベンチで一休み。

「何か、家族連れが多いよな」

そう、先程から多いのだ。









「でも、良い経験になったよね。子供ができたらあんな感じなのかな？」

「うーん、どうだろうな。てか、そこまで将来設計が完成してんのか」

まあ、さつきも思ったけど。でもまあ、近い未来になりそうな気もする。木綿季も「もちろん！」と領き、俺も苦笑しながら「そうなるように頑張るよ」と言っただけだ。

そして、今日という日は、俺たちの思い出のページに刻まれたのだった――。

第42話《君と送る年、迎える年》

2025年12月31日、21時。——そして君と迎える年は6回目。

『お兄ちゃんー！木綿季ちゃんー！年越し蕎麦<sup>そば</sup>食べよー！』

一階から直葉の声が、俺の部屋に届く。

俺の部屋のベットのの上に座るのは、紺野木綿季、桐ヶ谷和人。——  
そして、永遠の約束を交わした子だ。

木綿季は「元気だなあ、スグちゃん」と苦笑してから、

「今行くよー！スグちゃんー！——和人、下に行こっか」  
「だな」

そう言うってから、俺たちは座っているベットから腰を上げ歩き出す。扉を開け、廊下に出てから扉を閉め、階段を下り居間を目指す。

「ボク、明日奈たちとも年を越したかったな。……ボクの我儘なのかも知れないけど」

「いや、俺もそう思ってた所だよ。——俺たちはSAOからずっと一緒だったしな」

俺たちの出会いは、あのデスゲームが始まり「はじまりの街」を出た時から一緒だ。

ボスを倒した後は一足先に次の街に行き、アルゴ経由で「情報」を下層に流す作業もしてた。それが「はじまりの街」をすぐ後にした、俺たちの出来ることだと思っていたし、死者を出すことがないように。と、義務。とも捉えていた。

木綿季は「逝ってしまった人には失礼になるかもだけど」と先に言うてから、

「ボクたちにとってSAOは——出会いと別れの場。でもあつたんだよね」

「そうだな。不躰かも知れないけど、そのことだけは茅場に感謝してる。まあ、許せない部分もあるけどな」



き合いの許しが下りたんです。和人幼馴染さんの想いも見抜いた。と言つてもいいました。——…それに、私とお付き合いする男性にも、面接するからな。とも言っていましたし」

はあ。と溜息を吐く藍子。

明日奈も「うちもほぼ同じですなんです」と溜息を吐く。

「そ、そうなの。でも、和人がねえ……」

俺は、むっ。としたが、翠の言うことも尤もだな、と思う。

木綿季のような可愛い子が俺と共に生きてくれるなんて、6年前の俺なら「ありえないだろ」と一蹴したかも知れないし。

ともあれ、各自風呂に入ってから談笑し、「約束の時間」が近づいてきた。

「そろそろ時間だ。親父、お袋、席を外すな」

そう、24時を回る頃に、ALOでカウンタダウンのイベントがあるのだ。

「あ、そうだったわね。和人たちはコレからALOでカウンタダウンがあるんでしよう」

「私は翠さんと水入らずで年を越させてもらう。四人とも行って来なさい」

俺たちは立ち上がり「行って来ます」と声をかけてから、各部屋に向かった。ちなみに、俺と木綿季は俺の部屋、明日奈と藍子は直葉の部屋だ。

ともあれ、部屋に入ってからベット上に仰向けになりアミユスフェアを被る。

俺と木綿季は頷いてから、

「リンク・スタート！」

と、言葉を発すると視界が暗く染まった直後に、想い出が詰まった家に舞い降りた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

↳第二十二層、森の家ログハウス↳

「パパ、ママ、おかえりなさいです」

「ただいま、ユイ」

「ただいま、ユイちゃん」

新生アンクラッド第二十二層、《森の家》にログインした俺とユウキは、愛娘のユイの頭を優しく撫で、ユイは眼を細めて気持ち良さそうにする。

それから、長い、黒と青の髪を揺らしながら、アスナとランが此方に歩み寄る。そして、その後ろには長い金髪をポニーテールに纏めたリーファだ。

「こんばんわ、ユイちゃん」

「ユイちゃん、こんばんわ。今日は楽しましょうね」

「こんばんわ、ユイちゃん」

ランに続いて、アスナ、リーファがそう言う。

「ねえねえ、アスナさん、リーファさん。こんばんわです」

それから、ユイを可愛がるアスナたち。

ともあれ、俺は周りを見回してから、

「んじや、アルンまで飛びますか。準備はいいか？」

俺がそう言うと、「おー！」と返事を返してくれるのだった。

それからログハウス出て、庭で大きく翅を震わせて、カウントダウンが行われるアルンまで飛翔を開始した。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

アルンの広場では、全ての妖精たちが、普段以上に賑わっていた。

俺たちは世界樹の木の根元に着陸し、周りを見渡す。ちなみに、ユイの姿は小妖精の姿ではなく、白いワンピースに上着を羽織った少女の姿だ。

「今の時刻は、23時59分です。カウントダウンまで、後一分です」

ユイが補足してくれる。んで、世界樹の巨大な幹にスクリーン映像に、イベント主催のGMと新年まで58秒という文字が浮かび上がる。

そして――、

『アルヴヘイム・オンラインをプレイしている皆様こんばんは！新年





そこには花柄の振袖を身に纏った木綿季と直葉。紫陽花の絵があらわらつてある振袖を着た、明日奈と藍子。タブレットの中で花柄の振袖を身に纏っているユイが姿勢を正して座っていた。

俺は一定の距離を取った後正座し、皆に向き合つて今年最初の挨拶を交わす。……てか、スウエットとか場違いすぎる。

「明けましておめでとうございませう、皆、今年もよろしくお願ひします」

それから、遅れてやつて来た翠にも挨拶をした。

皆で軽く談笑した後集合写真を撮ることになったので、俺と峰高は袴はかまに、翠は振袖に着替え、中庭に集合した。

「よしー、撮るぞ、準備はいいか？」

『「「おう（はい）」」』

配置は左から、翠、直葉、藍子、明日奈、木綿季&ユイ、俺、峰高だ。

峰高はカメラの自動シャッターを回し、俺の隣に立ち、その数分後シャッターが切られた。

「OKだ。じゃあ、皆で雑煮を食べるか」

翠、峰高、直葉は、朝食の準備の為、家の中へ戻っていった。

中庭に残されたのは、俺と木綿季、ユイ、明日奈、藍子になった。

「木綿季、明日奈、藍子、ユイ、今年もよろしくな」

「うん、ボクの方こそよろしくね」

「私たちはいつも一緒よ。これからもよろしくお願ひします」

「私もよろしくお願ひします。今年皆さん、溜め込まないようにお願ひしますね」

うっ。と言葉に詰まる俺たち。

藍子の言う通り、俺たち三人は、溜め込んで潰れかかった経験があるのだ。あれだ、今年はないように善処しよう。

『パパ、ママ、ねえねえ、明日奈さん。今年もよろしくお願ひします』  
こうして、俺たちの新たな年が始まった。